

硝子の兄は海月になりたい

ふみどり

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

家入硝子さんの四つ上の兄、家入海月（みつぎ）が主人公。筋金入りの面倒くさがり、怠惰を極めたゆえの効率厨。顔はそっくりだそうです。一級術師の術式もち。けれど戦闘向きの術式ではなく、チートでもありません。だからこそ、の物語。

最強たちの学生時代に、もし彼のような存在がいたら。何か変わるものもあるのではないかと。

最終的に原作の改変に繋がりますのでご注意ください。さまざま自己解釈注意です。

クロスオーバーを含む番外短編：<https://syosetu.org/novel/300029/>

目次

海月の青春	299
走馬灯の果てに	284
海月の心	277
琴線	268
遺された呪い	259
海月の反抗期	255
ephryra (海月の過去編／web再録)	235
	16
	15
	14
	13
	12
	11
	10
	9
	8
	7
	6
	5
	4
	3
	2
	1

番外（時系列関係なし）

十年後の話

夏風邪は馬鹿が引く

深夜のカステラ

ちよつとしたお掃除です

ふたりの「最強」

ひとの嫌がることは進んでやります

つかれたよるに

特級クズの憂き晴らし

奇縁極まれり

星に願いを

最高のカスクートをもとめて

海月と日車

「普通」のはなし

不機嫌クラゲ

海月の子守歌

何てことない夏の日

ほつといてほしい

海月と伊地知と年の瀬と

夏の酔い

教訓

ねこ

受難の始まり

世界でいちばん、

SS集

ないしよばなし	399
呪術師たるもの	401
絡み酒の本音	404
次の日全員二日酔い	407
凡人の頂	409
彗星の行方	415
ブラックボックス	418
終着点 ※本誌ネタ注意	421
サンタ捕獲大作戦	424
破り捨てて欲しかった	426
何歳になっても	429

もともと、のんびりすることが好きな性分だったように思う。

日当たりのいいところでぼんやり本を読んだり、気が向いたらその辺をふらふら散歩したり、ゆったりした時間に身を任せているときに一番穏やかな顔をしていた。

かといっていつもぼさつとしていたりかと言われればそうではなく、片付けるべきことはきつちりゴールまでの最短距離を描き、その通りに終わらせてしまうタイプだ。それこそ、夏休みをのんびり過ごすために、夏休みが始まるまでに宿題の全てを終わらせてしまうような。だから、今コイツが休みなく必死に働いているのも、きつとそういうことだろうとは思っている。思ってはいるけれど。

「……まだやってんのクズ兄貴」

「お兄様に対してクズ呼ばわりとはひどいんじゃないやねえの、妹」

高専の中でも、限りなくひとの出入りが少ないエリア。特に生徒となればこのあたりに近寄るような必要もなく、私だってコイツがいなければ何があるのかも知らなかっただろう。

窓もない暗がりの部屋。いくつものモニターが私には意味のわからない数字や文字の羅列を映し出し、床には報告書やその類の書類がいくつも散らばっている。

その中心に鎮座するそいつは、モニターから目をそらすことなく、ひたすらキーボードを叩いていた。ゆらりと漂うのは、煙草の匂いと珈琲の香り。床に足の踏み場を探しながらそいつが座る椅子に近寄り、その白衣のポケットから目当てのものを抜き取った。

「お前な、煙草なくなるたびに俺んところから盗ってくのやめろっつってんの」

「煙草を口実に可愛い妹が会いに来てあげてんじゃん、空気読めよ兄貴」

「その妹がヘビースモーカーじゃなければその言葉信じてもいいんだけどなく。ほどほどにしとけよ未成年」

「ほどほどならいいんだ」

「煙草の危険性を理解した上でやるならお前の勝手だろ。でもちよつとはバレねーようにしろよ、夜蛾に説教されんの俺なんだからな」

「ウケる。今度夜蛾の目の前で吸ってやる」

「やめろ馬鹿。硝子、今何時?」

携帯の画面を確認し、もうすぐ真夜中、と答えれば、兄貴はおっさん臭く息を吐きながら大きく伸びをした。もうそんな時間か、と肩を鳴らす。

「俺もちよつと寝るからお前もさっさと寮戻れ。途中一服とかしてんなよ」

「え、珍し。もう寝るの」

「何か知んねーけど明日、俺の研究について授業しろって言われてんだよ。眠さに負けて適当なこと言ったら殺されそうだろ」

「授業?」

「今年の一年、ふたりとも一般家庭出身なんだろ? 教科書通りの解説もいーけど、たまには最近の呪霊についての研究も含めて授業とか何とか……あゝゝゝめんどくせゝゝゝ」

ぐったりと脱力して椅子の背にもたれる兄貴は本当に嫌そうだった。いや実際嫌なのだろう。このめんどくさがりが教師役とか笑いしか出てこない。いったいどういう風の吹き回しだろうと思うより先に、たぶんこの引きこもりを外に引っ張り出そうという教師陣の厚意だな、と見当がついた。

高専を卒業して二年あまり、一応呪術師としてたまの任務に出るほかは、ほとんどこの部屋に引きこもってモニターに向かい合っていると聞く。いまだ生徒扱いが抜けない夜蛾なんかは、たまにはあいつを外に連れ出したほうがいいぞなんて私に言う始末だ。

ぼさぼさの髪に、消えることのない隈、日に当たらないせいで真っ白の肌。確かに、この顔を見ればそう言いたくなるのも無理はないのかもしれない。あんなに好きだった日光からも、ずいぶんと離れてしまった。

「……ふーん。何か面白い話すんの、それ」

「別に。お前からすれば何を今さらってことばつかだと思うぞ。ついでに研究に協力してくれって話には持つてくつもりだけど」

「へー」

「……何企んでんだよ」

「いや？　面白そうだからちよつと茶々入れさせてってセンサーに言ってみよっかかって」

「ええ……お前身内の授業とか受けてーの？　お兄様のこと大好きか」

「初めての授業でトチるとこ爆笑したいじゃん」

「お前まじでそういうところ俺の妹く」

いいからさっさと寮戻れ、とペしりと頭をはたかれた。当然のように手加減されたそれは、もちろん痛くもなんともない。

はいはいと兄貴に背を向ければ、背後でぎしりと椅子のきしむ音がした。

「硝子」

眠そうな声に呼ばれて、振り返る。椅子から立ち上がった兄貴は、私に背を向けたまま、また大きく伸びをしていた。

「早く寝ろよ」

「……兄貴に言われたくない言葉ベストスリーくらいに入りそう、それ」

「お前な。ちなみにあと二つは何なんだよ」

『『よく食べる』と『煙草やめろ』』

「マジで反論できないこと言うのやめなさい」

ちよつと笑って、兄貴もとつと寝なよ、と軽く言えば、はいはいとめんどくさそうな声が返ってきた。文字通り寝食を忘れて研究に没頭しがちな馬鹿兄だが、私に適当な嘘を吐くことだけはない。今日くらいはちゃんと寝てくれるだろう。

欠伸混じりのオヤスミを聞いて、深海のように暗い部屋を後にした。

いや確かに昨日妹がそんなこと言っていたような気はしたが、まさかマジでいるとは思わないだろ。

何でいるんだよ、と目で訴えてみれば、性格のよろしくない我が妹はにっこりと微笑みを返してくる。ひとの嫌がることを進んでやるその心意気、いったい誰に似やがったんだと思うと同時に俺だな、と思いついたので考えるのはやめた。

当初の予定ではふたりの生徒しかいないはずだった教室には、何故だか五人もの生徒が着席している。とりあえずひそひそと「うわ、マジでそっくり」「目元とか完全に硝子だね」とかやっている特級ふたり、さっさと出て行ってくれないだろうか。

やれやれと、俺は大きなため息をつく。

「……何かもう自己紹介の必要もなさそうだけど、どーも、そこにいる家入硝子の兄です。いつも生意気盛りの妹が世話になってます」

「世話してんの私の方なんだけど」

「そういうところなんだわお前。はい、改めて俺の名前は家入ミツキですが、海に月と書きます。ちなみにこれで本来は何て読むか知ってる？ ハイそこの前髪くん」

「夏油です」

「前髪で通じてんじやん」

「……クラゲですね」

かろうじて笑顔を保ったが、眉間がびくりと揺れたのはごまかせなかったぞ夏油くん。話には聞いていたが、表面上は真面目に振る舞っているもわりと沸点が低いというのは本当らしい。ちなみに彼の両隣ではうちの妹と白髪の彼が口元を抑えて震えていた。夏油くんいい友だち持つてんなウケる。

それはさておき、クラゲと答えてくれた彼にひとつ頷いて続けた。

「そう、海に月と書いて『クラゲ』と読む。お察しの通り、生まれてこの方俺のあだ名はどこ行っても大抵『クラゲ』、本名よりも『クラゲ』って呼ばれることの方が多かったんで、呼ぶ必要があるならそつちでどうぞ。名字だと妹と被るし、ミツキって名前も正直似合っていない自覚

があるから」

「クラゲ先生！」

「ノリがいいな許す。でも先生はいいよ、俺教師じゃないし」

「クラゲさん！」

「よし。一般家庭出身とは聞いてたけど、呪術師には珍しいタイプだな」

元気で大変よろしい、と言えば黒髪の彼は褒められたーと明るく笑った。本当にこの子通う学校間違えたんじゃないだろうか。手元の名簿を見て名前を確認する。灰原くん。その隣に生真面目な顔で座っているのが、同じく一年の七海くん。

今日の授業は本来ふたりに向けてのものだ。冷やかしの三人よりも彼らの理解を確認しながら進めよう。

「で、今日は俺の研究について話すわけだけど……まあそんな難しいことじゃないからあんまり気負う必要はないよ。簡単に言うくと、呪霊って何って話」

「マジの基礎じゃん」

「その通り。じゃあマジの基礎と言ってくれたところで、呪霊って何かな白髪くん」

「あ？」

「……え、何、答えられない感じ？ 二年生でしかも特級やってながら？」

「言ってるねーだろ！ つか特級つつたつてことは俺らのこと知ってるんじゃないか！」

「いや硝子がクズクズ言ってたからどのくらい器が小さいのか試しようと思ってる」

夏油くんは苛立ってもちやんと答えてくれる程度の器はあったな、としれつと言えば、白髪の五条悟くんはぐつと黙る。夏油くんは二度瞬きをして、ククツと笑った。それを横目で見た五条くんはさらに渋い顔をして、いやいやながら口を開く。

「……人間から漏出した呪力が積み重なって形をなしたモノ」

「その通り。人間が出した負の感情は呪力となり、形を得て呪霊とな

る。これが教科書通りの答えだな。じゃあ、えーと、七海くん」

「はい」

「今の説明はきつと入学して即聞かされたと思う。で、この説明納得できた？」

「全く」

「よし、君は見込みがあるな。大変よろしい」

ここで驚いた顔をしたのは、特級のふたりのみ。俺の研究について知っている硝子は平然とした顔で、灰原くんは何となく考え込んだ顔をしている。彼の場合は納得していない、というよりはよくわかっていない、という様子か。それでも何も考えずただ受け入れているよりはずつといい。

しかし、ここまできつぱりと否定をしてくれる生徒がいるとは思わなかったな、と少し口角が上がるのを感じる。改めて七海くんを見て、理由を尋ねた。

「理由も何も、ただ『そうなる』という結果を教えられただけですから。呪力が呪霊になる過程の詳細も理由の説明もない以上、納得しろという方が無理では」

「いいね、全くもってその通り。対象が何であれ、こういうものだから、と一言でそれに関わる全てを片付けようとするのは非常に危険だ。呪霊の存在に慣れてしまったやつほどそういう考えに走りがちだから、気をつけないといけないよな」

俺の研究のスタートもそこだったよ、と改めて全員の顔を見る。様子見を決め込んでいた特級ふたりの関心もいくらか得られたようで、その視線には好奇心の色が見えた。

まあ掴みとしてはこんなもんだろうか。別に面白い話をするつもりもないが、さすがに目の前で居眠り決め込まれたら俺も気分は良くない。何よりそんな授業をしたと、後で硝子に笑われるのも癪だった。

妹にいいところを見せたいなんて気持ちは欠片もないが、馬鹿にされたいわけでもない。

「呪霊とは何か、そしていかにして生まれるか。それが俺の研究テー

マダ。先に言っておくと、これについてはまだまだ研究途中で説明はできていない。が、その研究過程として俺がやっつてることを今日は話せと言われてる。これは呪術師の任務に直結してる話だから、まあ真面目に聞いてくれると嬉しいよ」

「うわ、真面目ぶっててウケる〜」

「硝子、お前はちよつと黙ってなさいね」

研究の話をするときくらいは取り繕わせてくれマジで。

*

呪霊が人間にとって超常的な存在であることは認める。だが、その超常的な存在との付き合いもはや千年を超えているというのに、あまりにも「呪霊」への理解を諦めすぎていないだろうか。俺が呪術高专に入学してまず最初に思ったのは、それだった。

「いや実際ね、漏出した呪力がどう呪霊に変化していくか観測できりゃ一番てつとり早いんだけど、まだその辺上手くいってなくてな。現状、天災や人的事件なんかの呪霊の発生源になりやすい案件と、実際に発生した呪霊のデータを照らし合わせて関連を探り、遠回りに呪霊の発生条件を調べている」

他にも、たとえば人口や地理的条件、もちろん当時の世情、そこに住まうひとびとの心を揺さぶるもの全て。そういったあらゆるデータを取り込んで、相関を調べる。

膨大なデータが必要な手法にはなるが、研究なんてものはそもそも地道に進めていくものだ。いや千年前からちやんと記録残しといってくれば俺がこんなに苦労することも、なんて言っても仕方がない。「たとえば大きな天災があつた翌年は呪霊の発生が多い傾向にあることや、人口の多い土地ほど呪霊の数は多く、また厄介なやつが多いこと。これくらいは呪術師ならだいたい体感として理解していると思う。けど、体感はあくまでも体感だろ。そういった傾向を明確な数字をもって実証するわけ」

「出来てんの?」

「それくらいなら一応な」

へえ、と五条くんは感心したのか何なのかわからない相づちを打つ

た。

あまりにも明らかな事実くらいなら、俺が持っているデータでも十分結果が出ている。だから手法自体が間違っているとは思わない。

「残念ながらデータが少なすぎてまだまだ新しい発見にはほど遠いけどな。全体的な傾向を数値化し、最終的にはそこから個々の案件に視点を落としていきたいと思ってる。ここまで進めばかなり実用性が出る」

「とうとう?」

実用性、という言葉に七海くんが反応した。なるほど、どうやら彼はそれなりの合理主義者らしい。

「具体的に言うと、……あー、一応これは現状の批判とかではないと前置きしとくけど。夏油くん、たとえば特級になってから受けた任務の中で、いやこれ三級くらいの術師で十分じゃねって思った案件なかった?」

「……ありますね」

「逆に五条くん、二級案件だけど呪霊の数が多いから行ってこいつって言われた任務で、いやこれどう見ても一級以上じゃんっていう呪霊に遭遇したことない?」

「めつつつちやあるけど?」

「最終的には、そういうのをなくす」

いや正直ゼロにするのは限りなく不可能だが、ゼロに近づけることくらいは出来ると思ってる。

そもそも、現状のやり方があまりにもアナログなのだ。発生した呪霊の情報をキャッチしたら「窓」が直接現場に赴いて対象を確認し、呪力を体感ではかって等級をつけ、そこから等級に見合った呪術師の派遣を要請する。しかも派遣する呪術師について上層から茶々入れまで来るときたら、そりやもう実力に見合った任務になるかなんて運でしかない。

呪力が機械で測定できるようなものではないとは言え、もうちよつと別の方法考えろよと言いたくもなるというか。

「こういう条件で発生した呪霊ほくて、今どんな様子で、過去似たよう

な案件にはこういうのがあって、『窓』が感じた呪力はこれくらいでつて情報を統合して、おおよその呪霊の等級を統計から弾き出す。理論的には、これで任務と呪術師の実力のギャップはかなりなくせるはずだ。もちろん、サポートに入る補助監督の選出も統計をもとに行う」

「こら悟」

「まーその辺ははつきり言って任務の内容と呪術師のレベルにもよる。けど、補助監督にも得手不得手はあるだろ。避難誘導が得意なやつ、付近住民言いくるめるのが得意なやつ、あと帳のクオリティにも実は差がある。小さいことのように、そういうのでも任務の成功率、生存率にも差は出てるんだよ」

そう言うと、夏油くんや七海くんは感心したように頷く。灰原くんも、皆無事なほうがいいですもんね、とどこまでも元気がいい。そう、皆無事なほうがいい。その通りだ。

そこでさつと七海くんが手を上げる。

「はい七海くん」

「現状として進捗はどの程度なんですか？」

「……」

「実用に足るレベルに達する見込みはいつごろなのかも聞きたいですね」

「……夏油くん、実は前髪つつったの根にもってんな？」

まさか、と夏油くんは朗らかに笑うが、これは絶対根に持ってる。いやくさすが妹に真面目系クズと称されるだけのことはある。器が小せえ。

いや俺だってそれこそ昼夜を問わず休みなしでデータを取り込み、システムの開発を続けている。ときには俺の術式も行使して、わりと身を削って頑張っているのだ。学生時代から構想を練り、暇をもらえぬ四年生時代から開発は始めたが、なんせほぼほぼ独りでそれをこなしているなので。ぶっちゃけたった三年じゃ、胸を張れるほどの進捗はない。

「……いや、システムの基礎はとりあえず出来てんの。デバッグと調

整はまだまだいるけど……あと取り込んだデータがまだ十数年分くらいしかないから、蓄積として全然たりない。から、……最終的な構想を百と見るなら、進捗はせいぜい三くらいかな……完成にはあと十年か二十年は最低欲しい」

「全然できてねーんじゃん」

「俺的には三年間でひとりでここまでやっただけだいたい褒められたい。というかそもそも有効データが全然そろわないことが一番の原因なんだよ。そう、その点についてちゃんと話しておきたいんだけど」

俺が今日こんなめんどくさい授業を引き受けたのも、それについての話がしたかったからだ。

呪霊というものについて、現状では機械で測定することも出来なければ、記録を残すことも出来ない。だから、任務に赴いた呪術師の所感こそが唯一のデータになる。

その重要性を一年生に説きたかったのだが、一年生以上にそれを伝えなかったやつが勝手に乗り込んできてくれた。ちようどいい、と俺はそいつに目を向ける。

「何が言いたいかって言うと、報告書はちゃんと書けて話なんだよ。いやお前に言ってるんだぞ五条悟、毎度毎度何なんだよあの報告書」

「はあ？　ちゃんと書いてんだろ」

『最強なので余裕でした』が報告だと思ってるんなら義務教育からやり直してくれ頼む」

「は？　小学生の日記かよ。ウケる」

「悟、いつも真面目に書きなってる言ってるだろう……」

「夜蛾はもう何も言わねえけど？」

「何諦めてんだあの教師。ちゃんと指導しろよ」

一番欲しい特級術師の任務報告がろくなものじゃないっていうのは、俺にとってかなり手痛い。実力のある人間の所感ほど欲しいところなのに、最強の片割れの報告が小学生並みとは。いや笑ってる場合じゃねえんだよ妹、俺には死活問題なんだわ。

うわ、と引いた顔を見せる七海くんの隣で、灰原くんがクラゲさん、

と元気よく手を上げた。

「えーっと、報告書って、任務であったことを書けとは言われてるんですけど、具体的にどういうことが書いてあればいいんですか？」

「いい質問だな灰原くん。花丸あげよう」

「やったー！」

もはやこの無邪気さがありがたい。というかこんな綺麗な心の人間が呪術界きて大丈夫だろうか。疲れ切った俺の心ですら心配になってきた。どうか擦れずに生き残れよ少年。

「もちろん最低限の情報として、日時や場所、被害状況、任務完了までの経緯。まあそれくらいはだいたい皆書いてくれると思う。ここに追加して書いて欲しいのが、自分の目で見た呪霊についての詳細だ。事前情報とのギャップがあれば特に詳しく欲しい。何より、任務にあたる呪術師として、自分が適当であったかどうか」

事前に報告されていた呪霊の等級は正しかったか。その数や特徴は。それを祓うために召喚された呪術師として、自分の能力・術式・戦闘スタイルを踏まえて適当だったと言えるかどうか。

「いや大前提として、その任務を遂行するのに自分が一番相応しいから呼ばれてるはずなんだよ。人員不足はさておくけど。そこに別の意図とか、ほら、あるわけねーじゃん？」

いや、あるんだけどさ、上層の嫌がらせとか。

一応の授業でそこまで言うのもさすがに憚られたので濁したが、夏油くんは何とも言えない顔のまま、五条くんは露骨にめんどくさそうな顔をしていた。実力があって生意気が過ぎるならそりや目の敵にされてんだろーうなと、そのあたりだけはちよつと同情しなくもない。俺もたいがい上層には嫌われている身だが、この二人は俺の比ではないだろう。

そういうのも、このシステムが完成すればなくせると思っている。「それは本当に自分がやるべき任務だったのか。違うなら、どういう呪術師なら適当だったのか。祓った呪霊の等級や能力を踏まえた所感が欲しい。特に、実力のある呪術師の意見ならなおさらな。そういうわけがちよつと頑張って書いて欲しいんだわ」

「んなこと言われたら俺全部『こんな雑魚任務俺が行く必要なかった』って書くけど?」

「いいよ、そこに理由までちゃんと付けてくれたらな。つーか俺から見ても特級こき使いすぎだと思うし、その辺報告書で好きなだけ文句言ってくれ」

え、とサンングラスの奥の瞳が見開かれた。光を受けた六眼は、まるで海面のように輝いている。

俺はちよつと笑って、言葉を続けた。

「体裁を整えろって言ってるんじゃない、率直な意見を寄越せって言ってるの。自分じゃなくても、ある程度フィジカルのある呪術師にそこそこの呪具持たせれば十分だったとか、結界術得意なやつにサポートさせれば二級術師でもイケたとか、そういうやつ。それを俺が集約してデータに落とし込み、誰が見ても文句言えないような『指標』に加工する」

そうすれば、とりあえず特級に任務割り振るときやいいなんて雑な命令はなくなる。自分の実力にあわない任務について、無駄にひとを死なせることもなくなる。

「呪術師は完全な個人戦、自分の実力がなきゃ簡単に死んじゃう。だけど、ちよつとした工夫とサポートで生き残る可能性が上がるなら。自分や他の呪術師がもつと楽に任務をこなせるようになるなら。そう思ったら少しはやる気になんねーかな。お前らだって、どうせなら学校生活楽しく遊びたいだろ」

ちなみに俺の高専時代はほぼ任務の思い出しかありません、と付け加えれば、一年生ふたりは露骨に嫌な顔をする。いやマジで灰色の青春時代でしたね、俺は同期もいなかったし。先輩とか後輩とか補助監督とか、昨日話してた人が次の日には死んでるとかマジで経験したし。

そんな経験、わざわざ後世に引き継がせる必要もない。

「つーことで報告書はしっかりよろしくな。ああ、一年諸君はまだわかんねーこと多いと思うし、出来る限りでいいから」

「頑張りますー!」

「はい」

「やべーな、素直すぎて俺の心が浄化されそう」

「いや肺と同じく汚れきってるから無理っしょ」

「何でお前は兄貴をこき下ろすときだけ反応早いわけ？」

「それこそ兄貴の妹だからじゃん？」

「返事の仕方が完全に俺の妹って感じでマジでやだわ……」

煙草やるからちよつと黙ってなさいとポケットの中に入っていたケースを放り投げれば、ラッキーとか言いながら硝子は両手でそれを受け取った。

七海くんにとんでもねー目線を向けられたような気がしたが、所詮俺は教師でも何でもないのでもんな目で見ないでほしい。

「はい、そんな感じで俺が今日言いたかったことはだいたい言ったんだけど、何か聞きたいことある？ 久しぶりにすげー喋って疲れたわ」

「はいー」

「どーぞ灰原くん」

「僕、いまいち負の感情っていうのがよくわかんないんですが！」

「……えっマジで言ってる？」

あ、七海くんの眉間の皺が増えた。

灰原の小学生のような質問にもなんだかんだで答え抜いた兄貴は、あくびをしながら教室を去って行った。

その背中を見送った私たちは、自分たちの教室に戻るべく廊下を歩く。その途中でクズの片割れに仲が良いんだねと言われ、どう返答したものかと一瞬悩んでしまった。

多分、仲が悪い方ではない。普通に話すし、喧嘩というほどの喧嘩もしないし、たまに兄貴のぶんまで買い物や雑用をこなして、かわりにそのポケットから煙草をかすめ取っていく。

私がどうというよりは、なんだかんだで兄貴が私に甘いのだと言う

ことには気づいていた。

「まあ悪くはないんじゃない。あんなんだから喧嘩とかしないし」

「顔も似てると思っただけど性格も似てるんだな。話し方とか」

「そ？ 自分じゃわかんねーわ」

「いやマジそっくりだろ。硝子の男版じゃん」

術式は似てねーみたいだけど、と六眼が煌めく。へえ、と夏油は面白そうに笑った。

「硝子、クラゲさんは何級なんだい？」

「一級」

「やっぱりか。不健康そうな顔をしてたけど、身のこなしは手練れのそれだったな」

「ま、そんなくらいじゃねーと高専であんな研究室々とできねーだろ」

さらりと五条は言ったが、それは事実だった。

呪霊の研究自体がこれまでなかったわけではない。しかしそれはどちらかというと秘匿されてきたし、その研究内容は御三家をはじめとする有力な家系が独占している。それも、おそらくは術式の強化や呪具の開発といった、呪術師が呪霊を祓うという意味で実用的な方向にしか活かされていない。

兄貴のようにデータを収集して演算を繰り返し、呪霊の発生そのものについて調べる研究はほとんどなかったようだ。一度兄貴が「先行研究皆無って嘘だろ……何してんの呪術界……」とぼやいていたのを聞いたことがあるので、少なくとも公には行われていない。

何故、その研究が今まで行われなかったのか。呪術師にとって呪霊の存在が当たり前すぎて、当たり前を見直すという発想がなかった、というのもひとつだろう。しかし、それ以上にあるのは。

「あの研究が完成すれば、老害^{ジジイ}どもの特権がひとつ失われる」

対象の呪霊の危険性が機械的に弾き出せるようになれば、その任務に最も適した呪術師が判断できるようになれば、

わざわざ呪術界の上層が誰にどの任務を割り振るかなど、口を出す必要はない。

「気に食わねーやつはヤバい任務行かせて殺すっていう常套手段が使

えなくなつからな。そんな研究、相当ウザがられてるだろ。むしろよく生きてるわ」

「悟、」

「いーよ夏油。実際、何度か騙されてヤバい任務行かされたりしたらしいし」

「やつぱ？」

『死ぬかと思つた』つてぶつくさ言いながらぼろぼろで帰ってくる」
「それで済むのはいつそ大したものだね」

そう、確かに兄貴は強いのだと思う。呪具の日本刀一振りを携えて、心底面倒だという態度で夜の暗がり姿を消す。いつものごとく任務完了までの最短距離を描いて実行し、とにかくさっさと高専に戻ろうとするらしい。そして戻ったら戻ったですぐに任務の情報を取り込み、また研究に勤しんでいると。

どこまで研究馬鹿なんだろうと私も思うが、残念ながら兄貴は本来そんな熱心な人間でもなければ、研究への好奇心だけで寝食を投げだせるタイプでもない。

だからきつと、何かあるのだろうとは思っている。本来は昼行燈でしかない兄貴が、わざわざ好き好んで闇の中に飛び込み、必死に働いている理由。あの馬鹿兄貴は決して、言おうとはしないけれど。

「ま、小学生の日記みたいな報告書は勘弁してやりなよ五条。あれマジで兄貴頭抱えてるから」

「めんどくせ〜〜〜」

「全く……いいじゃないか悟、クラゲさんの研究は私も有意義なものだと思うよ。灰原も言っていたけど、皆無事ならそれが一番だしね。それに、悟だつて嫌がらせの低級の任務には辟易していただろう？」

「そらそーだけど。……十年二十年とか言ってたけど、あれマジで完成するわけ？」

「いや私に言われても知らんけど。まあ寝食削つて研究に没頭してるのはマジ。任務以外じゃ外どころか、部屋からも出ないでモニターの前に座ってるよ。休日とか作ってんの見たことない」

「……マジで？」

「大マジ」

お前の兄貴はマジで人間なの、と完全に引いた顔をした五条に少し笑った。熱心すぎて心配にすらなるね、と夏油すら苦笑気味だ。

「だから兄貴想いの妹は仕方なしに面倒見てやってるわけ。私が食べ物差し入れなかったらとつくに死んでるよあの馬鹿」

「それは優しい妹だな。報酬は煙草かい？」

何も言わずに親指を立てると、夏油は愉快そうに肩を揺らした。どこで煙草入手してるんだろうとは思ってたんだよ、と軽く笑われる。

未だめんどくさそうな顔の五条に、まあ、と言葉を続けた。

「出来ないことを出来るって言うタイプじゃないのは確か」

家入海月は理想論者ではなく、根っからの現実主義者だ。過大評価せず、過小評価せず、自分のもつ情報を繋ぎ合わせ、可能と思えば進み、不可能と思えば手を付けることもしない。生まれ持った術式の影響もあるのだろう、根拠のない楽観論や精神論が死ぬほど嫌いな人間だった。

その兄貴が「可能」と判断して開発しているのだから、それこそ余計な横やりでもない限り、やつは完成させるだろう。めんどくさそうな顔をしながら、出来るつつつたろ、と当たり前前の顔をして。

私の言葉を聞いた五条は口元をひん曲げて少し考えると、仕方ねーな、とわざとらしくため息をついた。

「書けばいんだろ書けば。あ~~~~めんどくせ」

「おや、素直だね」

「俺だつてめんどくせー任務減るならそれに越したことはねーし」

「それは同感。硝子、クラゲさんは普段どこで研究をしてるんだい？」

「高専の使つてない部屋陣取ってるけど、何で？」

「面白そうだからまた話を聞いてみたいなと思つて。ついでに差し入れでも持つていこうかな」

うわ心底嫌がりそう、と思わず本音を漏らせば、夏油は愉快そうに笑った。

なるほどコイツ、そもそも嫌がらせのつもりだな。前髪と言われたのをまだ根に持つてるのかもしれない。さすがクス、心が狭い。

いや違うよ、と夏油は笑顔のまま続ける。

「報告書もちゃんと書くけど、任務にあたった術師の生の声のほうがいいデータになりそうじゃないかい？ 協力できることがあるなら是非させてほしいと思ってるね。別にかかわれたことを根に持つてるんじゃないよ」

「根に持つてんじゃん」

「根に持つてんな」

「根に持つてない。協力したいと思ってるのは本当だよ」

そのうち連れていってくれと朗らかに言われ、まあそれはそれで面白そうかと頷いた。

部屋に押しかけられるのは嫌がるだろうが、確かに特級術師の協力には有益なものになるだろう。いくらクズとは言え、夏油は適当な嘘を言うほど姑息なやつでもない。

もうちよい私以外にも会話させねーとなという、妹としての本音もあつた。

「じゃあ兄貴の餌やり手伝えよ、夏油。ほつといたらマジで食べないから」

「二度クラゲさんに人間の生活を叩き込んだほうがいいんじゃないかな」

「つか何お前の兄貴、むしろどうやって生きてんの？」

プランクトンでも食つてんじゃない、と適当に言えば、本当のクラゲじゃないんだから、と夏油は呆れたように言った。

疲れた身体を引きずり、ほぼ住処と化した研究室に戻る。

別に特別疲れることをしたわけでもなく、生徒たちの前で少しばかり話しただけなのだが、そもそもひとと会話をすることがあまりない俺にとっては結構に疲れた。下手なことを言つて妙な思想を植え付けたと言われては堪らないし、上より下と話すときのほうが気を使うことが多かつたりする。

はあ、とため息をつきながらモニター前の椅子に座り込んだ。画面に表示された演算結果をチェックしつつ、今日の授業を振り返る。

「……見込みはあるな」

まだこの世界に染まっていない、一般家庭出身の一年生ふたり。タイプは全く異なるふたりだったが、両方とも思考回路は柔軟で、そして善良だった。腐ったこの世界で生きるには相応の苦勞もするだろうが、きつと自分の頭で考え、判断ができる人間になってくれるだろう。

それから、若くして「最強」と名高い特級のふたりも。噂通りにクズで性根はひねくれ切っているようだが、そうでなくては上層と渡り合うことなどできはしない。教壇に立っていろいろな同期の兄である。俺をちやんと自分の眼で見定めようとしたところも評価はできる。まだまだガキはガキで危うさも見えるが、少なくとも他からの圧力で潰されるタイプではなさそうだ。

別に心配してやる義理など欠片もないわけだが、ただでさえ簡単にひとが死ぬ世界だ。どうせなら良い術師に育ち、無事に生き残って俺のデータ収集に貢献してほしい。

とりあえず五条悟の報告書が変わらないようなら夜蛾にクレームいれてやる、と思ったそのとき、俺の携帯が着信を告げた。任務でも入ったか、と画面を見ると、そこには面倒な人の名前。

疲れてるときに話したくねーな、としばらく様子をみたが、残念なことに諦める気配はない。やれやれと思いつつ、仕方なく通話をつなげた。

「……はい」

『やあ海月、元気かな?』

「元気じゃねーんで切つていいですか。あと本名で呼ぶなっつってんでしょ」

九十九さん、とその名前を呼ぶと、彼女はいつものごとく何も気にしていないという風に笑い声をあげた。

変わり者と名高い、この世で三人しかいない特級術師のひとり、九十九由基。俺にとって数少ない協力者であり、後ろ盾であり、スポン

サーでもあった。このひとがいなくては俺の研究は成り立たない。

まあだからって下手に出ているかと言われればそうでもなく。

「定期報告は先週送ったばかりですが、何かご不満でも？」

『まさか。さすがは海月だね、着実に成果をあげているじゃないか。特に今回の、これ。術師からは呪霊が生まれない可能性がある。これは相当な発見だろう？』

「あくまで仮説ですよ。検証してみないとまだわかりません」

『だが、可能性は高い。検証は私のほうでも努力してみるよ。何かわかればまた連絡しよう』

どうも、と気の乗らない返事をする。

九十九さんは九十九さんで呪霊の研究を進めており、最終的には呪霊のいない世界を作りたい、という。それを初めて聞いたときは、なかなか荒唐無稽な話ですね、と言ってしまったが、本当にそう思うかい、と笑われて黙った。

呪霊のいない世界を作ることができるか否か。現時点では、それ不可能と言いつけるほどの根拠もない。あまりにも、呪霊に対する理解が浅すぎる。

判断材料さえ足りないことに苛立って舌打ちすらしした俺に、九十九さんは手を差し伸べた。自身が後ろ盾になり、金も出すかわりに、頭脳を貸してほしい、と。

『相変わらず君は優秀だ。協力を持ちかけてよかったよ』

「……感謝はしています。貴方がいなければ俺は研究どころじゃなかった」

高専から一室部屋を与えられているのも。最新の機器を導入し、維持できているのも。めちやくちやに任務を割り振られるなんてこともなく、ある程度研究に専念できているのも。

「相変わらずさんごん嫌味は言われますけどね。さすがの上層も、まだ貴方を敵に回す度胸はないらしい」

『私の名前が役に立っているなら何よりだ。高専は相変わらずのようだね』

「保身と利権と血筋しか意味を持たない場所です。変わりようがあり

ませんよ」

『あはは、君も相変わらず辛辣。それでも高専と縁を切らないんだから、君も物好きだ』

「……わかってて言ってるでしょう」

高専にいれば、任務報告という名目で呪霊のデータが入手できる。天元の結界に守られているこの場所なら、精密機械や重要データの保管もそれほど気を払う必要はない。一般家庭出身で結界つきの屋敷なんか持たない俺にとって、呪霊の研究をするならここにいるのがいちばん都合がいい。

それに何より、ここには硝子がいる。

『……他者に反転術式を施せる貴重も貴重な人材を、高専が手放すわけがないからね。といつても、ちゃんと大事にされているんだろう？

妹さん自身も、自分の意志で高専に来た』

「ええ。……逃げることを選択した瞬間にどうなるかわかりませんけどね」

硝子は確かに自分の意志でここに来た。自分の意志で、呪術師になることを選んでいる。それなら俺は、何も言うつもりはない。

ただ、この世界がどれだけ腐っているかはもう知ってしまった。

「何でこの世界、こんな前時代的でひどでなしなんですかね。かわいくねー妹ですが、使い潰される可能性や母胎扱いされる可能性がある限り、放置する気はありません」

『妹想いだね。美しい兄妹愛じゃないか』

「俺はやることやって気兼ねなく隠居したいんですよ。余計な後悔はしたくないだけです」

『素直じゃないね。そのうち君の可愛い妹さんの顔も見てみたいな』

「めんどくさそうなのでやめてください」

『あはは！ そうじゃなくても今特級術師がふたり高専にいるだろう？ 是非彼らとも会ってみたいんだよ』

そう言われて、あのクソガキふたりと九十九さんが出会うところを想像する。……ダメだ、めんどくさそうな気配しかしない。

もはや頭痛がしてきて目頭を押さえたが、九十九さんは変わらずか

らからと笑っていた。

『じゃあ、そのうち高専に顔を出すから。そのときはまた顔を見せてくれ』

「無駄なのを承知で言いますけど、事前に連絡くらいしてくださいよ」
『覚えておくよ。多分ね!』

そして笑い声とともに通話は終わる。どこまでもマイペースしかないひとなので、どうせ事前の連絡など入れることもなく乗り込んでくるのだろう。俺には俺の都合があることを少しは理解してほしいものだ。

沈黙する携帯をその辺に放り捨て、俺は椅子に深く座りなおした。何だかどつと疲れた。九十九さんは悪いひとではないと思うが良いひとでもなく、何故だか話しているところこちらのエネルギーを吸い取られているような心地になる。省エネで生きたい俺にとつてはだいたい天敵だった。嗚呼、とにかく疲れた。

少し休もうと、モニターを切り替える。数字で埋まった画面は切り替わり、海を漂うクラゲのダンスが表示される。

「……あーもー……クラゲになりたい……」

もともとクラゲと呼ばれるのは嫌いではなかった。ゼラチン質の透き通った身体は素直に綺麗だと思っただし、海を漂い、波に揺られ、沈みすぎたときだけちよつと頑張つて泳いで、それ以外はなすがままのその姿には、惹かれるものがあつた。もともと俺は面倒ごとは嫌いなのだ。そんな風に生きたいと思つた。

だから、「呪い」という概念に触れてからはさらに「クラゲ」と呼ぶよう周囲に言つてまわつた。本名の響きが綺麗すぎて柄ではないと、もつともらしい言い訳をつけて。「クラゲ」という呪いをかけられ続ければ、俺もいつかクラゲのようになれるんじゃないかと、そんなのただの気休めだと理解していながら。

来世ではマジでクラゲになれたりしねーかなと、実は本気で思つたりしている。

「……まじでめんどくせえ……」

今の俺を硝子のせいなんて言うつもりは毛頭ない。俺も、俺自身が

選んでここにいる。

俺は自分の意志で高専に来了。呪術界の腐敗を見て、その前時代的でアナログで非効率な在り方を見て、自分の意志で呪術師をやる覚悟を決めた。

任務を適正かつ効率よくまわせるシステムを開発し、呪術師が任務をより安全にこなせるようにして、硝子が酷使されることのないように。俺自身も呪術師として任務をこなし、呪霊の研究で成果を出すことで呪術界における俺の地位を少しでも上げ、いざというときに硝子を庇えるように。

そして、それが全部終わって、俺がいなくなっても大丈夫だという確信を得たら、全部投げ投げて隠居の日々を送る。穏やかな時間に身を任せて、ただ毎日をのんびり過ごすのだ。

今、そのためだけに、身を粉にして研究に没頭する日々を送っている。

「……、」

ぼんやりクラゲを眺めていたら、だんだん瞼が下りてきた。昨日は久々に数時間は眠ったはずなのだが、やはり慣れないことをするのは負担が大きかったらしい。

少し仮眠をしたらデータをまとめなおそうと内心で呟いて、俺はそのまま眠りに落ちた。

ノックをしても返事がないのは珍しかった。

不思議に思いながらドアに手をやればカギは開いていて、急な任務が入ったわけではないことがわかる。そっと部屋を覗き込めば、部屋の主はいつも通りモニター前の椅子に座っているのが見えた。肘置きの上に見える腕は、完全に脱力している。

「……兄貴、寝てんの？」

小声でそう呟き、足音を消してその傍に寄る。縮こまるようにして椅子に座っている兄は、深い寝息を立てていた。珍しく熟睡している

らしい。

せつかく差し入れ持つてきてやったのに、と軽食の入った紙袋をその辺に置いた。いつも適当にひっかけてあるブランケットを取り、身体を覆うように広げる。

さすがに慣れないことをして疲れたのだろうか、とモニターを泳ぐクラゲを見つめた。どこまで自分の名前が好きなのか、兄貴は疲れているときによくクラゲを見たがる。

呪術高专に来る前も、よく実家の近くにある小さな水族館に通っていた。

『硝子、見える？』

『見えるよ。クラゲ』

『うん、これはミズクラゲ。あつちはカミクラゲだつて』

綺麗だね、と笑う兄に、私も頷いた。

両親が仕事で忙しかったこともあって、幼い私の面倒を見てくれたのはほとんど兄貴だった。多少出歩くことが許される歳になると、時間とお小遣いの許す限り私の手を引いて水槽の前を歩いていたことを覚えている。我ながらよく飽きなかったものだと思うが、兄貴があんなに穏やかな顔をするのはクラゲを見ているときくらいだと知っていたからかもしれない。

兄貴は、昔から無意識で術式を行使していたらしい。その効果は「高速演算」。自分の脳にインプットした情報から、未来に起こる「可能性」を計算で弾き出す術式だ。先のことになればなるほど確実ではないし、頭に入れた情報が少なければ少ないほど精度は落ちる。もちろんイレギュラーが起きれば全く役に立たない、と兄貴は軽く言った。それでも日常生活の、それも学校生活程度のことであれば、だいたいは何をどうすれば一番良い結果になるのかを弾き出すことができた。面倒ごとが嫌いな兄貴は当然、何をやるにも最も効率の良い道筋を辿った。

その結果が、どこに行っても評判の「神童」扱い。もともと頭の作りが悪くなかったのもあって、何をするにも最高の結果が期待され、まとめ役を任されることも多かった。のちに兄貴は「さつきと術式に

気づいていればもつと上手く立ち回れたのにな」と盛大なため息をつくことになるが、それこそ後の祭りだった。

期待という名目で余計な仕事を増やされることと、期待をあえて裏切つて余計な面倒を増やすことを秤にかけた兄貴は、結局いつも前者を取った。

『こっちの方がめんどくさくないんだ。……多分』

仕方なさそうに言う兄貴の頭を、私はよく撫でていた。無意識の術式は当然コントロールすることも出来ず、暴走させると発熱や頭痛を引き起こす。しかし何故だか、私が撫でるとそれがおさまるのだという。私もまた、無意識で反転術式を使っていたらしい。

『硝子の手は不思議だなあ』

良くなったよ、とお返しに頭を撫でてくれるのが嬉しかった。穏やかで、平和な生活を送っていたと思う。

私たちの存在が呪術高専に見出され、入学を勧められるまでは。

『来たくなかったら断つていいんだぞ、高専』

一度だけ、高専に入学した兄貴はそう言った。寮に入ってから顔を合わせる機会も減り、たまに実家に帰ってきててもやけに疲れた顔をしていた。多分、高専は兄貴にとって面倒な場所だったのだろう。でも私は、首を振った。

兄貴だけをそんな場所に行かせて、私が逃げるのは嫌だった。それに、何となく逃げられない気配も感じていた。そしてそれは多分正しかったのだと、今なら思う。

「……兄貴こそ、逃げればいいのに」

逃げようと思えば、兄貴なら決して不可能ではないはずなのに。

呪術師としての仕事も、研究も、兄貴なりの理由があつてやっているのだろうし、だとしたら私が口を出すのは筋が違う。ただ、身体くらはいは大事にしてほしいと思う。私の反転術式だって、決して万能ではないのだから。

右手に呪力を宿し、かつてと同じようにその額に手をやった。さらに、自分と同じ黒髪に指を通す。眠りを妨げないように慎重に、緩やかに呪力を送り込んだ。

「……おやすみ、兄貴」

ちよつとは身体、大事にしてよ。

平穩を夢見る海月は、今日も望んで硝子の檻に囚われる。

何で偉そうな人間って無駄話が好きなんだろうな、とぼんやりと思う。

きちんとデータを取ったことはないが、少なくとも俺が約二十年の人生のなかで遭遇してきた「偉そうな人間」は全員そうだったように思う。話が回りくどくてめんどくさくて、まとめれば一分で終わるような話を三十分かけてするような非効率なやつばかり。ひとりとして例外が浮かばない。自分に価値があると思ってるから、自分の言葉にも価値があると思いついでいるのだろうか。他者の限りある時間を自分のために浪費させることに対して、わずかぐらいの罪悪感を抱いて欲しいと心から思う。

ここに立って無駄な時間を過ごすなら、せめて睡眠時間にあてたかった。そう思いながら、奥歯で欠伸をかみ殺す。

「……聞いているのか、家人」

「聞いてますよ。くだらねー研究してないでもっと任務に出るか何かして呪術界に貢献しろってんでしょ。一言で終わる話に何十分と掛けないでくださいよ」

「お前が研究をやめると言えばその一言すら必要ないわけだが？」

「俺が俺の時間で何しようが俺の勝手です。任務だつて必要最低限こなししてるじゃないですか。それも自分らの言うこと聞かねー特級に任せるには不安で、従順で忠実な一級に任せるには危険な質の悪い面倒なやつばっか」

死んでも構わない、むしろ死んでくれたほうが都合がいい、しかしそこそこの腕はあり、たいていの呪霊や呪詛師には対応できる便利な呪術師。俺の呪術師としての評価はそんなものだろう。割り振られた任務はちゃんと要求通りこなしているのだから、文句を言われる筋合いもない。

「……その生意気は直らんか」

「じゃあそつちもちよつとは尊敬できるようになつてもらえませんかね。ほかにお話がないならもういいですか、俺も暇じゃないんで」

「家人」

「何ですか」

「先日、学生に向けて授業を行ったらしいな」

なかなか好評だったらしいじゃないか、と猫なで声で言われて眉をひそめる。あれはあくまでも高専教師陣の独断で、この老害どもの指示ではなかったはずだが、どこからか噂は届いていたらしい。

それが何か、と短く答えれば、その爺は喉の奥でくく、と笑った。

「お前の頭の出来は評価している。呪術は教えられなくとも一般教養なら教えられるだろう。くだらん研究に時間を費やすよりは、後進の教育をするほうがまだ有意義だ。今後も面倒を見てやるといい」

呪術は教えられなくとも、を強調するあたり、血統しか自慢できるものがないこの爺らしい。あーめんどくさ、という態度を隠さずにため息をついて、呪術界の闇に背を向けた。

背後からまだいくつか小言が飛んできたような気がしたが、全て無視してその部屋を出る。辛気くさい廊下を進みながら、やっと終わった、と首を回した。正確には「終わらせた」なのだが、そんなことはどうでもいい。同じことしか言わない呼び出しに毎回応じてやるだけマシだと思えっつてんだアナログ大好きの非効率主義者どもめ。

飲み物でも買って部屋戻るか、と自販機の方へ足を向ければ、先日聞いたばかりの元気な声。

「あ、クラゲさんだ！ こんにちは！」

「こんにちは。先日はどうも」

「……ハイこんにちは」

遭遇したのは、ラフな格好で汗を拭う一年生たち。実習で体術の訓練でもしていたのだろう、その手にはスポーツドリンクが握られている。

きちんと挨拶をする礼儀正しさにはつい感心をしてしまった。俺こんにちはとか言ったのどれだけぶりだろう。実習か、と言ってみれば灰原くんは満面の笑みでハイと頷いた。

「さっきまで夏油さんに稽古をつけてもらってたんです！ 僕たち全然敵わなくて！」

「へえ。……夏油くんだけ？」

「五条さんは面倒だと言って端で寝ていました。夏油さんひとりで十分だと」

「マジで先輩甲斐ねーやつだな」

でも確かに二人がかりでも夏油さんに一発も当てられなかったの
で、と灰原くんは苦笑気味だが、戦闘訓練始めたばかりの新入生と特
級術師なら当たり前だと思う。

一般家庭から呪術高専に入学してきた人間は、まず「戦う」ことを
頭と身体に叩き込むのに苦勞をする。戦いの空気に身体を慣らし、敵
を傷つけることへの抵抗をなくするのは簡単なようで難しく、非常に精
神的な負担を伴う。しかしそれを乗り越えないと、戦闘技術は身につ
かない。呪術師にまともな人間がいないのは、まともでない呪術師
なんてやっていけないから、というのも理由のひとつなのだろう。

逆に言えば、呪術師家庭の出身じゃないのにすでに特級やってる夏
油傑、彼のほうがおかしいのだ。いったい一般人だったはずの中学ま
でどんな生活を送ってきたのか。控えめに言っただけで相当なやんちゃを
してきたのだろう。

「……まあ夏油くん、下への面倒見はよさそうだし、存分に相手しても
らえばいい。特級に稽古つけてもらえるなんて滅多にないことだか
らな」

「はい！ 頑張ります！」

「ええ。……クラゲさんは確か一級だと伺いましたが」

「？ ああ、そうだけど」

これはあくまでもただの好奇心なのですが、と前置きして七海くん
は続けた。

「たとえばクラゲさんなら、夏油さんに一発入れられるのでしょいか」
「……無理じゃん？ いや、夏油くんが戦ってんの見たことないけど」
「見たことがないのに即答できる根拠とは？」

切れ味良く返される言葉は、なかなか小気味いい。どこまでも理知
的な子だな、と内心で頷いた。

「現在呪術師の等級は四級から特級までであるが、本来は一級が一番上

なんだよ。特級はあくまでも『一級を遙かに超える』という位置づけで、文字通り特別で特殊な等級だ。だからそうぼんぼん誰にでもくれてやるもんじゃないし、実際今も特級術師は三人しかいない」

五条悟、夏油傑、そして九十九由基。

三人の戦闘を見たことはないが、まあ術式にしろ体術にしろそれ以外にしろ、間違いなく人間の枠を軽く超えた化け物なのだろうと思っている。

俺は自分を弱いとは思っていないが、人間の枠を超えているつもりはなかった。

「たとえば戦闘を見たことがなくても、特級術師である以上は俺より相当強いんだろうと思うし、そうあるべきだ。一級術師に一発入れられてしまう程度の強さなら、そもそも『特級』である必要がないと俺は思う。同じ一級術師の中でも強さの幅はあるんだ、その枠に収まらないほど圧倒的でないと『特級』の意味がない」

「……なるほど」

「やつぱり夏油さんも五条さんもすごいんですね！」

「ちなみに俺の知る限り、特級になるための条件に『性格』とか『人間性』はない」

「それは言われなくてもわかります」

食い気味で乗ってきたあたり、七海くんも相当苦勞しているらしい。頭が痛そうに目頭を押さえている彼を見ると、さすがの俺も同情が芽生えた。特級のクズどものことは妹の愚痴程度のことでは知らないが、とんでもなくめんどくさそうな人間性であることだけは察している。

思わず、まあ頑張れとその骨張った肩を叩いた。

「別に必ずしも先輩を尊敬しなきゃいけないわけじゃねーから」

「ええ、そのつもりです」

「僕、夏油さんは尊敬してますよ！ 五条さんはしてませんけど！」

「五条くんは灰原くんにすら尊敬されてないのか……何かすごいな……」

「自業自得です」

そつから、とわずかに遠い目をする。明朗快活という言葉が似合い
そんなこの子にさえ「尊敬してない」と言わしめる特級のクス、本当
に何をしたんだ。呪術師にまともな人間がいらないのは今さらだが、そ
こまで尊敬されないのもどうなのだろう。

いや俺もたぶん後輩には尊敬されてないから人のこと言えねーな
とぼんやり後輩たちの顔を思い浮かべていたとき、クラゲさん、と元
気のいい声に引き戻される。

「クラゲさんて普段も高専で研究してるんですよね？」

「ああ、君らがいるところと反対の棟に部屋がある」

「今度お邪魔してもいいですか？ 見てみたいです！」

「灰原、」

「七海だってこれまでの任務の記録とか呪霊の情報とか見てみたいっ
て言ってただろ？」

「……それは」

そうだが、と少し口ごもる七海くんも、どうやら興味はあるらしい。

俺の部屋に来てモモニターと散らばった書類があるだけなんだが、
と反射的に言おうとしてやめる。研究の手を止めさせられるのは愉
快ではないが、今後のために任務や呪霊の情報を見たい気持ちはわか
らなくはない。それに、好奇心だけでやっている研究ではないとはい
え、自分の専門分野に興味をもってもらえるのも悪い気はしない。何
より、あのクソ爺どもに俺の時間を無駄にさせられた後だからなの
か、彼らと接している時間を「浪費」だとは思わなかった。

「……事前に連絡入れてくれれば別に構わないよ。そんな面白いもん
はないと思うけど、任務のデータも俺がもってる分は見せてやれる。
呪霊についても少しはまとめてあるし」

「……迷惑では」

「俺は君らがいよいよといまいと自分のことやってると思うけど、それ
でもよければ」

「やったー！ じゃあ連絡先聞いてもいいですかー！」

はいはい、とポケットから携帯を取り出した。

にこにこ顔全体で喜びを表現する灰原くんと、ちよつと嬉しそう

な様子が隠しきれていない七海くん。いや本当、こんなに素直な子たちが呪術界を渡っていけるのかお兄さんは心配です。特級のクズたちを盾にしながら上手いこと生き残って欲しい。

二人と連絡先を交換して、そのまま携帯の画面に表示された時間を見る。ちよつとした立ち話のつもりが話し込んでしまった。ふたりはこの後の授業もあるだろう。

「んじゃ、俺は戻るから。ふたりも早く教室行きな」

「はい！ また連絡しますね！」

「ありがとうございます」

お礼言われるようなことはしてねーぞと思いつつ、わずかに頬の筋肉が緩む。爺どものせいで最悪だった気分が、少し浮上しているような気がした。

ふたりに背を向け、そういえば、と首だけで振り返る。

「三日前の任務の報告書」

「、はい」

「よく書けてたよ。その調子でよろしく」

背中に受けたふたりぶんの返事が、妙にくすぐったい。

まさかこの部屋に、先客がいるとは思わなかった。

ノックをする前から聞こえていたよく響く声と、それを諫める声。

そして相変わらずの、感情の揺れが感じられない平坦な声。

いつも深海のように薄暗くて静かな部屋に、日の光が差したかのようだった。

「……何、兄貴、塾でも始めたの？」

「あ、こんにちは家入さん！」

「お邪魔しています」

いつものごとく適当な差し入れを抱えて兄貴のところに顔を出してみれば、その床に座り込んで資料を漁っている後輩がふたり。兄貴は相変わらずモニターの前を陣取って、キーボードの上で指を踊らせ

ている。

こちらに視線も向けることなく、おう、と相づちだけを返した。

「見ようによつては塾かもな。高専も少しは実地以外でも呪霊に関する授業を取り入れろつてんだ。ついでに日本史とか宗教学とか」

「菅原道真が五条さんの先祖にあたるとは知りませんでした」

「どうかそもそも道真つて呪術師だったんだね！ 知らなかったな
〜」

一枚一枚資料をめくりながら、後輩たちは感心したように頷いている。

いったいいつのまに兄貴と交流もつようになったんだこいつら、と思いながらもつてきた食料を適当にその辺に置いた。ふたりがいるせいか、今日は書類が散らばっていなくて歩きやすい。

「兄貴が部屋に他の人間いれるなんて珍しいじゃん。どういう風の吹き返し？」

「知識が欲しい気持ちはわからんでもないつてだけだ。俺も一年のときはそれなりに苦労したしな」

「へー？ 夏油もここ来たいつて言つてたけど連れてきていい？」

「ええ……めんどくさそう」

「一応研究に協力する気はあるらしいよ。あとアイツの場合、直接呪霊も見せられるからいいデータ提供できるんじゃないかって」

ああ呪霊操術……、と兄貴はぼんやりと呟いて視線を宙に浮かせた。夏油の相手をする手間や面倒と、見返りとして得られるデータを天秤に掛けているのだろう。私としてはどちらでも構わないが、何となく連れてきた方が面白そうなので、夏油を連れてくるならもれなく五条もついてくるとは言わなかった。

数秒考えて、兄貴は事前に連絡は寄越せよ、とだけ言つてまたキーボードを叩き始める。予想通りの答えにちよつと笑いながら、ハイハイと適当に返事をして白衣のポケットから煙草を抜き取った。こちら、という言葉は聞こえなかったふりをする。

「何の資料見せてんの？」

「呪術界的日本史」

「何それ。公式資料？」

「いや、俺が聞きかじったことを学生のときにまとめたやつ」

「非常に興味深いです。日本史観が変わりますね、特に平安時代の」

「おいコラ兄貴、私それ見たことねーんだけど」

「お前別に歴史興味ねーじゃん」

まあ見たいなら勝手に見ろ、と分厚い紙束を渡される。

ぱらぱらとめくってみれば呪術師の目線から辿られる裏の日本史が丁寧に綴られている。歴史上のできごとの裏側で動いた呪術師や、使われた呪物のたぐい、ご丁寧に有力な呪術師家系の家系図までついている。よくこんなもんまとめたものだと思うが、これはひよっとしなくても外に出せない資料なのでは。

兄貴、と低い声で呼んでみれば、夜蛾には言うなよ、としれっと言葉を投げられた。何てもん後輩に見せてんだお前は。

「呪術師的には一般教養レベルの日本史。誰でも知ってることしか書いてねーよ」

「……本当に？」

「マジでヤバい部分はヒントだけ」

「お前ら読むのやめな。没収だ没収」

えー、と不満を訴える後輩どもの手から資料を抜き取る。兄貴が見せたのなら言うほど危ない資料ではないとは思いますが、それでも万が一ということはある。特別可愛がっているつもりはないとはいえ、自分の兄のせいで後輩たちが上層に目を付けられるというのは気分のいいものではなかった。

そこまで過敏になんなくても、と相変わらずキーボードを叩く手を止めない兄貴は悪びれない。

「多少ヤバそうな部分も、俺が調べようと思えば調べられる程度の隠蔽しかされてなかったんだから大丈夫だろ。知ったところで何ができるわけでもねーし。せいぜいすでに地に堕ちてる呪術界への評価が地下深くまでめり込む程度だよ」

「クラゲさんで本当に呪術界嫌いなんですな！」

「好きになれる要素が残念なくらいなくてな。まあふたりも自分の目

で見て確かめればいいよ、俺にとっちゃクズの集まりでしかないってだけだから」

嫌いだってのは俺の個人的な感情だ、ときらりと兄貴は言い、特に気にした様子もなく後輩たちも軽く返事をした。他人の感情は他人の感情として処理できている様子の後輩たちに、内心で胸をなで下ろす。もっとも、そうだとわかったからこそ兄貴も呪術界への嫌悪を隠さないのだろうけれど。

兄貴の指がいつもと違う動きを見せた。同時に、部屋の隅にあるプリンターが新しい紙を吐き出し始める。

「日本史没収されたし、別の暇つぶしやるよ。おおよそだけど、上級呪霊が生まれるきっかけになりやすい要因や感情についてのまとめ。仮説の域を出ないけどな」

「ありがとうございます」

「うーん、難しそう」

さっそく印刷された資料を受け取ったふたりは、目を通し始める。ついでに私も受け取って、紙の上に踊る文字や数字を辿っていく。これは以前に見たことがあった。

人間の負の感情を誘発し、漏出させ、果ては呪霊を生んでしまう、そういうもののリスト。上位にあるのは、やはり天災だった。

「ひどい天災が起きた翌年は呪霊の発生が多いと聞きますね。呪霊の発生には一年ほどかかるといふことなんでしょうか」

「いや、一年たって同じ季節が巡ってきたことで天災の記憶を呼び覚まし、改めて負の感情を漏出させてしまったって読み方もできる。そうとは言い切れないな」

「なるほど」

「こうして見ると、人的な事件とか、そういうのってあんまり上級にはならないんですね。今だとすぐニュースで広まっちゃうからたくさん負の感情を生んでしまいうそですけど」

「まあ、それはあくまで傾向としてのデータだから例外はあるし、こっちで捕捉できてないだけかもしれないけどな」

だが、と兄貴はキーボードを叩く手を止めて少し考える。

ちらりと私や後輩たちの顔を見て一瞬考え、まあいいかと口の中だけで呟いて続けた。

「これはデータと俺の経験則からくる所感で、ちゃんと数字で証明はされてないけど」

仮に、口にするのもおぞましい陰惨な事件があつたとしよう、と兄貴は言った。たとえば、ひとを殺すことを何とも思わないやつが、幼い子どもたちをいたぶり殺してしまうような、と。

そのたとえだけで、灰原も七海も嫌そうに顔をしかめた。その善良さにほんのわずか苦笑した兄貴は、ゆっくりと言葉を選んだ。

「ニュースでその事件が報道されれば、そりゃ日本中で相当な負の感情を生むことになるだろうな。よくある例としては、事件が起きた現場で被害者が漏出させてしまった恐怖や苦痛を核に、事件の報道によつて生まれた他者の負の感情が積み重なつて呪霊となるケースだな。犯罪者への嫌悪や憎しみ、被害者への憐憫や悲哀、その全部のために呪霊が発生したとする。さて、この呪霊の強さはどの程度か？」

「日本中で負の感情が発生させるわけだから……一級くらい？」

「二級か、準一級か。相当の等級な気がしますが」

ふたりの言葉を聞いて、ふむ、と兄貴は頷く。それから私に目をやつて、硝子はどう見る、と言葉を促された。私にまで聞くのかよ、とちよつと面倒に思いながら、今までの任務で見てきた呪霊を思い返す。

私の答えは、二人とは違っていた。

「……三級か、せいぜい二級？ 一級は行かない気がする」

「お前あんまり任務行かないわりにちゃんと見てんだな。正解」

「うるせー」

「え、」

「そうなんですか？」

あくまで傾向の話な、と兄貴は繰り返すが、本人はわりと確証をもっている様子だった。またモニターに向き直り、画面を走る数式をぼんやりと眺めている。

「せいぜい二級にしかならないのは、どれだけ陰惨だろうがいつの時

代にもよくあるただの殺人事件に過ぎない、というのも理由のひとつだろう。ニュースでどれだけ騒がれようと、他の大ニュースが報道されれば感情の矛先なんてすぐ変わるし。だが、俺はそこにもうひとつ仮説をもってる」

「とうとう？」

「あえて極端な表現をするが、その事件に対して大多数の人間が抱く『犯罪者への感情』と『被害者への感情』は、どちらも自分から見て『格下』への感情だ」

だってそうだろ、と兄貴は背もたれに深く背中を預ける。ぎしり、と椅子がにぶい悲鳴を上げた。

「自分より悪いやつに向ける感情。自分より可哀想なやつに向ける感情。そのどちらの感情にも、少なからず相手を見下す気持ちが含まれていると思わないか？ 見下すつてことは、相手を自分より弱い、劣っていると判断しているつてことだ。そんな気持ちで形をなした存在が、強いわけねーだろ」

まあ二級呪霊が強いかわいかったて議論はさておいて、と兄貴はモニターから目を離さずにひらひらと手を振る。

人間から漏出した感情を基盤に生まれる以上は、人間の認識を反映していてもおかしくない、と兄貴は私がつてきた紙袋をこそごとと漁る。中からふざけて入れたポップなパッケージの飴の大袋を見つけ、胡乱な目を私に向けつつそれを開けた。適当にとったひとつの包装を開けて、紫色の粒を口に放り込む。

「格下へ向ける感情よりも、格上に向ける感情をもとに発生した呪霊の方がイメージ的にも何か強そうだろ。実際、そのデータでも上位に上がっている天災——大自然だって、そういう存在だ」

俺が祓ってきた呪霊にもそういうやつはわりといるけど、と兄貴はころりと口の中で紫を転がす。

「恐怖より畏怖。恐れよりも畏れ。人間なんかじゃ敵うわけがないと思う、一種の敬意とも言える感情。それが根底にある呪霊は、たいてい厄介だよ」

ときに人が「神」と呼ぶもの。人智を超えた存在だと、見なしてし

まったもの。この場合、その存在の良い悪いは問題ではない。

人間では手の届かない存在だという「認識」や「定義」も呪霊に力を与えてしまうのではないか、と兄貴は言う。

「大自然とか神とか、それに紐付いた信仰とかな。信仰は人間の欲も含んでいるからなのか、強いっつーか姑息でめんどくさいタイプも多い。任務で遭遇した呪霊にわずかでもその気配を感じたら、まず逃げろ。少なく見積もって一級以上の可能性が高い」

生きてさえいれば、次がある。応援を呼ぶことも、さらに強くなる努力をすることもできる。背中を向けることは決して恥ではないと、いつもと変わらぬ声で兄貴は言った。

その横顔には特に何の感情も浮かんでいない。あくまでも平坦だ。けれど、その言葉は何故だかやけに重かった。

いくつもの修羅場をくぐってきた人間の、言葉だった。

「俺だって自分の手に負えないと思ったたらさっさと逃げる。死んで得られるもんなんか何もねーからな」

「……すごい兄貴らしいけど、それ迷わず出来るやつ少くない?」「何で? 逃げ切ったあとに応援でも呼んで、俺より強いやつが行って片付ければいいだけだろ。適材適所、やれるやつがやればいい」

代わりに俺は、俺にしかできないことをやる。

そう言つて兄貴は、またキーボードに指を走らせた。これこそが自分にはできないことだと、そう言うように。

黙って話を聞いていた七海が、クラゲさん、とどこか囁くように呼んだ。兄貴は返事をせずに、キーボードを叩き続ける。しかし、ちゃんと耳を傾けているのは雰囲気であつた。七海は、そのまま続ける。

「貴方がそう迷いなく言い切れるのは、以前からですか? それとも、……」

その続きを、七海は言わなかつた。言えなかつた。そこまで口に出した七海は恥じるように俯いて、すみません、と小さく口にした。灰原は、何も言わずに口を真一文字に結んでいる。そんな顔を見るのは、珍しかった。

兄貴はふとキーボードから手を離し、こきりと肩を鳴らす。そのまま首だけで振り向いて、珍しくわかりやすい笑顔をつくった。きつとそれは、七海のために。

「昔からだよ。そういう性分なの、俺」
任務で命を擲つ仲間を見送ってきたからだとは、言わなかった。

「……甘すぎるな」

「何、飴なんだから甘いのは当然じゃん」

「誰が飴の話をしてんだよ。あのふたりの話」

特に七海くんは、と確かに甘すぎる飴をかみ砕いた。紫色だったからグレープ味なのだと思うが、妙に舌に残る甘さだ。それを振り切るように、手近にあった珈琲を喉に流し込む。

あのあと部屋を後にしたふたりは、何となく気まずそうな顔をしていた。俺の機嫌を損ねたとも思っているんだろうか。生憎と俺はそんな繊細な精神を持ち合わせていない。

「人を氣遣えるまともな人間に呪術師が務まるわけねーだろ。呪術師舐めてんのかって感じ」

「ははっ褒めてんだか貶してんだかわかんねー」

「このうえなく褒めてんだろうが。呪術師なんかそれしかできねークズがやりやいいんだよ」

「ああ、あの最強どもみたいだな」

「あんなわかりやすい呪術師の鑑が身近にいんのかな……」

尊敬できない先輩たちが特級に上り詰めている時点で、ちよつとは察しろというか。自分らに適性がないことに気づけというか。

これまでの様子と報告書を見る限り、頭は悪くないし、筋も悪くない。特別強力な術式を持ち合わせているわけではなさそうだが、フィジカルを鍛えて呪力操作を叩き込めば相応の術師には育つだろう。特級術師に稽古をつけてもらえるという最高の環境もある。

問題は、この血なまぐさい世界に適応できるかということだ。

「……そもそもこの世界に馴染む必要なんかねーんだよ。おかしいのはこつちなんだから」

「本人たちに言えよ。私に言うな」
「うるせ」

もはやただの愚痴だというのはわかつている。第一、彼らが呪術師として生きようが生きまいが、俺に関係はないし気にしてやる義理もない。生き残ろうと、死のうと、どうでもいいと自分に言い聞かせる。言い聞かせている時点で、もうアウトな自覚はあった。

だってまさか、呪術高専にあんなまともな生徒が入学してくるとか思わないだろ。思わず深いため息をついて、眉間の皺を自分で伸ばした。

そんな俺をにやにやと見つめる可愛くない妹は、一服すれば、と俺に煙草のケースを向ける。いやそれ俺のポケットから盗ったやつ。

「気になんなら諦めて面倒見てやれば？ その方が生き残る可能性高まるかもよ」

「何で俺が。教師でもなければ暇でもねーよ」

「さつきまで教師より教師ぶってたくせに何言ってるの。あのふたり、兄貴の研究成果も真面目に聞いて任務に活かす気みただし。七海も灰原もどつちかつつーと体術メインなんだから、そつちも見てもればいいつしよ。メンタル面はどーしよーもないけど、話聞いてくれる人間がいるだけで違うこともあるかもだし？ 兄貴の研究に貢献してくれること考えれば、それくらい投資してやりやいいじゃん」

簡単に言いやがって、と頭の痛い思いをしながら、差し出されたケースから一本抜き取った。手の中でライターの花火が弾ける。

いつもなら極力精密機械の傍では吸わないようにしているのだが、少しくらいなら構わないだろう。吸い込んだ煙はいつもながらクソ不味いが、それでも精神安定の効果はあった。真上にむけて細く煙を吐き出すと、それは天井近くでゆらりと渦を巻いて消える。

目を閉じると、脳内で灰原くんの言葉が繰り返された。

『皆無事なほうがいいですもんね』

あの朗らかな笑顔で、何の気なしに放たれた言葉。だけど、本当に、

その通りだ。皆、無事の方がいい。帰ってきてさえくれれば、情報をもらえる。対策が立てられる。傷だって、ある程度は癒えるだろう。身体の傷も、心の傷だって。何度だって、人間は立ち上げられる。

そう、生きて帰ってきてくれさえすれば。

「……硝子」

「何？」

顔を正面に戻して、目を開く。煙草を灰皿において、飴の大袋をひつつかんだ。甘いものは嫌いではないが、甘さは控えめな方が好みだ。それを知っているくせに買ってきた妹に、その袋を突っ返す。

「これもういらねーから誰かにやっというて」

「せっかく買ってきてやったのに」

「ふざけて買ってきたくせに何言ってるんだ、だいたいこんなに食い切れねーよ」

後輩にでもわけてやれ、とそう言葉を続けければ、またにやりと妹が気色の悪い笑みを見せる。その悪い笑顔が見ていられなくて、顔を無理矢理モニターに戻した。改めてキーボードに指を走らせるが、動揺のせいかタイプミスが続く。

まったく、これだから慣れないことはするもんじゃない。

「今日のごとは気にしなくていいし、いつでも遊びに来てって兄貴が言ってたって伝えといてやるよ。はく私ってばマジで気の利く優しい妹じゃん？ オラまだ煙草あんだろ兄貴、出来のいい妹に感謝ととも差し出しな」

「どこの取り立て屋だよクソ妹。あ〜も〜お前そういうところマジで俺に似るなよな」

クズ兄貴の妹なんだから仕方ない、と笑った硝子は飴の袋を受け取り、小脇に抱える。そのまま自分も、煙草を一本くわえて火を付けた。

「七海も灰原も兄貴に懐きそうだよね〜。あ、もう懐いてるか」

「何だよ。何もしてねーわ」

そういうところだよ、と笑う可愛くない妹の煙草を奪い取って、そのまま灰皿に押しつけた。あつと手を伸ばす硝子を押しとどめ、その額にでこぴんをひとつ。額をおさえて痛みにもだえる妹に、お兄様を

からかおうなんざ百年早い、と軽く笑う。

涙目で俺を睨む硝子は、絞り出すように言った。

「……明日にでも夏油と五条連れてきてやる……」

「それはやめろ」

海月の囚われる深海に、柔い陽射しがひとつふたつ。

だいたい俺が外に出るのは、真夜中のことが多い。深夜の冷たい風を受けながら、ぼんやりと自分の口元から上る煙を見つめた。

そこそこ面倒な任務だった。面倒と言っても俺が対処できないレベルのものではなく、例によってとつと呪霊を斬り捨てて補助監督の運転する車に戻る。よく顔を見合わせる彼は、今回も無事で何よりです、と軽く笑ってくれた。彼曰く、俺の任務はいつも早く片付くので補助監督の間では評判になってるらしい。

『君は送り届けて帳下ろしたと思っただけ帰ってくるじゃないか。いつもほとんど怪我もないし、かといってそれを誇るようなこともないからね。私たちの説明もちゃんと聞いてくれるし、無茶も言わない』

補助監督を雑に扱う呪術師がどれだけ多いかわかるな、と思いつつ適当に相づちをうつと、彼はいつものようにからからと笑う。俺より少し年上の彼は、高専時代からよく声をかけてくれた。任務の下調べについて一切の妥協をしない人なので、一応の信頼をしている。

高専に直帰で構わないかと尋ねられたが、そろそろ煙草が切れることを思い出して首を振った。必要な買い物は、任務のついでに片付けることにしている。

高専関係者御用達の山のふもとにある小さなコンビニは、明らかに得物を持った客でも平然と受け入れてくれる。高専と関わりはないはずだが、変人が多すぎて麻痺してしまったのだろうか。夜中でも元気な声で迎えてくれる店員には、もはや尊敬してしまうかもしれない。

買い物も済むまで待っていいよかという言葉も断り、さっさと補助監督にもご帰宅願った。今日の任務はほとんど一太刀で済んだ。高専までの山道を億劫がるほど疲れてもいない。

コンビニの外に設置された灰皿の傍で、俺は紫煙を吐き出す。夏が近づいてきたとはいえ、夜はまだまだ涼しい。一本だけ吸ってさっさと高専に戻るつもりだったのだが、思いがけない声かふたつ、深夜の

静寂を破った。

「おや。誰かと思えば」

「クラゲさんじゃん。めっずらし」

高専から下りてきたらしい、やけに大きなふたつの人影。スウェット姿のふたりは、俺と違って任務終わりというわけではなさそうだった。

いくら寮の門限があつてないようなものとは言え、こんな真夜中もすぎたこんな時間によくもまあ。お前らな、と呆れた視線を向ける。

「何時だと思つてんだ未成年」

「ちよつと小腹がすいたからコンビニにきただけじゃん」

「クラゲさんこそ、高専の外に出ているの初めて見ましたよ。任務ですか」

「まあな」

肩にひっつけた細長い袋を見て、へえと夏油は細い目をさらに細めた。中には俺の愛刀が入っている。

最初の一度だけ硝子に連れられて以降、彼らも気まぐれに俺の部屋にやってくるようになっていた。何が面白いのかわからないが、差し入れを片手にやってきては少し雑談をして去って行く。もしくは、俺のつくった資料を適当に読みあさって帰って行く。何となく、ノラ猫が自分の縄張りを巡回しているようなものなのだろうと思つている。いやひとの部屋を縄張り扱いするなどは思うけれど。

懐かれたつもりはないが、自分たちのことを恐れも嫌いもしない年上というのが珍しいのだろう。研究にも基本的に協力的なので、俺も邪険にする理由はなかった。

「まーじでクラゲさん任務に出てんだ？ 全部サボつてんだと思つた」

「二応割り振られた分くらいはこなしてるわ。まあだいたい近場の任務だから、夜中のうちに終わらせることが多いけど」

「なるほど。怪我どころか疲れた様子もないあたり、余裕でしたか」

「俺には相性のいい任務だったな」

へえ、と面白そうに言う夏油に構わず、口を開けて煙を吐き出した。

今回の任務は、ある古めかしい屋敷のなかに巣くう呪霊を祓えという、何の変哲もない任務だった。ただ、呪霊を祓うにあたり、ただし、と付けられた条件が面倒だった。たいがい俺に課せられた任務は、この「ただし」が付いてくるのだ。単純に呪霊を祓って終わりなんて案件は、まず俺にはまわってこない。

そう言うと、五条は舌を出してうえ、と吐き出す真似をしてみせる。

「何、めっちゃ嫌がらせじゃん。陰湿〜」

「はは、完全に死んでも構わない便利屋扱いされてますね」

「どこぞの特級術師どもが器物損壊しまくったり帳下ろし忘れたりしなけりや、たかが一級の俺にそんな面倒な任務は回ってこないと思うんだけどな」

「だってよ傑」

「どう考えても悟のことだろ」

「両方だよ。お前らもう少し穏便にことを済ますということ覚えろ」

さつと目をそらした破壊魔ふたりにため息をつきつつ、また煙草に口を付ける。

今回の「ただし」は、「屋敷内にある鏡に一切の傷をつけるな」だった。この屋敷がまた「鏡屋敷」と呼ばれるくらい鏡だらけの趣味の悪い屋敷で、しかも各所にある鏡は全部アンティークの値打ち品。その上、その値打ちに目を付けて屋敷ごと買い付けた金持ちが呪術界上層と縁のあるやつだったとかいう面倒のオンパレード。

さらに面倒を言うと、今回祓うべき呪霊は鏡の中を自由に行き来できるといふ、なんともわかりやすいアドバンテージ持ちだった。

「……鏡と鏡の間を反射で移動する感じ?」

「そ。しかも移動時はほぼ『光』になってみたいでな。迂闊に遮ると触れた部分が灼けるそうだ。それで『窓』が何人か怪我を負ったらしい」

「それはそれは。なのに鏡を傷つけるなどは……いや、鏡そのものを外すのはOKなのか?」

「指紋も傷のうちらしいぞ。あとその屋敷、玄関から廊下からとにか

く鏡だらけ。全部外そうと思ったら数日かかるな」

「……屋敷ごとぶっ壊そ？」

「おい破壊魔」

だつてめんどくせーじゃん、とか言いながら俺のもつビニール袋に手をつっ込んだ五条。おい、と声を掛けるより先に中のガムを掠め取り、勝手に開封して中の一枚を抜き取る。夏油もこらこらと諫める声を上げながらしれっと一枚抜き取った。何こいつら。

もう文句を言っても無駄なのはわかっているが、そういうえば、とふと思ひ出して煙草を口から離す。

「そのガム結構、」

「かっつっつっつら!!」

「……辛めだからお子様舌には向かねえぞつて言おうとしたんだけど。まあ勝手に盗ったお前が悪いな」

「お子様舌は大変だね、悟」

「傑テメツ」

「深夜にでかい声出すな」

毛を逆立てる猫のような五条を、夏油はあくまでもにこやかに眺めている。一応騒ぐなと言えば口を閉じただけ偉いと言えはいいのだろうか。いや小学生かよ。

そろそろ「やれやれ」以外の言葉が出ねーなど、だいぶ短くなった煙草を再びくわえると、それで、と夏油に続きを促された。

「結局、どうやって祓ったんです？」

「……たいしたことはしてねーよ」

俺の術式を解放する。鏡の配置と角度を把握し、絶対に呪霊が通らない安全地帯を見つける。呪霊の動きをしばらく観察して、移動のパターンを把握する。情報を集約して呪霊が移動時に通る可能性の高い一点を演算で弾き出し、そこに俺の刀を差し出す。それも、刃でなく刀身の腹が呪霊に当たるように。

俺は愛用の呪具の手入れを欠かすようなへまはしない。磨き上げた刀身は、たとえ闇の中のわずかな光でも「反射」させ、煌めく。「なるほど、刀身に反射させてルートを変えた」と

「あとは天井に突っ込んだ呪霊が降ってきたところを斬り捨てて終わり。天井は少々へこんだけど、鏡に傷はつけてねーんだからセーフだろ」

「高速演算ねー……それ疲れねーの？」

「それ疲れる。昔はよく頭痛起こしたり熱出したりしてたしな。まあ今は加減も呪力操作も覚えたから、それくらいは何てことねーよ」

ふーん、と興味があるんだかかないんだかわからない声を聞きながら、とん、と灰皿に煙草の灰を落とした。だいぶ短くなったそれを、ぎゅつと皿の底に押しつける。

「じゃ、俺そろそろ高専戻るから。お前らもさっさと帰れよ」

「え、ここは後輩にアイスのひとつでも奢ってくれるところじゃねーの？」

「ついさつき不本意ながらガム奢ったろうが。不本意ながら」

「二回言いましたね。ああ悟、ガムの残り私がもらうよ。君食べられないだろ」

「結果的にガム奢ってもらったのは僕だけで、俺には何もねーじゃん」
「お前厚顔もそこまでくるといつそすげーな」

コンビ二前でヤンキー座りした白髪グラサン野郎に服の裾を掴まれているこの絵面、端から見たらどうなんだろう、と頭の片隅で考えつつ、今日何度目かわからないため息をついた。

こんなもん、術式を使うまでもない。癪ではあるが、下手にごねるよりさっさと買ってやるほうが絶対に早く帰れる。

というかお前ら、絶対俺より高給取りのはずなんだけど。

「……ならとつと選んでこいよ」

「お、さすがクラゲさん話がわかる」

「クラゲさん、私はアイスより唐揚げが食べたいんですが」

「ガムはどうした」

「それはそれ、これはこれ」

「……よくこんな奴らと同期やっつけられるな妹……」

「いや硝子なら俺らがたかられてるって」

「妹さん、強かに育ってますよ」

どう考えてもお前らの悪影響だと返せば、いやクラゲさんの教育の賜物と綺麗に声を揃えられた。うるせえ絶対違います。

コンビニの軽快な入店の音楽が、再び夜の静寂を破る。さっさと帰らせてくれと思いつながら、明るすぎる屋内に足を進めた。

ずいぶんとこの部屋も明るくなったものだ、としみじみと思う。

窓がないのも、モニターの画面がぼぼ灯りがわりになつていても変わりはないけれど、訪れる人がいるだけでこの深海も何となく光が差したように感じられた。私が買ってきたものではない食料が、デスクの端に積まれている。

それぞれのビニール袋の中をのぞき込んで、ふと眉をひそめた。

「……待つて兄貴、何でコンビニの袋に混ざつてペットシヨップの袋があんの？」

「ああちようどよかつた硝子、それ適当に五条のメシに混入させといてくれ。きつとたぶん人体に害はないんじゃないやねーの、内容物見てないけど。腹壊す程度で済むといいよな」

「めつちや希望的観測じゃん。え、何これ。五条？」

「五条。クラゲ用人工プランクトンだよ。ガチのやつ」

うわマジでガチだ。中に入っている小さな袋には、可愛いクラゲのイラストがプリントされている。この近辺にペットシヨップなんてないはずだが、あのクスこの悪戯のためにわざわざ出かけていったのだろうか。そのやる気と労力を他で使えと心から思う。

食わせとくわ、と返事をすると、よろしく、と兄貴はモニターを見つめたまま片手を振った。

「……ずいぶん懐かれたじゃん」

「これ懐かれたっていうのか？ 体のいい標的にされてる感がつえーんだけど」

「構つてやるからつしよ。何、こっちの袋は夏油？」

「ガムと十秒メシ入つてんのが夏油。おにぎり野菜ジュース入つて

んのが後輩ズだよ。性格出るよな」

「めちやくちや懐かれてんじやん」

「知らねーよ」

まあ後輩ズの方は面倒みてやってる自覚あるけど、と兄貴は首をひねる。

私が兄貴からだと言つて飴の袋を渡してやって以来、七海と灰原はちよくちよくこの部屋を訪れては兄貴に質問をしたり、過去の任務資料を見たりして勉強しているらしい。さすがに実地で戦闘まで見てやっているわけではないようだが、部屋の中で教えられる範囲のことは教えてやっているようだ。呪力操作がちよつとだけわかつた気がします、と灰原が嬉しそうに言っているのを聞いたような気がする。

兄貴も兄貴で、素直に話を聞いて学び得ようとする態度にはわりと真面目に感心したらしい。マジで呪術師向いてねーふたりとか言いながらも、邪険にすることはなかった。

「けど、五条と夏油まで懐くかく。何、意外とひとたらしなの、兄貴つて」

「いやだから知らねーわ。自分を怖がらねー年上が珍しかったんじやねーの」

「へえ、あいつら怖くないの、兄貴」

「ただのクソガキにしか見えねーのにどう怖がれてんだよ。お前だって別にあいつら怖くはねーだろ」

「まー、そりやね」

確かにあのふたりは最強で、私も兄貴も殺そうと思えば一瞬で殺せてしまうのだろう。けれど、アイツらはそれをするほど馬鹿ではない。クズではあるが、情を解さないわけでもない。それが理解できる程度には、同じ時間を重ねてきていた。

そんなこともわからない呪術師たちはただ闇雲にあのクズどもを恐れるが、わりと時間と労力の無駄だと思う。兄貴もきつと、そう思ったのだ。無駄が嫌いな兄貴だからこそ、必要のない恐怖に怯えることもない。

「連絡も寄越さずに乗り込んでくるのはめんどくせーけど、まあノラ

猫の巡回と思って諦めてる」

「特級術師をノラ猫扱いとかウケる」

「首輪付けようとか考えなきや別にひっかきもしねーのにな、アイツら」

「ひっかくどころか一応協力的なんしよ？」

それについては俺もびっくり、とりズムよくキーボードが鳴り続ける。何となく、兄貴の機嫌がいいのが伝わってきた。

「報告書もちゃんと詳細書くようになったしな。夏油が取り込んだ呪霊を直接見せて説明してくれんのもいいデータになるし、五条もまさか五条家から呪霊関係の資料持ってきてくれるとは思わなかったわ」

「……マジでめちゃくちや懐きすぎじゃん？」

「門外不出の資料なんじゃねーのって聞いたたら、俺がいいって言ってるんだからそれが全て、だよ。ワンマンとは聞いてたけど五条やべーな」

「いやそんだけ五条懐かせてる兄貴がやべーわ」

よくわからんけどもらえるもんはもらった、と機嫌のいい兄貴は、顔こそ無表情だが鼻歌でも歌いそうな様子だった。ここまで花を飛ばしている兄貴は高専入学以来初めて見たかもしれない。率直に言ってわりと気持ち悪かった。

しかし、そこまで五条が協力的だとは。確かに兄貴を気に掛けている雰囲気は感じていたが、いったいどこで頭を打ったのだろう。何となく腑に落ちない気持ちのまま、もってきた差し入れを兄貴の手に置く。

「おお、サンキュ」

「ん。ほら対価寄越しな」

「お前ヤニ以外の対価もうちよつと考えらんねーの？ 最近俺より吸ってるだろ」

「んなことねーし。オラ寄越せ」

そうは言ってみたものの、最近煙草が増えている自覚はあった。

美味しいかと言われるばさして美味しくもなく、ひたすらに肺を汚すだけのものではないのはよくわかっている。けれど、今の私には

必要だった。

煙草の煙は、血と臓物の臭いをリセットしてくれる。

「……硝子」

掌にほすりと、煙草のケースが置かれた。不思議とそれは、温かい。「お前も最近顔色わりーな。ひとのこと言えねーけどちよつとは日に当たれよ」

「マジでひとのこ言えねーじゃんウケる。はい兄貴に言われたくないベストフアイブ入り」

「ベストスリーだったのが更新されてんじゃねーか。残りひとつは何だ」

「そりや『口が悪い』でしょ」

「……お前マジで俺の口調真似んのやめろ？」

「もう無理じゃん？」

真顔で言われたので真顔で返してみれば、目元をおさえた兄貴は項垂れた。

別に真似をしてきたつもりはなかったが、生憎と一番私の面倒をみてきたのは兄貴だ。そりや口調が似ても仕方がないと思う。

まあ諦めてるけど、と兄貴はため息をつく。

「口の悪さはともかく、外には出るよ。こんな陰気くさいところ閉じこもっても気が滅入るだけだぞ」

「いやだから説得力皆無。兄貴こそたまにはちゃんと休み作って外出れば？」

「別に行きたいところもねーし、買い出しもお前の差し入れと任務後のまとめ買いで足りてんだよ」

「うわ、寂しいやつ」

「うるせ」

じゃあせめて明るいうちにこの部屋を出ろと言ってみれば、兄貴は露骨に嫌な顔をする。あんなに日光浴が好きだったくせに、どうしてこれほどまでに深海の住人になってしまったのか。

私の胡乱な目線の意味を理解してか、少し唇をとがらせた兄貴はそっぽを向く。

「気が抜けるんだよ、日光浴びると。今は研究から気を抜きたくないってだけ」

「いや何年も気を抜かずやってるほうがおかしーんだよ、かえって効率悪いわ。少しは未来の医者言うことを聞け」

「何だよ今日はやけに押しが強いじゃねーか。やなことでもあったのか?」

「別に」

短く言い切れば、いや絶対何かあっただろ、という顔をした兄貴はまたため息をつく。

いつもなら適当なところで私が引き下がるし、兄貴の研究の手を止めさせるようなことは極力言わないようにしていた。しかし、何となく今回はとにかく連れ出してやりたくなかったので折れてやるつもりはない。

そして兄貴は、絶対に本人は認めないだろうけど、結局妹のおねだりには弱いのだ。

「今が区切り悪いなら明日でいいし、高専からは出なくていいから」
「……敷地内とかさらにやることねーだろ。俺に何しろつての」

小さな声で白旗をあげた兄貴に、にっこりと笑ってみせる。同期や後輩が買ってきた食料をちらりと見て、じゃあ、とわざと明るい声を作って言った。

「メシ作って。久しぶりに、いつものやつ」

材料は買つたというやるから、と続ければ、兄貴はうえ、という顔をしつつも無理とは言わなかった。

兄貴の料理の腕は、私が一番よく知っている。両親が忙しかったぶん兄貴がキッチンに立つことは多かったし、何より料理は科学だ。手先もそこそこ器用な兄貴にとっては、料理が失敗すること自体がよくわからないらしい。

諦めた顔をした兄貴は、仕方ない、とため息をつく。

「ほかのやつには言うなよ。作る量が増えたら面倒だ」

「わかってるって」

結局折れてくれる兄貴ににやりと笑うと、こつり、と小さな拳が額

におりる。

相変わらず、兄貴の手は痛くもなんともなかった。

そういえば卵の殻を割るのってこんな感じだったなと、指先の感覚を確かめる。牛乳と塩を加え、菜箸でぶつくりと膨れた黄身をついた。どれくらい、どんな風に混ぜればベストな結果に繋がられるのか。俺の脳はとづくに答えを弾き出している。

頭の奥ではいくつもの数式が並び、最良の結果へ到達するための道筋は、すでに俺の中にあつた。

「……え、料理に術式使つてんの……？」

「あーアレ、もう癖なんですよ、昔から無意識で術式使つてたから。術式のオンオフできるようになった今でも、結局昔みたいに術式使つた方が楽みたいで。ほら、ほとんど考えなくても演算通りにやれば美味いもん作れるから」

「ああ、あれこれ考えるのが面倒なのね。さすが先輩」

聞こえてるからな、と口に出すのも面倒でぼんやりと卵を見つめる。俺の手はほとんど勝手にベストを求めて動き続ける。白身の塊がほぼ消えたところで腕は止まった。卵の状態を目視で確認する。問題なし、と俺の脳は答えを示した。

フライパンの温まり具合、表面を転がるバターの量、さつき作ったチキンライス。できあがりを乗せる皿まで用意すれば、あとは卵を焼いて、包むだけ。失敗する確率は……ゼロではないが、限りなく低い。まあ油断さえしなければ、イレギュラーさえ起きなければ問題ないだろう。シミュレーションを続けながら、俺はただ手を動かしていく。

やれやれ、と俺の口から小さなため息が漏れた。

『え、先輩が昼間に外に出てる……!?!』

硝子に引きずられて寮のキッチンに向かう途中、久しく会っていないかった彼女と顔を合わせた。いつもの巫女服に、ゆるく二つに束ねた髪。まるで化け物にでも会ったかのような顔をしているが、まあ別に

腹も立たない。俺自身、日光にあたるのが久しぶりすぎて完全に体内時計が混乱しているレベル。眠いのか眠くないのかも、もはやわからなかった。

歌姫センパイ、と硝子が嬉しそうに声を上げる。

『どうやって先輩を外に連れ出したの硝子……やっぱり先輩も妹のおねだりには弱いとか？』

『そうなんすよく兄貴ってばシスコンなんで』

『しばき倒すぞクソ妹。めんどくせーけどいろいろあったんだよ』

お前は任務か、と尋ねれば、俺はいえ、とちよつと目を逸らした。

二級術師、庵歌姫。高専を卒業したばかりの彼女は、俺の一学年下の後輩にあたる。一学年の人数が少なく先輩後輩の交流が盛んなこの学校では、先輩が後輩の指導するのはごくごく当たり前にあつたし、彼女と一緒に任務にあつたことも数え切れない。

鍛錬で吹っ飛ばしても吐くまでしごいても食らいついてくる彼女の根性にはわりと感心していたし、なんだかんだと義理を欠かさない彼女のことは嫌いではなかつた。

『その、今度の任務のことであつと先輩にご相談をと思つたんですけど……』

『俺に？』

『いえ、でもご用事だつたんですよね。まだ時間あるし、改めます。今度はちゃんと事前に連絡しますね』

『ちなみにセンパイ、お昼ごはん予定ありますか？』

え、と瞬きをする俺と、にんまりと笑つて見せた可愛くねー妹。おい、と止めるより先に、やけに俺に懐いている硝子はさらりと言つた。『兄貴の手料理、興味ないですか？』

そら俺みたいなのやつが料理するとか思わねーよなど、我ながら思う。高専時代も基本買い食いだったし、お湯を沸かすレベル以上のことはしなかつた。ある程度金銭的な余裕さえあれば、別に料理なんてしなくても生きていけるのだ。

センパイノテリヨウリ、とまるで知らない言語のように繰り返した俺の顔はなかなか面白かつたが、じゃあ三人分な、と親指たてた妹、お

前誰が作ると思ってたんだ。いや俺が作るから軽く言ってたよな、うるせえ知ってるわ。

混乱する俺ともうどうにでもしてくれ状態の俺をひきずる硝子は、近年まれに見るほどの上機嫌だった。我が妹ながら気色悪い。

結局三人前の「いつもの」オムライスを拵えることになった俺は、卵の具合をチェックしながらチキンライスを包みあげている。

皿にうつして形を整え、背後で呑気に座っている妹に皿くらい運べ、と声を掛けた。

「一応聞くけど、もう人数増えねーんだろーな」

「野郎どもなら全員任務出てるって。まあ帰ってくるかもだけど、さすがに昼は過ぎるでしょ。さっさと食っちゃえばダイジョーブ」

てかもう材料ねーし、と硝子はまずひとつ焼けたオムライスの皿を受け取った。オムライスは一人前ずつしか作れない。この作業をあと二回するだけでも面倒なのに、これ以上増えるのはさすがに勘弁して欲しかった。

目の前にオムライスを置かれた俺は、まるで子どものように目を輝かせている。

「まだ食うなよ、俺。硝子」

「へーい」

小皿にケチャップを絞り出した硝子は、そのままレンジに放り込む。それを横目に見ながら、俺は二つ目のオムライスに取りかかった。

「ケチャップ温めるの？」

「こうすると酸味が飛んでイイ感じになるんで」

「今はこんなだけど、硝子にも酸っぱいもん苦手な時期があったんだよ」

「え、可愛い」

「でしょ？」

「でしょじゃねーんだわ、手間増やしやがって」

「子どもの好き嫌いごときでグチグチ言うなっつ。だいたいいつも私がやってんだろが」

相変わらずの憎まれ口を叩きながら、硝子はレンジからケチャップを取り出した。その姿が、かつての幼い妹と重なる。

忙しかった両親と食事をともにすることはかなり少なかったと思う。いつも食事は俺と二人で、できたてとは言えないごはんを食べることがほとんどだった。

まあそんな食事、俺だって嫌になるんだから妹だってそうだろう。作り置きで冷たくなった料理も、外で買ってこようとするものももう嫌だと言った妹。気持ちはわかるだけに上手く宥めることも出来ず、どうしたものかと考えたときにテレビに映った名店のシェフ。ご家庭でも簡単に名店の味を、なんてよくある煽り文句と同時に紹介されたレシピと、実演された調理の流れが目についた。

たぶん、術式はすでに解放していた。一応火を使うことも許されていた俺は、家のコンロの火の癖も、フライパンの使い勝手も把握している。勝手に食材を使っただけは怒られるかもしれないと思っただけ、硝子が食事を抜くよりはマシだと思った。

必要な情報データさえ揃ってれば、俺は最短の手間で最良の結果を出せる。

『わたしもてっだう』

『いいよ、火は危ないから座ってな』

『てっだう……』

『……じゃあ硝子、ケチャップお皿に出して、チンして』

『！ うん』

俺の料理を興味津々で見ていた妹に手伝いを頼めば、わかりにくく張り切ってレンジに向かう硝子。それ以来、ケチャップを温めるのは硝子の仕事になっていった。

初めて作ったオムライスはさすがに完璧とは言いがたかったが、それでも卵は破れずにチキンライスを隠していたし、もちろん焦げていたなんてこともない。ただちよつと、フライパンが重くて、うまく形を整えることは出来なかった。

それでも硝子は目を輝かせて、それを口いっぱい頬張った。

『……おにいちゃん』

『うん？』

『おいしい』

『……そっか』

口元にケチャップを付けながら言った硝子に少し笑って、その口元を拭ってやったのを覚えている。それから硝子にせがまれていくつかの料理を覚えたが、結局「いつもの」に落ち着いたのはこのオムライスだった。

「……覚えてるもんだな」

とは言え、最後に作ってやったのはいつだったか。年齢が上がれば生活時間もあわなくなつて二人で食べる機会も減つていったし、高専に入つて寮生活になればなおさらだった。

軽く数年はキッチンに立つことも滅多になかつたのに、術式以上に俺の身体はこれの作り方を覚えている。

最後のひとつを皿に乗せて、硝子に渡した。温かいケチャップで彩られたそれが三つ、食卓に並ぶ。

「めちやくちや美味しそう……！」

「これくらいお前も作れるだろ」

「いや、こんな絵に描いたみたいなおムライスはなかなか……」

「絵に描いたみたいなの。確かに」

「何か文句あんのか」

ワンパターンとか思つてねーよとか言いやがった硝子の皿を取り上げようとすれば、冗談じゃーん、としつかりと皿を抱えられた。「いつもの」とか抜かしたくせに変化を求めるんじゃない。

まあまあと庵に宥められ、まったく思いながら手を引いた。いただきます、と三人揃つて手を合わせる。

「おいっしい……！」

「ん〜いつもの味」

「お料理上手だったんですね、先輩。さすがやればできる人代表」

「滅多に作らねえけどな」

「どちらかというと必要がなければやらないやつ代表」

「何で必要ねーことをわざわざしなきゃなんねーんだよ」

「真顔で言うな」

そんな軽口を叩きながら、皿を空にしていく。多少材料の違いはあれど、いつも通りの見た目、いつも通りの味。数年ぶりに作ったそれは、確かに落ち着く味だった。

燦々と降りそそぐ日光と、食べ慣れた味。だんだんと、脳の奥で堅く結んでいたものがほどけていくような気がした。いけない、と眉間に皺を寄せる。まだ、それを解くわけにはいかない。

難しい顔をしてしまっていたのか、家入先輩、と心配そうな声を掛けられる。

「どうかしました？ 眉間に皺寄せて」

「いや、眠いだけ」

「体内時計狂いまくりじゃん」

「うるせ。……ああ、そういや庵、何か任務の話があんだっけ？」

少しは頭を使う話しておかないと、いろんなものが壊れてしまいそうだった。食事時にする話ではないと理解しながらも、後で聞こうと思っていた話を振る。

庵に任務の相談をされるのは初めてではなかった。先輩後輩の関係というのもあるが、ある程度俺の研究に理解のある術師はたまにこうして俺のもとを訪れる。俺がもつ膨大なデータの価値を、身をもつて理解しているのだろう。

あ、と思い出したように庵は口元を拭いて、姿勢を正した。別に食いながらでいーよと言っても、義理堅い庵はちよつと困ったように笑うだけ。どこまでも真面目な奴だと思う。

「相談というか、ちよつと資料を見せて頂きたいなど。前に先輩も関わったことのある団体だと伺って」

「団体？ 何、呪詛師がらみか？」

タチの悪い呪詛師がらみとなれば庵向きではなさそうだけど、と思いながら問い返すと、いえ、と庵は長い髪を揺らす。

ひとつ息を吐いて、庵は真面目な顔を作って言った。

「盤星教です。〴〵存知でしょう？」

深海を揺蕩う海月には、天の星など見えぬもの。知らないままで、いたかった。

盤星教、それは不死の術式をもつ呪術界の核ともいえる存在、天元を崇拜する非術師の宗教団体だ。久しぶりに聞いたその名前に、過去の任務の記憶が蘇る。他に類を見ないほど、とにかく苦痛な任務だった。

「……ああ、調査任務の護衛、今回はお前にまわってきたのか」

「はい。先輩も担当されたことがあると伺ったので」

基本的に呪術界も非術師の宗教団体を気に掛けるほど暇ではない。が、彼らの場合、崇拜している対象が対象だけに、定期的に「ご挨拶」の体で彼らの活動にチェックを入れている。といってもそれを行うのはほとんど補助監督の仕事で、呪術師は「万が一」のときのために護衛として調査にくっついていくだけだった。

しかし「万が一」のことがあったという事例は、今のところ記録にはない。相手が非術師であることもあって、その護衛はせいぜい二級か三級術師の持ち回りですることになっている。俺も二級だったときに一度護衛任務を受けたことがあるが、補助監督と盤星教の代表の腹の探り合いを延々と聞かされるという、かなり苦痛な任務だった。「暇つぶしの道具もつてくといいで。俺も本のひとつでも持つとくべきだったと死ぬほど後悔した」

「護衛任務中に読書とかウケる」

「……それ他の人にも言われました……」

マジですか、と硝子が驚いた顔をしているが、マジだ。この任務から帰ってきた術師は皆「どちらかという拷問」「精神的苦痛を伴う」「呪霊相手にしてたほうがいくらかマシ」「案山子の苦勞を身をもって理解した」と呪いたつぷりの報告書を提出している。まあ数日の間、日が一瞬突っ立ったままイヤミな言葉の応酬を聞き続けるだけの任務なので当然だと思う。俺も二度とやりたくはない。

そんな任務を振り分けられた庵に少し同情しながら、改めて尋ねる。

「まあ、そういう任務だから仕方ねーわな。で、それで何でわざわざ俺

んどこまで」

「任務にあたって、参考としてこれまでの調査任務の報告書を見せてもらったんです。それ読んで思ったんですけど、先輩、この任務、無駄なものだとは思ってませんか？」

疑問形で聞きながらも断定している様子の庵に、片眉を上げる。そこそこの付き合いがあるとは言え、報告書くらいでそこまで言い当てられるとは思わなかった。

確かに俺は心底面倒だとは思いながらも、この任務の必要性を肌で理解していた。

「詳細すぎる先輩の報告書を見ればそれくらいわかりますよ。だいたい、報告書の書き方や注意事項を私に指導してくれたのも先輩じゃないですか」

「……まあ、そりやそうか。そうだな、任務は死ぬほど面倒だが、あまり目を離さない方がいい集団だとは思ったよ」

「そんなヤバイやつらなの？」

そこを私も伺いたくて、と硝子の言葉を受けて庵が頷く。

わざわざそれを聞くために俺を訪ねたのか。相変わらず真面目が過ぎるといふか慎重というか。しかし、前線での戦闘に向かない庵に、事前に行ける対策はすべてとっておけと言いつけたのも俺だったつけ、とかつてを思い出す。俺の言ったことを実践しているのだと思えば、適当に答えるわけにもいかないだろう。

非術師の集団にすぎない盤星教。多くの術師は、その存在を気にも留めていない。所詮は非術師、呪力もない相手に何を警戒するのかと、この調査任務の継続そのものを疑問視する声も多い。だが俺は、そうは思わなかった。

「……盤星教の信者の多くはあくまでも非術師。ほんの一部の幹部に術師もいるらしいが、まあ大したレベルじゃない。だから戦闘力という意味は脅威でも何でもねーよ」

「そう思います。なのに何故？」

「そこそこ思想がヤバいくせに、非術師ってところが厄介なんだよ」
「厄介って何がよ」

「何をするかわかんねー弱者つてのは、下手に強いやつよりよほど怖いだろ」

社会の大原則は弱者生存。弱いものが強いものに淘汰されずに生き残るために、人間は集団生活を覚え、社会を生み出した。弱いものを庇護し、強いものを抑圧することによって、社会の秩序は保たれている。大多数の人間の生存と平穏を保障するためには、非常に理にかなっている考え方と言えるだろう。

その大原則は、当然呪術界にも当てはまっている。

「基本的に、術師は非術師に手を出せない」

世界の平和が呪霊の発生を抑圧するから、という意味もあって、呪術界の基本姿勢として「非術師」は「守るべき存在」だ。

力のない者を守れ、と。彼らに自分たちや呪霊の存在を知られるな、と。関係のない者たちに力を行使し、いたずらに傷つけるな、と。

わかりやすくこれに反した者たちは「呪詛師」の烙印を押され、呪術界から追われる立場となる。別に、それ自体をおかしいとはさすがの俺も思わない。俺だって、弱い者をいじめて愉しむような変態的趣味はない。

だが、この原則は時として「強者」と「弱者」の関係を逆転させる可能性を秘めている。

「……別に、盤星教が今すぐに呪術界に逆らってくるとか、そういうことを思ったわけじゃねーけど。あそこまで狂信的に天元を崇拜してるやつらなら、正直どつかで道を外れてもおかしくはねーと思った。で、俺たち術師は、奴らが道を外したという明確な証明がされるまでアイツらには手を出せねーだろ。つまり何かあったとき、確実に後手にまわることになる」

後手にまわるということは、すでに何かしらの被害を出してしまっているということだ。誰かが傷ついているかもしれないし、死んでしまっているかもしれない。そこからどんな手を打とうとも被害を受けた事實は消えず、喪われたものは戻らない。

これで相手が術師の集団だったらまだ話は違っただろう。相手が呪力をもたないという事実、それだけ術師にとって大きな意味があ

る。

「術師が迂闊に手を出せない非術師の集団であること、信仰の対象が自分たちの理想から離れることを許せないという過激思想をもっていること、天元のためなら倫理も道徳も投げ出せる思考放棄系馬鹿であること。俺が盤星教から目を離さない方がいいと思う理由はそんなとこだ。まめに様子を見に行つて、こつちはお前らに目を付けてんだぞつてことを見せといた方がいい」

この調査任務を誰が提唱したのかは知らないが、ちゃんとそれをわかつている呪術師がいたということだと思う。非術師を見下す術師が多い中で、よく定期的な調査にまでこぎつけたものだ。その慧眼には素直に敬服する。

真剣な顔で俺の話聞いていた俺は、そこまで聞いて少し考え、頭の中で内容を咀嚼し、頷いた。なるほど、と真面目な声で言う。

「やっぱりこの任務、気を抜かない方がよさそうですね」

「いや、何もねーなら顔見せとくだけで十分だと思うけどな。それはそうとオムライス冷めるぞ」

「あつ、えつと、すいません失礼します！」

俺が話している間、真面目にスプーンを置いていた俺の皿には、まだ三分の一ほどオムライスが残っていた。別に食いながらでいいつて言ったのに、俺は少し堅すぎるところがある。俺ごときにそこまで礼儀を気にしなくてもいいものを。

退屈そうに聞いていた硝子は、すっかり空になった皿にスプーンを置いて、ふーん、と少し首をかしげた。

「何かめんどくさそ」

「めんどくせーんだよ。無駄に歴史も規模もあるから適当な理由つけて潰すこともできねーんだろ。信者が多いぶん金もあるし、拠点も多い」

「あつ、ひよのほろなんれふれろ！」

「食つてから喋れな、俺」

礼儀は重んじるが、どこか抜けている俺は口を押さえてもごもごと唸った。ごくりと口の中のを飲み込み、ちよつと恥ずかしそうに

改めて口を開く。

「先輩のことだから、どうせ個人的にも盤星教の調査続けてますよね？」

「どうせって何だよ」

「警戒してる相手を放置しておく性格じゃないことは存じてます」

「……まあ」

「やっぱり。盤星教が拠点に使ってる施設の最新のリストとかあれば是非拝見したいんですけど！」

この後輩、よく先輩のことわかってんなとちよつと遠い目をした。なるほど、俺を訪ねてきた本当の理由はこっちの方か。

確かに俺は、室内において調べられる範囲ではあるが、盤星教ほかちよつと気になった団体や個人については継続的に調査をしている。研究優先なので片手間程度だが、それでもその中には上層も把握していない情報だつてなくはない。何で上層に報告しないのかつてそりゃ、わざわざ教えてやる義理がないからに決まっている。

「……別にいいけど、情報源が俺だつてことは言うなよ」

「もちろんです！　ありがとうございます！」

「兄貴、ちよつと手広くやりすぎじゃん？」

「気になったことを放置しとくほうがストレスだつてだけだ」

イレギュラー
不安要素は見張つておくに限るだろ、と言つたところで食べ終わつた俺が両手をあわせる。ごちそうさまでした、という言葉に、お粗末さん、と軽く返した。

米粒ひとつ残されていない皿を見て、悪い気はしない。

「本当に美味しかったです。お皿の片付けやりますね」

「あ、センパイ私やりますよ」

「いいの硝子、やらせて」

「……じゃあお皿洗うので拭いてもらえますか？」

流しに並ぶふたりの背中を横目に、ぼんやりと窓の外を見る。

そういえば、昼間の高専はこんな感じだったなど、改めて思った。盤星教の話で少し動いていた脳が、柔らかな日差しにあてられて再び緩み始める。……嗚呼、これはまずい。

まだ、気を抜いていい時期じゃない。

まだ、これを自分に許せるほどのことを成してはいない。

気晴らしが必要だという言葉も理解はしているし、硝子の顔色が悪かったからつい連れ出されてしまったが、これは頭が緩みきる前に深海に帰った方が良さそうだ。俺の怠け癖は俺が一番理解している。

眩しさにくらむ目を擦り、皿を片付けているふたりに声を掛けた。

「俺は部屋に戻る。俺、拠点のデータは用意しとくから夜にでも取りに来い」

「あ、はい！」

「なに、もう戻んの？」

「昼飯は作ってやったら。それで良しにしとけ」

皿洗いで硝子が手を離せないのいいことに、俺はさっさとその場に背を向ける。

日光と、平穏と、妹と、それに後輩までいたその空間は、確かに俺にとって居心地がいい。だが、だからこそ。

今の俺がそれを享受するわけには、いかなかった。

「で、何があったの？」

こっちの手が塞がっているのをいいことに、やるだけやってさっさと逃げた兄貴。それに思わずチツと舌打ちをすると、苦笑気味のセンパイが柔らかく言った。

何がって、と問い返すと、センパイは拭き上げた皿を棚に戻しながら言った。

「あのひとが昼間に外に出て、料理までするなんて。確かに実は世話焼きなひとだけど、妹のためとは言えそこまでするのは珍しいじゃない。硝子だって、普段なら研究の手を止めさせることは言わないようにしてるし」

兄貴が私のわがままを聞いてくれた理由、そして私がそんなわがままを言った理由。その両方を尋ねているのだと気づいて、ちよつと気

まずい気分になる。このセンパイ、そういうところはチョロくなかった。

言いたくないなら聞かないけど、と微笑むその顔が優しい。

「……珈琲でも飲みませんか？」

「いいわよ。付き合う」

珈琲豆なんて上等なものはないが、インスタントくらいは常備してある。センパイのために砂糖とミルクも用意して、またセンパイと食卓で向かい合った。

柔らかい色になった珈琲を、センパイはスプーンでかき混ぜる。渦をつくるそれをぼんやり眺めて、ちよつとだけ小さな声で言った。

「……別に、特別ななんかあったわけじゃなくて」

「ええ」

「とつくに慣れたつもりだったんですけど、……血とか臓器とか、そういうのの臭いが、鼻の奥に残る感じが最近、ひどくて」

「そう」

「……ちよつとイラついてたかもしんないです」

確かに顔色が良くないとは思ったのよね、と歌姫センパイは苦笑した。何となく決まりが悪くて目をそらすと、いいんじゃない、と優しい声が落ちる。

「というか無理もないわよ。特にアンタの立場ならね」

「……」

「最近、術師の遺体の解剖なんかに立ち会ってるんでしょ？」

「……医師免許とること決めたって言ったたら、そういうのも経験していた方がいいからって言われて」

空間に満ちる、血と臓物の臭い。目の前に横たわる遺体は形が残っていればいい方で、もはや元が人間だったとは思えないようなものもある。人ではないものを相手にしているのだから仕方のないことと言えそうなのだが、グロテスク以外に表現しようのないものを何度も眼前に叩きつけられるのは、正直、堪えた。

きつと繰り返していけばいつかは慣れるのだろう。それまでの我慢だと自分に言い聞かせても、あの独特のどす黒い赤が目焼き付い

て離れない。

何より、いつか自分のよく知る「誰か」も、こんな肉塊に成り果ててしまうのかもしれないと思うと。

「……人間って、所詮血と肉の塊なんですよ。誰しも、いつかは死ぬし」

「何悟りきったこと言ってるのよ。……まあ、言いたいことはわかるわ」

死と隣り合わせの仕事だと知っていることと、実感することは違うのよね。

そう言ったセンパイの言葉が、重く響く。

「まあ少なくとも、アンタのお兄さんはそう簡単には死なないわよ。下手したらあのクソ生意気な最強どもより生き残るんじゃないかしら」

「別に兄貴の心配はしてませんが、……あのクズどもより?」
「ええ」

本当に変なひとよね、とセンパイはどこか懐かしそうに笑う。

歌姫センパイと兄貴がこの高専で同じ時間を過ごしたのは、実質二年ほど。その間に何があつて、どんなことを話したのか、これまであまり詳細を聞いたことはなかった。だけど、なんだかんだで兄貴はちゃんと歌姫センパイを気に掛けていたし、センパイはセンパイで兄貴のことを頼りにしているのは見ていてわかる。

家入先輩は、と続けるその声は柔らかい。

「何よりも生きて帰ることを第一に考えるひとでしょ？ 学生時代はそりゃ吐くほどしごかれたけど、いつだって先輩の指導は『戦って勝つこと』じゃなくて『戦闘を自分に有利に進めて生き残ること』を前提にしていた。おかげで攻撃することより回避することの方が上手くなっちゃったけど」

「それはまあ……そんなこと言ってるの聞いたこともありませんけど」

「ね。しかも生き残ることを最優先に考えるどころか、怪我をするのすら嫌がるのよね、先輩って。こんな世界に身を置いてるくせに、どんだけ潔癖なんだって思ってたんだけど」

硝子のことを知って納得したの、と愉快そうに笑うセンパイは、そつと珈琲に口を付けた。ちよつと甘すぎたかな、と小さくぼやく。

「何でそこで私」

「そりや、アンタにそんな姿を見せたくないからよ」

「……は？」

「怪我を負ったたら、どうしたって反転術式を施せる硝子のところに連行されちやうじやない？ 自分の血とか傷とか、もちろん自分の死も、そういうのをアンタに見せたくなかったのね。だから先輩は、極力血を流さない戦闘スタイルを確立した」

最低限の被害で、最良の結果を。死ぬくらいなら、血を流すくらいなら、さつさと撤退して敵の情報を整理し、きちんとした策を立てて「次」に挑む。血を流すことなく、私の前で傷ついた姿を晒すことのないように。

実はわかりやすいひとよね、とからかうように言うセンパイに、思わず言葉を忘れた。

「……歌姫センパイ、それマジで言ってます？」

「マジで言ってるわよ。アンタだって自分で言ってたじゃない、あのひと相当なシスコンでしょ」

「……うわー……」

「アンタだって大概ブラコンなんだからドン引くのはやめたげなさいよ」

「えっ嘘、マジでやめてください鳥肌たってる」

仲良し兄妹ね、とにやにやと笑われて頭を抱える。

いや兄貴が私に甘いのはわかっていた。それに乗っかって好き勝手やってきた自覚も正直なくはない。だがそれに「シスコン」「ブラコン」と名称を付けられるとさすがにぞつとした。そんなことはないと言いたい張りたいが、センパイは笑うのをやめない。

ちよつとやけになって、手元にあった珈琲を一気に呷る。珈琲はまだちよつと熱かった。

「……ブラコンではないです」

「はいはい、わかったから珈琲一気はやめなさい。熱かったんでしょ、

涙目なってるわよ」

「いやマジで違うんですってば」

「わかったわかった」

絶対信じてね〜と泣く真似をすれば、とうとうセンパイは声を上げて笑った。いやマジでこっちからすれば笑い事じゃない。あの兄貴に対してブラコンとか末代までの恥というか、もはや死んだ方がマシ。

ぐぬぬと唸ると、いいじゃない、とセンパイはただ楽しそうに笑う。「アンタの八つ当たりと気晴らしにもなんだかんだ付き合ってくれろ『いいお兄ちゃん』でしょ？　こうして私にアンタの気晴らし相手を頼んだりね」

「え？」

「じゃなきやわざわぎ『夜に來い』なんて言わないわよ。『夜まで硝子に付き合ってやってくれ』って意味でしょ、あれ」

「……………マジすか」

「マジよ」

たっぷり数秒、沈黙が流れる。

あ、これ煙草吸いたい。めちやくちや吸いたい。煙を肺に入れて、このぐちやくちやな羞恥をまとめて吐き出したい。そして全てを忘れ去ってしまいたい。

とりあえずあのクソ恥ずかしい兄貴には五条が買ってきたクラゲの餌でも食わせてやると心に誓う。

「……………センパイ、この話はどうか内密に……………」

「そんな苦悩に満ちた顔で言わなくても」

「私にとってはわりとマジで深刻な問題です」

まああえて他で言うようなことはしないけど、と呆れたように言うセンパイはまた珈琲に口を付けた。

とうかこのセンパイ、マジで兄貴のこと理解しすぎではないだろうか。何せ兄貴が兄貴なので今まで考えたことはなかったが、これはひよっとしてひよっとするのでは。

思わず身を乗り出してそれを尋ねると、センパイは照れるどころか

死んだ目をして軽く手を振った。希望の欠片もない声で、儂く甘い夢を切り捨てる。

「ないわよ」

「え、それにしちや兄貴のこと理解しすぎでしょ」

「あのね、硝子、私はこれでも先輩のこと信頼してるし、呪術師にしては珍しいくらいまともなひとだとも思ってる。尊敬だっけしてってるつもりよ。ただ、ただね、」

アンタの前でこんなこと言うのは気が引けるけど、と歌姫センパイは今日でいちばん真面目な顔で拳を握った。

「私、付き合うなら健康で文化的な最低限度の生活を送ってるひとがiiii……!」

「タイプじゃない理由が生存権の放棄なのマジでウケる」

世間の保育士さんはきつと大変なんだろうなと、背後の喧噪を聞きながら思う。

「だから私のが先輩だっつってんだろ五条!」

「弱つちい歌姫相手に敬語使えとか無理じゃん?」

「こら悟、たとえ弱くても敬意は払うべきだよ」

「聞きましたよ、今日クラゲさんがオムライス作ったって! 僕も食べたかったなく!」

「灰原、声が大きい。クラゲさん、これ今日の任務先で買ってきたお土産です」

いや、七海くんにはありがとうと言っておこう。受け取った紙袋の中を見ると、入っていたのは安眠効果のあるハーブティの類い。そういうのを作っているおばあさんと任務先で話をしたらしい。なるほど寝ると言いたいのはわかったから俺の隈を見ながら「クラゲさんには必要なものか」とか言うんじゃない。

改めて思う。ガキの相手をする職業のひとのストレスは、きつと俺の比ではない。心の奥底から尊敬します。俺には無理です。

「とりあえずちよつと口を閉じろお前ら。うるせえ」

仕方がないのでちよつとした呪力の放出とともにそう言つてやると、さすがに部屋は一瞬静かになった。これくらいしないと静かにならないのがマジでめんどくさい。

ひとつため息をついて、背後に向けて書類ケースを差し出す。

「庵、資料まとめといたから持つてけ」

「あ、ありがとうございます！」

「何よ、任務関係？」

「盤星教関連だよ」

「ばんせいきよう」

「ついでに灰原くんと七海くんには盤星教の基本的資料をやろう」

「やったー！」

「ありがとうございます仕事がはやい」

私たちにはないんですかと夏油が文句をつけるが、そもそもお前ら盤星教くらい知ってるだろというか。俺は素直に学びを得ようとする相手には協力的なだけです。

どれどれと灰原くんを押しつぶしながら資料をのぞき込む五条、お前後輩に尊敬されないのはそういうとこだぞと思う。

「……まあ確かにこれくらいは基本知識だわな。つかクラゲさんこんなまで資料作るつて、実は暇？」

「五条、アンタね、」

「いーよ庵、その程度で腹立てたら血管何本あつても足りねーから」
「その理屈で言うとか歌姫先輩は血管何本あるんでしようね」

んだと夏油、とまた大声を出そうとする庵にため息をつくど、うつと詰まった後輩は小さな声ですみません、と呟く。基本的には素直な庵だが、どうもクズふたりには熱くなってしまうらしい。まあ気持ちにはわからんでもないが、さすがに怒りくらしいはコントロールできるよになれよと思う。感情のコントロールは呪術師の基本だ。

お前はもうちよい受け流せるようになりな、と言えば、うううと唸る声が聞こえる。

「はいクラゲさん、質問いいですか！」

「俺、灰原くんのそういう空気読まねーところ嫌いじゃないよ」

「ありがとうございます！」

「うん、そこでお礼言える素直さもな。で、何？」

そして天元で何ですか、と軽く言い放った彼に、俺は改めて高専の教育体制を心から憂いた。さすがに唾然とする俺に、困った顔をする夏油。平然としているのは五条だけで、七海くんもまた頭を抱えていた。一応七海くんは知っている様子なので説明を受けてないわけはなさそうだが、理解していないのを放置している時点でダメだろ教師。

とりあえず俺はキーボードを叩き、プリンターに新たな資料を吐き出させる。

「……はい、天元の資料」

「ありがとうございます！」

「それも資料あんのかよ。口で説明してやりやいいじゃん」

「いや、口頭での説明で頭に入らない場合もあるから、資料があるというのありがたいことだと思っようよ。繰り返し読んで復習できるしね」「そもそも口頭での説明で理解していなかったから灰原もこう言っているので……」

クラゲさんの資料はいつもわかりやすくて助かりますと元気いっぱい灰原くん、ありがとうございますなんだけど何だか複雑な気持ちになるのは何故だろうか。

とりあえず、と夏油は優しい顔のまま言い聞かせるように言った。

「灰原、天元さまには『さま』をつけるようにしましょう。この呪術界のまさに『核』といえる方だからね」

「はい！……あれ、クラゲさんはさつき、」

「俺は俺だろ。見習わない方がいいぞ」

しれっと言い放てば、困ったように笑う夏油。俺が誰に敬意を払うかは俺が決めることなので、是非とも放っておいて欲しい。

相変わらずですね、と俺に呆れたように言われるが、今さらだと軽く返す。

「そんなだから無駄に敵を増やすんですよ……」

「敵を増やしても殺されねー程度の対策は取ってる」

「また嫌がらせ任務まわされますよ、クラゲさん」

「別にいいよ。どんな任務だろうが俺は無理だと思ったら逃げるから」

このひとは……と呆れる夏油の肩に腕を置き、笑いをこらえる五条。ま、いーんじゃん、とひらひらと手を振りながら言う。

「大丈夫っしょ、クラゲさんならたいいの呪霊からは逃げ切りそーだし」

「特級にそこまで言わせるなんて俺も捨てたもんじゃないな」

「まあ俺たちにクラゲさん殺せって任務が下りたらそうはいかねーけど」

「せいぜい狙われねーように気をつけるわ」

また俺の視線が剣呑になっているが、事實は事実なんだから腹を立てるほどのことでもなかりうに。七海くんにするもの言いたげな視線を向けられるが、あえてその碧眼を避けてモニターに目を戻す。俺はあんな軽口に感情揺らされるほど暇じゃありません。

背中に向けられた視線の一切を無視して、いつも通りの作業にうつる。今日の昼間にサボってしまった分は夜のうちに片付けたかった。

「……そう言えば先輩」

集中しようとしたそのときに、ぽつりと零された後輩の声。何、と声だけ返せば、ちよつとだけ優しげになった声が続いた。

「硝子、今日は早く休むそうです」

あのあとたくさんお喋りしたら疲れちゃったみたいで、と明るい声。

相変わらず俺はそういうところが鋭い。そうか、と相づちを打って、その辺にあつた飴を後ろに放り投げる。

わ、と驚いた声はしたが、どうやらちゃんと受け取ったらしい。

「アイツ機嫌悪いとうるせーんだわ。さんきゅな」

「少しは素直に心配だったって言ったらどうなんですか」

「別に。今日みたいに外に引きずり出されるのはもう勘弁てハナシ」

「クラゲさんて素直じゃないだけで家入さんのこと大好きですよね！
僕も妹いるのでわかります！」

「灰原くん、ちよつとお口チャックしような。おうそのクズども、
笑ってんならいい加減出てけや」

「知ってたけどシスコン……！」

「わかってたけどシスコン……！」

「……俺、お前らと歳離れてて良かったよ」

こいつらと在学期間が被っていれば、この七面倒なやつらと毎日のように顔を合わせていた可能性がある。そうなればさすがに温厚な俺もどこかで我慢の限界はきていただろう。なるほど、そう考えれば俺がこいつらにキレやすいのも無理はないのかもしれない。

何か同期と先輩がすみませんと真面目な顔で言う七海くん、むしろあんな先輩をもってしまった君には同情しかないので安心して欲しい。あと灰原くんはもう何か諦めている。

「それはそれとして盤星教についていくつか質問があるのですが、いいですか？ 関連して、天元さまについても」

「いーよ。俺、その笑い袋ふたつ外に捨ててきてくれ。うるさい」

「こいつらの前で言ったのは謝りますから無茶ぶりやめてください
！」

「？ 家族が大事なものは恥ずかしいことじゃないよね？」

「灰原、否定はしませんがとりあえず君はその資料を熟読しなさい。
天元さまを知らないのはさすがにまずい」

復活した喧噪のため息をつきつつ、キーボードを叩く指は止まらない。
い。

少し前までは訪れるひとなんてたかが知れていたこの部屋も、ずいぶん賑やかになったものだ。深海みたいに静かで暗い部屋だと硝子が零していたのが嘘のよう。

「……どっちかつーと南国の浅瀬だな」

「？ 何か？」

「や、何でもない。で、質問て？」

少し不思議そうな顔をした七海くんが、では、と資料の該当箇所を

指さした。その隣で灰原くんは一生懸命に天元についての資料を読み、相変わらず笑いを堪えてうずくまっているでかいガキ二匹を引きずり出そうと俺がもがく。俺、外に捨てると言ったのは俺だけどすがにそれは無理だと思う。

やれやれ、と質問に耳を傾けながら目の前の数式を辿っていく。このところ研究の手が止まることこそ増えたが、協力者が増えたことでデータの収集は妙にはかどっていた。

今までひととの交流はめんどくさがってばかりだったが、案外悪いことばかりでもなかったと認識を改める。

「そーいやクラゲさん、俺にも飴ちよーだい」

「五条さんの面の皮つてどれだけ分厚いんですか？」

「あゝあゝん？」

ただ、頼むから喧嘩は外でやってほしい。

静かに近づく大波に、未だ海月は気づかない。

別に、言うほどヘビースモーカーではないと俺は思っている。

そりや何本も吸う日もないわけではないが、まったく吸わない日だってあるくらいだ。だいたい吸いたくなるのは日が沈みきったあと、自分の思考を整理したくなるとき。高専の校舎裏、ちようど俺が使っている部屋の真後ろが、俺にとつての喫煙所だった。そんなところで喫煙していいのかつて？ いいんだよ、火の始末も吸い殻の片付けもちゃんとしてんだから。

そもそもこんな場所、よっぽどの物好きでもなければわざわざ訪れることもない。

「こんなところにいたのか、海月」

と、思っていたのだが、今日はそうでもなかったらしい。客の顔は暗闇に隠れて見えないが、その声はよく知ったものだった。

「その名で呼ぶなって何度言ったらわかってもらえるんですかね、先生」

高専時代の恩師、夜蛾正道。どこをどう見ても柄の悪いオッサンなのだが、そのくせ可愛いものが好きで、しかもまさかの教育者だなんてどういう冗談だと心から思う。

こちらに歩み寄るにつれて、わずかな煙草の灯りを受けて浮き上がったその顔。うっわ、どこをどう見てもヤクザでしかない。多分幼い子どもはこの顔を見ただけで泣く。

「……お前、何か失礼なことを考えていないか？」

「言いがかりはやめてくださいよ」

別に失礼なことじゃない、ただの純然たる事実である。

で、何の用ですか、と煙草をくわえたまま聞けば、夜蛾はひとつため息をついて小さなビニール袋を差し出した。コンビニの袋らしいそれには、簡単な軽食が入っている。

「硝子に頼まれた。今日は実習で行けないから、ほっといたらまともな食事も摂らない兄に届けて欲しいとな」

「……とうとう担任をパシるとかさすが俺の妹」

「感心しないで自分の食事くらい自分で何とかしたらどうだ」
「最低限は食べてんですよ、アイツがお節介なだけです」

どうも、と一応の一言を添えて、その袋を受け取った。

まったく、いつも通り呆れた顔をした夜蛾は、そのままとんと校舎の壁にもたれかかる。嫌な予感がしたので、とりあえず先手は打っておくことにした。

「もう生徒じゃねーんですから、説教は聞きませんよ」

「学生時代もまともに説教を聞いたことない奴が何を言うか」

「聞いてはいましたよ、右から左に逃げてっただけで」

「それは聞いていないと言うんだ」

今さらお前に説教をする気はない、と言われたので、それはよかった、と心からの言葉を返す。ただでさえ話し始めると長いひとなのだ、輪を掛けて長くなる説教なんてわざわざ聞いていられない。昔、短くまとめてくださいませんかとうっかり口に出してマジの拳を食らったことを覚えている。あれは結構に痛かった。

じゃあ何だ、と視線を向ければ、夜蛾は改めて話し出した。

「最近、硝子以外の生徒たちの面倒も見てくれてるらしいな。一年の担任がえらく感謝していたぞ、灰原がようやく呪術について実地以外でも理解し始めたよ」

「そこは一年の担任に説教しといてくださいよ。そりゃ根気はいるでしょうが、別にやる気がないわけじゃないんだから。ちゃんと理解するまで面倒見てやれよって」

「ああ、そこは本人も反省していたよ。どんな説明をすればわかりやすいのか、今試行錯誤を重ねているらしい」

まだ七海にダメだしされるらしいがな、と夜蛾は唇をゆがめた。教師相手にも物怖じせず指摘を試みせる七海くんの姿が容易に想像できて、少し笑う。彼を生意気だと切り捨てることなく、その言葉に耳を傾けているのだとしたら、きつと見込みのある教師なのだろう。早くまともな説明ができるようになってもらいたいものだ。

しかし、と浮かんだ笑みを引つ込める。そういえば、ふたりの一年生について、最近少々思うところがあった。いや、一年生だけ、とい

うのは正しくない。二年の例の「最強」ども、そして一年生ふたりも関わった、例の任務。

さて、このひとは何か知っているのだろうか。知っていたとして、ぼろを出してくれるだろうか。別に俺に直接関係のあることではないが、今後とも無関係であるとは限らない。

煙草の煙を細く吐き出し、そっぴや先生、と変わらない声音で続けた。

「先日の星漿体の任務なんですけど」

「……ああ、あの件についてはお前も手助けをしてくれたそうだな」

「たいしたことはしてませんよ。夏油の連絡受けてちよつと調べ物をしただけです」

突然連絡を寄越してきて「呪詛師の動きを調べろ」とかマジで何様だとは思ったが、そこで堂々と「特級術師さまですが何か？」と抜かしやがった夏油、あまりのクズっぷりが面白かったので許せた。

星漿体、天内理子、呪詛師とくればすぐに調べはついた。呪詛師御用達の闇サイトに、期限付きで掛けられた懸賞金。その期限が午前十一時、つまり同化が行われる日没よりかなり早めに設定されている時点で、相手の意図に気づけというか何というか。

その甘さが、今回は完全に裏目に出た。

「それだけじゃないだろう。盤星教の拠点も正確に把握し、幹部の所在や天内理子の遺体がある可能性の高い施設もすぐにピックアップした」

「前回の定期調査で俺が不穏な気配ありって報告出してたから警戒してただけです。俺を褒めるより、俺の報告を真面目に捉えなかったやつらが反省しろよって言う話じゃないですかね。……俺を持ち上げではぐらかそうとしないでくださいよ、俺が言いたいのはそんなことじゃない」

あの任務、不可解な点がいくつかあるんですけど。

俺の言葉を、夜蛾は真正面から受け止めた。

「まあいくつかと言っても、大きくわけたらふたつです。ひとつ、一年ふたりが動員されたことについて。ふたつ、星漿体の扱いについて」

「……一年ふたりが動員されたのは何もおかしくはないだろう。お前の指導もあつてか、あのふたりの成長は著しいと聞いている」

「実力のほどは察してますよ。今までこなしてきた任務も一年生、まして一般家庭出身の人間にしちや上等でしょう。けど、命がけの戦闘に身を投じてまだ数ヶ月のガキどもであることには変わりません」

まして、今回の敵は呪霊じゃなく呪詛師だった。運良く戦闘がなかったとはいえ、状況が状況であれば、対呪詛師という普段とは全く違う戦闘に臨む可能性があった。

そこそこ呪術師をやつていれば、呪詛師を相手取るとはそこまで珍しいことではない。その命を自分の手で摘み取ることも、珍しくはないのだ。

その事実を、「呪霊を祓うことと同じ」と捉えるか、「人殺し」と捉えるか。

慣れた呪術師ほど、前者を選ぶ。その何が悪い、と平然と言つてのける。頭がイカれていればイカれているほど、そこに葛藤はない。別に、それをおかしいとは思わない。だから呪術師なんてものは、やっぱり呪術師しかできないやつがやればいいのだ。

しかし、そう切り捨てられない奴もいないわけじゃない。

「別に俺はあのふたりに人殺しができないとも、その覚悟がないとも思つてません。だが、対呪霊とは精神的にも戦術的にも勝手の違う戦闘になる以上、対呪詛師の可能性がある任務は等級を上乗せして設定されることが多いですよ。まして今回はすぐに増援の見込めない沖縄での、一般人が多い施設の警備。いくらなんでも、優秀な一年生たちを見込みすぎでは？」

「……今回の一年生の立ち位置はあくまでもサポートだ。それも、特級術師がふたりも動員している任務のな。悟や傑とのコミュニケーションの取りやすさや、経験を積ませたいという意味も含めての配置だと思ふが？」

「うっわ、好意的な解釈すぎて反吐が出ますね。綺麗事にもほどがある」

「海月、」

「誰を標的にした嫌がらせだったんでしようね。五条ですか、それとも夏油？ ああ俺かもしれないですね、生徒の面倒見てやれつててめえで言つたくせに、いざ本当に面倒見始めたらアイツらごと目の敵ですか。相変わらずやり口が陰湿だ」

「海月！」

「その名で呼ぶのやめてください」

すうっと煙草の煙を深く吸い込む。腹にたまった苛立ちごと、大きくそれを吐き出した。

わかっている。別に夜蛾が任務に行くように命じたわけでもなし、このひとに感情をぶつけることは正しくない。もちろん、夜蛾にこれを言つたところで何が解決するでもない。

もう、あのふたりに強くなつてもらおう以外に方法のないところまできている。どんな理不尽を押しつけられようが、どんな窮地に追いやられようが、生き残ることができるように。

よほどヤバいときは手を考えてやらなければならないかもしれないが、結局自分の身は自分で守るしかないのだ。

「まあこれは八つ当たりなんで、本題はふたつめの方なんですけど」

「……お前な……」

「率直に聞きますけど、アンタが星漿体を選択肢をやつた理由は何ですか？」

回りくどい言い方ではあつたようだが、このひとは確かに星漿体に「同化をしない」という選択肢を与えた。夏油と五条に決断を委ねたように見せても、あのふたりの性格を考えればほぼ結論はわかつていたはずだ。

「現時点で公表されている情報から考えて、星漿体が同化しなかったら今の呪術界的にマジでやばいやつでしょ、天元の結界術強化は現体制の基礎なんだから。なのに同化しなくてもいいよって、あの特級馬鹿ふたりへの道徳教育にしてもリスク負いきじやないですか？」

そもそもクズに道徳とか教えようとしても無駄だし。

そう軽口を付け加えてみても、夜蛾は乗つてこなかった。ただ、無言を通して。短くなつてきた煙草の火を見つめながら、俺の口は

積み重なった疑念を吐き続ける。

「まあいくつか理由は考えられますよね。たとえば、そもそも天内理子は星漿体ではなかった、とか。ただの影武者に過ぎず、本物は別にいる。星漿体の存在が呪詛師集団だの盤星教だのに漏れてることも不自然っちゃ不自然だし、偽物の星漿体を餌にして目障りだった呪詛師集団だの宗教法人だのを誘き出してまとめて掃除したって言い方もできるな。いや、天内が本当に星漿体だったとしても、星漿体自体が複数存在する可能性もあるか」

「……想像力が豊かになったな、海月」

「お褒めにあずかり光栄です。想像力が豊かになったついでに、もうひとつ言いますでしょうか。呪詛師集団と同様、先生も天元に暴走してほしかった、なんて可能性もありますね」

だとすれば、天元が星漿体と同化しなくても変わらず安定しているこの状況は、目論見が外れたってことになるんですかね？

そう続けてやると、海月、と静かな声が再度響く。その声に、動揺も怒りもなかった。ただ、説教を聞き流し続ける俺に呆れ果てつつも論し続けた、教育者としての声色にひどく似ていた。

「それも八つ当たりか？」

返された言葉に、また煙を吸って、吐いた。

「や、ただの所感」

提出された報告書と、五条や夏油から聞いた話を総合したときに、あまりにも素直に俺の中に生まれたもの。感情を排し、可能性を辿っただけのもの。

それが正しいかどうかなんて、俺には判断するだけの材料もない。「もちろん、満月を過ぎても未だ天元が安定してるのは単純に天元がすげー存在だからってだけなのかもしれないし、先生も単純にあのクソガキふたりに自分たちがしていることの意味を理解しろって言いたかっただけなのかもしれない。何が正しくて何が間違っているのか、俺には判断しようがないんで」

「ああ、あらゆる可能性を考えられるのはお前の長所だと思う。だが、言う相手は選べよ。俺はお前に悪意がないことを知っているが、そん

なやつばかりじゃないからな」

「はいはい、ご忠告痛み入ります」

「また心にもない」

「元教え子の言葉を信じないとか教師としてどうかと思いまゝす」

「一応教えてやるが海月、お前のそういう言い回し完全に硝子にうつてるからな」

「……」

そこを突かれるとさすがに俺も黙らざるを得なかった。

口が止まった俺に肩を揺らして、夜蛾は空を見上げた。釣られて俺も、視線を浮かせる。

今夜は月がない。そのせいか、やけに星々が自分の光を主張している。綺麗と言えば綺麗なのだが、俺にはやけにうるさく思えた。

「俺を疑うのもお前の自由だ、海月。信じる相手は自分で選べばいい」

「そのつもりです。……いや、一応俺、これでも先生はどちらかという
と信じてるつもりですよ？　そうだな、九十九さんと同じくらい」

「それは一切信用していないのと同義じゃないのか」

「さては先生こそ俺のこと信じてないですね？」

「信じてるさ。悟や傑と同じくらいにはな」

「うわこれ一切信用されてねーやつ」

とりあえず普段の行いを見直してくれ、と言われるが真剣に心外だった。俺ほど自分の心に従って生きる正直な呪術師は珍しいだろうに。

そう言ってみれば、よく言う、と夜蛾は笑う。

「めんどくさがりだの何だのいつも嘘八百を言ってるじゃないか。お前ほど自ら苦難の道を選ぶやつを見たことがないぞ」

「失礼な。俺は自分にとっていちばん楽な道を選んで生きてますよ。なんせ面倒が嫌いなもので」

遠回りに見えても結局それが一番面倒が少ないのだと、俺の術式が告げている。だから俺は、その道筋を辿っているだけのことだ。

それは今までも、そしてこれから。何も、変わることはない。

「そっぴや先生、俺が生徒のときから思ってたけど、ちつとは呪術

や呪霊に対する座学増やしたらどうですか。一年たちどころか、夏油もたまに知識抜けてますよ。アイツもかなり独学で頑張ってるみただけけど、あんま応用利くタイプじゃねーから誰か見てやった方が良さげ。頭は悪くねーのに、妙に型に嵌まりたがるっつーか」

「それを言われるとな……海月、たまにでいいからまた授業やってみないか。いや、むしろ教師やってみないか」

「なりふり構わねーのもいい加減にしてくれませんかね」

今俺の隣にいるのが、かつて教えを受けた恩師でも、腹の底に思惑を抱える「呪術師」でも、もはやどちらでも良かった。

誰を信じようが、誰を疑おうが、俺がすることは何も変わらない。

「俺はもう、やること決まってるんで」

ただ俺は、俺の目的のために。

今日の差し入れは、いつもと違っていた。

ふもとのコンビニのビニール袋ではなく、ちよっとお高め和菓子店の紙袋。もちろんまさか私が兄貴のためにそんな店にわざわざ買いに行くわけもなく、今日の私はただのおつかい係だ。自分で届けに行けばいいものを、とは思ったが、先日私も足に使ったのだからひとのことは言えない。

任務がないからとくつついてきた夏油と軽口を叩きながら、いつも通り深海へのドアを開いた。

「兄貴ー、おやつー」

「ノックをすんなら返事を待てよ妹。何だ、夏油もきたのか」

「どうも。今日の差し入れは豪勢ですよ」

めんどくさそうに振り向いた兄貴の眼前に、ずいっとその袋を見せる。袋に印刷された店名を見て、高いとこのじゃん、といつも半開きの目が見開かれた。

「何だよ、どういう風の吹き回し？」

「私らじゃなくて夜蛾からだよ。何かやたらと機嫌良くてキシヨかつ

た」

「クラゲさんと一緒に食べるって渡されたんですよ。悟がない日ですよ。よかった」

「俺と一緒にイ？」

とうとう呪骸に反乱起こされて頭でも打ったか、と半ば本気で言う兄貴。あのでかい図体が自分でつくった呪骸たちから一斉攻撃を受けているところを想像するとちよつと笑えた。ぬいぐるみに埋もれるガタイのいいおっさんはヤバイ。腹抱えて笑える。

それはそれでちよつと見たいですが、と夏油も笑いながら答えた。

「何か夜蛾先生が喜ぶようなことを言ったんでしょう？ あいつも呪術師らしくなって、なんて言いながらちよつと泣いてましたよ。わりと気持ち悪かったな」

「確かにそれは気持ち悪いな」

「入学してきた頃はあんなに小さかったのに、とか何とか。兄貴って高専入学したときそんなにチビだった？」

「確かに高専の四年間で十センチは伸びたけど、入学時にも百七十あつたぞ」

「なるほどそれは小さい」

「規格外は黙ってるな」

日本人の平均身長見てみろってんだ、と言いながら兄貴は紙袋を受け取った。中を見て、栗入りのどら焼きか、とちよつと嬉しそうな顔を見せる。

この兄貴、いかにも甘いものが嫌いですという顔をしながら、実はチョコより餡子が好きなタイプの甘党だったりする。本人は「甘党と言うほどじゃない」とか抜かしているが、一般的には普通に甘党に分類されるだろう。

さすが夜蛾というか、担任は元教え子の食の好みも忘れていなかったらしい。兄貴はどら焼きをひとつ取り出して、また私に袋を返した。

「つっても夜蛾を喜ばせるようなことを言ったつもりはねーんだけど。どつちかという喧嘩を売った」

「マジで何言ったの兄貴」

「総括すると、八つ当たりついでに俺は夜蛾のことも別に信用してねーよって話をな。それで喜ぶってあの人ドMかな？ あの外見なのに教師で可愛いもの好きでドMってやべーな。属性盛りすぎじゃん、マジで引くわ」

「うわ。それ夜蛾に言っついていい？」

「やめろ。この歳になって夜蛾に追いかけてまわされんのはごめんだ」
「ということは昔は追いかけてまわされてたんですか」

お前らほどじゃねーよ、いやそんな、なんて交わされる言葉を聞き流しながら、私も袋の中からどら焼きを取り出す。ひとつ夏油に渡して、私も自分の分を手にとった。

兄貴の高専時代については夜蛾から少し話を聞いたことがあるが、そこそこの問題児だったことは察している。それなりに頭が良くて腕がたっただけになおさら面倒な生徒だったのだろう。まあ、夏油と五条ほどではなかったと信じているけれど。

齧りついたどら焼きは上品な甘さがして、あまり甘いものが好きでない私でも美味しく感じられた。なるほど、これがお値段分の味。

「にしてもクラゲさん、呪術界が嫌いなのは知ってましたが、夜蛾先生もそこに含まれるんです？」

「別に夜蛾が嫌いとは言っついてねーよ。話が通じるだけマシなひとだとも思っってるし、一応元生徒として世話になった自覚もある。ただ、あのひとも呪術師には変わりないっただけで」

「……呪術師だから、と？」

「当然だけど、あのひとにはあのひとの思惑があるっつて話。このまま行けば確実に学長になるだろうし、その程度にはこの面倒な世界の渡り方を理解してるひとなわけだ。その時点でろくな人間じゃないに決まっってるだろ」

「偏見……とも言いきれませぬね」

「むしろそれでこそ呪術師、というか。俺にそう教えたのも夜蛾だしな」

呪い呪われの世界なんだから、と兄貴はさらりと言う。その言葉に

夏油も苦笑して、なるほど、と頷いた。

「まあ、呪術師ですからね。私は夜蛾先生をいい先生だとは思っていますが、確かにいいひとかと聞かれたら即答はできないな。それを判断できるほど先生を知っているとも思わない」

「そういうもんだろ。むしろ自分の知ってる一面だけで相手を理解したつもりでいる方がよっぽど危険だ」

「それは同感です。ところでクラゲさん」

「何だよ」

『応用が利かないタイプで妙に型に嵌まりたがる』ってのは誰のことです?」

「あのオッサン口軽すぎか?」

くるとモニターの方に向き直った兄貴を、力尽くで椅子ごと振り向かせる夏油。につこり笑顔で圧を掛ける夏油と、真剣に嫌そうな顔をした兄貴の対比が心底面白い。うわ、面白すぎてこの光景だけでどら焼きもう一個イける。そう思って袋に手を伸ばすと、俺にももうひとつ、と兄貴が手を伸ばしてきた。

特級術師に睨みつけられながらおかわりを要求できるコイツ、我が兄ながら頭がイカれている。

「兄貴ってわりと命知らずだよ。ウケる」

「俺ほど自分の命を大事にしてる人間もいねーと思うが」

「特級術師目の前にして堂々とどら焼きを食う人間は命知らずに分類されるのでは?」

「何だよどら焼きくらい好きに食わせろよ」

「今別にどら焼きの話はしてないですよ」

夏油が引きそうにないのを察してか、兄貴は深々とため息をつく。もそもそとどら焼きを食べながら、めんどくさそうに言った。

「別に、他意はねーけど。一応言っとくと陰口のつもりもない。俺はそう思うっただけ」

「ええ、貴方が根拠なくそういうことを言う人間だとは思っていません。ただ、私のどういふところを見てそう思ったのかは聞いておこうかと」

「うわこいつめんどくさい」

「クラゲさん？」

「呪霊出そうとすんなアラート鳴るだろが」

え〜〜〜とまじで嫌そうに説明の言葉を探す兄貴。というか自覚ねーのかよ、とぼつりと呟くと、また夏油の手元で呪力が渦を巻いた。

口元をひん曲げた兄貴は、頭をがしがしと掻きながら口を開く。

「もともと思考の傾向がそうなんだろうってのは思うけど。特にそう感じたのは、戦闘面」

「、戦闘で？」

「たとえばだけど、お前さ、呪霊操術を呪霊操る以外の使い方考えたことある？」

「……は？」

「何だ、やっぱ手の内晒してないわけじゃねーのか。まあじやなきや禪院甚爾相手に簡単に殺され掛けたりしねーわな」

あ、と夏油の口から珍しく低い声が漏れ、その目に剣呑な色が宿る。

禪院甚爾、という名前に聞き覚えはあった。少し前にあった、星漿体の護衛任務。そこで危うくこの「最強」どもが殺され掛けたという、禪院家出身の術師殺し。

あの任務のあとふたりはいつも通りだったが、さしも私も命が惜しい。この件については触れないようにしていた。

あれ伏黒甚爾だっけ、と首をひねった命知らずは、特級の殺気にも怯む様子は見せなかった。

「キレるのは勝手だけど早とちりすんなよ。禪院甚爾のことは俺も聞いたことがある。完全に呪力ゼロという最高クラスの天与呪縛、その身体能力はまさに人間の域を超えてる。しかも多くの術師を殺してきた経験値つきとくれば、お前が負けるのも、まあ、無理はない」

「……」

「ただ、そんな化け物相手にした状況でもお前、報告書を読む限り、術式の使い方がそのまんまだったから。奥の手隠してるわけじゃねー

のかつてちよつと驚いただけ」

「……術式の使い方がそのまま、というのほ？」

「そこでピンとこねーのが俺にはいつそ不思議なんだよな。だから呪術の座学増やせてんだよ夜蛾のやつ」

お前が特殊例つてのもあんだろうけど、と兄貴はひたすらにため息交じり。どこから説明すりやいーんだよクソ教師ども、と頭を揺らしている。

そんな様子に毒気を抜かれたのか、夏油は戸惑った様子で殺気を解いた。

「……知識不足ということですか？」

「それもある。というか、そうか、夏油お前、基本的に任務はずつと五条と一緒に、ほかの術師と組んだことあんまりなかったりする？」

「え、……ええ」

「んで、当然ながら自分より強い奴と戦った経験、あんまないよな」

「……そうですね」

素質がありすぎるのも考えものつてことか、と兄貴は小さくなったどら焼きの欠片を口に放り込んだ。目を閉じて何やら考えながら咀嚼し、ごくりと飲み込む。そしてまた目を開けて、言葉が続けた。

「術師が強くなろうと思つたとき、いろいろ手段はあると思う。呪力操作の精度あげるとか、身体能力の向上させるとか、体術鍛えるとか。その中でも特に術師の戦闘能力に直結するのが、自身の術式への理解を深めることだと俺は思つてる」

「……というど？」

「さつきも言つたら。呪霊操術つて、呪霊操ること以外できねーのつてハナシ」

いや呪霊操術つてそういうもんじゃねーの、と思つたのが顔に出ていたらしい。私の顔を横目で見た兄貴が、また深々とため息をついた。

これだから前線出ねーやつはとでも言いたげで、まあお前もお前で特殊例なんだよな、と頭の上に掌が置かれる。

何かむかついたので払いのけた。

「術式なんて本来あやふやなものなんだよ。自分の術式に定義を与えるのはあくまでも自分で、術式効果の枠を定めるのも自分なの。だからそこその術師はたいがい、自分に刻まれた術式を無理矢理にでも解釈しなおして定義を広げたり、定義を逆手にとって効果を裏返したりして武器を増やすわけ。創意工夫つてやつ」

「……術式反転のことを言ってます？」

「それもまたひとつ。俺はできねーけど」

「センスね〜」

「俺の術式反転させても大して意味はなさそうって話なんだよ、ちよつと黙ってなさい妹。たぶんお前の呪霊操術もそう……いや、順転が使役なら反転は暴走か？ それはそれで……」

「兄貴」

思考の海に潜りかけた兄貴はおつと、と我に返ると、そのまま話を続ける。

「だから、もう呪霊操術を言葉通りの『呪霊を』『操る』術式だって素直に受け止めてないで、積極的に疑って定義を壊して作り直すくらいのことはやろうぜって話。お前拳銃持ったら弾込めて撃つことしか考えないだろ。俺なら銃弾と拳銃解体バラして爆弾作るくらいは考えるね」

「たとえが物騒」

「さすが兄貴」

「うるせ。……自分の強さを正確に把握するのは大事なことだ。けど、何でだかお前、術式の話も含めて、これはこういうもんだって型に嵌めて、はみ出すことを許さないように見えるんだよな。自分の強さについてもそう。その先を指す貪欲さが見えないというか」

夏油の身体が、強ばったような気がした。

驚いてその顔を見ようとすると、なぜか兄貴の手に阻まれた。見かけによらず大きな掌は、私の頭を押さえつけて上を向かせようとしている。

兄貴の顔も、夏油の顔も見えない。

「お前、まだまだ強くなれるのに」

その声は、いつそ不思議なほど真剣で。

「というか強くなつてもらわねーと俺が困るんだよ、と兄貴はどんな顔でそれを言ったのだろう。夏油が、息を呑んだような気がした。」

「ま、呪霊操術はそもそも強力な術式だし、何より五条なんて特殊例が隣にいちや、そこに思い至らないのも無理はないかもとも思う。相伝の術式の場合、その辺あんまり考える必要ねーんだろうし」

「そう軽い声で言つて、ようやく兄貴の手から力が抜けた。ペしりと払いのけるが、兄貴はまるで知らん顔で話を続ける。」

「……それは、術式の定義を広げた結果が蓄積されているからですか？」

「そうだな。術式を極めた最終的なゴールの姿がある程度確立していて、そこに至るまでのルートも見えてる。五条が『最強』なのは、六眼と無下限術式を併せ持つてること以上に、強くなるための地図がすでにあるからつてのが大きいと思う」

「強くなるための地図、ですか」

「大多数の術師はそれを自分で描くんだよ、と兄貴は肩をすくめる。」

「兄貴もそうなの、と聞いてみれば、じゃなきや一級術師になんかなれねーよと軽く返された。その軽い言葉の裏に、どれだけの苦労があったのか。私には、想像することもできないけれど。」

「ただでさえ俺の術式は直接ダメージを与えられる類いじゃねーんだ、任務で一緒になった先輩術師参考にしたり、資料漁ったり、ひたすら頭ひねつて術式いじくりまわして鍛えたんだよ。じゃなきやとつとと死んでるわ」

「そーいや私兄貴の戦闘見たことねーわ。どんなの？」

「口で説明するのがめんどくせー」

「というかそろそろしゃべり疲れたとか抜かすこの社会不適合者、やっぱり夜蛾が言つていたようにまた授業にでも引きずり出してやる。」

「後輩たちへの接し方や今の話を聞いていても、わりと普通に教師向いているのではと思う。研究が順調だからなのか、最近は私らにも時間を割くようになったし、前ほど詰め込みで作業をしているわけで」

もないらしい。目の下の隈が、少しだが薄くなっている。

多分、兄貴は研究の協力者が増えることのメリットを理解したのだと思う。夏油に「強くなってもらわなくては困る」というのも、きつとそういう意味なのだろう。

ふと、夏油が妙に静かなことに気づいて視線を向けた。その顔には何の感情も浮かんでいない、ように見えて、何だろう、何か考え込んでいるような。夏油、と思わず名前を呼んだら、何だい、とぼつといつもの顔に戻る。

「顔が変」

「唐突に喧嘩売るのがやめてくれないか」

「硝子、どら焼きもう一個あるよな」

「げ、まだ食うの」

「いやその最後の一個は私の方でしょう。硝子、私がもらう」

「え、お前あんま甘いもん好きじゃねーんじゃねーの?」

「そんなことはないです」

あれ、違ったつけと首をひねる兄貴。それは多分、夏油がいつも甘いものがあれば五条に優先的にわけてやっているからだろうと言えば、兄貴は納得したように頷いた。

それからまるで可哀想なものを見るかのような視線を、夏油に向けた。

「夏油って五条のママかなんかなの?」

「それは正直私もよく思う」

「ははは、この兄妹」

相変わらずそっくりですね、と青筋を立てたそいつに言われ、どうやらふたり揃って同じ顔をしたらしい。その顔もそっくりだと、軽く笑い飛ばされた。

部屋にいつも通りの軽い空気が流れ始めたことに少し安堵して、私は小さく息を吐いた。

硝子と夏油が部屋を去って十分もしないうちに、再び部屋にノックの音が響く。

近づいてくる足音と呪力で、それが誰なのかはわかっていた。はい、と返事をする、ゆつくりとドアが開く。

「忘れもんでもしたのか、夏油」

違いますよ、なんて言われるまでもなくわかっていた。

「硝子には聞かれたくないかと思いましたが」

「何を？」

「さつき、私に強くなってもらわなければ困ると言ったでしょう。その話です」

「せっかく研究に協力してくれてなのに死なれたら困るだろ」

「ええ、硝子もそう解釈したでしょうね」

私には違うように聞こえましたが、とやけに自信のある声。俺は夏油に背を向けたままキーボードを叩いているが、おそらくその顔にも自信たっぷりの笑顔が乗っていることだろう。

逆に馬鹿正直だな、と感想が浮かんだ。

「下手なカマ掛けはやめろよ、夏油。言いたいことあるならはつきり言え」

「……そうですね。だめだな、こういう部分では貴方を出し抜けそうもない」

「素直すぎるのも気持ち悪いな、お前」

「わりとめちやくちや言ってる自覚はありますかね？」

やれやれとため息をつかれたような気がしたが、ため息をつきたいのはこちらの方だ。今日だけでずいぶん喋って俺はまじで疲れている。話があるのならさつきと終わらせて欲しい。

で、何、と話を促してやると、一瞬間を置いて夏油は言った。

「想像でしかありませんが、クラゲさんが高専に留まっている理由はなんとなく予想がついています。私に強くなって欲しいという理由も」

「でっ」

「強くなります。だから協力してください」

「……へ？」

予想外が過ぎる言葉に、思わず振り向いた。

夏油はいつも通り、にっこりと嫌な微笑みを浮かべながらそこに立っている。

今こいつ、まさか「協力」とか抜かしたのだろうか。ひとに頼るくらいなら独りで死んでいきそうなくらいプライドの高いコイツが、「協力」と？ しかも、歳が上とは言え、自分より弱い術師相手に。

そんなに意外ですか、と夏油は苦笑して頬を掻いた。

「意外というか天変地異が起こりそう……」

「……否定はしないでおきますよ、自分でも驚いていますから」

ただ、と夏油は続ける。その顔は真剣だった。

「正直、今は手段を選んでいられない。私の任務はもうほぼ単独で、他の術師から学びを得る機会もない。だったら、貴方に助言をもらう方が効率がいいだろうと」

「……百歩譲ってひとに頼る発想になったのは理解するよ。けど何で俺」

「私が強くなることは、貴方にとって都合がいいんでしょう？ 下手に人の好きそうな顔をする人間よりも、自分のためと言い切る人間の方がよほど信用できる」

これでも私は貴方を信用しているんですよ、とまた笑顔を作られた。うわあ、うさんくさいにもほどがある。白い目を向ければ、その頬がひくりと揺れた。

本心なんです、とため息を重ねられる。

「いえ、まあ、私が貴方を信用していいようがいまいがどうでもいいことでしょう。事実として貴方は私に強くなって欲しいと思っていて、私は強くなりたいと思っっている。ほかに理由は必要ない」

「……確かに。ああ、お前の言いたいことは理解した。けど、俺にできることなんてたかが知れてるぞ」

「別に貴方に稽古を付けて欲しいとは思いませんよ。無駄でしょうし」

「お前がクズなのってそういうことだと思う」

「事実は事実です。……私が欲しいのは、あくまで助言です。たまにこうして私の話を聞いて、貴方の知識と経験値をわけてくれればそれでいい。あとは勝手にやります」

「どうやら私は知識も抜けているらしいですし、と付け加えられた言葉に、まじで夜蛾のやつどこまで口が軽いんだと内心で毒づいた。別に聞かれて困るでもないが、人伝につたわってしまうのは何となく気まずい思いが否めない。」

「やれやれ、と正面から夏油の視線を受け止めた。確かに俺にメリツトこそあれど、デメリツトのある話ではなかった。」

「ただ、ひとつだけ気がかりがある。」

「……夏油、お前何焦ってたんだ?」

「きゆ、とその口元が結ばれた。どうやら、口を開く気はないらしい。まあいい、想像ができないでもないし、そもそも俺には関係ない。」

「確かに、夏油には強くなってもらわなくては困る。いや、別に夏油だけの話ではないが、俺の最終的な目的を考えれば、相応に強い協力者はどうしたって必要だ。」

「それを考えれば、ここで特級術師に恩を売っておくのは悪い話ではない。」

「……わかった、いいよ、俺にできることなら協力する。口出すくらいなら大したことでもねーしな」

「……そうですか、ありがとうございます」

「ただし夏油お前、変に暴走すんなよ」

「暴走すんな、とは?」

「根詰めるとか徹夜するとか、そういうことをすんなって話」

「そう付け加えると、とびきりの生ぬるい視線が返される。硝子の気持ちがわかるな、と小さく零して、失礼にもほどがあるクズは続けた。」

「自分を棚上げするの、本当にいい加減にしたほうがいいですよ」

「おいコラ、心底呆れた顔してんじゃねーよ」

海月は未だ、愛しい硝子の檻の中。

その居心地に微睡むも、いつかは外にと手を伸ばす。まずはひとつ見つけた欠片。それは鍵か、ガラクタか。

波の気配は、まだ消えない。

ここ最近、部屋の外に出ることが増えた。

いや、ある程度は自分のせいというか、自ら外に出る口実を増やしてしまっていることは自覚している。自分にもメリツトがあることを理解してのことなので、それは別にいい。別にいいのだが。

こうして会いたくもない人に呼び出されるのは、やはり気が滅入る。

「どうぞ、こちらでお待ちくださいませ」

訪れる時間を非常識な深夜に指定したのは、せめてもの反抗だった。といっても、どうせ毎日遅くまで飲んだくれているような爺には関係のない話だったろうけれど。

京都の本家ほどではないにしろ、歴史と伝統をこれでもかと詰め込んだような日本家屋。張り巡らされた結界の気配や、焚きしめられたお香の香りがとにかくうるさい。住人にとっては快適なのかも知れないが、俺にとっては非常に落ち着かない場所だった。

今は敵意こそないものの、何かあればこの屋敷のすべてが俺に牙をむくのだろう。それでもわざわざ出向いてやったのは、呼び出しを断れば面倒になることが目に見えている相手だからだ。

ふと、風の流れが変わったのを肌で感じる。足音こそないが、そのひたが動くだけでこの屋敷は鳴動するように気配が揺れた。

このひとには、それだけの存在感があった。

「待たせたな、家入」

「……お久しぶりです、直毘人さん」

御三家のひとつ、禪院家を統べるそのひと。

禪院直毘人は、いつも通り瓢箪を片手に、楽にして構わんと軽く笑った。

「相変わらず不健康そうな顔をしているな」

「貴方の肝臓よりは元気だと思えますよ」

「言いよるわ。お前も呑むか？ いい酒だぞ」

「ご要望ならご相伴には預かりますが、とりあえず用件を先にしてい

ただけませんか。アンタ酔ったら真面目に話す気なくなるだろ」

「というか絡み酒が過ぎるこのひとは正直あんまり酒を飲みたくない。俺のそんな気持ちで顔に出ていたのか、直毘人さんはいかにも愉快そうに喉の奥を揺らす。」

持っていた瓢箪を軽く叩き、縁側を顎で指した。仕方なしに立ち上がり、庭を向いて座り込んだ直毘人さんに倣う。まだ春には早いこの季節、外にいるのは肌寒かったが、堪えきれないほどではない。

「何、そうたいしたことを話すつもりはない。東京に出向いたついでに顔を見ておこうと思っただけだ」

「ならもう用件は済みましたね。帰っていいですか?」

わりと期待を込めてそう言ってみると、軽く笑い飛ばされたし許可は出なかった。別に冗談を言っているつもりはないし、心底帰りたいたいと思っているのだが、それを理解してくれるほどこの爺は甘くない。

正直、今このタイミングで呼び出される理由がわからないだけに、この状況は気味が悪かった。

「このところ、高専で教師のまねごとをしているそうだな」

前言撤回、呼び出される理由がわかった。

小さくため息をついて、言う。

「別に、五条悟がいるからってわけじゃありません。なりゆきです」

「ほう? 五条から援助を受けたと聞いたが」

「確かに情報提供はしてもらいましたがね、深い理由はないですよ。見りゃわかんでしょうあのガキ、家のために何かしようとかそういう発想はまるでない。自分にとって価値のないものだから別に見せてやっても構わない、それだけです」

アンタとアイツは違います、と言い切る。禪院家と五条家が犬猿の仲なのは周知の事実だが、このひとも個人的に五条家が好きではないらしい。

直毘人さんと縁ができてしまったのは、本当にただの偶然だった。京都での任務だの何だの、回避しきれなかったごたごたの中で、迂闊にも俺は手の内を少々晒してしまった。それがどうも、このひとのお気に召したらしい。

もともと禪院は、有力な術式をもつ術師を積極的に家に取り込むことで発展してきた家系だ。禪院家に非ずんば呪術師に非ずとか言っているが、有力な術師は全て禪院にしてしまえ、の方が正しい気がする。

このひとは、物好きにも俺に目を付けた。そして言った。禪院に来るのなら、全面的に禪院家の庇護を与える、と。

「しかし周囲はそうは見ん。あの五条悟と普通に会話をしているというだけで、お前が五条に取り込まれたと考える」

「周囲が何を考えようと知ったことではないです。俺は俺の研究に協力してくれる術師を邪険にする理由はないし、提供してもらったデータはありがたく活用するだけ」

「お前が婿養子に入るなら、禪院家もつ記録の全てを好きにさせてやるが？」

「禪院家の記録は確かに魅力的ですが、禪院に取り込まれるつもりはありません」

「頑固者め」
「アンタが言いますか」

このひとはどうやら、俺の術式を禪院の血統に取り込みたいらしい。大した術式ではないと思いますが、と何度言ってもこのひとは愉快そうに笑うばかりで退く様子を見せない。

このひとの前で俺の奥の手を晒してしまったことは、本当に失敗だった。

「お前の研究への全面協力、お前と妹の庇護、ほかもろもろの便宜も図ってやるとまで言ってやっているのに、まだ折れんとはな。頑固者でなく贅沢者か？」

「何を餌にしても返事は変わりませんよ。再三言いますが俺基本的に禪院嫌いですから」

「少しは当主に気を遣わんか」

「身内のクズっぷりを改めるところか面白がってるくせに何言ってるんだ」

禪院家に非ずんば呪術師に非ず、呪術師に非ずんば人に非ず。いつ

たいつつの時代の話だよと鼻で笑ってしまいそんな言葉が今も罷り通っているのだから、禪院の家風が知れようというものだ。

ひとの価値を呪力だの術式だのではかるのは脳が化石になっていく術師全体の傾向だが、禪院は特にひどい。じゃあ術師なら普通に扱ってくれるのかといえそうでもなく、相伝の術式がなきやクズ扱い、弱ければクズ扱い、おまけに女性蔑視の気も多大にある。呪術全盛の時代から外界との交流絶って引きこもりでもしてたのかと言いたくなるような有様だ。

一応、直毘人さんはまだ話がわかるひとだとは思っている。クズだしゲスだが会話は成り立つし、交渉もできる。だが、そんなひとは禪院のなかでもごく一握りだ。いつだったか硝子を母胎扱いしたドクズももれなく禪院だったりするので、俺の中で禪院になるという選択肢はマイクロメートル単位でも存在しない。

「二億歩譲って、確かにアンタが健在のうちはいいかもありません。が、アンタが死んだあとの跡継がアンタと同じ考えとは限らないでしょう。というか有力な跡継候補にろくなのいねーだろうが、知ってんだぞこっちは」

「何だ、バレとったか。まあ待て、少し前に良さそうなのを見つけたところだな」

「良さそうなの？」

「まだわからん。が、血筋はいいし何かしらは持っているらしい。育てれば見込みはあるかもしれん」

そりやまた可哀想に、と言ってやればまた直毘人さんは笑った。

口ぶりからして、禪院の外で生まれた子なのだろう。それをわざわざ地獄にご招待して育てられるとは、気の毒と言うほかない。そしてこんな環境で育てられれば、まともな人間性を手に入れるという方が無理だ。

顔も名前も知らない子の将来をほのかに憂いつつ、ぼんやりと目の前の暗闇を見る。

「とにかく、俺は禪院にならないし、五条に取り込まれたつもりもない。俺は俺として利用できるものはする、それだけです。他に何かあ

りますか」

「ふむ。一応聞くが、お前の妹が五条悟と何かあつて縁故とか……」

「斬り殺すぞクソジジイ」

つい反射的に言い返すと、直毘人さんは思わずといった様子で嘔き出した。

吐きたくなる思いを堪えながら、俺は真剣に言い直す。

「いや、これは妹離れがどうかそういう問題じゃねーんですよ。五条ですよ、あの五条。あれが義理とはいえ親類になるとか死んでも嫌でしょーが。俺は妹が選んだやつなら誰だろうがケチをつけるつもりはありませんが、五条だけは無理です。あ、いや待てよ、夏油も嫌だな」

「まあそれは俺も同感だが、あの強さと面の皮の出来映えは他に類を見んぞ？　ころつといくやつも多かろうに」

「他がどんだけ良かろうが、あのクソな人間性を無視するほどうちの妹は馬鹿じゃないんで」

というかそうであつてくれ頼む硝子。

妹が誰と付き合おうが結婚しようが、むしろしなかったとしても、口を挟むつもりは一切ない。一切ないけど、相手が五条や夏油だった場合だけは例外にさせてほしい。いや絶対にないと信じているけれど、ひとの心、しかも色恋沙汰なんてさすがに俺も計算しきれない。

その可能性だけは絶対潰す……と小声で頭を抱えると、まあそれならいい、と直毘人さんはにやりと笑った。

「本当に五条に取り込まれてはおらんようだな」

「ねーって言うてんでしょ」

「そうかそうか、なら話は終わりだ。まあ酒でも飲んでいけ、家入」

そう言つて差し出される瓢箪。ふわりと漂う香りは上等のものだ。よくもまあ、いい酒をこんな飲み方するもんだといつものことながら少々呆れる。

ちなみに俺は滅多に酒を飲まないが、だからといって飲めないことは決していない。うちの家系はそもそも遺伝的にアルコール分解酵素が多いのだが、なかでも俺は群を抜いているらしい。

たっぷり酒の入った瓢箪をちやぷりと揺らす。

「飲んだら帰ります」

そう言つて、返事も聞かずに口を付ける。

嗚呼、確かにいい酒だ。芳醇な香りが柔らかに鼻を抜け、舌触りも滑らか。するすると水のように喉を通り抜けていくが、しつかりとした米の味も感じられる。相応のアルコール度数であることは察したが、この程度で怯む俺ではない。

大きな瓢箪を逆さにして、最後の一滴まで喉に流し込む。

「……はい、ごちそうさまでした。確かにいい酒ですね」

「顔色ひとつ変わらんか。酒豪も相変わらずだな、つまらん」

「俺を潰したいなら酒の量もアルコール度数も足りませんよ」

「そうか、次はもつと強い酒を用意してやろう」

次とかいりません、と言つてはみるがどうせ無駄なのもわかつていた。しかし、酒の相手が欲しいなら適当に身内からでも見繕えばいいものを。まあこんな絡み酒のおっさんと誰も酒なんか飲みたくはねえわな、と思いつつながらその辺に瓢箪を置いて、ゆつくりと立ち上がる。

意識ははつきりしているし、足も問題ない。一応自分が酔っていないことを確認してから、改めて直毘人さんに目をやった。

「じゃ、俺はこれで」

「ああ、気が変わったらいつでも連絡を寄越せよ、家人。いい女を紹介してやる」

「少しは懲りろよアンタ。言っておきますけど俺、見下されることに慣れきつた従順なだけの女性は好みじゃないんで」

「ほうっ」

じゃあどんな女が好みだ、と聞き返されて、いつぞや俺に同じ質問をしてきたひとの姿がふと脳裏に浮かんだ。

長い金髪、自信満々の笑みに、規格外の呪力。そういや定期報告までもう少しだからそろそろレポートをまとめ始めないと、とそんなことを思う。もう少し、もう少し検証が進めば、研究は次の段階に行く。想定よりも研究の進みは数段早く、おそらくあのひととの契約が果たされる日も近い。

どうすれば、呪霊のいない世界を作れるのか。その「正解」は、結局のところやってみないとわからない。だが、現時点で「いちばんその可能性が高い」手段なら。

それがどんなものであれ、嘘偽りなく伝えること。それがあのひととの間に交わされた「縛り」だった。

ふう、とひとつ息を吐く。そうですね、と考えるふりをして、九十九さんに言ったのと同じ答えを返す。

「俺に興味をもたない横顔美人ですかね」

だから、研究に関わること以外で俺を煩わせるな。

そんな気持ちをこめて、ただ言い捨てた。

「さすがに言っつていいことと悪いことがあるって思わねーの?」

「だよな。これは俺がまじで悪かったわ、ごめん」

だからメスを医療行為以外に使おうとするのやめろと両手をあげて首を振る兄貴。

どうやら真剣に悪いとは思っているらしい。チツと舌打ちをひとつして、先ほどまで実習で使っていたメスをしまった。そして片手を出すと、そこに詫びだと言わんばかりに煙草の箱が乗せられる。ひと箱で足りると思っつてんのか、と無言で見返せば、珍しくちゃんともうひと箱が追加された。よほど反省したようだ。

わあ珍しい光景、今は静かにしていなさい、と背後から感心したような声とそれを窺めるような声が聞こえた。

「で、何でそんなくだらねー発想になったわけ?」

「いや、俺も考えもしてなかったんだけど。ひとに言われて初めてその可能性を認識した」

「誰だよそれ」

「お前の知らないひと」

いつもの通りに差し入れに来てやったというのにこのクソ兄貴、私の顔を見るなり真剣に心配そうな顔で「まさかとは思うけど五条や夏

油が俺の義弟になったりしないよな……？」と世迷い言を抜かしたのだ。

兄貴にその辺りについて口を出されるだけでもううぜーのに、まさか出た名前があつたりとか。つい反射的にメスを握ってしまったが、私は絶対に悪くない。

良かった良かったと真顔で繰り返す兄貴に、ため息しか出てこなかった。

「俺はお前のそういうところに口出す気は全くないけど、万が一にもあのふたりだったら真面目に嫌だなんて思つて」

「兄貴が夜蛾とデキるくらい有り得ねーけど？」

「可能性皆無だつて言いたいのはわかるけど、もうちよつといい例えなかつたか？」

でも見る目のある妹で嬉しい、と珍しくも素直な兄貴。どこまで嫌だつたんだとは思うが、そりゃ嫌だよなと私も思う。私に姉や妹がいなくても絶対同じ反応をした自信がある。

いったいどこで誰に吹き込まれたのか、さらに尋ねようとしたところで背後で後輩が笑つた。

「あはは、クラゲさんもそういうの気にするんですね！」

「別に相手があつたりじゃなかつたら気にしねーよ。灰原くん、君の妹さんが五条を連れてくるどころ想像してみな」

「……。……五条さんは!! 五条さんだけは!!」

「そういうこつた。別に甲斐性とか外見とかその他もろもろどうでもいいから、最低限の人間性はもちあわせてほしい」

「義理の弟への要求が最低ラインすぎませんか？」

「その最低ラインすら満たしてないのが君らの先輩だよ」

「……確かに。世知辛いですね」

ボロクソ言うじゃん、と思ひながら完全に同意だったので何も言わなかつた。どちらかというとその「最低限の人間性」だけを持ち合わせていないのがあのクズどもだ。特級クズ二匹が同期とか私まじでついてねーな、と思ひながら毒大福に齧りつく。

兄貴の好物を聞きかじつたらしい後輩たちが、どこかで買い込んで

きたらしい。あえて少し酸味のある苺を採用しているというその苺大福は、甘すぎなくて美味しい。

「……っーか、私のことより先に自分のことを考えれば?」

「俺? 普通にいらねー。つか邪魔」

「言い方最低じゃんウケる」

「この状態で誰かと付き合おうって方が最低だろ。まあそもそも相手いねーけど」

クラゲさんちゃんとしたらモテそうなのに、と悪気なく灰原が言いきる前に、ずびしと七海が灰原の脇腹に手刀を入れた。ぐふ、と変な声をあげて灰原はうずくまる。

いやちゃんとしてねーのは事実なんだから別にいいのに。兄貴も特に気にせず、今の結構いい音したな、と感心したように言った。

ううう、と言いながら灰原は言い訳をするように声を絞り出した。

「だ、だってクラゲさん、顔綺麗なのに隈あるから……!」

「それについては私も思います。睡眠時間はきちんととるべきですよ」

「もつと言つたれお前ら〜」

「硝子まで乗るな。最低限は寝てんだよ、これでも」

前より寝てるくらいだし、と言いつつじみたことを言う兄貴に、灰原と七海から飛ばされるブーイング。

聞こえねー、とか言いながら目の下にいつまでも隈を飼っているクズは、もそもそと苺大福に齧りつく。美味しい、と味わっている様子の兄貴に、後輩たちはちよつと嬉しそうに口を閉じる。いやそんなんで絆されるなっつもの。

やれやれ、と思いつつながら、ふと私も少し前に似たような話をしたことを思い出して言ってみた。

「相手いないって、たとえば歌姫センパイは?」

「それお前の願望じゃねーの」

「そうだけど?」

「開きなおんな。俺ならもつと誰かいいやつさがせ、……探せるだろ、きつと」

「おいコラ何で今言いよんだ?」

俺の名誉のために聞くな、と目をそらした兄貴、いったい何があった。付き合いがそこそこあればいろいろあんだよ、と死んだ目をしているが、さすがに後輩たちの前でそれ以上聞くのは躊躇われる。今度隙を見て探りを入れてみよう。

ちえーと口を尖らせても、兄貴は素知らぬ顔をしている。

「でも兄貴だって歌姫センパイ嫌いじゃねーだろ」

「そりゃ術師には珍しいくらい真面目でまともなやつだからな。それなりにしごいたのに食らいについてくる程度には根性もある。嫌う要素がない」

「めちやくちや褒めてるじゃないですか」

「いい後輩だとは思ってるよ。そんだけ」

話は終わりと言わんばかりに、兄貴はモニターに向き直る。

母大福を食べた手を綺麗に拭いて、またキーボードを泳ぎ始めた。最近のキー音は軽快ながらも、たまに立ち止まることがある。手を止めた兄貴はじつと数式を見て、時に自分の頭で少し演算して、また少し苦悩するように数列の海を泳ぐ。

研究がひとつの山を越えようとしているのは、察していた。

「……兄貴」

「なんだよ」

それでも、ちゃんといつも通り返事はしてくれる。どれだけ研究に夢中になろうと、この部屋に誰かがいるときは必ず、その耳だけはこちらに傾けてくれていた。研究を第一にしているように見えて、実はやっぱりそうでもない。

たまに、兄貴の優先順位がよくわからなくなる。

「万が私にそういう相手ができたら、反対はしないわけ?」

「五条と夏油以外ならな」

「ふーん。結婚式とかやったら泣いてくれる?」

「何でだよ。泣かねーわ」

「えっクラゲさんが泣くところ見たいです!」

「家入さん、是非式には呼んでください」

「いーけどご祝儀ははずめよ」

泣くのは親父くらいだろと嫌そうな顔をした兄貴だが、多分私に見えないところで義弟に「泣かせたら殺す」くらいの脅しはかけるだろうと正直思っている。その程度には、この不器用な兄貴に大事にされている自覚があった。

今のところ恋愛の類いに大した興味はなかったが、兄貴のそういう場面が見られる可能性があるなら、ちよつとは面白いかもしれない。にこにこといつもの笑顔を浮かべた灰原は、楽しそうに口を開いた。

「クラゲさんも式を挙げるときは是非呼んでくださいね！ 僕ら余興やりますよー！」

「相手も予定もねーけど、余興って何やってくれんの？」

「うーん、じゃあ漫才とか！ 僕と七海でコンビ組んで、あ、きつと五条さんと夏油さんもやってくれますよー！」

「何だよそれやっぱ、滑り倒すところ映像撮って後世に残したい」

「兄貴、さっさと式挙げる相手探してきて。今すぐ」

私を巻き込むな、と小さく零された嘆きは兄妹揃って聞こえなかったふりをした。コンビ名考えなきやね、と笑顔で言い切った灰原のメンタルの強さは、もしかしたら褒め称えられるべきなのかもしれない。

海月の揺蕩う、数の海。そこから弾き出される答えは希望か、それとも。

「お前、反転の素質皆無だな」

「クラゲさん、せめて言葉を選びませんか？」

夏油に協力を求められて以来、少しだが夏油が部屋に来ることが増えた。請け負っている任務が増えていることを考えれば、これでも相当時間をつくって顔を出しているのだろう。話を聞いて適当な資料や文献を渡したり、ときにはこうして実際にちよつとした実践を見たりと、これでも一応の協力はしていた。

とりあえず夏油は、今自分にできることとできないことの整理をしているらしい。身体を巡る呪力を操りながら、ひくりと頬を揺らした。

「反転の素質あるやつのが珍しいんだから気にすることねーだろ。お前の同期ふたりが特殊例なんだよ。硝子に至っては例外も例外だし」
「……それは確かに」

「素質のない方向で努力するのは建設的じゃない。やつぱ術式を拡張する方向で考えた方がいいだろうな」

術式を裏返すよりも、伸ばす方向で。

ふむ、と考えた夏油は、逆る呪力を引っ込める。難しいな、と呟いたその声には、わずかな悔しさが滲んでいるような気がした。まったく、無い物ねだりが好きな奴だ。

「そんだけの呪力量あるくせに反転までなんて欲を出すなよ。あるもんを使え」

「ああ、クラゲさん呪力量少ないですもんね」

「……お前こそ言葉選べるようになったほうがいいぞ」

別に本当のことを言われて腹を立てるほどガキでもないが、こいつまじで素でこれを言っているようだからすげーなと思う。あれ、と不思議そうに自分の言葉を辿り直す夏油は、クズの自覚のないクズだから厄介だ。

でも本当にクラゲさんの呪力はかなり少ない方ですよねと繰り返す夏油、少しは俺の話を聞けと思う。

「……まあ自覚はあるよ。一級の中なら最低ランクだろうな」

「それで呪力切れとか起こさないんですか？」

「昔はあったけど、今はほぼない」

「……そういえば、ここ数ヶ月で灰原の呪力操作が格段に良くなった気がするんですが」

「灰原くんは意外と筋が良いぞ」

七海くんもなかなかだったけど、と続ければ、なるほどねと夏油は苦笑した。

確かに俺は呪力の総量がそもそも少ない。硝子にも格段に劣るし、だからこそ自覚なく術式を使っていた昔は呪力切れで体調を崩すことも少なくなかった。だが、エネルギーが少ないなら節約するすべを覚えればいいだけのことだ。

呪力を必要なだけ、必要なところに。呪力のロスを限りなくゼロにすれば、俺程度の呪力量でもそれなりに戦うことはできる。

緻密も緻密な呪力操作には相応に努力も必要だったが、得られたものは大きかった。

「呪力操作か……そちらももう少し精度を上げられるかな。コツとかあるんですか」

「お前もそれなりに出来てそうだけどな。まあさらに伸ばしたいなら、日常生活から皮膚の薄皮一枚内側に常に呪力流しとけよ。当然、一切乱れさせるな。これが無意識に出来るレベルになれば相当」

「想像以上に地道。いえ、鍛錬はそういうものですね」

「日々精進だよ。生憎と俺は凡人なんでな、地道に努力するしかなかったの」

その若さで一級やってるひとが何を、と夏油は笑うが、いやそれこそ特級のお前が言うんじゃないよというか。

こうか、と薄い薄い呪力をまもって見せた夏油。それをさらりとやられただけ、十分嫌味だと凡人の俺は思う。俺も要領が悪い方だとは思っていないが、少なくとも何でも一回で出来るほうではなかった。ただ、効率よく努力するすべを演算で導き出せるだけだ。

とはいえ、夏油相手に嫉妬をしてしまうほど俺はガキじゃない。

ふと、くすりと夏油が小さく笑った。何だよ、と言ってみると、いえ、と笑みを深める。

「私はどうもすぐに相手を怒らせてしまうんですが、クラゲさんはそうじゃないのでありがたいなと」

「怒ってないと言った覚えはねーけど？」

「でも実際怒ってないでしょう。しかも面倒見もいい」

「そこまで俺の器は小さくねーよ」

「ええ、助かります。特に年上にはすぐ嫌われてしまうので」

「……別に年上だけじゃないんじゃない？」

「何か言いましたか？」

いや何も、ととりあえず目をそらしておくが、何だ一応嫌われてる自覚あったのか、とむしろちよつと感心した。

まあ確かに、夏油にとつては事実を事実として口に出しているだけで、悪意はないのだろう。そのあたりの感覚は俺としてもわからなくはない。何せ俺も、同じ理由で爺どもには蛇蝎のごとく嫌われている。

小さく息を吐いて、改めて夏油に顔を向ける。

「よほどのことがねー限り怒りやしねーよ、労力の無駄だし」

「むしろ怒ることあるんですか？」

「お前は俺をなんだと思ってるの？」

「そろそろアンドロイドか何かかなとちよつと思ってます」

「積極的に喧嘩売りに来るのやめろ。なくはねーよ、何年か前に禪院のドクズを半殺しにしたこともある」

「何ですかそれ詳しく」

「絶対言わねー」

半殺しというか殺そうとしたところを直毘人さんに止められてしまったのだが、まあ詳細はいいだろう。あのクソ生意気なドクズは今も元気になっているだろうか。直毘人さんに俺の奥の手を晒すことになってしまったのは彼のせいなので、どうか元気に死んでいて欲しい。

よく禪院家に手を出して無事でいますね、と言われるが、俺が直毘

人さんに気に入られてしまった事実もあって、どちらかというところ積極的に命を狙われているような気がする。今までに差し向けられた呪いのなかには、おそらく禪院家からのものもあることだろう。まあこれというほど興味もないのであまり覚えていない。

「クラゲさんも実はそれなりにやんちゃしてるんじゃないですか」

「適当に流してやってたのに、しつこく喧嘩売ってきたから仕方なく相手してやってただけだよ。何でこんな温厚な俺に一生懸命喧嘩売るんだらうな」

「温厚の意味を都合良くねじ曲げるのどうかと」
「うるせ」

そんな軽口の応酬をしていたとき、ふとドアをノックする音が響く。はい、と返事をするよ、と聞き慣れた声が出てドアが開いた。

そういえば、と頼み事をしていたことを思い出す。

「おっと失礼、取り込み中だったかな」

入ってきたのは、俺より少し年上の、よく任務で顔を合わせる黒スーツ。

補助監督の、と夏油が応じると、そのひとは軽く会釈を試みせた。いくら彼の方が年上とはいえ、基本的に補助監督のひとたちは術師に対して敬意を払う。相手が特級ならなおさらだ。

構いませんよ、と立ち上がると、椅子がぎしりと悲鳴をあげた。

「任務の追加報告でしょ。ありがとうございます」

「いえいえ、補足情報も入れてあるのでまたご確認を。あとこれ、差し入れ」

「……さては灰原くんや七海くんが余計な話をしましたね?」

「はは、一昨日彼らの任務に同行したときに、少し」

情報媒体とともに渡された紙袋は見たことのある和菓子屋のもので、中からはふわりと桜の香り。そういやもうそんな季節かと、あまり外に出ない俺はようやく今の季節を思い出した。

仕事に関係ない頼みごとを引き受けてくれたどころか、俺の好物を選んで差し入れをもつてくるとは、つくづくこのひとはお人好しが過

ぎる。性格的に術師があわなくて補助監督になったと小耳に挟んだことがあるが、こういうところだろうなと心から納得した。

ありがとうございます、と受け取ると、いえ、とそのひとはにこりと微笑む。

「よければ夏油術師も召し上がってください。甘いものが苦手でないれば」

「ありがたく頂きます。……任務の追加報告というところ、クラゲさんの研究の関係ですか？」

「そ。本当は俺に提供しちやいけない情報までもってきてくれる悪いひとだよ」

「ははは、そんな危ない情報だったら夏油術師の前で堂々と渡すわけがないでしょ。家入くん、君の冗談わかりにくいから本当に勘弁してくれるかな」

「さーせん」

あながち嘘でもない気がするけどな、と思いつつ桜餅をひとつ取り出して齧りついた。強烈なほどの春の香りが、すうつと鼻を通して抜けていく。

ん、と夏油にも袋を差し出すと、夏油も中からひとつ桜餅を取る。春ですね、とか言いながら夏油も大きく口を開けた。

「うん、美味しい。すみません、私まで頂いてしまって」

「いえいえ。最近はこの部屋によく学生さんたちが訪れると伺っていたので、そのつもりでおおめに買ってきましたから」

「そんな気を遣わなくていいのに。こっちが頼みごとしてる立場なんだし」

「頼みごとなんて気にしなくていいんですよ。俺も君の研究は応援したいと思ってるしね」

「へえ？」

相槌を打つてみせた夏油に、補助監督には結構そういうひとは多いんですよ、とそのひとは笑う。

「任務に赴く術師の方の前で言うことではありませんが、……補助監督だって、自分が任務先へ送り届けた術師が傷つくのは見たくないで

すから。家入くんの研究に期待するひとも多いんです」

「……なるほど。そうですね」

「夏油、今のほかで言うなよ。アンタも、それ迂闊に口にすんなって言うてんでしょ。俺みたいに爺どもに目エ付けられてもしらねーぞ」
「ははは、気を付けるよ」

からからとそのひとは笑ってみせるが、本当にわかってんのかと少し呆れる。あの爺どもはひとり気にくわなかったらまじで一族郎党、末代まで呪いかねないクソどもだ。俺は自分の身を守る程度の策くらい講じてあるが、このひとはそうはいかない。

笑う彼と呆れる俺を見ながら、夏油は何だか愉快そうにくすりとう。何だよ、と試みてみれば、いえ、とさらに笑みを深めた。

「クラゲさんにも気安く話せる間柄のひとがいたんだなと」

「お前やつば言葉選べるようになった方がいいわ」

「家入くんは素直じゃないだけでいい子なので、補助監督の中では人気なんですよー」

「俺とつくに成人してんだけど、まだ『いい子』とか言われなきやなんねーの?」

彼の「いい子」発言に笑って桜餅を喉に詰まらせた夏油の背を引っぱたきながら、言うほど歳変わんねーのに、とじとりと彼を見た。いやいや実はそれなりの歳なんだよ俺、というが、言うて俺と入れ替わりで高専を卒業した程度の年の差のはずだ。

それでも、とそのひとは笑みを絶やさない。

「焦って大人になる必要はないって話だよ。特に君みたいに大人びて、ひとの面倒を見るのが当たり前な子にとってはね」

「……アンタはお人好しが過ぎるし、俺に鼻眞目を使いすぎです」

「はは、君がそう言うならそうなのかもね」

じゃあ俺はこのへんで、とさっさとそのひとは去って行った。

たまにこうして用事のついでに俺の部屋を訪れる彼だが、少し雑談をするものの、決して長居はせずに帰って行く。その辺りの塩梅というか、距離感の取り方がわりと心地よく感じているのは否めなかった。

笑いどころが微妙にひととずれている上に、ツボにはまると意外と長い失礼な後輩は、ようやく息を吐いて体勢を戻した。面白いひとです、と軽く言葉を続ける。

「今まであまり補助監督のひとと話すことはなかったんですけど、ああいうひともあるんですね」

「？ フツーに変なひと多いと思うけど……ああ、クソ生意気で柄の悪い特級相手じゃ皆萎縮しちまうのか」

「悟と一緒にいた弊害がそんなところにも……」

「いや、お前の話だけど」

「は？」

「いやそこで反射的にガン飛ばす時点でアウトだから」

こうやって他のひとから学ぶ機会を自ら潰してたんだな、としみじみと思う。補助監督の中にも元術師はいるし、性格的・能力的に術師に向かなかっただけで、言うほど弱くないひともない。術師の家系出身のひとだって当然いるので、意外とそういうひととの雑談のなかにもヒントはあったりする。俺はそういうところから学ぶこともあったけれど、夏油はそれすらなかった。まあ自業自得だろう。

がしがしと頭を掻きつつ、補助監督のひととも雑談くらいしてみた。らどうだと適当を言ってみた。

「ちなみに今のひと、下手な術師より結界術詳しいぞ。帳のクオリティやバリエーションも頭ひとつ抜けてる」

「え、」

「俺もいろいろ教えてもらった。……学びを得るヒントはどこにでも転がってるってこった」

視野を広く持てよ、とそれらしいことを言ってみると、夏油は神妙な顔で黙った。

ひとに頼るのが苦手も苦手な夏油にはいい薬だったのかもしれない。自分より立場が下の人間が相手だろうが何だろうが、学び得る機会を見つけるのは自分自身だ。

ところで、と俺はにやりと笑ってみせる。

「薄皮一枚下の呪力操作。忘れてる」

「……あ」

結局、何事も地道に努力するのが一番の近道なのだ。

うわ何この面白すぎる光景。

そう思った瞬間に、私の右手は携帯のカメラを起動させていた。

「何撮ってんだ硝子。とつとこのでかいガキ回収してくれ」

「いやあまりにも面白くて。何そのくつつき虫」

「夏油に振られて傷心の五条さん家の悟くん十七歳」

「振られてねーし傷心でもねーけど!？」

だったらそこから離れろよと心底めんどくさそうに言う兄貴。それでもぶすくれた様子の子の五条は動こうとはしなかった。五歳児かよウケる。

兄貴が座る椅子の脚に、その長い手足を巻き付けてしがみついている五条。基本的に自分の作業の直接的な邪魔さえしなければ特に気にしない兄貴も、さすがにこれは思うところがあるらしい。

何がどうしてこうなつたと呆れるが、まあ私は面白いだけなので構わない。とりあえずもう一度シャッターは切っておいた。

「ひさびさに休みの重なった夏油を遊びに誘ったらすげなく振られたんだと。めんどくさい彼女かな？」

「うつせーし!」

「それで浮気相手に兄貴を選んだか。今七海や灰原も任務に出てんもんね」

「いや俺を選択肢に入れるなよ。ほらもうひとりいんだろ、今年入ってきた一年生の」

「まだ五条に耐性のない一年を売るなよ兄貴」

おどおどと怯える様子を見せる眼鏡をかけた彼のことはまだよく知らないが、どう見ても七海ほどの反骨心もなければ灰原ほどの凶太さも無い。そもそもよく知りもしない特級の先輩とか、普通は恐ろし

すぎて近づきたくないだろう。さすがの私も積極的に一年生をいじめる趣味はない。

伊地知くんだけか、と兄貴もようやく名前を思い出したように咳く。

「特級にいじられるのに慣れれば基本怖いもんなんかなくなるよ。何事も経験だろ」

「伊地知イ？ アイツいじったら殺しそうだからやだ、雑魚きらい」
「こんな先輩をもって可哀想に。後輩が嫌なら夜蛾の呪骸にでも遊んでもらってこい」

「普通十七の男に人形遊びとか勧める？」

「安心しろ、今のお前はどう見ても五歳児だ」

ぶすくれた五条はさらに腕の力を強めた。ぎしり、と兄貴愛用の椅子が嫌な音をたてる。おいやめろ、と仕方なさそうにようやく兄貴は五条の方を振り向いた。

「何、話なら聞いてやってんだろ。お前俺に何してほしーわけ」

「……別に」

「反抗期の硝子でさえここまで面倒じゃなかった」

「おいそこで私を引き合いに出すなクソ兄貴」

差し入れに持ってきていた缶コーヒーをその顔面に向けて投げつけると、兄貴は悠々とそれをキャッチした。硝子にも反抗期とかあつたの、とか聞く五条、お前も黙れと思う。

「まー今も反抗期みたいなもんだけどな」

「兄貴、黙んねーと次はメスが飛ぶぞ」

「だからお前は医療器具を医療目的以外に使うなっつ」

まったく、とか言いながら兄貴は缶コーヒーのプルタブを開ける。甘党のくせに珈琲はブラック党な兄貴は、真っ黒な缶を傾けながら視線を五条に向けた。

相変わらず五条は、不機嫌そうな顔をしながら椅子にしがみついている。

ふう、とひとつ息を吐いて、兄貴は缶をデスクの上に置き、口を開いた。

「……五条、お前昨日まで任務だったんだろ」

「あ？ そうだけど。青森に一週間。まじでだるかった」

「んで帰ってきたのは？」

「昨日の夜中つーか今日の朝方？ ちょっと空明るかった」

「そうか、じゃあ睡眠時間足りてねーだろ。寝ろ」

「は？」

兄貴の手が緩やかに五条に伸びる。白く柔らかそうな髪を指ですくように、その大きな手が十七歳児の頭の上に乗った。一瞬びくりと強ばった五条だったが、ゆつくりと頭を撫でられると徐々に強ばりを解いていった。

その様子に、兄貴の方がわずかに目を見開いた。ああ、この反応はわかる。冗談でやったのにまじで受け入れられてしまって、兄貴の方が驚いている。

え、この反応おかしくね、と兄貴が目で私に訴えるが、私はただ黙って親指を立てた。めちやくちや面白いので私的には全然あり。これも撮つとこ、とカメラを向ける。

「……いや、うん、睡眠不足は感情のコントロールにも影響を及ぼすからな。いくらお前でも疲れはあるだろうし、昼寝でもしたらどうだ。夏油も夜には戻るって言ってたんだろ？」

「……ん」

「……お前実はまじで体調悪い？」

「別に」

「……ならいーけど。寝るなら自分の部屋戻れよ、ベッドある方がいいだろ」

「……でいい」

「……でいい、と小さな声でもう一度繰り返した五条。

少し瞼を伏せた五条はどこか幼くて、本当にそのまま眠ってしまったそうだった。おそらく普段の五条を知らないひとがこの顔を見れば、それこそ卒倒するレベルで顔がいいとか言い出すのだろう。無防備なイケメンってこんなにあざといのか、と感心してしまうほどにはあざとかった。

しかし、普段を知っている私たちからすれば、完全に話は別だ。もう一言で言ってしまうなら、本当に心の奥底からまじで気持ち悪い。これは完全に鳥肌もの。

早々に限界が来た兄貴は、かつて見ないほど顔を引きつらせていた。

「ちよつと待つてキャラ違いすぎてもう俺が対応できないんだけどこれはまじで五条か？ あれか俺に認識阻害系の呪いとか掛かつてる？ それともまじで俺の気が狂った？ やっぱ、俺まだ死ぬわけにはいかないんだけど硝子ちよつと俺の頭診てくんない」

「ウケる。でもわかる」

えくくくくという顔をしながらも五条の頭を撫でる手は止めないでやるのがさすが兄貴というか。やれやれと思いつつながら近寄ってみると、五条はすでに半分くらい眠っているようだった。これはもしかしたら、本当に「最強」もお疲れだったのかもしれない。

仕方ねーな、と思いつつながら、ぺちぺちとその腕を叩いた。

「五条、寝るなら部屋戻りな」

「めんどい……」

「じゃあここでいいから、せめて横になれ。枕とブランケットくらいは提供してやるよ」

「いや俺のなんだけど」

「じゃあこのまま寝かせる？」

「……わあつたよ、ほら五条、ここで寝ていいから椅子から手はなせ」

ようやく椅子から手足を離れた五条は、そのままよろけるように床に転がる。ほとんど使っている様子のない枕をその頭の下に押し込み、ブランケットをバサリと掛けてやる。暖を求めた五条は、自分でブランケットにくるまった。見た目が完全に巨大な糞虫。

そしてそのまま数秒して、どうやら狸寝入りではない様子の寝息が部屋に響く。

「……実はまじで疲れてた系？」

「かもな。まあ誰でも疲労は溜まるだろ、確かに徐々に呪霊の発生件

数が増える」

「去年の災害のせい？」

「も、あるだろうな」

俺ですら任務増えているし、とため息交じりに兄貴は言った。兄貴が任務でこの部屋を空けているところにはあまり遭遇したことはないが、確かにこのところ兄貴もうたた寝の回数が増えている。それだけ夜の間には任務を片付けていると言うことなのだろう。

五条も疲労で頭狂うのか、と思わず言う、確かに、と兄貴も深く頷いた。

「いやいつも以上に素直にガキみたいなこというからおかしいとは思ってたけど、まじで頭働いてなかったんだろな。反転術式がどうかぐだぐだ言ってたから、五条も何かいろいろ試してるみたいだし」「気晴らしに夏油付き合わせようとしたら振られるし？」

「いい加減夏油離れしろってんだよな。何でもかんでも夏油基準に動きやがって」

いつまでも一緒にいられるわけじゃねーだろうに、とさりと落とされた言葉がどこか重い。五条にとって、きつと夏油はひとつの指針だった。何が綺麗で、何が汚いのか。何を守り、何を殺すのか。夏油の目を借りて世界を見るのはきつと楽しかったし、楽だったことだろう。五条にその自覚があるかは、別として。

けれど、ずっとそうしているわけにはいかない。そんなふうに思ってしまうのは、三年生になって進路がどうという話を夜蛾にされたからだろうか。

私の進路は、もう決まっているけれど。

「……硝子？」

ふと黙った私に、兄貴の手が伸ばされる。額にあてられた手は、大きくて温かい。

「お前も疲れてんのか？ 熱はねーよな」

「別にへーき。五条みたいに任務詰め込まれたりしてねーし」

「お前には勉強があんだろが。医学部行くからって詰め込みで勉強したりすんなよ。効率が落ちる」

「しねーし。点数は足りてっから」

いつも通りの軽口を飛ばし合いながら、考える。

いつまでもこのままではいられない。それはきつと、兄貴や私にも言えることだった。今は、こうして近くにいてくれるけれど。

いつかはきつと、兄貴も自由になることを考えている。

「……兄貴」

何だよ、と小さく落ちる声が近い。

額を離れた手が、今度は頭に乗った。昔はこうして、よく頭を撫でもらっていた。兄貴の撫で方は、ひどく優しい。

今は、振り払う気にはなれなかった。

「……夕飯、いつもの食べたい」

「またかよ。……わあつたよ、夕飯な」

お前もそれまで昼寝でもしてれば、と兄貴はもうひとつ私の頭を撫でて、それからモニターに向き直る。リズムカルなタイプ音に迷いはなかった。少し前まで時折みせていた躊躇いが、消えたような気がする。

足下で五条が寝返りを打った。

「……ちなみに五条どうする?」

「夜まで起きなかつたら夏油に回収させる」

「起こさねーの?」

「寝ぼけて術式でも使われてみる、俺は死ぬぞ」

やべーじゃん、と言ってみれば、やべーだろ、と同じテンションで言葉が返ってくる。何だか妙に笑えてきて、ウケる、と付け加えた。

ちよん、とつま先で五条をつつく。ひとの兄貴に甘えやがって、私の兄貴だぞ、とちよつとだけ言ってやりたくなった。絶対に口に出してなんかやらないけれど。

「改めて、ここまで五条に懐かれた感想をどうぞ」

「懐かれたも何も、こいつ夏油が俺に興味示さなかつたら絶対俺に興味もたなかつただろ。夏油のついでに懐かれてもなつて感じ。いや普通に懐かれても正直微妙だけど」

「そろそろまじで夏油と五条ってデキてんのかなつて思うんだけどど

う思う?」

「俺にはどつちかつつーとカルガモの親子に見える」

夏油のあとをてちてち歩いて行く五条が思い浮かんで、思わず嘖き出した。

多分卵からかえったときに一番最初に見ちまったのが夏油だったんだろうな、といっそ気の毒そうに言うのはやめろ兄貴。ひよこの五条とか想像しただけで笑える。

「……問題は夏油にその自覚が一切ないことかな」

「へえ?」

「ま、知ったこっちゃねーけど。たぶんそのうち夏油と五条が大喧嘩するだろうから、巻き込まれないようにだけ気を付けとけよ」

「何それ。術式使った?」

「や、ただの予想。特級術師の大喧嘩とか高専も無事じゃすまなそうだよな」

ここまで被害が来ないといいけど、と変わらずキーボードを叩く兄貴。ただの予想だとは言ったが、その口調は妙に確信をもっているようだった。ふうん、と一応その言葉を脳に刻んでおく。確かに特級同士の喧嘩になど巻き込まれたくはない。

特級のカルガモの子どもは、ただ呑気な寝息を立てていた。起きる様子は、まだない。

そろそろ日が暮れるという刻限に、携帯が震えた。

着信ではなく、メールが届いたらしい。それは海の外からのメールで、ざっと中身を確認する。予想通りの相手と内容に、小さく息をついた。

『予定を調整したら帰国するよ。君が出した結論は、君の口から聞かせてもらいたいからね。そのついでに君の検証に付き合うのも、もちろん吝かではない』

まだ、今日明日という話ではない。しかし、おそらく数か月後には、

きつと。

これを九十九さんに伝えることによって、呪術界（せいかい）にどんな影響を与えるとしても。

『君の答えを、楽しみにしているよ』

それでも俺は、迷わない。俺の優先順位は、もう決まっている。

ぱたんと折りたたみの携帯を閉じて、もう一度開く。足元の寝息を、いい加減片づけてしまわなければならない。

「……そろそろ夏油も帰ったかな」

足元で寝こけている「最強」を回収させたら、さつさとオムライスを作りに行かないと。五条や夏油のぶんまで作ることにならないように祈りながら、夏油の連絡先を呼び出した。

はい、と聞こえた声に、ため息交じりの言葉を返す。

「夏油、お前んとこのカルガモ引き取りに来て」

は、と戸惑いながらも、悟のことですかと言いつつ夏油に、実は夏油つてめちやくちやひでーやつなのでは、とちよつと思つた。この実力と権力と財力まであるクソ生意気な特級クズを懐かせ、しかも好かれてる自覚もありながら、それが五条にどんな影響を与えているのかはおそらく理解していない。

思わせぶりなことをしておきながら最終的には振るタイプかな、とちよつと引いた。さすが特級クズの片割れ。

「俺の部屋で寝こけてるんだよ。回収にきてくれ」

お前のせいでこうなってるんだから責任をとれと言え、何の話ですか、と本当にわからない様子のクズが言う。どうでもいいから早く来い、とだけ言つて通話を切つた。そのまま携帯をポケットに放り込んで、足元の五条の顔を覗き込む。

いまだ熟睡している様子の「最強」は、どう見ても五歳児の寝顔をしていた。

「……お前も、難儀なやつを指針にしちまつたもんだよな」

まじで見る目ねーよお前、とその眉間をつつけば、少し眉間にしわを寄せた五歳児は、俺の手をよけるようにブランケットに顔をうずめる。

聞こえてくる寝息がやすらかなことだけが、救いだつた。

星より多く、溢れる数。それでも海月は迷わない。
見たい光は、もう決めた。

季節なんてものはすぐに流れすぎるもので、つい昨日まで桜が咲いていたような気がするのに、いつのまにか葉桜になって、気づいたら蒸し暑い季節が来ていた。首を伝う汗が気持ち悪い。精密機械があるからと、空調が万全に効いている部屋に足早に飛び込む。

「あ~~~~~、すずし~~~~~」

「うるせーよ妹。ノックしたら返事を待て」

「外暑すぎんのが悪い。あ~~~~~この部屋天国」

「機械が熱吐く分、空調強めだからな」

いつも通り涼しい顔をした兄貴は、どこかぼんやりした顔をしている。よく見ればモニターには兄貴のお気に入り、クラゲの動画。どうやら休憩中だったらしい。

寝るとこだったの、と尋ねてみれば、起きたとこ、とまだ瞼が半分下りていた。

「眠いならまだ寝てれば。私も涼んだら戻るし」

「いや、……そこそこ寝たからな。もういい」

「……何か最近兄貴も眠そうじゃん」

「まあ、任務が増えてる分かな」

くあ、と兄貴にしては珍しい大欠伸。

デスクの端に差し入れを置くと、ほとんど言葉になってない礼が落とされる。とりあえずいつも通りポケットから煙草を抜き取って、兄貴の顔を横目で見た。眠そうと言うのもあるが、いつも以上に疲れがにじみ出ている。

このところの呪霊の発生率はそれなりにヤバいらしい。春が来る前から兄貴が「今年はヤバいだろうな」とは言っていたが、確かにただでさえ少ない術師たちが毎日のように日本全国を飛び回っている。ある程度の任務は免除されている兄貴ですらこうなのだから、ほかの術師たちの忙しさも想像に難くない。

実際、後輩たちはまだしも、あの特級のクズどもはかなりいいように使い回されていた。もはや高専にいることはかなり少なく、単独任

務が増えたのもあって、ふたりが揃っているところをしばらく見えない。

「皆忙しそーじゃんね。怪我ばつかだし」

「お前もだいぶ使われてんじゃねーの」

「つつても私は高専内でだいたい済むしね。たまに夜中に叩き起こされるくらい」

「そのうちお前も隈と仲良くなれそーだな」

「は？ 一緒にすんなよ」

多分お前も隈が出来やすい上に目立ちやすいぞ、と言われて思わず目の下をマッサージした。別にできたところで大して気にはしないが、隈まで兄貴とおそろいと言われるのは勘弁してほしかった。ただでさえ顔がそっくりなのに。

夜中に叩き起こされるのは、きついけれど別に構わない。なんと言っても、それだけ緊急性のある状況だということだ。頭が割れていたり、手足がなかったり、腹に大穴が空いていたり。よくもまあこれで生きてるもんだという患者が毎日のように出迎えてくれる。意外と人間って丈夫なんだなと、最近妙な感想を得た。

さすがに、ここまでくると血にも内臓にも慣れてくる。やはり、人間は慣れる生き物だった。患者を前にして吐くなんてことはあつてはならないので、解剖の見学をさせられたのは確かに無駄ではなかったのだと思う。

そういえば、兄貴はまだ一度も私のところに来たことないな、とふと椅子に座るその身体に目をやった。包帯やその類いは、一切見えない。

「……何だよ、じろじろと」

「いや、兄貴ってまじで怪我してないの？ それとも私のところに来ないだけ？」

確かに以前、私に見られないよう極力怪我をしない戦闘をしている、と歌姫センパイが言っていたのを思い出す。だが、それでも本当に任務に出て全く怪我をしないなんてことはありえるのだろうか。とりあえず手近なところにあつた腕を確かめるように持ち上げてみ

る。小さな古傷はあるが、やはり新しい怪我の気配はなかった。

ねーよ、と兄貴は私が持ち上げた腕の先をひらひらと振ってみせる。

「あってもせいぜいかすり傷レベル。お前に治してもらうほどのものはない」

「……まじで?」

「隠してどうすんだよ。俺は無茶はしねーって何度も言ってる」

「へー? まあそれならいいけど」

じゃあ、と腕を放すと、重力にそってぱたりと腕が落ちる。

完全に脱力している。まだ兄貴はどこかぼんやりとしていた。

「……やっぱもっかい寝たら?」

「起きるっつの。……硝子、最近夏油に会ったか?」

「夏油? 何で?」

いや、と兄貴はどこか歯切れが悪い。

例に漏れず任務で出ずっぱりの夏油には、たまにしか会えていない。夏油もほとんど怪我をしないし、気がついたら遠方の任務に飛んでいて数日いないなんてこともざらだ。最近ではむしろ、教室に座っている方が驚いてしまう。

確か最後にあつたのは、五日ほど前だっただろうか。

「……まー、何か疲れてるっぽかったけど。夏油も任務詰め込まれて疲れてんじゃない? 前の五歳児の五条ほどじゃねーけど」

「あれは死ぬほど迷惑だったな。しかも起きても謝るところか『忘れてろ』って脅しつけてくんだから。まじでクズ」

「五条なんだからもう仕方ねーじゃん?」

「全部が『五条だから』で片付く辺りすげーわな。……いや、夏油も普通にしてんならいい」

「何、今度は夏油のお兄ちゃん役でもしてやんの?」

「やめろ気色悪い。五条相手にもそんなもんしたつもりはねーわ」

ただ、と兄貴は少し言葉を濁す。

言おうか言わないかで迷ったようだが、結局、いつもより少し小さい声で呟いた。

「たまにここに顔出すけど、そろそろメンタルヤバそうだから」

「……メンタルってあの夏油が？ まじで？」

「気のせいならその方がいいんだけど。あとあんまメシ食ってなさそう」

「あ、それは思ってた。ちよつと痩せてきたよね」

まだまだ強くなれるってふっかけたの俺だしなあ、と兄貴は小さな声で続ける。

夏油が兄貴のところちよくちよく通って、何かしら学ぼうとしているのは何となく察していた。しかしどうやら、それは上手くいっていないらしい。いや、私の勝手な予想で言えば、たぶん進歩はしているのだろうけれど、それは夏油の思うスピードではなかった、とかだろうか。

何せ少し前に、五条が無下限呪術をものに始めたのを目の当たりにしている。

「俺から見りやずいぶん進歩はしてる。呪力操作は格段に上手くなったし、補助監督とかいろんなひとに話聞いて知識も入れて、戦術の幅が広がってるのは報告書からでもわかる。でも、アイツにとっちゃたりねーんだろうな。……それ以外にも、たぶん、何かぐだぐだ考え込んでるっぼいし」

「うーん、真面目系クズ」

「まじでそれ。……多分、自分が術師であり強者であるってことにプライド持ちすぎなんだよな、アイツは」

「兄貴その辺のプライドなさそーだよね」

「お前もだろ」

だって必要なくね、と返せば、さすが俺の妹、と変に感心された。ということはやはり兄貴もその必要性を考えてないのだろう。

自分は呪術師だから、とか。

自分は強いから、とか。

そこに意味と意義を見いだして、それらしい理屈をくっつけて、いったい何になるというのだろう。私にはよくわからないが、夏油にはそれが重要らしい。正直めんどくせーやつだな以外の感想が浮か

ばない。

お前はそれでいーんじやねーの、と兄貴は眠そうな顔にわずかな微笑みを乗せた。

「必要ないと思うならそれまでだ、大したことじゃない。……けど、うん、そうだな、やっぱり素質がありすぎなやつだと思っちゃまうもんなのかももしれねーな。しかも、五条みたいにそういう家系なわけでもなく、偶然生まれ持ってしまった力だからこそ。そこに理由を見いだして、安心したくなる。納得したくなる、のが正しいか」

「……そういうもん？」

「偶然を運命に言い換えたくなるって言ったらわかりやすいか？」

そう言われてなるほど、と頷いた。

確かに世間では、運命だの何だのという言葉があふれている。ただの偶然に意味と意義を見いだして、そこに価値まで乗せてしまう人間が多いと言うことだろう。

夏油も、そうだったのだろうか。ほかにはない自分だけの力を、そうやって納得して受け入れて。そのために使わなければならないと、自分に呪いを掛けたのだろうか。

「……自分の強さにも意味と意義があるものだと思ってるから、思うように強くなれない自分がストレスって？」

「もしそうだったら俺にも僅かばかりの責任があるんだろうかとちよっと思っただけだよ。まあ九割くらい知ったこっちゃねーって思ってるけど」

「一割も責任感じてんじやん。そんなに責任感強くなるなんて兄貴ってば頭でも打った？」

「妹、お前の中のお兄様への認識についてちよっとお話ししようか？」

「やだよめんどくさ」

「まじでこいつ俺の嫌なとこばつか似やがって」

またひとつ欠伸をした兄貴は、ぐっと両腕をあげて伸びをする。ごきり、と兄貴の肩が嫌な音をたてた。年寄りくさ、と言ってやれば、うるせ、とすかさず軽口が返される。

「意味と意義なんかどーでもいいーってか、呪術師の使命とか弱者生存

とか、アイツまじで似合いもしねー聖職者気取ろうとするよな。その辺は五条のがまだ可愛げあるわ」

「五条は逆にちよつと考えた方がいーんじゃない？」

「別にいーだろ、むやみやたらに人傷つけて回らない程度の理性があれば十分。頭はイカれてるけど、代わりに五条は多分並大抵のことじゃブレねーよ。行動原理がシンプルで、しかもその発端は全部自分にある。自分のために動ける奴はブレない」

「五条はつて、じゃあ、夏油は？」

夏油は、と兄貴は少し黙って、軽い口調のまま続けた。

「……意味と意義の根本が揺らいだとき、夏油も揺らぐんじゃないの」
知らんけど、と軽く続けられたのに、何故だかその言葉には妙な重みがあつて。

それ以上深く聞くのを避けた私は、じゃあ、と方向を変えてみる。

「兄貴は揺らぐことある？」

「ないね。俺の優先順位は決まってる」

ようやく目が覚めたららしい兄貴は、手を伸ばしてモニターを切り替える。優雅に海を漂うクラゲたちが消え、数式の海がモニターを塗り替えた。

揺らがないという言葉の通り、一切の迷いのない指がキーボードを踊る。

苛立ちが募ると、蟬の声ですら煩わしく感じた。

そもそもあのひとが時間通りに訪れるなんて、全く期待していなかった。期待していなかっただけ、少し会わない間にちよつとくらいは進歩を、なんてつまりこれは期待していたんだらうか。なんてことだ、俺があの一ひとに期待なんてものをしてしまうなんて。ひとなんてそうそう変わるわけがないだろ、他人に期待するな家入海月。ましてあんな人間性破綻している人種相手に。猛省しろ俺の馬鹿。

仕方なしに空調の効いた涼しい深海を出て、蒸し暑い高専の廊下を

歩く。さすがに高専には来ているよな、と少々疑わしく思いながらも、適当にひとがいそうな方へと足を向けた。あの特級クズどもに興味を示していたから、学生たちに絡んでいるのかもしれない。

別に探してやる義理など欠片もないわけだが、あのひとを放置してろくなことになった試しがない。さつきと報告を終えて資料を渡し、高専の外へ蹴り出してしまったかった。

「あれ、クラゲさん！ 外に出てるなんて珍しいですね！」
「灰原くんか」

廊下を歩いて行くと、曲がり角でいつもながら元気のいい彼と鉢合わせた。ひとを探しててな、と鉢合わせたついでに尋ねてみる。

「出会い頭に好みのタイプ聞いてくる変質者を見かけなかった？」

「すごいピンポイントですね。さつき会いましたよ、僕はたくさん食べる子が好きです！」

「会ったうえに答えたのかよ。知らないひとに話しかけられて返事をしちやいけません」

悪い人には見えなかったので、と朗らかに言う灰原くんにはため息しか出てこない。「悪い人じゃない」と「良い人」はイコールではないのだが、その辺りはわかっているのだろうか。まあ、それも彼の良いところではあるのだろうか。

やれやれと思いつつ詳細を尋ねると、自販機の前にいたとのこと。自分がその場を離れたときは、まだ夏油と話をしていたと。何だろう、妙に嫌な予感がする。

まだ近くにいると思いますよ、という言葉に礼を言って、彼に背を向けた。

「明日任務で遠出するので、またお土産持っていきますね！」

気を付けてな、と背を向けたまま手で応えて、俺は薄暗い廊下を急いだ。

任務で遠出、その言葉に覚えたわずかなひっかかりは、とりあえず後回しにさせてもらおう。

*

歩きながら、耳に呪力を集中させる。聴力を上げすぎると余計な雑

音で耳がやられそうになるが、ついでに脳にも呪力を集めて情報を取捨選択できるように調整。拾う音を選び、周囲に気を配りながら歩いて行くと、聞こえた。あのふたりの声だ。

位置的に、どうやらまだ自販機の辺りで話をしているらしい。

『知ってる？ 術師からは呪霊は生まれえないんだよ』

嫌な予感はいかんと、歩みを早める。

別にひとにそれを教えるのは構わない。きちんとした検証のうえでの結論であり、事実は事実。ただ、伝え方というものはある。

続いていく九十九さんの言葉を拾いながら、俺はほとんど小走りになっただけだ。

『大雑把に言ってしまうと、全人類が術師になれば呪霊は生まれえない』
確かにそれは事実だ。事実だが、違う。なぜならそれは実現そのものがほぼ不可能、机上の空論に過ぎないからだ。

俺がようやくそこに着いたそのとき、じゃあ、と夏油が口を開いた。

「非術師を皆殺しにすればいいじゃないですか」

「ずいぶん短絡的かつイカれた結論だな。術師らしい傲慢さがにじみ出てる」

ぱつと夏油が顔を上げる。その顔は、妙に色味がない。

「ああ、と諸悪の根源がにこやかに片手をあげた。

「久しぶりだね、海月！ わざわざ迎えに来てくれたのかい？」

「とつづくに約束の時間過ぎてるんでね。アンタを放置してろくなことになった例しがないからもしやと思って探してみれば……研究の成果を公開するのは勝手ですが、事実の一側面だけを開示するのはあまりにもアンフェアでしょう」

一側面、と夏油が繰り返す。九十九さんは心外だと言わんばかりに首を振った。

「話の流れだよ、海月。別に何かしらの意図があつたのと同じじゃない」「へえ？ で、アンタは、今の夏油の言葉に何て答えるんです」

「そうだね。……それはアリ、と答えるかな」

ぴくり、と夏油の肩が揺れる。

思わず眉間に皺を寄せると、だってそうだろうと九十九さんは肩を

すくめた。動きに合わせて、長い髪がさらりと揺れる。

「実際、それが一番簡単イージーだろう？ 非術師を間引き続け、生存戦略として術師に適応してもらおう。恐怖や危機感を使って、進化を促すんだ。これは別に不可能じゃない。違うかい、海月」

「……いえ、理屈の上では可能、その通りです。だがあくまで理屈のうえでの話だ。非術師塵殺の経過におけるあらゆる障害と、それに伴う副次的な結果を考えれば、決して現実的とは言えない」

「そうだね、だから実行していない。私もそこまでイカれてはいないよ」

「現実的じゃないってとここまで説明する気がありませんかかって話なんですよね」

理屈の上での「簡単」が、現実において「簡単」とは限らない。

夏油、と少し低い声を投げる。いつも平気な顔で笑ってみせる夏油が、今はやけに覇気のない顔をしていた。聞かれたくない言葉を聞かれてしまったとでも思っているのだろう。夏油の内心で燻る葛藤など知ったことではないが、釘だけは刺しておかなければならない。

ひとは、楽な道に走りたがる生き物だから。

「九十九さんの言葉に踊らされるなよ」

「ひどーい。海月は私を何だと思っているのかな」

「ろくな人間じゃないとは思ってます。だいたいその説明の仕方、非術師を皆殺しにするという選択肢を誰かに検証させたいように聞こえますよ」

「それはさすがに穿った見方をしすぎだ海月。……だが、そうか、確かにそう取られても仕方のない言い方をしてしまったかな。すまない、夏油くん。本当にそんなつもりはないよ」

「……いえ」

戸惑ったように瞬きを繰り返す夏油は、やはりどうも顔色が悪い。

このところどうも根を詰めているとは思っていたが、そんなときに聞きたい話ではなかっただろう。特に夏油は、自分が術師であることに意味と意義を持っていたいクソ真面目で頑固な馬鹿だ。意義と意味の方向性を誤れば、妙な方向に転びかねない。

謝ってみせる九十九さんを白い目で見ながら、俺は夏油に言った。「疑っていいぞ夏油。そんなつもりはないけど別にそうなくても構わなかった、それがこのひとだ」

「違うって言うてるのに。本当に海月のそういうところは可愛くないね?」

「好きなように言うてください。俺アンタのそういうところはわりとまじで嫌いです」

ひどすぎる、とめそめそと泣くフリをする九十九さん。いい歳して何やってんだろうとは思うけれど、そういえば俺このひとの歳知らないな、とどうでもいいことを思った。俺よりそこそこ年上なことは確かだし、聞いたら殺されそうなので年齢が囁む話はやめておこう。

ふう、とため息をつく、と、ところでおふたりは、と夏油が俺と九十九さんを見比べながら言った。

「海月は私の協力者だよ」

「俺にとっては研究のスポンサー。資金援助と、その他上層との関係を含めてちよつと融通を利かせてもらうかわりに、九十九さんの研究も手伝ってる」

「九十九さんの研究というと、」

「呪霊のいない世界を作る方法について、だね。それについて海月の中でおおよその結論が出たと言うから、今日はそれを聞きに来たんだ」

夏油の目が、再び俺に向けられた。そんな信じられないものを見るような目で見ないで欲しい。だいたい、結論なんて大袈裟には言ってみても、結局やつぱりちよつと考えればわかるようなところに戻っただけだった。

そう、誰もが「呪霊」や「呪術界」を「当たり前」と思わずに考えてみれば、わかるような答え。俺はそれを、一応の数字をもってやはり「有効」だと結論づけたに過ぎない。

「……場所を変えましょう、九十九さん。誰に聞かれるかわからない場所で話すことじゃない」

「オーケー、君の部屋に行こうか。君も来るかい、夏油くん」

「私は……」

「別に密談をするつもりはねーよ。興味があるなら勝手にしろ」

海月は私とふたりきりだと照れてしまうからね、と戯言が聞こえて頭が痛くなる。本当に、俺にこのひとをしばき倒せるだけの力があればいいのに。こういうときは自分の無力が呪わしい。

そんな軽口に笑う元気すらもないらしい夏油は、のろのろと立ち上がった。

「……疲れてんなら来なくてもいいけど」

「いえ、聞かせてください。平気です」

「ひでー顔色してっけど」

「聞きます」

どうやら頑固に火が付いたようだ。顔色は変わらないが、その表情は絶対に退かないと言っている。まあ、勝手にすればいい。どうせこの状況で無理に帰したところで気になって休めないに決まっている。非術師が呪霊を生む、その事実のみを頭に入れた状態で放置するのも確かに気がかりだった。

勝手にしろ、ともう一度言って、背を向ける。何だか面倒なことになってしまった。これだから九十九さん放っておくとろくなことにならないんだ、と内心で毒づきながら、特級ふたりを連れて部屋に向かう。

蒸し暑いはずの道中が、妙に薄ら寒く感じた。

*

今さらだが、基本的にひとがくることを想定していないこの部屋には椅子なんてものはひとつしかない。いつも俺が座って、学生たちが訪れたときはそのまま床に座り込んでいる。それが馴染まないらしい七海くんなんかは、わざわざクッションを持ち込んだりもしているが。

そして今、部屋にいるのは三人。

夏油はいつも通り立ったまま適当に壁によりかかったが、何が言いたいかって、ここで当然のように椅子を陣取るのが九十九さんだという話だ。序列とか客だとかレディファーストとかいろいろあるのだ

ろうが、勧められもしねーのに座るんじやねーよというか、何というか。いやまあ確かに絶対に俺は勧めないので、座りたいなら俺が座る前に勝手に座るしかないのだけれど。

やれやれと思いつながら、喉が渴いたなという声は綺麗に無視をした。アンタさつきまで自販機の目の前にいただろうが買つとけよ、とは言わなかった。さらに面倒になる。

はあ、と大きなため息をつく俺に、ようやく夏油は苦笑らしい表情を見せる。

「クラゲさんは本当に怖いもの知らずですね」

「じゃあ特級術師ってまじで傍若無人だなんて言い返すわ」

「ひとくくりにしないで欲しいんですが？」

「それ本気で言ってるならお前普段の行いまじで見直した方がいいぞ。冗談でなく」

何でたったこれだけの時間で俺は疲れ切っているんだ。強ばってしまった肩を回しながら、どこから話をするかと考える。

とりあえず大前提の話からか、と夏油を見た。目が合った切れ長の瞳は、ぱちりと瞬きをする。

「まず、この『呪霊のいない世界を作る』という命題について。当然だけれど、いきなりゼロにするなんて魔法みたいなことはまず無理だ。だから『呪霊を減らしていき、最終的にゼロを目指す』という方向で考える。そして現時点で発生してしまっている呪霊については地道に祓っていくしかないから、考えるべきは『いかに呪霊の発生を減少させるか』だ。これが大前提」

それはわかります、と夏油がこくりと頷いた。だから海月に協力をもちかけたんだよ、と九十九さんも歌うように言う。

追加でもうひとつ、と俺は指を立てた。

「もつと言うと、ただ呪霊の発生を減らすのではなく『強力な呪霊の発生を減らす』方向で考えたい。祓う手間や犠牲を考えても、そっちの方が建設的だからだ」

「確かに。それこそ蠅頭程度なら、ほぼ無害と言ってもいい訳ですし」
「最終的には蠅頭もいなくなるのが理想だけどね。けどまあ、経過の

段階ならそれでも十分だ」

それで、と九十九さんは続きを促した。抑えきれない好奇心と期待で目が輝いている。子どもかよ、とちよつと呆れたが、無理もないのかもしれない。

呪霊のいない世界を作ることは、俺にとっては目的のための手段のひとつでしかない。そうなれば俺の目的の達成にかなり近づく、という要素のひとつではあるが、それ以上の意味はなかった。

しかし、九十九さんにとってはそれこそが最終的な目的。気持ちが高ぶるのも道理か。

「強力な呪霊の発生を減らすなら、やっぱり呪霊の発生要因について考える必要がある。で、前にも言ったが、詳しいメカニズムとかその辺はさっぱりだ。だが、術師の報告書を中心に入力した俺の統計データと、九十九さんの経験値や観察によるデータをもとに、いくつかわかったことがある。そのひとつがさつき九十九さんが言った、術師からは呪霊が生まれなくていいこと」

「！」

「まあ当然といえば当然だ。術師がまず学ぶのは呪力のコントロール、呪力を漏出させるなんて術師にとっては無駄でしかない」

呪力というエネルギーに対して自覚的であり、それを利用するすべてを知っているのが術師だ。だから、術師からは呪力が漏出せず、当然呪霊も生まれない。死後呪いに転ずる場合は話が変わってくるが、それはかなりの特殊例だから今は数に入れないでおく。

とにかく言えるのは、今この世界に蔓延っている呪霊たちは、おそらくほぼすべて非術師から漏出した呪力によって出来ているということだ。

そこまで言って、夏油の顔色を伺う。夏油は少し唇を噛みしめ、それから解いた。自身を落ち着かせるように間を置いて、口を開く。

「……さつきはそれを、一側面に過ぎないと言いましたよね」

「ああ。呪霊は確かに非術師の漏出した呪力によって形作られている。だが、これだけでは説明できないことがある」

「それは？」

「夏油、知ってるか？ 諸外国は日本に比べて圧倒的に呪霊が少ないんだよ。特に強力な呪霊の数の差はかなり顕著だ」

俺も海外出張の経験は少ないからその辺は九十九さんの情報頼りだけど、と目をやると、九十九さんにはっこりと微笑んで自信満々に頷いた。

「それについては断言できるよ。もちろんデータでの提示でもできるけど、行ってみれば一目瞭然だ」

「聞いたことはありますが……そんなに違うんですか。人口や豊かさの問題ではなく？」

「総人口や人口密度、GDP、犯罪率、それに宗教や戦争なんかも踏まえて考えてはみたけれど、どれもこれも日本が突出して呪霊が多い理由にはならなかったね。海月、その辺りについては？」

「説明できます。術師の存在です」

夏油は目を見開き、九十九さんはほう、と頬杖をつく。

そう、強力な呪霊の発生の要因には、非術師だけじゃない、術師も噛んでいる。だから俺は言ったのだ。非術師が呪霊を生み出しているのは事実だが、あくまでもひとつの側面に過ぎない、と。

呪霊の発生についてまるで非術師にすべての原因があるような言い方をするのは、数字の上で実証された事実を鑑みれば決して正しくない。

「術師の存在って言い方は正しくないかもしれませんが。要は身近に強い呪力が存在しているということです。これは予測の域を出ませんが、人間も呪霊も同じなんじゃないですかね。つまり、そう、生存戦略です」

あえて、九十九さんの言葉を借りて言葉を続ける。

日本において、強い呪霊が多い理由。日本において、呪術師が多い理由。これはおそらく、どちらかが原因でどちらかが結果という話ではない。お互いがお互いに関係して、数を増やしている。それが俺の見立てだった。そう、つまり、シンプルに「生き残るため」という理由で。ほかにもいくつか解釈は考えられるが、現状集まっている情報から考えた結果、一番確率が高いのはこれだった。

「非術師が種をまき、呪術師はそれが育つ環境を作り上げている。言うなれば、呪霊にとって呪術師は天敵だ。より強い天敵が数多くいるから、呪霊も増えるし、強くなる。強くならざるを得ない、と言おう」

「……術師が、呪霊を育てている……？」

「そういう言い方もできる」

そんな、と言ひ募ろうとする夏油に、さらに事実を突きつける。これを実証するものはいくつかあるが、何よりも自分の目で見たものが一番納得できるだろう。

夏油には酷だろうか、と頭の片隅に少しだけ浮かんだ感情。だが、それを理性でもって切り捨てた。事実は事実として、認めなければならぬ。

夏油を、正面から見据える。

「そのわかりやすい実例と、お前は二年以上も一緒に過ごしてきただろう」

何を、と呟いた夏油の目が、次の瞬間に見開かれる。それについての詳細な資料は、よりにもよって本人から俺の手に渡っていた。

「十七年前……一九八九年十二月七日。その日を境にこの世界の均衡は一度崩れ、強力な呪霊たちが次々と発生し始めた」

その変化は、数字で見てもあまりに顕著だった。特に五条家から提供された資料には、「彼」の誕生による世界の変化が事細かに記されていた。呪霊の発生数、その強さが、その日を境に綺麗に右肩上がりしている。

たったひとり、そのたったひとりのために世界が塗り変わっていた。

「この場合、何をもって術師の『強さ』とするかは微妙だが……まあ、その定義はここで重要じゃない。呪霊にとっては脅威でしかない天敵、『強すぎる』術師がたったひとり生まれただけで、日本中の呪霊が影響を受けた」

「……なるほど、確かに生存戦略だ。もつとも、呪霊に生き物と同じ法則を当てはめるのは少しばかり違和感があるけどね」

「生き物にんげんから生まれてる以上、傾向が重なるくらいはあってもおかし

くないでしょ。数字でも明確すぎる証明が為されています」

確かに、と九十九さんは視線を浮かせた。これまでに提出した報告書でも思い返しているのだろう。本当に、いつそ笑えてしまうくらいに、それは明確だった。

強い呪術師が、強い呪霊を発生させてしまうのだ。

「しかし、だからこそ話は簡単です。強すぎる術師の存在そのものが呪霊の発生、さらに言うなら強力な呪霊の発生にも大きく影響している。なら、その原因を絶てばいい」

俺がそう言った瞬間に、距離は詰められていた。ぐつと胸ぐらを掴みあげられる。

俺よりいくらか高い場所にある黒い目が、まっすぐに俺を睨みつけた。いつもは切れ長の瞳も、今は瞳孔が開ききつている。ぎり、と奥歯が噛みしめられる音すら聞こえたような気がした。

向けられている、明確な激情。それは、殺意にもよく似ている。

「何が、言いたいんですか」

それに恐怖を感じるより先に、どちらかというど安堵にも似た感情を覚えた。

夏油が五条に向ける感情と、五条が夏油に向ける感情はきつと同じものではない。そのズレは、おそらくどこかでふたりの衝突を生むだろうという予感があった。だから硝子にも、そのときには巻き込まれないよう気を付けろよ、などと言ってみたりもしたけれど。

形はどうあれ、程度がどうあれ。確かに夏油も、五条のことを大切に思っている。

「……夏油、」

まあだからといってそんなことは関係なく、俺は俺の意見を言葉にするだけだ。嘘偽りなく伝えるという「縛り」があるという以上に、俺だって俺の研究にプライドくらいは持っている。それを個人の感情でねじ曲げるといふ選択肢は、俺にはなかった。

やれやれと小さく息を吐いて、その瞳を見返した。そして、改めて口を開く。

俺の出した結論が、呪術界にどのような影響をもたらすか。それ

は、俺の術式をもつてしてもわからなかった。

数の海。星の海。あらゆる可能性があふれる増埒。
海月は欠片をひとつ、掬い取る。掲げたそれは、蒼空そらの色。

「お前まじで気が短いっつーか、ひとの話を最後まで聞かねえよな」
は、と夏油の口から息が漏れる。

確かに回りくどい話し方をしてしまったが、だからってそう結論を急くなど思う。それに、ちゃんと自分の頭を使って考えろとも。

ちよつと考えればわかることだ。それが、早とちりでしかないことくらい。

「原因を絶つとは言ったが、五条を殺すとは言ってるねーだろ」

ぴたり、と夏油が動きを止めた。開ききった瞳孔は少しおさまり、その眼には戸惑いの色が見える。違うんですか、と囁くようなつぶやきが漏れた。

違う、と俺はその勘違いを切り捨てる。

「仮に五条を排除したとして、せいぜい五条が生まれる前の世界に戻るだけ。五条が生まれて呪霊が活性化したのは事実だが、その前からすでに日本の呪霊発生率はおかしかったんだよ。だったら五条ひとり排除して呪霊の発生が減少することを期待するより、本人に一体でも多く強力な呪霊を祓ってもらった方がずっといい。幸いにも五条はどつかのろくに仕事しねー特級とは違って、呪霊の祓除に積極的なんだから」

「海月、それは誰のことを言っているのかな？」

「だいたい五条がどんなに長生きしたとしても、せいぜい百年後には勝手に死ぬだろ。それをわざわざ殺す必要がどこにあるよ。殺そうとして殺せるやつでもねーってのに」

「ひどい、こんな美女を無視するなんて！」

外野がうるせーが、まあ気にすることはない。

確かに五条がこの世界に与えた影響は非常に大きい。だが、おそらく五条はその人生の間に、自身が活性化させた以上の呪霊を祓ってくれる。どうせ呪術師以外の生き方なんか絶対にできない呪術師の鑑なのだ、だったらせいぜいその真価を発揮してもらおう。

だからむしろ、五条悟には生きていてもらわないと困るのだ。排除

すべきは、五条じゃない。もつとこの呪術界せいかいの、根本に在るモノ。

「普通に考えりやわかるだろ。五条が生まれる前からこの国の呪霊発生率は異常だった。それは何故だ？ 呪術的な観点から考えて、この国と諸外国との最も大きな違いは何だ？」

遙か昔からこの国の要として鎮座している、呪力じりきの塊。

正直なところ、俺はその存在を「人間」として扱っていいのかすら疑問だった。

あまりにもわからないことが多すぎるうえに、生きた人間を贅として要求するような存在。多分俺は、それを「人間」としては扱いたくないと心のどこかで思っている。だいたい「不死」なんて、そもそもひとの手に負えるはずがない。

察したらしい九十九さんは、ふふ、とそれはそれは愉快そうに言う。

「海月、それはつまり、私に呪術界せいかいに喧嘩を売れと言っている？」

「俺は俺の考えを言ってるだけで、行動を起こすかどうかは九十九さんの自由です。が、俺から言わせてもらえば、アンタ呪術界せいかいに喧嘩を売る覚悟もなく呪霊のいない世界をつくるのか言ってたんですか？」
「言ってくれるね」

ところでそろそろ手を離せ、と夏油の手をぺちぺちと叩けば、はつとしたように首元の手が離される。簡単に服を整えると、まあつまり、と言葉を続けた。

「呪霊のいない世界をつくるにはどうしたらいいのか。それに対する俺の答えは―― 呪術界の要たる天元の排除、あるいは無効化だ」

*

たぶん、九十九さんとはもかく、夏油には相当衝撃で、そして荒唐無稽な話に聞こえたのだろう。衝撃と困惑と、もはや何て言ってもいいかわからないと言わんばかりの奇妙な表情をしている。だからお前は頭が堅いつつんだよ、と心の中だけで呟いた。

九十九さんにちらりと目をやれば、口元に笑みを浮かべたまま、しかしその目は笑っていない。

「なるほどね。天元はこの国を守るための要だと言われてきたけれど、実は天元こそが数多くの強力な呪霊を発生させている原因であ

る、と」

「とうより、他に考えられないんですよね。他国にはなくてこの国にはあり、古来より継続的に日本全土へ影響を与えていて、なおかつとんでもねー術師なんですよ、多分。いや本当のところどんなもんなのか知らねーけど」

「そりゃ私だって知らないさ。けれど、そうだね、……確かに。考えてみれば、奈良時代からずっと天元はこの国に鎮座している。呪術全盛の時代と呼ばれた平安すらも通り過ぎて、今もお」

天元のいないこの国を、誰も知らない。

なるほどなるほど、と妙に納得したように九十九さんは何度も頷く。

「昔からこの国の呪術師は命がけで数多くの呪霊を祓ってきた。祓って祓って、それなのに事実としてこの国の呪霊は他国より遙かに多い。天元を要とした呪術界（せいかい）の構造そのものが呪霊を減らせない原因なら、それも道理というわけだ」

「……待つてください、本気で言ってるんですか？ そんな、まさか、」
「根拠のある筋の通った反論なら聞くぞ、夏油。だが、お前のもっている固定観念からくる否定なら聞かない」
「っ……！」

そう言つてやれば、夏油は唇を噛む。

夏油からしてみれば、今日は突拍子もない事実の連続だろう。ひどかった顔色がさらに悪くなっているのも無理はない。染みついた固定観念の揺らぎは、善し悪しにかかわらず精神的な負担が大きい。とはいえ、聞くと決めたのは夏油本人だ。

別に、俺の言葉を信じろと言うつもりは全くなかった。夏油は夏油で、自分で考えて、結論を出して、それから行動すればいい。

少し目を閉じて考えていた九十九さんが、片目を開けて手を挙げた。

「少し整理をさせてほしい。海月、繰り返しの部分もあるけど改めていいかな？」

「どうして？」

どこか誤りがあれば訂正してくれ、と前置きして、九十九さんはその細い指を立てる。

「呪霊は非術師から漏出した呪力から形作られていて、その発生率や生まれた呪霊の強さには呪術師が影響していると思われる。それは海月の見立てでは呪霊の『生存戦略』であり、強い術師の存在そのものが、結果として強い呪霊を発生させている。世界がバランスを取っているわけだね」

「はっ」

「つまり、呪霊の発生を抑制するためのアプローチとしては、非術師という『種』か、術師という『環境』を絶つ、ふたつの選択肢が生まれる。改めて聞くけど、ここで非術師を絶つほうを選択しなかったのは何故だい？」

もちろん選択肢として、その可能性を考慮しなかったわけではない。それが目的に対する手段として有効なのであれば、倫理がどうか道徳がどうかそんなことを考えるまでもなく、俺は「是」としてそれを結論にしたらどう。だが、いくら演算を重ねても、やはりその選択肢は有効だとは思えなかった。

俺はひとつ頷いて、その理由をまとめる。

「ざっくり言つて、理由は三つ。第一に、非術師というマジョリテイを絶つには物理的に限界があり、その過程でも相当な呪霊の発生が予測できること。第二に、非術師が日本以上に存在しているのに、呪霊の発生が少ない国の例がほかにいくらでもあること。第三に、非術師を殺戮して術師のみの世界を作ったところで、どうせ強いだけのクズが跋扈する血なまぐさい時代がくるだけだつてこと。平安の代ならまだしも、このグローバルな時代にそんなことになれば地球規模での呪術全盛の時代の再来になりかねない。まあ普通に人類滅ぶんじやないですかね、呪霊がいなくなるよりも先に」

仮に本当に非術師のいない世界がつくれたとしても、その過程において発生した呪霊の強さは、いったいどれほどのものか。その呪霊を祓える術師が、存在しているかどうか。

術師の強さなんてあやふやなものを頼りに世界を構築するなんて

リスクが大きすぎる。運良く最強の術師がいたところで、どうせ百年程度で死んでしまうのだから。

それこそ、「不死」なんて反則技でももっていない限り。

確かにリスクが大きいね、と九十九さんは腕を組む。夏油は、何も言わなかった。

「それで術師を絶つ方を選択した、と。そしてさらに、術師の中でも最も影響力があると思われる天元、言わば呪霊発生の『地盤』と思われる存在を絶つことを選ぶわけだね。……この国の主要な結界はすべて天元が関わっているとされている。天元を失ったとき、この国はどうなる？」

まあ、その話になるよな、と首を傾げる。夏油の視線が、こちらに向いたのを感じた。

「んなもん俺が知るわけないでしょ」

だよねくくくく、と九十九さんが天を仰いだ。いやそこが一番重要なのでは、と夏油がドン引いた顔で言うが、いやそこを予測しろって無茶言うなと言うか。

俺だつて調べられる限りのあらゆる文献だの何だのを漁ってみたりもしたし、一応俺の話に聞く耳を持つてくれる術師にいろいろ探りを入れてみたりもしたが、それでも天元については公表されている情報しか出てこなかったのだ。

曰く、国内主要結界の要である。

曰く、「不死」の術式をもっている。

曰く、意志を保つため、五百年に一度「星漿体」と同化する必要がある。

何をどう調べようとも、出てくる情報はせいぜいそれくらい。しかも天内理子の一件で、これすら本当に正しいのかどうかもわからなくなっている。表向き「星漿体との同化は為されなかった」ことになっているのに、何故だか天元は安定しているのだから。

得ている情報すらどこまで正しいのかわからない状況なのに、これで天元いなくなった後のことを演算しろってそりゃ無理な話だ。

そう俺が肩をすくめてみれば、ううんと九十九さんは苦笑する。あ

のですね、と俺は続けた。

「俺はあくまでも『呪霊のいない世界を作るために一番効果的と思われる手法』の話をしてるだけです。天元がいなきや高専の結果が緩んで忌庫の呪物がまずいとか、帳が弱まって任務が遂行しにくくなるとか、そういうことを一切無視して話をしてます。もちろん、天元の排除あるいは無効化なんてことがそもそも可能かどうか、も含めてです」

天元のいない世界の姿を知る人間は、この世にはいない。ただ、ひとつひとつ可能性を拾い上げて検討した結果、その世界には実は呪霊がないのでは、という考えに至ったと言うだけのことだ。

「とりあえず言えるのは、下手に非術師の大量殺戮起こしたり五条悟の暗殺考えたりするよりは、もうちよつと可能性あるんじゃないかってこと。加えて、当然ながら呪術界上層の反発は免れないということ。もちろん術師に及ぼす影響も相当だし、ある程度の犠牲は覚悟しなきゃいけないということ」

それでも、言えるのは。

「痛みもリスクもなく世界を変えるのは、絶対に不可能だということ」
ついでにもうひとつ付け加えておこう。

ちらりと横目で夏油を見て、視線を九十九さんに戻す。

「ただ、今この時代には、三人もの特級術師がいます」

ぴくり、と夏油の肩が揺れたのを視界の端で捉えた。

最上級である一級を遙かに超える、おおよそ人間の枠を外れた特別で特例な術師。それが複数人存在することは、歴史を遡ってもそう多くない。

「その三人が、仮に天元側でなく、世界を変えようとする側として動くなら。俺は、案外何とかなるんじゃないかなって思ってます。すでにそのうちのひとり、九十九さんは世界を変えたい側なわけですし」
「……そのふたりは、こちらについてくれるかな？」

さあ、とあえてそっぽを向いて夏油を視界から外した。

その辺は、俺がどうこう言うことじゃない。九十九さんがやる気なのであれば、どうにかしてふたりを説得すればいいというだけの話

だ。

多分何とも言えない顔をしてるだろう夏油が、疲れ切ったような声で言う。

「……本人目の前にコメントに困る会話はやめてほしいんですが……クラゲさん、私もひとつ質問いいですか」

「いいよ、何？」

「クラゲさんは、その『世界を変える側』につくんですか？」

「現時点では明言できない。九十九さん次第」

え、とまた間抜けな声が漏れる。

俺はまたため息をついて、仕方なしに夏油の方を見る。予想通りに、そこには年相応の間抜け面があった。

「俺には俺の目的があんの。その達成のために、呪霊のいない世界をつくるのがひとつの手段になりえると思ったから、研究には協力した。けど、手段はあくまでも手段、俺は呪霊のいない世界を絶対につくらなきゃいけないとは思ってない。だから九十九さんの今後の行動が俺の目的に反しないという確証がない限り、協力は確約できない」

「私は君の目的に反することはしないつもりだけどね？」

「それを判断するのはアンタじゃなくて俺ですから」

必ず協力するなんて言質を与えるつもりはない。それは「縛り」になる可能性がある。

「お前も迂闊なこと言うなよ、夏油。九十九さんに協力するもしないもお前の勝手だが、呪霊のいない世界をつくることはお前にとって『目的』じゃないだろ」

「え、」

「自分にとって何が一番大切なのか、間違えないようにすることだ」

少なくとも夏油にとっては、「呪霊のいない世界」よりも「五条悟」の方が重かった。何も言わずに喉元を撫でてみせると、夏油は少し気まずげに目をそらす。

何が目的で、何が手段で。何が自分にとっての一番で、どこまでなら妥協できるのか。意外とそれはちゃんと考えないと曖昧なままで、

気づいたら手段のために目的を犠牲にしてしまった、なんてことも有り得なくはない。

常に自己に問いかけ、見極める必要がある。自分の、一番大切なことは何なのか。今の自分は、大切なことを置き去りにしてはいないか。

俺は、間違えたくはない。

「……とりあえず、俺の報告はそんなところです、九十九さん。あとでレポートは送つときますんで」

「……ああ、確かに。今後とも呪霊について継続的な観測と報告はお願いできるね?」

「それはもちろん。万一別の情報を得て俺の結論が変わるようなことがあれば、その際も必ず報告すると約束しましょう」

「オーケー、ありがとう。とりあえず一区切りとして、君の協力に心から感謝するよ、海月。今後ともよろしく頼む」

「どうも」

立ち上がった九十九さんが伸ばした手を、握る。

これからこのひとが何を考え、何を選択し、どういう行動を取るのかはわからない。それによって世界がどう変革するのか、しないのかも。まあ俺にとっては正直わりと本当にどうでもよかった。たとえば何が起ころうとも、俺は俺の目的のために動くだけだ。

握手した手が離れたところで、では、と俺はデスクの上に置いておいた分厚いファイルケースを手取る。

「報告は終わったんで、こっからが本題です。はい九十九さん、これ資料」

「……え?」

「まさか俺に報告させるだけさせといて今日は帰ろうなんて考えてねーよな。俺がアンタの研究に協力するかわりに、アンタも俺の研究に対して資金提供ほか、ありとあらゆる協力をするって約束でしたよね?」

「ありとあらゆるまで言ったかな私は?」

「言いましたよ、大人なんだから自分の発言には責任もつてくれねー」

と」

で、やって欲しいことなんですけど、と一番上の資料をみせる。

そこには地区ごとに色分けされ、要注意スポットに印を付けた日本地図。その数はざっと五十ほど。数が多い？ 全国分のデータなんだから仕方がない。

後ろからそれをのぞき込んだ夏油も、俺が言おうとしていることを察したらしく、うわあと呆れた顔をしている。

「何せこの一年ほどデータ収集がはかどってはかどって、一級以上の呪霊の発生しやすい条件や傾向を少しはつかむことが出来ましてね。それを元に、今から三ヶ月程度で期限を切って、一級以上の呪霊が発生しそうな場所と時期に目星を付けました。これがどこまで正しいか、現地に行つて確認してきてください」

「ちよつと待って、三ヶ月?! それにこれ数が多くないかな?!」

「ご不満なら半年先まで出しましょうか。ちゃんと全部行つて報告してくださいね」

「呪霊の天気予報みたいなものですか。自分で行かないんです?」

「それで遭遇したのが特級呪霊だったらどうする。所詮俺はしがない一級術師、特級から逃げきるのも大変なんだよ」

というわけで行つてきてください九十九由基特級術師さま。

珍しくにこりと笑顔をつくつて言つてやると、九十九さんの口元が大きく引きつった。このひとのこういう表情はなかなか見ることがないので、とても小気味いい。いつもアンタにはさんざん手を焼かされてるんだ、これくらい役に立ってくれても罰は当たらない。

一生懸命呆れた表情をつくつてみせる夏油も、口元が震えているのが隠し切れていない。

「こういうことになるから迂闊に言質を取られるとまずいんだよ、夏油。自分で自分に課した『縛り』を破るとどうなるかわからないしな」
「勉強になります、クラゲさん」

「君たちねえ……!」

ぐぬぬと唸りながら九十九さんはぱらぱらと各地の情報を辿っていく。うん、やつぱりこのひとが困っているところを見るのは心底気

分がいい。

資料をめくるその指先を何となく目で追っていると、ふとついさつき聞いた声が再び頭の中で響く。

いつも通りの朗らかな顔に、大きな声。彼との離れ際に背中で受けた言葉、俺はそこに何か少しひっかかるものを覚えたような。

「……あ、」

まさか、とは思えけれど。

嫌な予感というのは、不思議とだいたい当たるのだ。

大波は、必ず何かを奪っていく。

どれだけ海月が強く握りしめても、まるで嘲笑うように。

あれは、いつのことだっただろう。

いつも七海さんと一緒に来る灰原くんが、珍しくひとりで俺の部屋に訪れたとき。いつもよりほんのわずか大人しかった彼が珍しくて、つい言ってしまった。何かあったのか、と。

「何もないですよ？　いつも通りですー！」

彼はそう言ったが、声にもいつものほどの元気はない。とはいえ、本人が言いたがらないものを聞き出そうとは思わないし、聞いたところで俺に何が出来るとも思わない。そうか、と軽く受け取ると、灰原くんはそのまま黙った。

何か言葉を探しているらしい灰原くんは、つい、という様子で言葉を零す。

「……クラゲさんは、自分の妹が高専に入学するの、嫌じゃなかったですか」

彼のそんな声を聞いたのは、初めてだった。つい、指が止まる。

灰原くんははつと我に返って、何でもないです、と慌てて言うが、一度吐いてしまった言葉は戻らない。確か、彼の妹も見えるという話だった。絶対に高専に来ないように、彼が言い含めてきたという話も聞いたような気がする。

何となくぼさぼさの頭に手をやって、答えた。

「……嫌だったよ」

ぽつり、と言葉を落とす。そして、くるりと椅子を回して彼の方を見た。灰原くんは、いつも通り床に座り込んでこちらを見つめている。戸惑ったような、後悔したような、およそ灰原くんには似つかわしくない顔をしていた。

そんな顔もできるんじゃないかと、少し苦笑して息をつく。誰だつて、悩むことも迷うこともある。それを恥じる必要はない。

「けど、硝子は自分の意志でここに來るって決めたからな。俺がやめろつつて言うこと聞くようなやつでもないし」

「……そう、ですか」

「妹さんと喧嘩でもしたのか」

「うーん、これを喧嘩っていうなら、もうずっとしてるんですけど。……僕は、絶対に高専に来るなって言い聞かせてきたんです。こういうことに向いてるような妹でもありませんでしたし」

灰原くんの妹さんならそうなんだろうな、と何となく思えた。そもそも灰原くんだって、術師向きとは言えない人間なのだから。

少し前に夏油が「灰原は二周くらい回っていつそ術師向きなんじゃないかと思うようになりました」とか何とか言っていたが、やっぱり俺は彼が術師に向いているとは思えない。確かにどんな状況でも心折れず、未だに「普通」の感性を捨てずにいられるところは、いつそ頭がイカれているとは思うけれど。

でも、彼の魂は、やっぱり術師をやるには善良過ぎる。きっと、妹さんもそうなのだろう。

「久しぶりに電話して、またちょっと言い争っちゃって。僕は、自分が間違ったことを言ってるとは思いませんけど、……クラゲさんは家入さんの入学を許したんだよねあって、ちよつと思つて」

「……いやそこで俺を引き合いに出さなくても。いろいろ事情も違うだろうし」

「違うんですか?」

「違うと思うよ。まあ、うん、いろいろ」

説明するのが面倒でつい言葉を濁したが、灰原くんは素直にそうなんですか、と頷いた。そういうところなんだけどな、と思いつつも俺は苦笑するしかない。

だが、確かに事情は違うだろう。兄妹そろって高専にスカウトされたこと自体が同じだったとしても、俺と硝子の場合、俺はただの「おまけ」だった。他者の傷を癒やせる反転術式、高専が欲しかったのはどう考えてもそつちだろう。明言されたことはなかったが、俺たちに会いに来た高専の人間は、どいつもこいつも視線が硝子に向いていた。

硝子は自分の意志で高専に入学した。それは嘘じゃない。だが、硝子が入学したくないと言ったとしても、逃げ切れたかはわからなかつ

た。

「……灰原くんが来るなって言い含めたとしても、来ないことを決めたのは妹さん自身だろ。兄貴の反対押し切っても高専に入りたいと思えば入れたはずだ」

「、」

「というか、それくらい意志がないと入ったところでやっぱり潰れてたんじゃないか？　それで、高専に入って『潰れる』っていうのは、文字通り命の危険に直結する」

「だったら、やっぱり来なくて良かっただろ。」

「そう言いながら、俺はモニターに向き直る。背を向ける直前に見た灰原くんは、きゅつと口を閉じていた。」

「いつもうるさいくらい賑やかな彼でも、口を閉じることがあるんだなと少し笑う。」

「ちなみに何度でも言うけど、俺は君も術師に向いてるとは思わねーからな。死にたくなかったらさっさと辞めた方がいいぞ。この世界、いいやつから順番に死んでくから」

「じゃあ七海も向いてませんね！　ちなみに術師は辞めないます!!」

「うるっさ。調子取り戻すの早すぎかよ、ウケる」

「まあ確かに七海くんも向いてねーな、と付け足せば、ですよね、と返ってくるいつも通りの元気な声。やっぱりこの子はこうじゃないとな、と呆れつつも笑ってしまう。自分を「いいやつ」と言われても謙遜せずに受け止め、じゃあと言って自分の同期を出してくる辺りが、とても彼らしい。」

「だからこそとつと辞めろと思う反面、何とか生き残ってくれ、なんて。そんならしくもないことを思ったりする訳なのだが。」

「まあせいぜい死なないように」

「はい、死にません!!」

「元気なのは大変よろしいけど声は落とせな」

「はい!!」

「うるっせ」

「変わらない声量に苦笑しながら、思う。」

このクソでクズな血なまぐさい世界では、何故だか本当にいいやつから順に死んでしまう。そんなひとたちを、術師としての歴が短い俺ですらたくさん見送ってきた。彼らの存在を「呪い」にしたくなくて、もうほとんど思い出すことはできないけど。

確か、自分以外の誰かを尊ぶやつは死んだ。

確か、自分以外の誰かを見捨てられないやつは死んだ。

確か、自分以外の誰かを守ろうとした奴は死んだ。

だからだろうか、そういう「いいやつ」を見かけるたび、術師なんてとつと辞めて「いいやつが生き残れる世界」に行けばいいのに、なんて。そんな馬鹿げたことを思うようになったのは、いつからだっただろう。誰がきっかけだっただろう。

もう、何も思い出せない。ただ、俺にわかるのは。

「……まじで、いいやつから順番に死んでくんだよな。笑えないくらい」

つい口を突いて出たその呟きに、何か言いましたか、と相変わらずの音量が聞き返す。俺は何でもないよ、ただ手を振った。

その知らせを受けて、兄貴に連絡をしたのは夏油だった。

思いのほか早くこの部屋を訪れた兄貴は、何も言わず、表情も変えず、ただそのベッドの傍に突っ立っている。血霞が見えそうなほど濃く漂う血の香りに怯むこともなく、顔に掛けられた白い布を取ることもせず。

ただ、その遺体をじつと見つめていた。

「……私の落ち度だよ、海月。素直に認めよう」

少し離れた場所に座る、金髪美人。このひとが特級術師のひとり、九十九由基だということには驚かされたが、そんなひとと兄貴が協力関係だということにはもっと驚かされた。

お兄さんからよく君の話を聞いているよ、と挨拶をしてくれたそのひとは、冷静ながらも少し低い声で、状況を辿っていく。

「君の予測は正しかったよ。発生したのは産土神信仰、一級案件だ。しかも土地に紐付くタイプの呪霊なだけあって、その近辺一帯に蠅のように呪霊が寄っていてね。いくら筋がよくても、二級の学生ふたりの手に負える案件じゃなかった」

そう、兄貴が九十九さんに調査を依頼したという呪霊の発生予測。それが今回、七海と灰原が派遣される任務先とちょうど合致していた。高専の判断では二級で十分のことだったが、兄貴の予測では一級相当。高専よりも、兄貴の予測の方が正しかった。

二級案件だったら見学だけしておくから、と任務に同行した九十九さんがいなければ、犠牲はひとりだけでは済まなかったかもしれない。

「とにかく、呪霊の発生範囲が広がった。とにかく産土神信仰を起点にして広めに帳を下ろしてはもらって、さっさとメインを祓ってしまおうと思ったんだよ。実際、私の手に掛ければ一級呪霊くらい軽いものだからね。帳に入った低級呪霊は学生くんたちに任せて、帳に入りきらなかった分は後に回した」

それが、仇になった。

長椅子に腰掛け、目元をタオルで隠した七海が、絞り出すように口を開く。

「……クラゲさんの言ったとおりだった、と感心していたところだったんですよ。神やそれに紐付いた信仰は少なく見積もって一級案件、確かに私たちの手に負える呪霊ではなかった。今回はクラゲさんの予測と九十九さんのおかげで助かりましたが、もっと強くなって、次は自分たちの手で祓えるようにしなければと、そう、思っで、」

次、自分たちの手で祓えたところで、失われたものは戻らないのに。その声は、七海らしくもなく震えていた。今回の任務で負った傷はどこも軽傷で、とつくに完治している。だが、私の反転術式でも、心の傷は治せない。

「……いいひと、だったのに」

同じく七海の隣に座る灰原は、両手を強く握りしめて項垂れている。表情は見えないが、その声は湿っていた。

「いつも丁寧な任務の説明してくれて、辛くないかって気遣ってくれて、たくさん話もしてくれて、……なのに、帳が消えて、戻ってみたら、」

「彼、結界術が得意なんだってね。本当に大した腕だよ、帳の外で何が起きていたのか私にも一切気づけなかった」

「でしようね、とそこでようやく兄貴は口を開いた。」

「このひとの帳は外と中を完全に分断する。帳を通過できる条件付けもお手の物、たぶん補助監督の中では一、二を争うくらい結界術の名手だった。術師が帳のなかで呪霊にだけ集中できるように、状況によって帳を使い分けられる程度には優秀なひとです。……帳の外でこのひとが呪霊に襲われてたって、気づけるわけがない」

ベッドに横たわっているのは、兄貴が親しくしていたという補助監督だった。

兄貴曰く別に特別親しかったわけじゃないらしいが、夏油からみればずいぶんと信頼している相手に見えたという。実際、夏油から知らせを受けた兄貴は、本当にすぐにこの部屋を訪れた。

まだ、兄貴は彼の亡骸から目を離そうとしない。夏油は、ただ静かに部屋の壁にもたれている。

「今回、彼が亡くなったのはどちらかという俺のせいです。九十九さんも、灰原くんも七海くんも気に病む必要はない」

「、何を……!」

「このひとの性格をわかってたくせに、余計なことを言った」

反論しようとした七海を意にも介さず、兄貴はただ静かな声で続ける。わかつてたのにな、と繰り返した。

「今回の任務は、事前情報よりも呪霊の等級が上がる可能性がある。九十九さんがいれば問題はないと思うが、一応すぐに逃げられるように考慮しといてくれって。……帳に収まりきらない呪霊がいたんなら、戦うすべをもたない補助監督はとっとと安全なところまで避難すべきなのに。それでもこのひとが帳のすぐ外に留まったのはそのせいだろ。……自分の身の安全よりも学生の命を優先しちまう人間に言うべき言葉じゃなかった」

もう、遅いけど。

一瞬だけ目を伏せた兄貴は、いつも通りの顔でそのひとに背を向ける。

「海月」

足を踏み出そうとした兄貴を引き留めるように、九十九さんが兄貴を呼んだ。そういえば、このひとは兄貴を「クラゲ」とは呼ばないんだなど、妙な違和感を覚える。

「私たちが彼の元に戻ったとき、彼にはわずかに息があった。彼は、君にも言葉を遺して逝ったよ。聞かない？」

「いえ、いいです」

「海月？」

「だいたい予想つきますよ、その程度にはこのひとの性格知ってますし。それに、……どうせこのひと、笑っていったでしょ」

こっちの気も知らないで、と声にならない言葉が続いたような気がしたが、もしかしたらこれは私の妄想だったかもしれない。

困ったように笑ってみせた九十九さんは、正解、と小さく言葉を零す。それなら聞く必要はありません、と兄貴はあくまでも声のトーンを変えない。

「第一、亡くなったひとのことは忘れることにしてるので」

「あ、」

「……灰原くん？」

「それ、です」

兄貴の言葉に反応した灰原が、顔を上げる。やはりその瞳は涙に濡れていて、顔を上げた拍子に頬に一筋の光が走る。灰原はそれに構うことなく、言った。

「そう、言ったんです、最期に。……クラゲさんに、自分のことは忘れて欲しいと伝えてくれって」

兄貴は、特に驚く様子も見せなかった。ひとつ呼吸を置いて、そうか、と彼の最期の言葉を受け止める。じゃあやっぱり聞く必要なかったなど、温度のない眩きが落ちた。

強がっている様子はない。感情を押し殺している様子も見えない

かった。兄貴はもともと感情の上下を態度に出す方ではないし、そもそも多分さほど感情を動かすタイプでもない。だが、今の兄貴はとにかく「無」だった。

無感情、無表情。呪力の揺らぎも皆無。それが完璧なポーカーフエイスなのか、それとも本当に何も感じていないのか、私にも判断がでない。

ふと兄貴はちら、と後輩たちに視線をやって、こきり、と肩を鳴らす。まったく、とわずかに呆れに似たもの、いや、これは憐憫の方が近いだろうか。そんなものを視線に滲ませて、口を開く。

「……だから言っただろ、灰原、七海」

お前ら、術師に向いてないよ。

その言葉に、ふたりが目を見開いた、その瞬間だった。

「ええ、仰るとおりです」

耳障りなくらいねっとりとした、気色悪い甘さを含んだ声。声の元に目をやると、そこにはマツトな赤い唇が目を引く黒いスーツの女性が立っていた。

「ひとの死くらい軽く流せるようでなければ、この世界にいても辛いだけですよ。ご友人の死を見ても平然としていらつしやる家入海月一級術師くらい、薄情にならなくてはね？」

血のように赤い唇が、上弦の月のように弧を描いている。見たことのない顔だったが、どう見ても好意的な相手とは思えなかった。

*

部屋にいた全員の視線を受けても、彼女は平然と微笑んでいる。他者を小馬鹿にするような、感情を逆なでるような笑い方だった。

軽く首を傾けると、長い黒髪がさらりと揺れた。

「ああ、失礼いたしました、つい余計な口を。ノックはしたのですがお返事がなかったので、そのまま入室させて頂きました。家入一級術師、よろしいですか？」

「俺に何か？」

「はい、ハチウラを」

彼女は無遠慮に兄貴に近づき、薄いとは言えない書類の束を差し出

す。兄貴が受け取るときにちらりと一番上の書類がちらりと見えたが、その書式には覚えがあった。

術師たちに渡される、任務の命令書だ。

「貴方に課された任務の資料です」

「……ずいぶん多いな」

「ええ、ですがご安心ください。すべてをお一人でこなすように、という意味ではないそうです」

くす、と赤い月が嘲りを乗せる。

「ご事情は存じ上げませんが、貴方は九十九特級術師と仲がよろしいのでしょう?」

視界の隅で、夏油の肩が揺れた。九十九さんは泰然と微笑んだまま、兄貴も特に動揺をみせることなく書類の束に目を通してている。

「家入術師の手に負えない範囲は是非協力を頼むように、と。それを含めて、危険度の高い任務が多く割り振られているそうです。ですからどうぞ、家入術師はご無理なさらさず。ご友人を亡くされたばかりでお気持ちも揺らいで……はいらつしやらないのでしたね。失礼いたしました」

「どうでもいいけどご友人って言うのやめてもらえるか。違うから」

「あら、失礼いたしました。親しくなさっていただけと伺っておりましたが、彼の一方的な片思いだったのかしら。それは彼も可哀想に……彼は貴方のせいで目を付けられていたのに」

おわかりでしょう、これまで貴方の味方をしてきた人間が次々と消えていることくらい。

ふふ、と零される笑い声からは、毒と呪いの気配がした。

「どこまでも傲慢に自分勝手に振る舞って、危うくなれば自分の盾になつてくれる人間を傍に置いて。そうやってどれだけの屍を築いてきたのかしら?」

「だから覚えてないって言ってんだろ。死んだ人間のことは忘れたよ」

「あら、そうでした。さすが、薄情も極めると記憶の消去まで自在になりますのね」

ガタツと安っぽい長椅子が激しい音を立てる。

その瞳孔は完全に開いていた。飛び跳ねるように立ち上がった後輩たちは一直線に女性との距離を詰め、そしてもうあと一步というところで——弾かれるように、元の場所へと吹っ飛ぶ。

七海は夏油に首根っこを掴まれて放り捨てられ、灰原は兄貴にその頭を押し戻すように投げられた。壁に背中を打ち付けたふたりは、ずるずるとまた長椅子に座り込む。

一瞬のできごとすぎて、目で追うのがやっとだった。

「……おいおい、せっかく治したのにまた怪我させんなよ」

つい、呆れるようにそう言えば、にこりと笑顔を作った夏油が答える。しかし何となく、いつもよりもさらに作り物めいた、貼り付けたような笑みだった。

「ちゃんと手加減はしたから大丈夫だよ。ふたりとも、少し頭を冷やしな」

ふたりは無言のままだった。いまだ、その毒々しいスーツを正面から睨めつける。その態度を、夏油は咎めようとはしなかった。仕方ないねと言わんばかりに、その口から小さなため息が漏れる。

対して九十九さんはふふ、と微笑ましそうに笑みを零した。場違いなほどに明るい声で、兄貴に向けて言葉を投げる。

「やっぱりいい子たちじゃないか。自分のために怒ってくれる後輩をもった感想はどうだい？ 海月」

「危なっかしくて見てられねーし頼んでもねーですよ」

「あら、せっかくのお味方なのに。それにしてもごめんなさいね、何かお気に障ることを言ってしまったかしら？」

その嘲るような笑みを向けられても、ふたりは何も言わない。意外と本気でキレると黙るタイプだったのかと、特に灰原には意外に思う。言葉では何も語らずとも、その表情が、身体の強ばりが、迸るような呪力が、ふたりの怒りを語っていた。

だというのに当の本人は、いまだに凧いだ顔のまま。そんな兄貴を呆れたように見た夏油は、改めてその女性に目を向ける。

「見ない顔ですが、貴方は補助監督ですか？ 術師に対してこんなに

不躰なひとがいるとは思わなかったな」

「補助監督にもいろいろおりますのよ、夏油術師。いい機会ですから、家入術師にも教えて差し上げようと思ひまして」

「へえ、教えてあげるって、何を？」

夏油を相手にしても怯まないそのひとは、改めて視線を兄貴に向ける。その瞳には、いつそ決意とも言えるような、強い光があつたように見えた。

何だろうこのひと、とにかく気持ちの悪い言葉ばかりを吐いて、何を考えているのかよくわからない。その表情も、その声も、その在り方全てに、言い表せない違和感が募る。

「貴方、本当に迷惑なんです、ここに生きているだけで。だって貴方と関わったひとが順番に死地に追いやられているんですもの。貴方は忘れてしまったと仰るけれど、今までもずっとそうでした。そしてこれからも間違いなく、そうなるでしょうね」

今こうして貴方の傍にいてくれる方々も、いつまで息をしていられるかしら。

そこでちらりと、呪いに満ちた目線がこちらを向く。次は貴方よと、そう言われたような気がした。

「呪術界に抗えば抗うだけ、喪うだけなのに。それを貴方がいつまでも、懲りないから」

それだけ言つて、彼女はまた兄貴に視線を戻す。それを教えてあげる人が今までのいなかったのではないかと思ひまして、なんて今さら殊勝な顔をつくつて、嘲りを隠すこともせず。また腰を浮かし掛けた後輩たちを、夏油が視線で押しとどめた。

彼女の言葉を受け取つた兄貴は少し黙つて、それから改めて、なるほど、と呟く。

その顔には、先ほどまでとは少し違う感情の色がある。しかしそれがどういふ心情の表れなのか、私にもわからなかった。

兄貴は、相変わらず凪いだまま、その言葉を声に乗せる。

「アンタ、俺に殺されにきたのか」

時には海月も、傘を開く。開いて、閉じて、海を泳ぐ。
波に負けることのないように、沈んでしまうことのないように。

どうしてそんなに怒らずにいられるのか、と聞かれたことは何度かある。

中学まででも何人かには聞かれたし、高専時代には渋い顔をした庵にも聞かれた。最近で言うと、七海くんにも尋ねられたことがあったなど思い返す。

幾度となく繰り返される、小学生でもやんねーぞという五条の悪戯。日々ストレスをためている七海くんは、眉間に深い皺を刻んでいた。

「反応がいいから面白がられるんだろ。ほっときやいいのに」

「わかつては、いるのですが……!」

「そんな歯噛みしながら言わなくても」

根が素直なぶん、どうしても感情も素直に表現してしまうらしい。七海くんは一見ポーカーフェイスにも見えるが、実は意外と感情を外に出すタイプだ。灰原くんも素直なタイプではあるが、彼は感情の波がもともと高いところで一定している。からかってその機嫌を上下させ、反応が面白いのは七海くんのほうだろう。

後輩へのウザ絡みという娯楽を覚えてしまった五条は、それはそれは面白おかしく七海くんに絡んでいるらしい。正直気の毒。

「……いや、うん、何というか。理由をちゃんと考えるようにはしてやるよ」

「理由、というとっ」

あまり考えずにしていることを言葉にするのは難しい。うーん、と少し考えて、自分の感覚を言葉に直していく。

「仮に何かむかつく相手がいたとしよう。そいつが俺に向かって何かしら言葉を吐いて、イラツときたとする。そこで、即座に反撃するんじゃないくて、一歩立ち止まって考えるんだよ」

何故、俺はそれに腹を立てているのか？ そいつは俺を怒らせるつもりでその言葉を吐いたのか？ 悪気はあるのか？ そもそもそれは、耳を傾ける価値のある言葉なのか？

「何で俺はむかついたのか。たとえば俺にそもそもの原因があつてむかついたなら、それは俺の問題だよな。だったら怒るより自分の弱点消すことを考えた方が建設的」

「……はい」

「そうじゃなくて向こうが喧嘩売ってきたからむかついたのだとしたら、次考えるのは相手が何を考えて喧嘩を売ってきたかってこと。まあこれはいろいろ理由があると思うけど、とりあえずぎっくり二択で考える」

「悪気があるのか、ないのかですか」

「そ。そういうのって、だいたい相手がそういうシグナル出してるから何となくわかんじゃん。たまに微妙なものもなくはないけど」

五条なんて完全に「怒ってください」ってシグナル出してるし、と言ってみれば、深刻な顔をした七海くんは大きく頷く。本当に手を焼いているらしい。

少しは手加減しろよ五条、とは思うが、他人の迷惑なんか考える人間性がないからこそその「五条悟」だ。多分諦めた方が早い。もはや目を付けられたのが運の尽き。

「もし悪気がねーんなら、それはそいつが他者を不快にさせている自覚のない想像力欠如の馬鹿だつてことだろ。そう思うと、怒りより先に哀れみがくるんだよな。実際、無自覚に敵を作るやつって一番救いようがないだろ。生きてるだけで四面楚歌って、普通に大変じゃね？

知らんけど」

「むしろクラゲさんに『敵を作るとまずい』という発想があつたことに驚いています」

「敵の有無より自覚の有無が重要な。俺は敵だらけなの自覚してるので、いざというときの自衛の手段はちゃんと考えてあります」

わかってれば対策は立てられるから、と言つて、七海くんの呆れたような目線を軽くかわす。

こういうタイプは、むしろ怒りを示してやった方がもしかしたら本人のためなのかもしれない。自分が他者を怒らせていることを自覚すれば、本人次第で改めることも出来る。が、そんなやつのために俺

が労力を使ってやる義理などあるはずもないので、どうぞそのまま勝手に自滅してくださいと思っっている。

だから、特に怒りもわからない。スパイス程度に哀れみを付け足した無関心が関の山だ。

「……では、悪気のある相手だった場合は？」

何とも言えない顔をしながら、七海くんはそう言った。その脳裏にはあの情緒五歳児のクズ野郎の顔でも浮かんでいるのだろう。

その顔を見て、つい俺も苦笑が浮かぶ。そうだな、と前置いて続けた。

「悪気があるってことはつまり、何らかの理由があつて俺を怒らせたいわけじゃん。まーだいたい単純に『不快にさせたい』とか『面白い反応が見たい』って理由かもしれないけど、とにかく何らかの意図を持つて俺を怒らせようとしてるわけだ」

そんな相手の期待に応えてやる必要が、どこにある？

七海くんの口が、きゅつと結ばれた。それはどこか、悔しそうにも見える。

「ただの意地の問題だけど、相手の思うままに踊らされるなんて癪だろ？ だから俺は絶対怒ってなんてやらないね。あえてそのシグナルを受け取らない。そのうえで何で俺を怒らせたのかを探って、次の行動を選択するよ」

俺に悪意をもった相手の計算式など、ぶち壊してやるに限る。ひとの計算通りに動いてやるほど、俺はお人好しではない。

「まあつまり、俺は君より性格が悪いんだよ。仮に五条が俺で遊ぼうとしたところで、絶対にノってなんてやらねーからな」

「……そういう偽悪的な表現をわざわざ選ばなくてもいいと思いますよ」

「事実は事実。そういうわけで俺は君より怒る機会は少ないと思うけど、あんまり参考にならないと思うぞ。そもそも俺、他人の言動なんかどうでもいいってのが大前提にあるし」

「……いえ、努力してみます」

「それはあんまり建設的じゃない努力では」

「本当に、ほんつとうに五条さんがウザいんです」

わあ、どうやら相当に鬱憤が溜まっている。五条を回避できるなら悪魔にでも魂を売り渡してしまいたいそうだな。そういやこの世界、呪霊はいるけど悪魔って存在してんのかな。うーん、どうでもいい。

そうだな、とぼんやり考えながら七海くんは飴を差し出す。水色に着色されたサイダー味の飴を受け取って、七海くんは露骨に顔をしかめた。どうやらそれを見てどこかの誰かの六眼を思い出してしまったらしい。しまった、渡す味を間違えた。

とりあえず、取りなすように口を開く。

「まあ、キレる前に一呼吸置く癖はつけたほうがいいと思うよ。相手の意図は考えた方がいい。衝動で動くのはたいていよくないことにならねーからな」

特に、あえて自分を怒らせようとしている相手の場合は。

そういえば俺そんなこと言ったなど、このタイミングになって思い出す。目の前の赤いルージユは何故だか妙に挑発してきて、これでもかというくらい「怒れ」というシグナルを発している。それがわかった時点で、俺に「怒る」という選択肢などなかった。相手の思惑に乗ってやる義理など、俺にはない。

さて、何故彼女は俺を怒らせようとしているのだろうか。怒った俺に、何をしてほしいと思っているのだろうか。そもそも彼女は誰だ。どういう存在で、どんな思惑があつて、誰の味方で誰の敵だ。その表情から、言葉から、呪力から、情報を拾い上げて繋いでいく。

ぱちり、とピースがはまった音がした。頭の中に、ひとつの推論が浮かび上がる。そういうことか、と改めて彼女を見据えた。

「アンタ、俺に殺されにきたのか」

今、俺の中に何かしらの感情があるとすれば、それは「憐憫」に近い別の何かだった。

その言葉を聞いた彼女は、一瞬目を見開いたような気がする。しか

しすぐに表情を戻して、何を仰っているの、と侮蔑を込めて言葉を返した。

「それは脅しのおつもり？　がっかりだわ、伺っていたよりずいぶん気の短いのね」

「いいよもうその話し方。めんどくせ」

兄貴はすたすたと私のところに寄ってきて、ちよつと持つてと書類の束を渡してきた。両手を空けて何をするのかと思ったら、ポケットから煙草を取り出して口にくわえる。おいここ禁煙だぞクソ兄貴。「線香みたいなもんだろうが。堅いこと言うなよ」

「こうやってルール守んねーやつがいるから喫煙者の肩身が狭くなつてくんだよな」

「未成年の喫煙者に言われるとは思わなかったわ。肩身狭いのが嫌なら禁煙すれば？」

「は？　やだけど」

火の付いた煙草の先から立ち上る白い煙。ゆらゆらと天井を目指すそれを眺めながら、兄貴は大きく息を吐いた。

さて、と改めて兄貴は彼女に目を向ける。

「とりあえずそれ、さっさと外した方がいいぞ」

「何を、」

「呪力の流れが不自然だ。見りゃわかる」

ゆらりと兄貴が動いた。彼女が反応するよりも先に距離を詰め、彼女の左腕をつかむ。目の高さまで持ち上げられたその手首には、腕時計ともうひとつ、黒い革のような何かで編み込まれたブレスレット。それを見た瞬間、ぞわりと怖気だった。何か、ひどく気持ちが悪い。

さっきまで彼女に覚えていた違和感のものはそれだと確信する。呪力を狂わせる何かが、そのブレスレットには込められていた。

「やっぱりか。数年前にこんな粗悪品流行りましたよね、九十九さん」
「あつたね、お手軽に呪力を増幅できますなんて謳ってたタチの悪い呪具。せいぜい見えない人間が少しばかり見えるようになるくらいの効果しかないうえに、使用者の肉体と精神の両方に相当な負荷が掛かる」

「使用者の精神を不安定にして負の感情を増幅させ、無理矢理呪力に変換するわけですからね。むしろよく堪えたもんだ」

腕を引こうとする彼女の抵抗などものともせず、兄貴はその腕から呪具を抜き取る。するとまるで吸い取られるように彼女から呪力の気配が消えた。同時に彼女は膝から崩れ落ちかけるが、すぐに体勢を立て直して兄貴の腕を払いのける。

彼女の顔に、先ほどもまでの毒々しい笑みはもうない。怒りと、焦りと、それ以外の何か。烈しい感情が、瞳孔に現れている。

兄貴は、手に持ったそれを気色悪そうにしげしげと見つめる。後で処分だな、と嫌そうにそれをポケットに仕舞った。

「呪力量を誤魔化したのかしらねーけど、こんなもんつけてたら逆に面白くなるようなもんだぞ。アンタ、呪力ないんだろ」
ぐ、とルージユが歪んだ。

補助監督じゃないんですか、と灰原が驚いた声を上げる。じゃなきゃこんな呪具を使う理由がねーよ、と兄貴は軽く返した。

「呪力のない人間が、術師相手にさんざん挑発してくれたわけだけど。見るからに『怒ってください』ってやり方されても俺、まじで萎えるんだよね」

「待ってくださいクラゲさん、呪力のないひとが術師を怒らせて何の得があるって言うんです。下手をすれば殺されかねないのに」

「だから言っただろ七海くん、このひとは殺されにきたんだよ」

ずいぶん姑息でくだらねー手だ、と言い捨てて、兄貴はまた煙草に口を付ける。珍しくそのフィルターには、強い噛み痕が残っていた。

「術師が非術師を殺したという事実が欲しかったってところか？ どうせ俺はもともと嫌われ者、呪術界上層は喜んでその事実を受け入れるだろうさ。基本原則、術師が非術師に手を出すのは御法度。俺を呪詛師として追放するこれ以上ない理由になる」

すると、脳内で疑念がほどけていく。そのひとを見たときの、気持ちの悪い違和感。ただただ兄貴を煽り、怒らせるためだけの言動。

女性の額に、汗がったう。

「加えてもうひとつ。これ、初対面じゃねーよな。禪院の本家ですれ違ったことがある」

「、」

「化粧変えたくらいじゃ誤魔化せねーよ。確か禪院の傍流も傍流のクソ野郎に連れられてたっけ。どう見ても対等な関係には見えなかつたな。となるとアンタは、禪院の分家筋か、禪院傘下の術師家系の人間でとこ」

禪院家は、術式至上主義だと聞いたことがある。しかも、非常に男尊女卑の傾向が強い。兄貴にして「平安から価値観のアップデートが出来てない可哀想な世間知らずの集まり」と言わしめた家系だ。

この馬鹿そんな連中にまで恨まれているのかと呆れたとき、少し笑った夏油がなるほど、と口を開く。

「クラゲさん、確か『禪院のドクズ』さんを半殺しにしたことがあるんでしたっけ？」

「へえ！ やるね海月！」

「何やってんのクソ兄貴」

「喧嘩の押し売りされたから仕方なく高価買い取りしてやっただけだよ。とはいえ、ドクズはドクズでも本家筋のドクズ。傍流のカス野郎がアンタを生贄にして俺を追放し、ドクズに媚びを売ったかつたところかな。利権と保身しか考えてねーやつのやりそうなことだよ、呪力もない女ひとりの命なんて惜しくもないだろうしな」

「その『ドクズ』さんが首謀者とは考えないんですか？」

『呪術師に非ずんば禪院に非ず』を未だに謳う化石みたいな連中だぞ。いくらドクズでも、本家筋の人間ならここまで姑息な手段は選ばない。御三家であり術師である人間としてのメンツってもんがある」俺にはその感覚理解できねーけどな、と兄貴はしらけた顔。なんとも兄貴らしい。同感。

で、と兄貴は煙を吐き出しながら語りかける。

「その反応的にあってるっばいけど。アンタ、どうする？」

どう、と尋ねられた瞬間に彼女は動いた。彼女の懐から見えた、鈍い光。しかし次の瞬間には、その腕は兄貴の手に取って押さえられて

いた。

ナイフを持った彼女の腕は、ぴくりとも動かない。どこまで俺は舐められてんだ、と兄貴はうんざりした調子で言った。

「こんなナイフもにやられるほど弱くねーし、それで反撃するほど馬鹿でもねーよ。とつとと諦めてくんねーかな、俺も暇じゃねーんだ」

「つ……………」

「殺されたいのは勝手だが、俺を巻き込むな」

俺は、アンタを殺さない。

その言葉で、彼女の中の何か切れたらしい。彼女の身体が震え出し、落ちたナイフが床を滑る。兄貴が腕を放すと、彼女はそのまま床に崩れ落ちた。肩が揺れ、膝が揺れ、さきほどまでの強気な表情は見る影もない。潤んだ瞳からは今にも涙がこぼれ落ちそうで、目元のメイクがすでににじみ始めているように見えた。

この濃いメイクは泣かないための戦化粧か、とふと思った。きつと、もつと薄い柔らかな色の方が似合う顔立ちをしているのに。

「……………」

兄貴の足下に、継るように。力の入らない腕を伸ばして、白衣の裾をつかむ。兄貴を見上げた彼女の頬に、一筋の光が伝った。

「おねがい、わたしをころして……………」

「アンタを殺しても俺にメリットねーし」

「お、ねがいます……………」

いや普通にめんどくさい、と心底嫌そうな顔で言う兄貴。さすがクズというか、女性に継られても特に思うところはないらしい。

まあ自分を陥れようとした相手に、特に同情もないということだろう。その辺りは同感なので、私もサイテー、というだけにとどめた。え、これ俺が悪いの、という顔でこつちを見る兄貴が面白い。ウケる。

うーん、と苦笑をしつつ、とりあえずという感じで夏油が口を出す。

「事情くらい聞いてあげてもいいんじゃないですか？」

「夏油お前、今の俺の立場だったとして事情聞くわけ？」

「そりゃあ聞きますよ。弱者を助けるのが術師の務めですから」

「お前そろそろその言葉だいぶ嘘くさいぞ。じゃあ夏油が聞いてやれば」

「求められてるのはクラゲさんでしょう」

「揃いも揃ってクズすぎウケる」

お二人とも、と眉間に皺を寄せた七海が低い声を出す。同時にさつと立ち上がった灰原が話を聞きましよう、といつもの大声。

その様子を見た九十九さんもあははつと声を上げて笑った。

「気持ちわかるけどね、海月、夏油くん。たまには心の綺麗な後輩を見習ってもいいと思うよ？ 何よりレディの涙を無視するのはいただけないね」

「まさか俺より心が汚れてるひとからそんなことを言われるとは」

「クラゲさん、少し言い方を考えたほうが」

「内容を指摘しねーあたりお前も同じ穴の貉だよ」

「君たちほんとに可愛くなくくくくくく」

つつてもな、と兄貴はやはり嫌そうに彼女を見下ろす。

「ひとが自分の命を投げ捨てる理由なんてたいがい決まってるんだよな。誰が人質なんだよ、家族？ 恋人？」

「お、とうとが、」

「へえ、弟」

「わ、たしと違って、呪力もある、術式もあつて、男の子だから……っちゃん、生きられるはずなんです！ 術師^{ひと}として生きられるはずなのに、なのにあの男……っ！」

言うことを聞かなければ、その未来を潰すと。禪院^{じぶん}に仕えさせて、適当に使い潰して、禪院のために死なせてやると。非術師^{じぶん}が奴隷のように扱われるのは仕方がなくても、せめて弟だけはと思っていたのに、と。その言葉はどこまでも悲痛だった。

率直に言つて嫌悪感がひどいが、生憎とその内容にはない。自分の意志で生きることをつくに諦めている彼女の思考が、どうにも気味が悪かった。

彼女の思考は、すでに毒されている。非術師である自分、女である自分が思うままに生きられないのは仕方がない、と。そんな諦観をも

たないと生きていられない場所に、彼女はいたのだろうか。想像が出来なさすぎて哀れみすらも覚えない。

一通り聞いた兄貴も、特に興味もなさそうに煙草をふかしている。やっぱり時間の無駄だったとでも言いたげだった。

「事情説明終わり?」

「っ……………」

「いやそんな悲劇のヒロインみたいな顔されてもな」

「クラゲさん、」

「七海、黙ってる」

いつになく強い口調に、七海も押し黙る。懐から取り出した携帯灰皿に白くなつた灰を落として、ひたすらめんどくさそうにため息を吐いた。

「そうだな、一万歩譲ってお気の毒には言つとくよ。あの家のクズっぷりは俺も知ってる。さぞ苦勞して生きてきたんだろうな。で、だから何?」

「、」

「アンタは確かに呪力もないし、女性だからと不利なことも多かっただろう。でも、別に出来ることはゼロじゃなかったはずだ」

「……………」

「自分を守るために、弟を守るために。頭ひねって策を弄したか?」

非術師でも戦えるすべを模索したか? 今だってそうだろう。自分の事情説明して、麗しい姉弟愛語って、だから何だ」

大事なのは、その次の言葉だろう。

それは兄貴にしては珍しく、ひどく堅い声音だった。あ、う、と歪んだルージユが声にならない言葉を辿る。混乱で眼球の動きが激しい。それでも動かない脳を必死に回転させて、次の声を作る。

「た、…て」

「聞こえねーな」

「た、すけて、おと、とを、…………弟を助けてください!」

「要求に具体性がねーうえに対価の提示もないとか舐めてる? ボランティアで動く術師なんてその術師向きじゃねーふたりくらいだ

ぞ」

えつと、えつと、と泣きながら次の言葉を考える彼女と、その前にめんどくさそうに立つ兄貴。うーん、どう見てもいじめられっこといじめっこの凶。

夏油と九十九さんは愉快そうに、灰原と七海は何とも言えない顔で二人を見つめていた。私はどっち側って、そりゃあ前者だ。何故って、兄貴の言いたいことくらい私にもわかるから。

兄貴は、彼女に「対等」を求めている。

「アンタは何が欲しい？ 持っているものは？ 情報は？ 何を使って何を動かせば目的に近づける？ 目的を明確にしろ。自分の手にあるものを最大限に活用して目的達成までの道筋を描け」

きつとそれは、兄貴が今まで自分に言い続けてきた言葉。

「あ、」

「俺はヒーローじゃない、呪術師だ。ただの人助けはしない」

「う、あ、」

「言語を使えよ。察してもらおうことを前提に吐いた言葉は、相手の都合の良いように解釈される。明確で明瞭な言葉を選択しろ。解釈の余地を与えるな」

「、」

改めて思う。やはり、兄貴は甘い。

術師として血なまぐさい世界に身を置こうとも、深海のような部屋で数の海を漂っていても、兄貴の本質は変わらない。その、心底めんどくさそうな横顔を見る。

家入海月という人間は、決して他に手を差し伸べてなどやらない。背中を押してなどやらない。立ち上がるなら勝手に立ち上がれと、進む先は自分で選べと、足を踏み出すなら自分の意志でと。それでこそ「人間」だと。だから、兄貴は諦めた人間に興味を示さない。だから、兄貴は己の意志で進む人間を見下さない。

すべてのものには星の数ほどの可能性があるという。それらのひとつひとつを観測し、可能性の行く末を見つめる術式をもつからこそ。

家入海月はただ、人間がもつ可能性を愛している。

「……やっぱ時間の無駄だったか？」

裾離せよ、と兄貴が声を掛けたところで、彼女はぐつと指に力を込める。ぎり、とその歯が噛みしめられたように思えた。

「つあの男の支配から解放されたい！ 私も、弟も！」

「へえ？」

「術師とか家系とかどうでもいい、私たちが自分の意志で生きられる場所が欲しい！ 貴方にそれが出来るなら、手を貸して！」

「……ふーん。まだまだ抽象的だけど、ぎりぎり妥協点か。で？」

「あ、貴方は呪霊の研究をしているんでしょう。特に、呪霊の発生について、任務記録からデータを抽出して統計を取っている」

「そうだな」

「わ、たしたちの家は、……今は傾いてるけど……それでも三百年は続く術師の家系よ。これまで祓ってきた呪霊の記録は残ってる。貴方が手を貸してくれるなら、私はその全てを貴方に提供する！」

それが対価よ、と言い切った彼女。意地を見せたというよりはただのやけっぱち、癩癩を起こした子どものような。けれど、その目には確かに光があった。

兄貴は、いまだ火の残る煙草を携帯灰皿の中に押し込んだ。そして、わずかに態度を改める。

「ま、いいだろ」

「！」

「そつちの条件は禪院のカスの排除とアンタら姉弟の自由。俺の条件はアンタの家がもつ呪霊の記録の提供。これは『縛り』だ、異論はないな？」

「な、ない！」

「ん。じゃあ、まずはそつちの条件片付けるか」

はくくくく、とまた心底嫌そうな顔で兄貴は携帯灰皿をしまい、かわりに携帯を取り出した。あのひとと話すのめんどくせーな、とぶちぶち言いながら携帯をいじる。

ふうん、と愉快そうな夏油が茶々を入れる。

「どんな手を使うんです？ 相手にこちらの意図がバレた時点で詰みでしょう」

「ああ、だから気取られる前に一気に潰す。が、俺がやると手間なのでひとに頼む」

「結局他力本願じゃないですか」

「適材適所って言えよ。使えるもんは使うだけだ」

俺だつて使いたくねーけど、と兄貴は携帯を耳に寄せる。機械的なコール音が静かな部屋に響いた。

「……どーも、家人です。いま時間大丈夫ですか？」

僅かに聞こえた返事で、かろうじて男性の声が聞こえた。内容まではわからないが、機嫌の良さそうな声に感じられる。対して、兄貴の声はどこまでも嫌そうだ。本当にあまり話したい相手ではないらしい。

挨拶もそこそこに、とところで、とさっさと本題に切り込んだ。

「禪院もずいぶんとくだらねー手を使うようになったんですね。呪いを送ってくるならともかく、まさか生贄を送ってくるとは思いませんでしたよ。家族人質にとつて非術師の女性に言うこと聞かせて、果ては俺に殺されてこいとか。くだらなすぎてまじで正気を疑うわ」

直毘人さん。

兄貴が口にしたその名前に、覚えがあつた。禪院家の当主、禪院直毘人。何でそんな大物と兄貴が、なんて思う暇もなく、兄貴はほとんど言葉を重ねていく。向こうの声は聞こえなくとも、会話の内容は明白だった。

「クズだらけの禪院も、術師としてのプライドだけは死守するもんだと思つてたんですが。こんなチンピラ崩れのやり方で俺を追放して満足です？ ……は、それは自分の怠惰への言い訳ですか？ アンタらしくもねー」

躑サボつてたツケがきたんだろ、と時に敬語すら抜ける兄貴。禪院に恨まれてるくせに禪院の当主と普通に喋ってる兄貴って何。気の毒に、電話の相手を理解したらしい彼女は、蒼白になって震えている。ちらりと九十九さんと目が合ったが、九十九さんはただ面白そうに

肩をすくめた。さすが海月だね、と唇が動く。そんな一言で済ませていいのだろうか。

「禪院に名を連ねる者がやらかした、当主にも当然責任はあんだろが。俺は別にいいんですよ、これが呪術界中に広まっても。普段は俺の言葉なんか歯牙にも掛けねーやつらも、今回ばかりは話が違うんじゃないかな。なんてったって、禪院の評判を地に墮とすには最高のスキャンダルだ」

何なら五条家の皆さんにでも事細かく事情説明しましょうか、直毘人さん仲良いですよ、としれつと言ってしまう兄貴、たぶん神経の太さが違う。言うまでもないが、禪院家と五条家は年季の入った犬猿の仲だ。

「俺も五条家に日頃の感謝を伝えるいい機会になりそうですよ。五条家には無償で呪霊の記録提供してくれた恩があるし、これで少しは恩返しになるかな」

そこまで言って、兄貴はさつと携帯を耳から離れた。途端に電話口から聞こえる、老齢の男性の大きな笑い声。それはそれは面白くて仕方ないという調子で、闊達な声は笑い転げていた。

それが落ち着いて来た頃に、兄貴はまた耳元に携帯を戻す。ええ、と頷いて続けた。

「俺の要求はふたつ。まずは首謀者である術師への落とし前。内容は任せますが、二度とでかい面できないようにはしてください。それから俺のところに寄越された非術師の女性と、人質にされているその弟の保護および援助。アンタにとっちゃ安いもんだろ、今後の生活含めて面倒みてやれよ。弟さんは術式もってるらしいし」

あ、とそこで思い出したように兄貴は付け足した。

「言つとくけど面倒見てやれつてのは誰かの妾にしろつて意味じゃねーからな。自分の意志で生きられる環境を返してやれよつて意味。……アンタだから言ってるんだろ、俺は禪院の『普通』も『当然』も一切信用してねーんですよ」

それからいくらかやりとりをして、兄貴は通話を切る。携帯を白衣のポケットにしまい、膝を折って彼女と視線を合わせた。まだ、彼女

は白衣の裾を握っている。

「禪院直毘人は知ってるだろ、禪院家の現当主だ。とりあえず話は通したから、数日以内には全部片付くと思う。今後のことはアンタや弟さんの意志確認しつつ詳細を詰めて、……どうした？」

彼女は呆然としたまま反応を返さない。あれ、と兄貴は不思議そうに彼女の目の前で手を振るが、いや普通に無理もないだろうと思う。君ねえ、と呆れた顔をした九十九さんが二人に歩み寄った。

「さすがにキヤパオーバーだよ、彼女。呪具の影響も残っているだろうし、そろそろ心身ともに限界だろう。まったく、海月はレディへの気遣いをもっと学ばないと」

「それ俺の人生に必要なさそうなんで大丈夫です」

「う〜くん可愛くない。とりあえず彼女は休ませてあげなさい」

とん、と細い指が額に落ちると同時に、ゆらりと彼女の身体が傾く。九十九さんは柔らかなく彼女を受け止めて、小さな声で Good night と囁いた。

「これでしばらくはぐつすりだろう。さて海月、まさか君が禪院家の当主と繋がりを持っていたとは思わなかったよ。彼はちゃんと動いてくれるのかい？」

「身のケジメはちゃんと付けると思いますよ、メンツがありますからね。ただ、この姉弟の処遇に関しては若干不安なので、一応本人に直接念を押してきます。ちやうど京都の任務もあるし」

「……兄貴、これまじで行くの？」

確かに今私の手にある任務のリストの中には、京都で発生した呪霊の祓除の文字があった。他にも日本各地で発生した呪霊を祓うよう命令書には書かれていて、記載されている呪霊の等級はどれも高めだ。確かにこれはどう見ても嫌がらせ。

しかし、これまで兄貴はあまり任務には行かなかつたし、行ってもせいぜい都内だと聞いていた。てつきりこれらも、適当に突き返すもんだと思っていたのに。

私の言葉に、仕方ねーだろ、と兄貴は特に気にした風もなく返す。「その命令書は本物みたいだしな。多分、俺を通して九十九さんを動

かしたいと上層が考えたつてのはマジなんだろ。あと、……彼が亡くなったタイミングでやばめの任務多く割り振って、俺が死んだらラツキー、みたいな。カスはそこに便乗したんだろうな」

「アホほど嫌われてんじゃん、ウケる」

「俺も嫌いだから別にいい」

「子どもの喧嘩かな？　で、どうするんだい海月、手伝ってあげようか？」

「は？　アンタは呪霊の発生予測の検証があんだろが。幸いにも俺の任務とかぶつてるところはないんで、きりきり働いてください」

「どうして海月は私相手だと妙に辛辣なのかな？」

「日頃の行い」

「君が言うかい!?!」

あくうるせ、と言いながら、兄貴は丁寧に自分の白衣を掴む指を外す。眠りを妨げないようにそつとその手を離して、立ち上がった。

肩をこきりと鳴らして、出張とかまじ久々だな、と首を回す。

「……まじで行くんだ」

「割り振られた分くらいは片付けるよ。まあ研究も一区切りと言えば一区切りだし、少しくらい気晴らしに運動してもいいだろ」

「まさか任務を気晴らしの運動として扱う人間が五条さん以外にもいるとは」

「待って七海くん、俺をアイツと同列に並べないで。さすがに傷つく」

「それだけ余裕をもつのが大事つてことですよね、さすがクラゲさんですー！」

「灰原くんつてまじで頭イカれてるよな。うっかり尊敬しそう」

「え!?!」

「灰原、今のは褒められてないからね。嬉しそうな顔をしない」

兄貴は私の手から任務の命令書を抜き取つて、またぱらぱらと軽く眼を通す。ざつと二、三週間くらいかな、と頭を搔いた。

それから顔を上げて、改めて私を見る。

「硝子、数日彼女を学生寮にでも匿つといて。向こうの処理が終わるまで、彼女が生きてることを誰にも知られるな。ただし夜蛾には話を

通して、禪院の使いが来たら極力立ち会わせるように。夜蛾なら御三家相手でも渡り合える」

「……ん、おっけ」

適当に誤魔化しとく、と言えば、よし、と兄貴は頷く。

それから私に背を向けて、今度は後輩たちに顔を向ける。その視線の意味を読み取ったのか、ふたりはさつと背筋を伸ばした。

「灰原、七海、特に何も起きないとは思うけど、暇だったら彼女の護衛しといて。出張あがりならもう数日は任務も入らないだろ」

「わかりました!!」

「了解です」

ぴつと灰原は敬礼し、七海はこくりと頷いた。まだ、その表情の陰りは抜けきっていない。張り切ってみせようと、軽口を叩いてみせようと、やはり親しくしていた人間の死、そして同時に叩きつけられた呪術界の闇は響くものがあつただろう。

だが、ただ落ち込み、嘆き、後悔している暇などないことは、きつとふたりにもわかっている。この後輩ども、どうやらまだまだ心折れる気はないらしい。

それを確認した兄貴は、また視線をずらす。その先にいたそいつは、私にも何か、と少し不思議そうな顔をしていた。

「夏油」

「? はい」

「俺がいない間、よろしく」

たった、一言。その一言に、驚かされた。

兄貴が、誰かに何かを託すような言葉を言うのを、少なくとも私は初めて聞いたような気がする。それも指示という指示もない曖昧な言葉で、夏油相手に。

夏油自身もまた、その言葉を聞いてわずかに驚いたようだった。しかしすぐに表情を戻し、にこりと笑ってその声に応える。

「了解」

それを受けて、くす、と小さな笑みが部屋に響いた。ずいぶんな殺し文句だね、とからかい混じりの言葉を投げた九十九さんに、兄貴は

別に、と短く返す。最後にちらりと横たわったままの「彼」に目をやって、すぐに背を向けた。ドアのある方向へ、迷いなく足を踏み出す。

当たり前だが、兄貴が任務に行くのは初めてじゃない。むしろ私もりもずつとずつと、たくさん危険な任務を乗り越えてきている。けれど、任務に向かうその背中を見るのは、これが初めてで。

あにき、と知らないうちに声が零れた。何だよ、と足を止めた兄貴が振り返る。その表情は、本当にいつも通りだ。あの深海にいるときと、変わらない顔。

「？ 土産は期待すんなよ」

「いやいらねーけど。……何でもなくいい。いってら」

不思議そうに首を傾げた兄貴は、何かあれば連絡しろよ、とそれだけ言っつて、また私に背を向ける。

「……いつてきますか？」

何で疑問形なんだよ、と突っ込むのも忘れて、その背中がドアの向こうに消えるのを見る。兄貴の口からその言葉を聞くのは、ずいぶんと久しぶりだった。

あまりにもいつも通りすぎたその態度が、何となく憎らしい。

無限に近い数の海。波に逆らい、舞う海月。

硝子の檻は、何を想う。

実を言うと、ただ呪霊を祓うだけの任務なら、それこそ特級でも出ない限り何とか出来る自信はある。いつもの任務のように「ただし」とめんどくさい制約があるわけでもなく、とにかく相手を斬ればいいならなおさらだ。

どんな力をもっていたとしても、無敵の呪霊など存在しない。勝ち筋までの道を選び、その通りに動けばいい。

「お疲れさまでした、家入術師」
「どうも」

刀の汚れを払って、鞘におさめる。

運転手兼案内役としてついてきてくれた補助監督が、お怪我は、と尋ねてくれる。初めて見る顔の彼は、他の補助監督と同じく黒いスーツを身にまとっていた。

「怪我はありません。問題なければホテル直行してもらえますか。明日の朝一で次の任務に飛びたいので、新幹線の手配お願いします」

「了解しました。……が、明日の朝一で大丈夫ですか？ 久々の出張続きと伺っていますが、そろそろお疲れでは。一日くらい休息の時間をとつても日程としては問題ないかと思いますが……」

そもそもかなり巻きで任務を片付けているのに、と心配そうな顔を向けられる。

このひとも他人の心配をしてしまうお人好しのクチか、と思いつながら、構いませんよ、と彼の隣を通り過ぎる。実際、さしたる疲労は感じていなかった。

「おかげさまで移動中に睡眠が取れているので、むしろいつもより寝てますし。……ああ、すいません休みたかったですか？」

「ああ、いえ、自分の話ではなく！ 自分は家入術師が次の任務地に向かうのを見届けたら交代ですし。問題なければそのように手配いたします。差し出がましいことを申し上げました」

「いえ、お気遣いありがとうございます」

妙にへりくだる彼を不思議に思いつつ、車の後部座席に乗り込ん

だ。柔らかい座席に背を預けて、ふうとひとつ息をつく。

運転席に乗り込んだ彼とミラー越しに目が合った。小さく微笑んだ彼は、ホテルにいたら起こしますよ、と軽く言ってくれる。彼の運転は丁寧で快適なので、睡眠を摂るには非常にありがたかった。

小さく欠伸をしつつ、回らない舌で礼を言う。すると彼は、くす、と小さく笑った。親しみと切なさの両方が詰まったような、儂い笑い方だった。

「……ああ、すみません、以前から家入術師のことは伺っていたのですが、あまりにもお話通りの方だったので、つい」

「はあ。ろくな噂じゃなさそう」

「いえいえ、むしろいい噂ばかりですよ。補助監督相手にも丁寧で、無理難題を押しつけることもなく、小さなことにもお礼を言つて、気遣いを見せてくれる方だと」

「俺は俺のこと、ごくごく普通の人間だと思つてんですけどね。むしろ他の術師どんだけクズなんだろう」

「ははは、ノーコメントでお願いします」

補助監督も大変ですね、と言えどもはや笑うしかないという様子の彼。いや本当にすげーと思う。術師の相手とか俺なら絶対にやりたくない。

それからまた彼は少し笑つて、息をついて、車を発進させた。

「……アイツからも、よく話は聞いていたんです」

アイツ、と彼は言った。薄れさせようとしていた記憶が、一瞬にして蘇る。

よく運転席に座ってからからと笑つていたこと。任務の追加情報がほしいと言えばふたつ返事で頷いて、頼んだ以上の情報を提供してくれたこと。結界術の話聞けば、出し惜しみをせずに丁寧に教えてくれたこと。わざわざ桜餅を差し入れてくれたこと。

そして最後に脳裏に浮かぶのは、血の気のない顔で横たわる姿。そうか、俺の話をしたのはあのひとか。そりゃ好意的なことばかり伝わっているはずだ。

どこまでもお人好しの、善良な魂の持ち主。

「いいやつでした。……すみません、突然こんなことを」

「……いえ」

確かに、いいひとでした。

そう言うのと、彼は小さく唇を噛む。いいひとの傍にはいいひとが寄るものなのだろうか。残念なことに、彼もどうやら善良な魂の持ち主らしい。

このひともさっさとこの世界から離れてくれねーかなと、反射的に思った。何でわざわざこんな世界に残るんだよ、きつとそのお人好しが活きる世界はほかにいくらでもあるだろうに。俺だって、こんな薄汚い世界にいなきやいけない理由がなければとつと逃げ出しているところなのに。

こんな、善良さが利用され、消費される世界にいらなくなつて。

「同情とか哀れみとかはやめてくださいいね」

唐突に落とされた言葉に、思わず瞬きをする。その表情に似合わず、強い言葉だった。まるで、断固とした意地がにじみ出たような。「アイツの死はアイツの選択の結果であり、アイツだけのものです。他の誰のものでもなければ、誰の責任でもない。アイツは自分のために生きて、最期まで人生を全うした。そうでしょう」

そうでなければならぬ、と言い切った声色は、否定を許さないものだった。そして、貴方もそうでしょう、と続ける。

一呼吸分考えて、確かにそうだ、と思った。あのひとは善良ではあったが、自身の選択を他人に委ねるような生やさしい人間ではなかった。あのひとには、あのひとの意志と、選択があった。そこに俺や他の人が介入する余地など、あるはずもない。俺も、たとえどんな死に方をしようと、それを誰のせいにするつもりはなかった。

俺の意志も、選択も、人生も、俺だけのもの。そうでなければならぬ。

「……そうですね」

肯定の返事だけを残して、俺は柔らかい後部座席に身を預け、目を閉じる。これ以上、言葉を重ねるつもりはなかった。運転席でハンドルを握る彼もまた、そうだと思う。

忘れる、と脳裏に浮かんだあのひとの顔を意識の外に追い出した。別に、言うほど親しかったわけじゃない。あのひとの名前を呼んだことすら、あったかどうか。俺に協力的で話のわかるひとだったから、他の補助監督より話す機会が多かっただけだ。そもそも俺は、親しい人間など作る気だつてなかっただろう。

だからあのひとの死は、俺にとって特別な意味をもつものじゃない。この血なまぐさい世界に、それこそ星の数くらい溢れる現象のひとつに過ぎない。

これまで誰が死んだときも、そう思つて意識の外に追い出してきた。

「……、」

しかし、そう思うと同時に溢れようとする記憶。出てくるな、と強く押し込めて意識の底に深く沈める。ぎり、と自分の奥歯が鳴ったのが聞こえた。

思い出すな。守られてしまったことを。

思い出すな。赦されてしまったことを。

思い出すな。俺の背を押してくれたひとたちがいたことを。

俺が歩みを止めないのは、そのひとたちがいてくれたからじゃない。俺が歩みを止められないのは、そのひとたちのせいじゃない。俺の背を押している手は、俺を逃がさないためのものじゃない。

俺は、俺のために生きて、俺のためにこの道を進んでいる。死んでいったひとたちのためじゃない。硝子のためでもない。俺が、俺のために選んだこと。そう、だから。

今俺がいる場所を地獄だと思ふのなら、それは俺の責任なのだ。

「……お休みのところすみません、家入術師」

意識と無意識を漂っていたときに声を掛けられ、はっと目を覚ます。首元に嫌な汗をかいていることに気づき、何となく気持ち悪い。申し訳なさそうな顔をしている補助監督と、ミラー越しに目が合った。

「もう着きました?」

「ああいえ、携帯が」

「携帯？ ……ああ、俺のか」

「先ほどから何度か震えていたので、急ぎかもと。どうぞ、自分にはお気遣いなく」

どうも、とポケットに手を突っ込んで携帯を取り出す。外に出た携帯の着信音がひどく耳障りで、電源切つとけば良かったなんて出来もしないことを思ってしまう。

原則として、高専に属している術師は、任務時以外は連絡をとれるようにしておかなければならない。緊急時に連絡が取れませんでしたなんてことになれば笑えないので、さすがの俺も遵守している。

誰だよ、と思いつながら画面に表示された名前を見る。同時に、俺にしては非常に珍しいことに、携帯を握りつぶしそうになったことは後になってきちんと反省をした。まだまだ俺も感情のコントロールが甘かったらしい。

待ち受けになってる柔らかい色のミズクラゲに、小さなヒビが入った。

兄貴が任務に出て、数日が経った。

差し入れも毎日行っていたわけでもないのに、私の生活は特に変わらない。強いて言うなら、教室に行くと「最強」どものどちらかはだいたい席に座っているようになったということくらいだろうか。

今日も、普通に夏油が席に座っている。五条は任務だそうだが、都内らしいので昼には戻るだろうということだ。兄貴が任務に出たことを聞いた五条は、いつもこうならいーのに、とか軽く抜かしていた。うっせー働け特級。

「私や悟の引き受けていた遠方の任務がクラゲさんにまわされたんだろうね」

「特級にまわしてた任務を一級にまわすとか。まじで嫌がらせだな」

「そうだね。だが、だからこそ心配はいらないんじゃないかな」

その言葉に思わず夏油の顔を見ると、隣の席で頬杖をついていたク

ズはにこ、と笑ってみせた。

「私たちに回される任務は、ほとんどが『とにかく呪霊を祓えばいい』類いのものだ。クラゲさんが言っていたけど、あのひとが普段受けている任務はもつと制約の多いものらしいからね。手段を選ばなくていい任務なんて、クラゲさんにとってはいつもより楽なくらいだと思うよ」

「……別に心配はしてねーけど」

「そう？　ならいいけど」

そう言ってもうさんくさい笑みを崩さないクズ、とりあえず解剖させてくんねーかなと心から思う。

確かに兄貴は特に怪我もなく、むしろ巻きで任務をこなしているらしい。匿っていた彼女のことで連絡をしても、特にいつもと変わらない様子で返信を寄越してきた。

《禪院家当主の確約はとった。数日以内に禪院から迎えが来るから彼女を託していい。当主の遣いである証明として、弟さんも一緒に高専に来るはずだから》

どうやらクソ兄貴、まじで京都の禪院本家に乗り込んだらしい。

禪院家なんて燃えればいいのにな、とか愚痴も綴られていたので、相応にめんどくさい感じだったのだろう。何で絡み酒のやつほど酒飲むの好きなんだろう、とザルを通り越してワクであるらしい兄貴は心底理解しがたい様子で語っていた。

そして昨日、その甲斐あってか彼女は弟くんと感動の再会を果たし、高専を後にした。やっぱり彼女には涙を流してもさほど影響がないくらいの薄いメイクの方が似合う。縛りについては必ず、と真面目な顔で言った彼女に、今後は自由に生きていってくれればいいな、とらしくもなく思った。

術師とか、非術師とか、男とか女とか、そんなことはどうでもいい。誰だって好きなように生きればいいのだと、そう思うのはもしかしたら兄貴の影響なのかもしれない。

ふと、あの騒動の最後を思い出して隣のクズに尋ねる。

「……そういや夏油」

「何だい？」

「兄貴の言つてた『よろしく』ってどういう意味？」

ああ、あれのこと、と夏油はいつそ愉快そうに言った。

「さあ？」

は、と私の口から息が漏れた。

どこまでも夏油は愉しそうに肩を揺らす。何だか、そんな風に笑う夏油を見るのは久しぶりのような気がした。

「知らないよ。別にクラゲさんに何か頼まれていたわけでもないし、あんな曖昧なことを言われてもね。とりあえず頷いただけ」

「とりあえずなの？」

「とりあえずだよ。まあ頷いた以上は、一応クラゲさんにとって必要なことはやってあげようとは思うけど。クラゲさんに恩を売って損はなさそうだし」

「何だ、あんな思わせぶりなこと言うの珍しいからどうしたのかと思つたのに。ちなみに必要そうなことつて何？」

「それは秘密」

うわうぜー、と言つてみても、やっぱり夏油は笑うだけ。

硝子は気にしなくていいよつて何だよ、わりと率直にキシヨかつた。どうも妙に兄貴と夏油の距離が近づいたような気がするが、多分そう言つたら両方が「は？」つて顔をすんだらなると思う。

おそらくこの二人、利害が一致している部分だけわかりあつていて、それ以外は互いにどうでもいいと思つているのだろう。ふたりとも人間性クソすぎてウケる。

「兄貴に恩を売つても、まじで得があるかわかんないよ？」

「まあ、そうだけど。構わないさ、私はこれでもクラゲさんが嫌いじゃないからね」

まともに話が出来る年上の人間は少ないんだ、と夏油は言う。いや年上じゃなくても少ねーだろと言えば、クラゲさんと同じこと言わなideくれと夏油の眉がわずかに歪められた。さすが兄妹、とか言っているが、兄貴じゃなくても絶対同じことを考えるとと思う。夏油はもう少し自分のクズ具合を自覚したほうがいい。

それにしても先生遅いね、と時計を見上げた夏油が呟いたところで、慣れた気配が近づいてくるのを感じた。都内の任務とは聞いていたが、こうも早く終わらせてきたとは。

「あ〜〜〜、だつる」

「おかえり悟。早かったね」

「あんな雑魚い任務秒で終わるっつの」

「のわりに妙に制服汚れてない？」

「帰りに瞬間移動試してちよつとミスった」

まだ調整が足りねーわ、とかぼやきながらクズの片割れは大きな音を立てて椅子を引いた。機嫌が悪いのか、その眉間には皺が寄っている。精神年齢がまだまだ低いでかいガキは、自分で自分の機嫌をとる手段を知らないようだ。面倒なことこの上ない。

相変わらずの相棒に、夏油はその笑顔に少し苦みを足した。

「さすがの悟も苦戦中かい？」

「うっせ、すぐにもものにしてやるっつーの。あ、僕、夜蛾が呼んでた。また任務で出張だよ」

「それを先に言いなよ。……クラゲさんのおかげで出張も減ったって話をしていたところだったんだけどね」

やれやれと今度は夏油が立ち上がる。せめて移動が楽なところだといいいけど、と言いながら椅子を戻した。それを見た五条は、にやりと笑う。

「残念、地図にも載らねー山奥だよ」

「呪霊祓うより移動のほうで疲れるやつか」

「ご愁傷サン。まーもう少ししたら呪霊の発生も落ち着くつてよ」

「そなの？」

「クラゲさんが電話で言ってた」

何の気なしに言った五条に、つい夏油とふたりして五条を凝視した。視線に気づいて、五条は何だよ、と不思議そうな顔をする。

いや、五条と兄貴が電話で話すとか意外を通り越して面白すぎんだけど。

「……悟、クラゲさんと連絡とってるのかい？」

「移動中マジで暇だったときに鬼電したら二十回目くらいで繋がった。ウケるよな」

「無視しないクラゲさん優しい」

「着拒しない兄貴優しい」

「はっ」

真剣に嫌そうな声で電話に出たのが五条的には相当に面白かったらしく、五条はこれ幸いと愚痴とどうでもいい話を吐き出しまくったらしい。三回くらい会話の途中で通話を切られたが、それでもめげずに電話を何度も鳴らし続け、とうとう根負けした兄貴は五条が満足するまで付き合ってたとか。マジでこいつ驚くほどウザい。

呆れを通り越した夏油は、それはそれは大きいため息をつく。

「……たまにクラゲさんはとんでもない苦労人なんじゃないかと思うことがあるよ」

「いやこれはマジで私も驚いたわ。どうしたんだろ兄貴、頭でも打ったか？」

「着拒したら報告書かかねーって言ったたら諦めてたけど？」

「悟、それはさすがに」

「性格クソすぎやっぱ」

とはいえ、それでも兄貴が大人しく特に理由もない電話に付き合ってたやるとは。兄貴なりに五条を気に入っているということなのか、実は兄貴も相当暇だったのか。

いや、これで自分が着拒したら七海や灰原、伊地知の方に被害が行く可能性があるかと踏んだのかもしれない。あれで兄貴は、後輩たちのことを気に入っている。

「夏場をしのげば少しは呪霊の発生も落ち着くってよ。クラゲさんの予測じゃ、今年の冬はむしろ例年より呪霊の発生は少ないかもとか言ってた」

クラゲさんの呪霊発生予測、今のところわりと当たってたんだろ、と五条は軽く続ける。

どうやら兄貴が今九十九さんに検証してもらっている話も聞いたらしい。今年の冬はもうちよい遊べっかな、とようやく五条は機嫌を

戻した。

視界のほとんどを黒く塗りつぶすサングラスを少し下がり、その六眼が相棒を捉えた。

「だからさっさと片付けて来いよ、傑」

そう言われた片割れは、ふ、とくすぐったいように笑う。はいはい、といつも通りの顔をして、じゃあ行ってくるよ、と夏油は教室の戸を開けた。

そしてこの後の任務こそが、「最強」で真面目系クズで、どこまでも馬鹿で不器用な夏油傑という術師にとつての、大きな契機だった、らしい。

数日後に聞いたその任務の顛末に、私も、そして五条も、ただただ目を瞠ることになる。

結局、全ての任務を片付けるのに十日もかかってしまった。

呪霊の祓除の時間は短縮できても、移動にかかる時間を短縮するのには限度がある。これだから出張は面倒だ、と思いつながら自室のドアを開けた。

習慣として部屋に入る前に、任務に行く前と部屋の状態を比較する。ものが移動している様子も、残穢もない。それを確認してから部屋に足を踏み入れ、その辺に刀を置いて荷物を適当に放り投げた。

ぎしりと音を立てる椅子に身体を預けて、深く長く息を吐く。

「……やるか」

すでにまとめておいた任務の情報を、片っ端から入力していく。残念なことには任務の移動中で睡眠と休息は十分すぎるほど摂れている。任務に出ている間の方がよく寝ているなんて皮肉な話だが、本当のことなのだから仕方がない。

俺が出張していた間の任務報告の入力も早く進めたい。呪霊の発生数が増えれば任務も増え、当然ながら未入力 of 報告書もやまのようにある。効率よく進めて、この十日分を取り戻さなければ。

ついでにあれだけ面倒な電話に長時間付き合ってやった五条、これでまじで報告書が適当だったらすすがの俺もちよつと本気で考えなければならぬ。え、「最強」相手に何をするのかって？ そこは俺の術式と性格の悪さの見せ所である。夏油と硝子を巻き込めば、手なんていくらでも考えられる。

そんなことを考えながらカタカタとキーボードを鳴らし、いつもより早いペースで入力を進めていると、ふとドアの外に気配を感じた。軽いノックの音が響き、もはや聞き慣れた声が続く。

せつかく作業に取りかかったところなのに邪魔をされたくない。

「……急ぎじゃないなら後に、」

してくれ、なんて言おうとしたところで無駄だと最初から理解しておくべきだった。この傍若無人、本当に何とかならないものだろうか。いや何とかならなかつたからこうなんだろうな、そうだよな。

ため息をつきながら、俺の返事を無視して部屋に侵入してきたやつ
の顔を見る。

「何だよ、俺ついさつき戻ったところなんだけど」

俺の嫌そうな顔など気にも留めず、そいつはいつものように笑ってみせる。そう、本当にいつも通りの顔だった。ここしばらくその顔に浮かんでいた昏さは、もうどこにもない。

上下ともに真っ黒な服を着た夏油は、クラゲさんに話したいことがあるまして、といつもものように慇懃に宣った。

「多分、クラゲさんにとっても悪くない話になると思います」

最終的にはですけど、と付け加えた夏油は、妙にこの深海に溶け込んでいのように感じられる。

その瞳には、策謀の色が見えた。

水の流れはとどまることなく、変わらぬものなど有り得ない。

去るものがあれば来るものがあり、失うものがあれば得るものがある。

硝子の檻も、囚われる海月も、また同じ。
海月はただ、たゆたうままに受け入れる。

それにしても、と夏油は一度言葉を切って、まじまじと俺の顔を見る。何だよ、とつい身をよじった。

「クラゲさんですよね？」

「……他の誰に見えるってんだ」

「いえ、隈がないクラゲさんを初めて見たので」

「移動時間、やることなく基本寝てるからな。出張に出てる方が睡眠時間なげーんだよ」

「出張中の方が健康的って……クラゲさん、やっぱり真面目に任務に出るべきでは」

「うるせーわ」

本当に印象変わりますね、と無遠慮に見つめられて顔をしかめる。野郎に凝視されて喜ぶ趣味はねーよと言えば、むしろ女性になら凝視されて喜ぶんですか、とか聞き直す夏油、お前マジで黙れと思う。

「どっちもいらね」

「そういえば硝子が、クラゲさんは中学まで死ぬほどモテたって」

「中学までなんてどいつもこいつもガキだから、頭良かったり運動神経良かったりまとめ役やったりする奴が無条件でモテるもんだろ。俺そういうの全部クリアしてたから」

「頭と運動神経はわかりますが、まとめ役も？」

「生徒会長まではやった」

それは意外、と不思議そうに言う夏油に、ため息をつく。

「事態が悪化した後に助っ人頼まれたり相談されたりするよりは、最初から俺が動かした方が効率いいし、俺の精神衛生的にも少しはマシ」

「納得。昔からクラゲさんは面倒見が良かったんですね」

「昔からって何だよ」

「悟のイタ電に付き合っただけであげたんでしょ？」

思わず死んだ目をした俺に、夏油は遠慮なく笑う。本当に懐かれましたねって、マジでお前が言うなと言うか。あいつマジで何とかなん

ねーの、と言っても、その相棒はただ無理ですよと手を振るばかり。こいつまじで面白がってやがる。

もう話をするのもめんどくさくなって、で、と言葉を促せば、はいはいと夏油は手に持っていたメモを差し出す。

「本題の前に宿題の話を。これ、クラゲさんがいなかった間に特にもないのに高専に訪れた暇な術師のリストです。印がついてるのが、その中でも直接硝子に接触しようとしたひと。私が任務でいなかったときは夜蛾先生が見ていたので、漏れはないと思いますよ」

「……夏油」

「二応私が高専にいるときはなるべく目を光らせていましたし、悟もわかっているのかどうなのか、いつもより硝子を気に掛けてたみたいですよ。まあ術師のそういうめんどくさはきつと悟の方がよく知っているでしょうしね」

これで「よろしく」は果たせましたか、と平然と言う夏油。

とりあえずメモを受け取って、軽く目を通す。どいつもこいつも、クズと評判の馬鹿ばかりだった。そうか、とそのメモを握りつぶす。

「そう解釈したのか」

「あれ、違いました?」

「あつてるも違うもねーよ。お前がどう動くのかを見たかっただけ」
俺の「目的」を理解しているつもりだと宣った夏油。だからあえて曖昧な言葉で留守を任せ、俺の何をどこまで理解しているのかを確かめるつもりだった。

そして夏油は、硝子の周囲に目を光らせるという行動に出た。それはつまり、確かにおおよその俺の目的を理解しているということ。同時に、このリストを作成する中で気づくこともあったはず。

ふうん、と夏油に目をやれば、夏油は苦笑して、それから嫌そうに顔をしかめて、言い捨てる。

「ある程度はわかってるつもりでした。……でも、正直想定以上でした」

まさか、ここまで腐っているとは。

その言葉に、少し息を吐く。

「勘違いすんなよ。俺はお前に呪術界の腐敗を理解させたかったわけじゃない」

「わかってます。呪術界にとって、硝子が今どういう立場なのかをはっきりさせたかったんでしよう」

硝子という存在を、モノとしか見ない下衆ども。正直俺が高専にいるからと言って、どこまで抑制できているかはわかっていなかった。硝子が入学して以来、俺が何日も高専を離れたのは今回が初めてだからだ。

しかしこの結果を見るに、俺という存在は威嚇くらいにはなっていないらしい。

「……まあ、礼は言っとくよ夏油。助かったわ」

「いえ。クラゲさんに言われなくても、硝子に手を出されるのは気分が悪いですし」

改めて確認しますが、と夏油はまっすぐに俺を見た。その目には確かに、真摯な色があった。

「クラゲさんの『目的』は、硝子を守ることですか？」

「違うけど」

「……は？」

いやだって、と言い募ろうとする間抜け面に、呆れた顔を向ける。確かに俺は硝子を守るが、それも「目的」でなく「手段」に過ぎない。俺は硝子のために生きるつもりはない。いつだって、俺は俺のために生きていく。

「俺にとって硝子を守ることも『手段』だ。……守るって言い方すら語弊があるかもな。俺は、硝子が硝子の思うように生きられるならそれでいい。たとえばその結果、地獄を見ようが早死にしようが、それが硝子の選択の結果なら必要以上に手を出すつもりはない」

「それは……」

「けど、今は明らかにそれができる状況じゃねーだろ。今回みたいに隙を見せれば、呪術界の下衆どもは今すぐにでも硝子に手を出すだろうよ。他者に治療を施せる術師、しかも女。こんな都合のいい存在はねーからな」

「っ……！」

俺は俺のために、硝子の自由と無事を保障する。

少しでも術師が傷つくことが減れば、硝子を使い潰されるような事態は起きない。だから俺は研究を続ける。俺が術師として強くなれば、自分が可愛い下衆どもは硝子に手出しできなくなる。だから俺は腕を磨いた。

どんなに生意気だろうと、それでも俺にとってはたったひとりの妹。両親よりずっと面倒を見てきた自負もある。

妹が自由に生きられる確信がない限り、俺は自分が自由になることは許せない。

「……とはいえ、想定よりも状況はだいぶいい。このまま行けば硝子は、高専所属、医師免許持ちの他者に治療を施せる呪術師、上層的にはこのうえなくありがたい存在になる。そこまで行けば呪術界の共有財産扱い、下手に手を出して独占すれば他の恨みを買っちゃう。だから硝子を手に入れるチャンスは高専在学中くらいしかないわけだが、ここにはお前や五条がいる」

「まあ、確かに手を出させたりはしませんけど」

「ああ。お前らは自分の利益、情、お前に限れば術師としての使命感も含めて、硝子のことを守ろうとするだろう。夜蛾だって学生を売るタイプじゃねーし」

硝子のまわりに、俺以外にも硝子を守ってくれる存在があること。しかも、ほかの全てを黙らせるくらいの実力をもった存在。まさかそんな都合のいいやつらが現れてくれるとは思っていなかった。

強くなりたいという夏油の求めに応じたのも、これが理由だった。こいつらが強ければ強いほど、硝子の安全は保障される。

まあ言ってもいいか、と俺は小さく息を吐いて頬杖をつく。

「……俺はな、夏油。クラゲになりたいんだよ」

唐突にそう言ったときの、夏油の顔と言ったら。

頭でも打ちましたかとても言わんばかりの表情に、思わず肩を揺らす。確かにこの言い方はわかりにくいか、と言葉を続けた。

「知ってるか？ 種類にもよるが、多くのクラゲはあんまり自分で泳

がねーんだよ。波にのって、ふらふら漂うだけ。たまに沈みかけると傘を開いて閉じて、ちよつと浮き上がったらまた漂う」

あるがままに、流されるままに。

面倒ごとになんか関わらず、ふわふわふらふらと。俺は、そう在りたい。

「術師なんかとつとと辞めて隠居してーの、俺は。適当に静かな場所に家買って、毎日ぼけつと昼寝したり、散歩したり、出来るだけ頭使わずに平和に過ごしたいわけ。生活費が心許なくなったらちよつと小金稼いで、十分に貯まったらまた隠居する。そうやって怠惰と自由の限りを尽くしたいんだよ」

今だって、やろうと思えば出来なくはない。けれど、何の気兼ねもなく隠居をするためには、やっぱり硝子への気がかりだけは何とかしていかなくはならない。

一日でも早く、硝子が思うままに生きられる環境をつくるために。

一日でも長く、クラゲのような生活を送るために。

俺の目的なんて、ただそれだけのこと。そのためだけに、俺は今、自らこの地獄を泳いでいる。

「俺の隠居のためには硝子の自由は不可欠な条件だから、まあほとんど目的と同義だと言ってもいいんだけどな、それ以外の条件はほぼほぼ達成できてるわけだし」

「……クラゲさんて、実は相当な怠け者ですか？」

「おうとも、労働も面倒も非効率も大嫌いだね。俺は自分が楽をするためなら、どんな苦労も厭わない」

「うーん、決定的に矛盾をはらんでるような。……いえ、ええ、まあいいか。とりあえずは問題なさそうだ」

では、と夏油は俺の顔をまっすぐに見据える。

ここからが本題か、と俺もその視線を正面から受けた。数日前に、夏油が片付けた任務。そこで何があったのか、おおよその情報だけは頭に入っている。硝子からも聞いたし、どこかで噂を拾ったらしい補助監督もその話をしてくれた。

正直なところを言えば、俺の感想は「またか」だった。古今東西、ど

こを見たってよくある話である。

人間は、自分が理解できないものを恐れる。

「だいぶ噂になつたらしいのですが、私が先日受けた任務のことはご存知ですか？」

「話は聞いている。任務先の山村で、村ぐるみで虐待されていた呪力のある子どもたちを保護したって？」

「ええ。……ひどいものでした」

私にはあの村の住人が猿に見えましたよ、と澄ました顔で言う夏油。

呪霊による被害を、幼い子どもたちに押しつけた村人たち。親がいなかったうえに、自分たちには見えないものが見えるらしい子どもなんて、そりや全ての責任をなすりつけるには適任だっただろう。

すべてをその子たちに押しつけて、自分たちは中身の無い安寧を手に入れる。いつの時代でも、どこの国でもある話。反吐が出るくらいに、ありふれた話。

夏油のまとう空気は、妙に凜いでいる。

「本当なら村人たちを皆殺しにしても足りなかったんですが……とにかく、その子たちを早く村から出してあげたかったので。邪魔する奴だけ排除して、さっさと村を離れました。双子の女の子なんですが、硝子にも懐いてるんですよ。怪我を治してもらったのが嬉しかったみたいで。まあ悟のことは嫌いみたいですが」

「幼いのに見る目のある子たちだな。将来有望」

「ええ、本当に。私もそう思います」

そこで夏油は、言葉を切る。

少し顔を伏せて、考えるような仕草を見せる。自分の中に生まれたものを、なるべく正確に言葉にしようとしているように見えた。

俺は何も言わず、次の言葉を待つ。それが夏油にとって大事な言葉なら、急かすつもりはなかった。

しばらく黙った夏油は、少し目を閉じて、開く。それからまだ顔を上げた。

「星漿体の一件のときも、今回でも思いましたが、私は悪戯に術師が傷

つき、消費されていくのが許せないようです。それも、自分たちのこ
としか考えない非術師のために」

「……非術師限定か？」

「ええ、……いえ、ですが、そうじゃない非術師がいるのもわかってい
ます。弟のために、自らクラゲさんに殺されに来たあの女性のように。
……同時に、術師にだつて薄汚い下衆がいることも。硝子をモノ
のように扱い、クラゲさんの研究を保身や利権のために潰そうとする
上層のことは、たとえ術師であっても仲間だとは思えない」

私は、とそこで夏油はまた言葉を切った。

へえ、と思った。夏油は、自分の感情を整理しながら、自分の核を
掴もうとしている。自分にとって、大切なもの。ひとつひとつの経験
と感情を並べて、比較して、共通点を探って、絶対に妥協の出来ない
「目的」を、自分という情報の海から引き上げようと。

夏油は、「夏油傑」という人間を理解しようとしている。

「……私は、」

わたしは、と繰り返す。

それは、静かな叫びだった。振り絞るような声だった。

「私は、呪術師なかもを守りたい。術師を理解することもできないくせに消
費だけしようとする非術師からも、都合のいい駒として使い潰そうと
する呪術界からも」

仲間が、ただ消費されるだけの今が許せない、と。それはきつと、普
段あまり内心の深いところを晒さない夏油にとっては珍しい、心から
の言葉。

術師の存在意義に重きを置き、たとえ限定的でも自分以外の他人を
想うところが、何とも夏油らしいというか、何というか。いや、むし
ろ術師なかもに限るところが一番夏油らしいかもしれない。

それでいいと思う。俺たち呪術師は、全てを救う救世主なんかじゃ
ない。負の感情を呪いに変えて力にする呪術師に、そんなもんを期待
するほうが間違っている。

そこまで言った夏油は、少しすっきりしたような顔でにこりと笑
う。

「……と、いう結論に至りまして」

「うん。で?」

「いろいろ考えたんですが、高専を卒業したらフリーになろうと思います」

「へえ」

「フリーになったら、高専とは別に術師の組織を作れないかと」

「組織。どんな?」

「まだ、構想でしかないんですが。とりあえず最初は、美々子や菜々子——その双子のことですが——ふたりのような存在を保護することから始めたいと」

非術師のなか、その力のせいで生きづらい思いをしている存在を。自身の力を行使する方法がわからず、もてあましている存在を。

独りではない、辛い思いをすることはないと伝えたいと、夏油は語る。

「呪力のある子の保護施設か? まず探し出すのが難しそうだけど」

「その辺りは考えなくてはとは思っています。まず市井の中にネットワークを作って、高専とは違う情報網を得る必要がありますし。でもそういう建前におけば、高専もそれほど邪魔してくることはないと思うんです。少なくとも、表向きは」

「表向きはな。で、スタートが呪力のある人間の保護だとして、ゴールは?」

呪術界に戦争でも仕掛けるのか、と言ってみれば、夏油はただ笑みを深める。肯定も否定もしないところが、何とも夏油らしい。

「私としては、別に高専に進んで牙をむくつもりはありませんよ。少なくともそれは『目的』ではありません。ただ、術師に選択肢を作りたいと思っていますだけです」

温厚ぶった笑顔を浮かべたまま、夏油は両手を開く。

「私だって霞を食べて生きるわけにはいきませんから、ちゃんと術師としての仕事はしますよ。フリーらしく一般人からも高専からも依頼を受け、呪霊を祓います。いずれはそれを、私の組織で働くことを選択してくれた術師たちに割り振っていく」

「つまり、第二の高専を？」

「イメージとしては、そうですね。ただ教育機関はそう簡単に作れないでしょうし、当分は仕事の斡旋だけですかね。高専と上手く折衝しつつ組織を育てていき、最終的には高専と並ぶ規模を目指す」

そこまで聞いて、なるほど、と頷いた。

今呪術界の上層が大きな顔を出来るのは、術師が術師として安定して働けるための機関が高専しかないからだ。

術師の多くが高専で育ち、高専から仕事を割り振られ、高専から収入を得ている。フリーでもまともに生きていけるのは、世渡りに長けていて伝手もあり、当然実力もあるほんの一握り。それが難しい術師は、どうしたって上層の顔色を伺わなくてはならない。だから手に余る危険な任務も、胸くそ悪い任務も、圧力を掛けられればやらざるを得ないのだ。

だから夏油は言う。術師に選択肢を与えると。今の呪術界上層のやり方が合わない術師たちに、別の居場所をつくると。

呪術師が非術師にも呪術界上層にも脅かされることのない、そんな場所を築くと宣ったその顔はひどく不遜で、ひどく夏油らしかった。「本当にまだ構想しかないのです、これから卒業までに詳細を詰めて準備をしていきたいと思っています。相当な資金も必要でしょうし、あの程度の根回しと賛同者も……高専に邪魔されないように立ち回りも考えないといけない」

「……気の長い計画になりそうです」

「何でもスタートはゼロからです。高専だって最初はそうだったでしょう。これから千年と続かせれば同じことです」

「ああ、確かに」

頬杖をついていた腕を解いた。ぎしりと音をたてて椅子の背もたれに寄りかかり、両腕を組む。

夏油のやりたいことはおおよそわかった。高専に属しては、いくら特級でも自分の意志だけでは動けない。その制約を解くためにフリーになり、夏油の思う呪術師を守るための組織を作る。事情のある術師を保護する傍ら、術師が高専に依存しなくても生きていける道

を示す。夏油の組織に呪霊祓除の依頼がある程度入るようになり、仕事の斡旋ができるようになれば、呪術界上層でふんぞり返っている奴らの特権も少しずつ削がれていくだろう。同時に、夏油がトップにいる以上は、ある程度仕事を選ぶことも出来るようになる。胸くそ悪い猿相手の任務を蹴り飛ばすことだって出来るわけだ。

なるほど、それなりの戦略をもつて駒を進めれば無謀ということもない。ふむ、と頷いてみせた俺を見て、夏油は満足そうに頷く。

「で、クラゲさん」

「ん」

「私の『目的』は、少なくともクラゲさんの意志に反するものではないと思っています。私の守りたいと思う呪術師^なには、貴方も硝子も含まれていますから」

「まあ、そうだな」

「だから、貴方に協力を頼みたいんです」

その愉しそうな顔に、思わず俺も口角が上がる。

嗚呼、なんてとびきりの面倒ごとだ。現在の高専レベルを目指す組織の立ち上げの協力をしろって？ 面倒も面倒で、普段の俺なら今の時点ですでに切り捨てていただろう。なのに妙に愉快に感じるのは、俺が使命感や感情論で動かないとわかっている夏油が相手だからだろうか。

なあ、と夏油に声を掛け、脚を組む。

「まさかこの俺に一方的な協力をしろなんて馬鹿は言わねーよな、夏油？」

「もちろん。残念なことに私たちは呪術師ですからね」

貴方にとつても悪くない話になると言っただでしょう、と言った夏油の笑い方は、なるほど、救世主にはほど遠かった。

*

といっても、と夏油は肩をすくめる。

「現時点では詰めなくてはいけないことが多すぎて、明確にこれをしてほしいとは言えない状況です。だから、まだ『縛り』を結べるほど具体的な要求はありません。ただ、こちらが約束できることはありま

す」

「それは？」

「大きくふたつ。ひとつ、私は貴方の研究を信頼するし、協力もお約束します。ふたつ、貴方や硝子に何らかの助力が必要になったとき、必ず私は——私の組織は、ふたりの力になります」

おっと、と俺は肩をすくめた。

「いくら『縛り』にならないとは言え、必ずなんて強い言葉を使うのか？」

「大丈夫ですよ。言ったでしょう、貴方も硝子も、私にとっては守るべき対象です」

むしろ手を貸さない理由がありません、と夏油は言い切った。それが呪術界を相手取ることになってもしか、とは聞かなかつた。迷いなく頷いてくれる確信はあつた。そんなことでビビるほど、この特級クズの神経は細くない。

俺はひとつ頷いて、夏油に続きを促す。

「代わりに、貴方には私の味方でいてほしい」

みかた、とあまりに曖昧な言葉にひとつ瞬きをする。ええ、味方で、と夏油はどこまでも愉快そうだ。

「私の目的を理解した上で、私に必要なだと考えられる助言と、行動をください」

「……緩すぎねえ？」

「ええ。でも、それだけで十分のはずです。私がやろうとしていることは、貴方にとってメリットしかないのだから」

いざというときに硝子を連れて逃げられる場所、ほしいでしょう？

そう言つて小首を傾げてみたこのクズ、念には念を入れたい俺の性格をよくわかっている。研究最優先の九十九さんや、そもそも性格クズ筆頭の直毘人さんより、夏油は確実に俺や硝子を守るだろう。こいつの性格と矜持の高さを考えれば、自分の言葉を違えることも有り得ない。

不安があるとすれば夏油が俺の隠居を邪魔しないかということくらいだが、おそらく俺の手が必要になるのはせいぜい最初の数年。組

織がある程度形になり、夏油が上層との渡り方を覚えてしまえば問題はないと読む。

たったそれだけで、いざというときの避難場所を手に入れられるのなら、確かに安い。

「……夏油」

「何ですか？」

「ひとつ条件」

「聞きましょう」

自分でも驚くほどに愉快的気持ちのまま、人差し指を立ててみせる。

俺は一体何をこんなに愉しんでいるのだろう。今、とんでもない面倒ごとの話をしているというのに。頭の中にはいくつものアイディアが湧いてきて、夏油の言う組織をつくるための段取りまで考え始めている。

こんな不確かで曖昧な状況では、俺の術式だってろくに働いてくれない。夏油の思うものが本当に形になるのかどうか、全く判断が出来ない。そんな状況で答えなんて出すべきではない。出してはならない。俺は、勝てるかわからない勝負には乗らない。運任せのギャンブルなんて大嫌いだ。

大嫌いな、はずなのに。

「俺の頭にはすでに、お前の計画におけるいくつかの障害と、その対策が浮かんでいる。これをお前に伝えるというレベルの協力なら、まあ俺にも出来る」

何故だか不思議と、大丈夫だと。そう思っている自分がいた。

「けど俺、多分お前が思うより手段選ばねーぞ？ お前にとつちや反吐が出るようなことも策に数えると思う。それに、お前にもそれなりの要求をすることになる。それも、お前の得意な『強さ』以外のあらゆることをな」

反射的に口を開こうとした夏油を手で制する。そんなことは覚悟の上だと返されるのはわかっていた。だから、その返事を聞く必要はない。

だから、俺はあえてこういう言い方をしよう。

「だが、お前は俺を失望させるな」

それを「目的」として定めたなら、それをお前の「本心」とするなら、なりふり構わずただそれだけを貫き通してみせろ、と。捉えて掴んだ「自分」の形を、歪ませることだけは許さない、と。

お前がお前である限り、俺は死ぬほど嫌いなギャンブルにだって乗ってやる。

「それが条件。お前が日和ったその瞬間に、この協力関係は終わりだ」
ぎしりと椅子が声を上げる。数の海を映し出す淡い光を背に、俺は一步、二歩と夏油に近づいた。口角が上がっているような気がする。睡眠も休息も十分に摂った後だからだろうか、妙に気分もいい。

自分でも気づかないうちに、俺は術式を発動していた。目の前に星の数ほどの可能性が堰を切ったように溢れ出す。いつもならこの星の海から、可能性の高い欠片を取り出すか、あるいは選び取りたい欠片を探し出して、その欠片への道筋を辿る。だが、情報も足りなければ目的の具体性も足りない今の状況では、どうにもならない。ただただ、いつか起こりえる可能性が目の前に浮かんでは消えていく。

笑っている欠片もあった。血の流れる欠片もあった。涙する欠片もあった。平穏に、穏やかなときを過ごす欠片もあった。これらのどれに辿り着くのか、それともどれにも辿り着かないのか。今の俺にはわからない、だけど。

やってみるだけの価値はがあると、術式でなく俺の脳が告げている。

「俺、わりと厳しいと思うけど、乗る？」

瞬きをひとつして、視界を現実に戻す。夏油は、一切の揺らぎを見せなかった。手を伸ばせば届くほどの距離で、俺よりいくらか年下の、だけど俺より遙かに強い、自分のカタチをその手に捉えた術師は笑う。

誰よりも術師らしく、傲慢に、不遜に、笑う。

「望むところですよ」

嗚呼、乗り越えたんだな、と。迷いのないその顔を見て、思う。
いつぞや夜蛾が教育はいいぞ、なんて延々と俺に教師という仕事の

やりがいについてプレゼンしてきたことがあったが、もしかしたらこういうことなのかもしれない。

惑い、苦しみ、あがき、自己の可能性を模索して、道を切り開く。そんなさまを見るのは、確かにちよつと痛快だ。いや俺絶対教師とかやんねーけど。

そうか、と俺は息をつく。夏油はまだ、笑ったまま。

「一応言っておきますけど、クラゲさんもちゃんと利用価値があるところを示し続けて下さいね?」

「は、まだまだ上層との喧嘩の仕方も知らねーガキが言いやがる」

「ははは、その道のプロに言われると言いつ返し返せないですね」

「誰がその道のプロだ。経験値があると言え」

「言つときますけど、大半の術師はその経験値持つてませんからね」

「意外と術師つてチキン多いよな。嫌なことに嫌つて言うのがそんなに難しいか?」

「難しいんですよ」

そのために私の「目的」がある、と夏油は言う。

まあその通りか、と俺も頷いて、改めて夏油に背を向け、また椅子に座った。

「話は終わりか? 俺の考えは詳細詰めてからまた話す」

「わかりました。じゃあ私はこれで失礼します、が……クラゲさん」

「何だよ」

「せっかく隈消えたんですから、今後も睡眠時間確保した方がいいと思いますよ」

「聞こえねー」

くるりと椅子を回してモニターに向き直ると、背後からため息が聞こえたが無視する。たとえ夏油と協力関係を結ぼうと、俺にとってこの研究の優先度が下がることはない。

やれやれと部屋を去ろうとした夏油は、ふと気づいたように声を投げる。

「そうだ、私が授業や任務に出ている間、双子たちを預けてもいいですか?」

「ここ託児所じゃねーんだけど?」

素直ないい子たちですよ、という言葉だけを残して、ドアの閉まる音がした。いろいろと吹っ切れた特級クズは、どうやらそのマイペースにも磨きを掛けたらしい。

一気に静かになった部屋に、俺のため息が落ちる。まあもともと夏油ってああいう奴だな、と思い直して、俺は再びキーボードに手を伸ばす。

いつもと変わらない数の海が、今日は妙に鮮明に見えた。

海月はただ、数の海を愛している。

そして、その海に挑もうとするものも、また。

確か、私にひらがなを教えてくださいましたのも兄貴だったと思う。

鉛筆の持ち方を教えてくれて、一緒に鉛筆を握って、ゆっくりと文字の形をたどった。自分の名前から初めて、あいうえおを覚えて、数字やカタカナも覚えて。兄貴ができることは何でもできるようなりたかったから、何でも真似をしてできることを増やしていった。あんなにめんどくさがりの兄貴のくせに、何故だか私にものを教えることはめんどくさがらなかった。あれで意外と、ひとが成長するところを見るのは嫌いじゃないのだと思う。

珍しく明るい深海の真ん中で、無邪気で得意げな笑顔がふたつ咲く。

「げとうさま、みてー！」

「ひらがな、おしえてもらったの」

真つ白な紙にいびつな文字で書かれた「げとうさま」の文字。それはひどく微笑ましいのだが、いや何で「げとうさま」。

いやそこは普通自分の名前から教えるもんじゃねーのかと視線を送れば、仕方ねーだろ譲らなかつたんだから、と何とも言いがたい視線が返された。

あの山村から救い出された幼い双子は、崇拜するかのよう夏油を慕っている。

「すごいじゃないか、上手に書けているね」

笑顔でふたりを褒めながら、よしよしと頭を撫でてやる夏油。何で自分の名前なんだろうとか、何で「さま」がついてるんだろうとか、そういうのをおくびにも出さずにちゃんと褒めるところはまあまあ偉いと言ってやろう。

双子にひらがなを教えてやったらしい兄貴は、すっかり呆れた顔でその光景を見つめていた。

「……なあ妹、お前の同期、幼い女の子にさま付けで呼ばれてんだけどどう思う？」

「まじで縁を切りたい。通報案件じゃん？」

「良かった、俺の感覚は正しいな。同感」

「ははは、ちよつと黙りましょうか」

いやだつて、と兄妹揃つて引いた目を向けてみれば、何度言つても直してくれないんだから仕方ないでしょう、と歯噛みするように夏油は言う。最強クズも素直に自分を慕ってくれる幼女には弱いらしい。幼女強い。

褒められた、と嬉しそうに花を飛ばすふたりは、ぱたぱたと兄貴に駆け寄つて、白衣の裾を掴む。兄貴は自然に身をかがめ、ふたりに視線を合わせてやった。

「くらげさん、げとうさますごいって！　じょうずだつて！」

「ああ、良かったな」

「もつと、おぼえる」

「また今度な。それまでに書いてみたい言葉をたくさん覚えておいで」

うん、と元気よく言う菜々子と、控えめだが大きく頷いた美々子。すっかり怪我也癒えたふたりだが、まだ高専の外には出られないでいる。

自分たちを助け出してくれた夏油や、夏油が大丈夫だと言つた術師以外の人間には、ひどく警戒する様子を見せる双子。外部の施設に預けようにも、ふたりは梃子でも夏油から離れようとしなない。さすがに無理を強いることも出来ず、結果としてふたりには学生寮の空き部屋が開放されることとなった。今も学生や手の空いた補助監督で面倒を見ている。

そして今日、手の空いている補助監督がいないのをいいことに、夏油は兄貴にふたりを預けた。兄貴が断る暇も与えずに預けてきたという話を聞いたときは呆れたが、まあ問題はないだろうと思つたし、実際大丈夫だった。

菜々子も美々子も、すっかり兄貴に懐いている。

「懐くだらうとは思つたけど、やっぱり大丈夫だったな」

「まーね。何せ兄貴だし」

「ああ、長年硝子の面倒を見てきただけはあるね？」

「そこはあの五条を懐かせただけはあると言えよ」

今日も今日とて任務の五条は、今日は北の方に飛んでいると聞いている。双子が高専に来て以降、何となく夏油の任務が減って五条の任務が増えていた。

それを気にした夏油は、五条に任務を代わろうかと提案をしたらしいのだが、ばつさりと切り捨てられたらしい。五条曰く、ガキの面倒見るくらいなら任務に出てたほうがマシ、とのこと。素直に気になつて言えばいいのにね、と夏油は言うが、多分五条にとっては限りなく本心なのではないかと思う。

ただでさえ夏油をとられて拗ね気味なのに、兄貴まで双子にとられたら癩癩を起すかもな、とぼんやりと思った。

脳内で駄々をこねはじめた五条を掻き消していると、勢いよく部屋のドアが開く。

「クラゲさーん、いますかー?」

「灰原、まずノックをしなさい」

「し、失礼します……」

入ってきたのはいつも通りのテンションの灰原に、呆れた顔の七海、申し訳なさそうな顔をした伊地知。灰原に引きずられるようにしてこの部屋を訪れるようになった伊地知だが、何となくまだ遠慮があるらしい。遠慮なんて言葉と縁のある人間が高専に来るなんて、と兄貴は真剣に驚いていた。同感。

あ、みみななちゃんたちも来てたんですね、と朗らかに笑う灰原の手には、大きな紙袋があった。

「何だ、三人して任務帰りか?」

「はい! 任務は都内だったしすぐ終わっただけですけど、せっかくなのでちよつと寄り道してきたんです!」

「おふたりもいてちようど良かった。差し入れを買ってきたんですよ、伊地知くんのお勧めだそうです」

「へえ?」

「お口に合うといいのですが……」

それから灰原が紙袋から取り出したのは、まだ微かに湯気を上げて

いる鯛焼き。ふわりと柔らかい香りが鼻腔をくすぐる。

「おさかな？」

「ちやいろ……」

「あ、ふたりは初めてかな？　これはね、鯛焼きっていうんだよ」

あんこ大丈夫かな、と差し出された鯛焼きを受け取ったふたり。小さなサイズの良かった、鯛焼きを平和に半分こするのは至難の業だ。

小さなくちを開けてはむりと柔らかいそれに齧りつき、もくもくとクチを動かす。そしてぱあつと目を輝かせた。

「んんん！」

「ん〜！」

「……お気に召したようですね」

「あはは、そうだね、食べてるときは喋っちゃだめだもんね！」

口を閉じたまま何とかおいしさを表現しようとするのが微笑まじい。ものを食べているときは口を開けてはダメ、と言われたのを素直に実践しながら、双子はぱたぱたと伊地知の傍に駆け寄った。

ようやく口の中のを飲み込んだふたりは、満面の笑顔で言う。

「おいしい！　いじちありがとう！」

「ありがとう」

「こらふたりとも、伊地知さんだろう？」

「ああ、いえ、構いませんよ夏油さん。ええ、どういたしまして。美味しかったならよかったです」

「いじち、しゃがんで」

「しゃがんで！　とどかない！」

「？　しゃがむんですか？　はい」

すつとふたりに視線を合わせた伊地知に頭に、小さな紅葉がふたつ乗る。そして遠慮なく伊地知の髪をかき回した。

「ありがとういじち、えらい！」

「ありがとう、おいしい」

「ああ、そういう……はい、ありがとうございませす」

「……これは止めるべきか否か……」

「可愛いし、いーんじゃん？」

幼女ふたりによしよしされる伊地知なんてもう記録に残すしかないだろう。すかさず携帯を取り出して、その光景を写真に残した。伊地知が若干困りつつも嬉しそうなのがウケる。

すっかり夏油の真似を覚えたな、と兄貴はおもむろに灰原のもつ紙袋に手を突っ込み、中から鯛焼きをひとつ取り出す。ぱくりと齧りつくど、確かに美味しい、と頷いて伊地知に歩み寄った。

もそもそと鯛焼きを食べながら、左手を伸ばす。

「うんうん、美味しい鯛焼きありがとな」

「く、クラゲさんまで……！」

「いじちありがとー！」

「たいやきおいしい」

わっしやわっしやと伊地知の髪をなで回す兄貴。ちなみに表情筋はいつも通り動いていない。どちらかというど犬の褒め方だが、それでも伊地知はどこことなく嬉しそうだ。お前はそれでいいのか。

それを見て灰原もぱあつと顔を輝かせて、すすすと伊地知の隣でしゃがみ込んだ。どうやらこいつもたいそうな物好きらしい。

「……灰原くん？」

「はいー」

「いや、はいじゃねーんだけど」

「僕も鯛焼き買ってきましたよ！ 今日の日務も頑張りました！」

「……」

「頑張りました！」

「……はいはい」

えらいえらい、と棒読みで灰原の頭を撫でてやる兄貴。双子たちも続いて、えらいえらいと小さな紅葉をぺたぺたと動かす。

灰原はやったー、といつも通りの笑顔。こういうのも新鮮でいいですね、とにこにこしている灰原を見て、私の視界の端で誰かの肩が揺れた。そしてそんな面白いことを、兄貴と夏油が見逃すはずもなく。

夏油、と兄貴が一声発するのと同時に夏油は一瞬で足を払い、その場に足を折らせた。あまりの早さに、当の本人も反応できずに目を丸

くしている。

「すまないね、七海。大丈夫かい？」

「な、にを、」

「伊地知くんを褒めて灰原くんを褒めたなら、もうひとり褒めなきやなんねーやつがいるだろ。なあ灰原くん」

「七海も今日頑張ったんですよ！ 鯛焼きを見てクラゲさんのところに差し入れようって言ったのも七海ですよ！」

「よし。じゃあ次行くぞ、菜々子、美々子」

「つぎ！」

「ななみ！」

いや私は、と七海が立ち上がるより先に双子が七海に飛びつく。よしよし、偉いね、と小さな紅葉にぺちぺちされてはさすがの七海も無碍にすることはできず。どう反応していいやら、と困り切ってるのを面白そうに見ながら、兄貴もゆっくり歩み寄って手を伸ばした。

「鯛焼きありがとな。今日も任務頑張って偉いよ」

「……クラゲさん……！」

「めちやくちや何とも言いがたい顔してんじやん。ウケる」

「どうしてクラゲさんときどきそう面倒くさい感じになるんですか？」

「俺の気まぐれに理由を求められてもな。何となく」

「ななみえらい！」

「えらい」

「ああ、偉い。いや本当に日頃から偉いとは思ってるよ」

よく頑張ってる、と最後のおまけとばかりにぼすぼすと頭を柔らかくはたいて、兄貴は鯛焼きのおかわりを求めに七海から離れた。目を離したあとに、七海が少しだけ顔を赤くしていることにも知らずに。うわ兄貴ってば罪作り。

にやにやと七海を見つめていると、何ですかとジト目を向けられ、別にとだけ返す。夏油も面白そうに、何でもないよと軽く言った。

「七海も可愛いところがあると思ってるね」

「何の話ですか」

「照れることないじゃん？ 思ってもないことで褒めるほど兄貴はやさしくねーよ」

「何だよ妹、お前も褒めてほしいって？」

「言ってるねーけど。キモいわ」

「クラゲさん、私は？」

「何で俺がお前褒めなきやなんねーの？」

真顔で言った兄貴に、ひどいな、と軽く笑う夏油。その足下に、双子はぴったりとくっついた。げとうさまはいちばんすごいです、と口々に言うふたりに、夏油はありがとう、とまた頭を撫でる。偉い、じゃなくてすごい、などころに崇拜を感じた。事情を考えれば仕方のないことなのだが、どこかで彼女たちの男の趣味は矯正してやりたいものだと思つた。

二匹目の鯛焼きをもそもそと食べながら、将来が心配だよな、とぼそりと呟いた兄貴に、七海は大きく頷いた。

「五条さんのことは一目で見抜いたんですけどね」

「そーいや仲悪いって？」

「精神年齢が近いからでしょうか、夏油さんを取り合つて喧嘩をはじめる始末です。五条さんのめんどくささも五割増しで」

子ども相手に本気で言い返すんですよあのひと、と心底呆れたように言う七海。容易に想像できたのか、ああ、と兄貴も軽く頷いた。

「弟や妹ができるとうの子は幼児退行して親の気を引こうとするケースが多いって聞くよな」

「誰が親ですか」

「夏油だろ」

「夏油じゃん？」

「夏油さんですすね」

「夏油さんですよ！」

「夏油さんかと……」

「伊地知？」

「すみませんすみません！」

何故自分だけ、と言おうにも言えない可哀想な後輩はぺこぺこ頭

を下げる。その反応が面白いから五条にも夏油にもいいように遊ばれてしまうのだが、気の毒にと思いつつも誰も助けられないのは術師の集団らしいというか何というか。

後輩をいじめるのはよくないですよ、と言葉では言ってみせる七海も、その口には鯛焼きがある。五条や夏油が伊地知をからかうことを覚えて以来、自分への被害が減ったことを喜んでるのが丸わかりだ。灰原はそもそも夏油が後輩をいじめるわけがないと思っているので助けるも何もない。うーん、伊地知どんまい。

ふと、兄貴がそんな伊地知の肩にぽんと手を置いた。はつとしたように伊地知は兄貴に顔を向ける。兄貴はいつも通りの無表情で、口を開いた。

「これまじで美味しいな。どこの店？」

「……お店の場所あとでお送りします……」

「悪いね」

まあもちろん兄貴もフォローなんてするはずもなく。

鯛焼きをぺろりと食べきった兄貴は、ぎしりと音を立ててモニター前の椅子を陣取った。すぐにカタカタとキーボードが音を立て始める。この兄貴、マイペースにも限度がある。

その背中を見て苦笑した夏油は、また双子たちに視線を合わせた。

「それじゃ今日はもう帰ろうか。ほら、クラゲさんにありがとうは？」

「くらげさんありがとうー！」

「ありがとう」

「はいはい。またな」

「良かったね、明日も来ていいって」

「言ってねーけど？」

そんな兄貴の言葉は軽く聞こえないふりをして、無邪気に喜ぶ双子たちに笑顔を向ける。小さくため息を漏らした兄貴は、すでに諦めた顔をしていた。

このところすっかり調子を取り戻した夏油は、何故だか妙に素直になったというか、ゴイングマイウェイに磨きが掛かったというか。まあ食欲も取り戻して顔色もよくなったようなので、多分良い変化が

あつたのだらうと思う。元氣を取り戻した夏油の被害をこうむっているのはおもに後輩たちや兄貴なので、私はとりあえず良かったと思っておこう。

深海を出て、皆で寮への帰路を歩く。夏油と手を繋いでご満悦の双子は、きやあきやあ言いながら自分よりずっと大きな手と戯れていた。前を見て歩きなさい、と言いなながらも満更でもなさそうな夏油は、すっかり親の顔をしている。

「……元氣になつて良かったですね」

そんな姿を微笑ましそうに眺めながら、伊地知がぽつりと呟く。

高専に保護されたばかりのころは、身体中傷だらけで、栄養状態も良くなって、夏油以外がすべて敵だとばかりに周囲のすべてに負の感情を振りまいていた双子たち。それが今は怪我ひとつなく、顔いっばいで笑つて、大好きな夏油に手を引かれて歩いている。まだまだ心の傷は癒えるには時間が必要だろうけれど、それでも笑えるようになったのは大きなことだ。

そうだね、と灰原は朗らかに笑い、ええ、と七海も小さく頷く。

「きつとこれからもっと元氣になるよ。外にも遊びに行けるようになるといいよね!」

「ええ。……大丈夫でしょう、心の傷もきつと少しずつ癒えていくはずです」

生きてさえいれば、きつと。

七海がそう言ったとき、夏油は顔だけで振り向いて、私たちを見る。そういえば話したいことがあるんだつた、とさも今思い出したかのように、夏油は口を開く。

「やりたいことを決めただ。あとで少し時間をくれるかい?」

その夜、双子を寝かしつけた後、私たちは夏油の夢の話を聞いた。

荒唐無稽なようで、地に足が着いているような、けれどスケールが大きくて、いまいち現実味が無いような。私にはまだイメージがしにくかったけれど、夏油はすでに兄貴に協力の約束は取り付けてあるという。となるとこれは、実現可能な夢なのだろう。あの兄貴が不可能なことに手を貸すなどと言うはずもない。

「現時点で協力してくれと言うつもりもないし、何かしてほしいわけでもない。ただ、知っておいてほしいと思っただんだ」

私は君たちのことを仲間だと思っっているから、と夏油は迷いのない表情で言う。そこには確かな決意があつて、覚悟があつて、きっと夏油は折れないだろうという確信が持てた。

自分が仲間だと思つた術師を守るための場所をつくる、それはひどく自分勝手に傲慢な。弱者の救済を説いたエセ聖職者は、どうやら自分の領域にいる者だけを守るエゴイストにジョブチェンジしたらしい。

思わず喉の奥が揺れた。なるほど、何となくあのめんどくさがりが協力を約束してやった理由がわかるような気がした。

兄貴はきつと、夏油の「可能性」の行く末を見たくなくなったのだ。

「素直に笑つていいよ、硝子。まだ構想すらはつきりしてないんだ、無謀だと思われても仕方がない」

「別に無謀だとは思つてねーよ。兄貴が領いた以上、可能性はあるんだらうし」

ただ、悪くないって思っただけ。

そう言ってみれば、何となく少し照れたように、夏油は笑みを深める。それはいつものうさんくさい笑みではなくて、本当に心からのそれ。

「ありがとう」

五条と組んで悪巧みをしているときと同じ、クソガキの笑い方だった。

目と指でデータの入力を休みなく続けながら、思考は夏油の言う「組織」の方に向いていた。カタカタと慣れ親しんだタイプ音を聞き流しつつ、ひとつひとつ問題を考えていく。

まず解決する必要があるのは資金の問題。特級の給料がどんなものなのかは知らないが、それでも資金を調達する方法は考えなくては

ならないだろう。フリーになれば任務報酬も高専の給与体系には縛られないとは言え、夏油ひとりの給料を注ぎ込み続けるのは現実的ではない。第一、夏油が任務に奔走して「組織」に目を向ける暇がなくなるようでは本末転倒だ。

それに、数多くの目と耳が必要だ。美々子や菜々子のような存在を見つげるためにも、単純に呪霊を祓除する仕事を得るためにも、できれば高専とは異なるネットワークを得て、しかも向こうから情報をもってくるように考えなければならぬ。

もちろん、高専との関係も重要だ。生意気の限りを尽くした特級術師が外に術師の組織をつくるなんて、まず上層は謀反の可能性を考え潰しにくるだろう。最終的に敵対する可能性があるにしろ、最初のうちは極力良い関係を築いておいたほうがいい。そのための手取り早い手段としては、当然だがこの「組織」が他の術師や高専にとってメリットがあると示すこと。

つまり必要なのは、金と、人員と、大義名分。その全てを解決する策は、すでに俺の頭にあつた。

「今度は何の悪巧みだ？」

モニターから目を離さない俺の後ろで、気難しい顔をした次期学長は背中を壁に預けている。

「このところ何か嗅ぎ回っているだろう。不審に思われているぞ」

「上層の爺どもってまじで暇ですよね。ちよっと調べ物しただけでわざわざアンタを超越してくるとか」

「上は関係ない。俺の独断だ」

「何だ、暇なのはアンタでしたか」

タタン、とエンターキーを押して、くるりと椅子を回す。相変わらずの悪人面がこちらを静かに睨みつけていた。

「相変わらず信用ねーの」

「日頃の行いがなあ……」

「俺がいつどんな悪事を企てたってんですか」

「昔、貴重な文献を読みたいがために学長の部屋に忍び込んだのは覚えてるか？」

「よくそんな昔のこと覚えてますね」

知的好奇心のために窃盗を働いた学生はお前くらいだ、とため息交じりの元担任。

ちなみにこの件については、最初は素直に読ませてほしいと頭を下げたのに、「読めるもんなら読んでみる」と言い放った学長が悪い。仕方がないから手間と時間を掛けて学長の部屋に不法侵入することに成功し、その一冊だけを拝借してきたというだけの話だ。もちろん読んだ後はちゃんと元の場所に戻しておきました。閑話休題。

しかも、と夜蛾は低い声で続ける。

「任務記録を見るのはともかく、高専が関わった民間の団体や呪詛師の記録を調べていただろう。きな臭いと思うのも当然じゃないか？」
「……ま、そうですよね。確かにいろいろと企んではいますが、別に俺が呪詛師になろうとかそんなことは考えていませんよ。嬉々として刺客差し向けられるだろうし」

「わかっているならもう少し慎重に動け。上層はお前を排除する口実を常に探している」

「俺も嫌われたもんですね。はいはい気を付けますよ、だいたい調べごとは終わったのでもう必要ないですし」

情報は揃った。策の用意もある。そして実行するかは夏油次第だ。俺はただ、夏油にこれを提案するだけ。

何となく愉快そうな俺に、夜蛾は呆れたように言う。

「……珍しく愉しそうじゃないか。厄介ごとにも巻き込まれてるのかと思っただが、それでもなさそうだな」

「いえ、とんでもねー厄介ごとには巻き込まれてるんですけどね。何か不思議と愉しいんですよ。俺もびっくり」

「……海月」

俺としてはあまり無茶をしないでくれれば口を出すつもりはないが、と一応俺の心配をしてくれているらしい元担任は言った。

無茶と言えば相当な無茶ですが、実際やろうとしているのは俺じゃなくてアンタの受け持ちの学生です、と言えばどんな顔をするのだろう。それはそれでちよつと見てみたい気もしたが、さすがにこれは俺

の口から言うべきことではない。いや全く、夜蛾ときたら問題児の受け持ちばかりで気の毒に。もちろん俺の話でなく、夏油と五条の話だ。あの二人に比べれば俺がやらかしたことなくって些末些末。

大丈夫ですよ、とだけ言っただけで、くるりと椅子の向きをモニターの方へ戻した。ああそういうえば、と一言だけ付け足す。

「最近ちよつと思っただんですけど、誰かが道を決めて進んでいくのを見るのは、わりと悪くないもんですね」

アンタが言っただけで「教師の醍醐味」が少しわかったような気がするよ、と言ってみれば、背後からは少し驚いたような気配。それから小さな低い笑い声が聞こえて、そうか、と夜蛾も続けた。

「最近、僕の顔色が良くなったのはお前のおかげか？」

「知りませんよ。双子の娘ができて気合いでも入ったんじゃないですか」

「ああ、あの子たちにも感謝しないといけないな。僕がいい顔をするようになった」

もう迷いはなさそうだった夜蛾は、どうやら夏油の不調には気づいていたらしい。とはいえ夏油のプライドと頑固さのために、手も口も出さずに出せなかったというところだろうか。確かにあの夏油が担任の言うことなんて聞くはずもない。

そして、あとはその片割れなんだが、夜我はまたため息をつく。誰のことを言ってるかなんて聞かなくてもわかった。

このところ絶賛不機嫌中の、問題児のなかの問題児。

「アイツまだ拗ねてんですか」

「改善どころか悪化の一方だ。任務で憂さ晴らしをしてなければとつくに校舎のひとつくらい破壊しているだろうな」

「まじ迷惑。まあでも、いい加減あのクソガキも理解するでしょ。精神年齢が低いだけで馬鹿なわけじゃないんだから」

夏油が卒業後、フリーになることを知れば、きつと。五条だって、いやでも思い知る。

「ずっとこのままでなんて、いらねーんですから」

*

とはいえ大人しくそれを受け入れるかどうかは別問題だよな、と目の前で起こるそれを見ながら思う。

宙に立って掌印を組むクソガキと、数多の呪霊を操るクソガキ。特級対特級の大喧嘩の勃発など、わりと本当に洒落にならない。取り急ぎ下ろした「帳」も、いったいどこまで機能してくれることやら。

「……おいクソガキども、一回冷静になって話をするつもりは？」

「は？ 勝手にブチ切れてきたのは僕の方なだけど？」

「私は今も十分に冷静ですよ、クラゲさん。一発殴ったら終わるので放っておいてください」

「殴るところか手も届かぬーくせに何言っちゃってんの、ウケる」「すぐに地面に引きずり下ろしてあげるよ、悟」

正直今までこなしたどの任務よりも真剣に逃げたい。が、今日は夜蛾が出張に出ている上に、この最強クズども、だいぶ頭に血が昇っている。どこかで止めてやらないと、まじで怪我で済まない可能性があるのが特級という生き物だ。周囲への被害も計り知れない。

仕方なしに俺は大きなため息をついて、鞘ごと刀を肩に担ぐ。さて、と内心だけで呟いて術式を解放した。

「——詳星呪法、」

さて、俺にこの喧嘩を止められる「星」はあるだろうか。数多の可能性が、星のように眼前を巡る。

いつしか賑やかになった深海も、ずっとそのままではいられるはずもなく。

別に、あの最強クズどもが喧嘩をするのはよくあることだ。

どっちもガキで譲らないから、それ自体は全く珍しくない。そんな気配を感じるたびに、余計な被害を受けたくない私はさっさとその場を退散していた。けれど、このレベルの喧嘩を見たのは、もしかしたら初めてかもしれない。

鳴り響くアラートに、足下を揺らすほどの地響き。教室で始まった喧嘩は、どうやら校舎をぶち抜いて校庭に飛び出したらしい。

「家入さん、これは、」

「馬鹿どもの喧嘩。でもちよいやばそうだから外だよ」

校舎の廊下で後輩たちと合流し、とりあえず外に出る。校舎の中で被害のほどはわからないが、この校舎だって瓦礫の山にならないとは限らない。

どこまでも迷惑な、と渋い顔をする七海に内心で全面同意する。喧嘩は勝手だが周囲への被害も考えてほしい。

「派手にやってるみたいですね！ちなみに喧嘩の原因は何なんですか？」

「知らね。夏油の卒業後の話をしてるっぽかったけど」

「ああ……」

「え、何か心当たりあんの伊地知」

廊下を走り抜けて、校舎を飛び出す。同時に、また大きな地響きがあった。思わず立ち止まって振り返れば、ついさっきまで自分たちがいた校舎に大きな穴が空いている。やっば。

「何というか……その、五条さんは多分、夏油さんの話を理解できないような気がしていたので」

完全に死んだ目で校舎を見つめる伊地知は、囁くように言う。言い終わってからはずっとして、別に五条さんの理解力がどうという意味ではなく、と慌てたように言い訳するが、何となく言いたいことはわかる。

五条は多分、理解できない。その内容を理解できないというより

は、それが夏油にとってどれだけ大切なことなのかを理解できないような気がする。さすがクズの中のクズ。

「知ってたけど特級クズやベーな」

「ええ、知ってましたけどもう少しどうにか出来なかつたんですか？」

「夏油に言えよ、私に言うな」

「あつ見たことない呪霊がいる！　すごいでつかい鳥！」

「灰原、緊張感」

校庭の中心でやり合うクズどもが遠目に見える。殴り合う程度の喧嘩で済ませてくれればいいものを、五条の右手は掌印を結んでいるし、夏油の右手には黒い渦が巻いている。

ふたりを中心に巻き上がる呪力の波はもはや息苦しいほどで、早くこの場から離れると術師としての本能が叫んでいる。止めた方がいいのかな、と灰原は呑気に言うが、あれはもはや私たちに止められるレベルの喧嘩ではない。

特級術師同士の大喧嘩など、死人が出ない方がおかしいのだ。

「家人さん！」

そしてこれだけ離れているのに、当然のように飛んでくる呪力の余波。目には見えない衝撃波が、地面を抉りながら眼前に迫る。

これは五条の術式の、と脳が判断するより先に、強い力に引き上げられた。

「ぼさつとしてんな。何やってんだ」

「……兄貴、」

私を片腕で抱えた兄貴は、心底嫌そうな顔でクズふたりを見つめている。いつもはケースに入ったままの刀が、その手には握られていた。

*

兄貴は軽く地面に着地し、私の足を地面に付ける。私が自分の足で立てることを確認すると、そのまま腕を離れた。まったく、といかにも仕方なさそうにため息をつく。

クラゲさん、と駆け寄ってきた後輩たちには目もくれず、その視線はずっとクズたちに向けられている。

「アラート鳴ったから何かと思って来てみればこれかよ。まじで迷惑なやつらだな」

「今日の喧嘩はちよつとやばめ」

「見りやわかる。原因は？」

「多分、夏油の将来の夢関連」

ああ……と兄貴もどこか納得したように遠い目をした。兄貴もどこかでこうなることを予想していたらしい。

ちなみに、と七海が言葉を続ける。

「今日は夜蛾先生をはじめとする教師陣は出張で京都です」

「そいや今日って珍しく高専にほとんど術師がいないんだっけ？」

「美々子ちゃんたちが定期検診で病院に行っていることだけが救いでしょうか……今日が高専来て以来初めての外出だと」

「ああ、不幸中の幸いだな。つと、」

散れ、と兄貴が言うと同時に迫り来る衝撃波。再び私の首根っこを掴んだ兄貴は、あのクソガキが、と小声で悪態をつく。私と同じくとつさに反応できなかつた伊地知は、灰原と七海に腕を掴まれて涙目だ。

はあ、とひとつため息をつくと、兄貴の長い指がその形を作る。

『闇より出でて闇より黒く、その穢れを禊ぎ祓え』

滴るように広がる夜は、馬鹿を続けるクスふたりを閉じ込めていく。その最中にも放たれた衝撃波は、夜の壁に吸い込まれるようにして消えた。ひくりと兄貴の目が細められたが、帳は問題なく下りきる。

兄貴がもう一度息をつく頃には、クスどもの姿は完全に見えなくなっていた。

「帳、もしかして条件付き？」

「一定以上の呪力のあるものは通れないようにした。無機物も含め、外からも内からもな」

「んなこと出来たんだ」

「教わった」

誰に、と口にする前に思い出した。結界術に秀でていたという、あ

の補助監督の存在。

こうやって兄貴は守られ、呪われてきたのかと、妙に腑に落ちる。死んだ人のことを忘れても、そのひとから学び取ったものは決して忘れることなく。

兄貴を構成するひとつとなつて、彼らの「呪い」は生きている。

「……何まじまじとひとの顔見てんだよ」

「別に。で、これからどうすんの？」

「あの特級クズども相手にいつまで帳がもつかわかんねーからな。帳の強度を上げるためにも、俺が中に入る」

「あ、死に行く感じ？」

「俺だつてまじで行きたかねーんだけど？」

けど今あいつらのどつちに死なれても困んだよ、と真剣に嫌そうに言う兄貴。

確かにあの調子では、どちらかが死ぬか、最低でも再起不能くらいにまでいかないかと止まらない可能性がある。力が入りすぎてウツカリ殺したなんてことがまじで有り得てしまうのがあのクズどもだ。

でも一定以上の呪力があるものは通れないって、と尋ねれば、兄貴はほんの少しだけ口を尖らせて言う。

「……呪力量の基準を俺にしたからな。俺までは通れる」

「自虐ネタじゃんやつば。そりやあのクズどもは通るの無理か」

「やかましい。こんな調整の難しい帳下ろせるだけすげーんだぞ本来」

「きやー兄貴すごーい」

「せめて棒読みを隠す努力をしろクソ妹」

とにかく、と兄貴は後輩たちに顔を向ける。

「七海くんと伊地知くんは補助監督や職員へ避難指示と、被害状況の確認を。特に非術師はもう高専から離れた方がいい。山側の避難経路使つて外に出てもらつて」

「はい」

「りよ、了解しました」

「硝子と灰原くんは怪我人の搬送と処置頼む。医務室まわりは他より

強力な結界に守られてるから、そこならたとえ校舎が壊れようが大きな被害はないはずだ」

「了解ですー！」

「わかった」

よし、と頷いて、兄貴は刀を肩に担ぐ。そのまま深い深いため息をついて、自らが下ろした帳に目を向けた。

「……死にたくね〜〜〜」

あまりにも素直な心の声に、こんな状況だとわかりながらも空気が少し緩む。

あははつと灰原は遠慮なく笑い、伊地知はですよね、と弱々しく笑う。七海だけは真面目な顔を保っていたが、その顔に堅さはなかった。

「いえ、死ぬ前に逃げてくださいね」

「ご、ご無理なさらず……！」

「クラゲさんならきつと大丈夫ですよ!! 多分!!」

「熱量のわりに励まし方がゆるすぎてウケる」

これ終わったらあの二人に何か奢らせましょうと言った七海に、水ようかん食べたい、と続く兄貴。良いお店調べておきます、と苦笑した伊地知の肩をひとつ叩いて、兄貴は歩き出す。

その背中に、私も言葉を投げた。

「とりあえず命が残ってれば何とかしてやるけど、もし手足がちぎれたらちやんと拾ってこいよ」

「想像がエグいわ」

じゃーそつち頼むぞ、と走り出した白衣。

兄貴が出張に出たあのと看とは違って、何故だかその背中を見送るのは怖くなかった。

「——詳星呪法、」

脳内に広がる、可能性の海。

それはまるで、宇宙のような。それはまるで、深海のような。可能性が光となって浮かび、それ以外は闇が埋め尽くす場所。漂う闇は、よくよく見れば数の形をしている。

「《^{サーチ}検索》」

無傷でこの二人の喧嘩を止められる星はあるかって、まあこの段階で見ても無駄だよな。案の定、可能性の海にはひとつとして星は浮かんでおらず、頭に浮かんだのは《^{エラー}無理》の一言。情報が足りない現段階でこの二人を止めようとするならそれは力尽く以外にないが、俺がこいつらを力尽くで止めるとか無理に決まっている。普通に死ぬ。

となるとやはり、もう少し情報が必要だ。この喧嘩の発端が夏油の進路の話だと言うことは聞いた。だが、その中でも何がきっかけで、何がどちらの怒りに触れたのか。それを理解しなくては、この喧嘩を止める星は見つからない。

たまに飛んでくる衝撃波をかわし、飛び散る呪霊の破片を鞘ごと刀で払い、ふたりの会話に耳を澄ませる。

「んだよ、傑がやりてーっていうから手伝ってやるつつただけだろ!?! 何キレてんのかまじ意味わかんねーんだけど!!」

「その無自覚の高慢さが勘に障るって言ってるんだ!! 誰が手伝ってくれって言ったんだ、悟は悟のやるべきことがあるだろ!!」

「はあ?! 俺のやるべきこととかオマエが勝手に言うんじやねーつつの!!」

「悟!!」

聞くだけで馬鹿らしくなるようなガキの喧嘩が目の前で繰り広げられている。強さだけは一丁前に特級なので、いやほんとマジで迷惑だなと思いつつ、眼前に現れた頭が三つある犬のような何かをはたき落とした。なに今のケルベロスでは。しまったもう少しよく見たかった。

ぎゃーぎゃーとわめき続ける声を聞きながら、頭に情報を入力し^{インプット}ていく。

どうやら先にキレたのは夏油のほうらしい。夏油の進路の話聞いた五条は、協力を申し出た。どうも一緒にフリーになるとか抜かし

たようだ。まあ素直じゃない言い方はしたのだろうが、そうじゃなくても夏油はそれを許せなかった。五条を「高慢」だと、やるべきことがあるだろうと言って、それを切り捨てた。

あー……、と自分でも心底面倒だと言う声が口から漏れる。何となく、わかったようなそうでないような。

浮かんだ推測が正解なのかはわからないが、まず間違いなく言えることは。

「……ガキかな？」

いや、俺からすれば確かに四つも下のガキであることには間違いのないのだが、四年前の俺もこんなにガキだっただろうか。全く覚えていない。

何がガキかって、お互いがお互いのことを理解していると思いついでいるところだ。どれだけ仲が良かろうが、以心伝心など有り得ない。言葉を尽くしてようやく、相手の心のひとかけらに触れられるかどうかだというのに。

こいつらに欠けているのは、意地や強がり抜いた、本音での対話だろう。

「《再実行》」

改めて、星を探す。俺が無傷で二人を止める方法。

さつきとは違い、今度はいくらか浮かぶ星がある。といつても宇宙の片隅で密やかに燃える星程度のものだが、まあないよりはマシだろう。

とにかく、まずは冷静にさせないといけない。少ない星々を渡り歩くように、それぞれの可能性の欠片を検討していく。

「……えー……」

何やら強い力に引き寄せられそうになるのを寸でのところでかわし、一番強く輝く「可能性」にため息をつく。

正直、やりたくない。何でって疲れる。いざというときのために何重にも《縛り》をかけて温存している奥の手を、何故ガキどもの喧嘩の仲裁に使わねばならんのか。いや、わかっている、それでもやらなきゃこの特級クズどもは止められない。もうため息も出ない。

しかし、やるにしてもチャンスは一度きり。しかも、対象は一名のみだ。どちらを狙い、どのタイミングで、そして必要な条件をどうやって揃えるか。

脳内で一番強く輝く星は、蒼い色。

「……五条、」

自分の呪力が、ゆらりと揺らいだのを感じた。

出来るだけ何気ない口調で、でも確実に聞こえる声量で続ける。

「お前な、素直に言ったらどうだ」

「あ？」

「寂しいんだろ、夏油と離れるの」

え、と夏油は呪霊を操る手を止め、五条はその色素の薄い顔を真っ赤に染める。肌が白いとその変化はひどくわかりやすい。

「は、……あああああ!! 何言っつんだよキモ!!」

「まあ卒業すればどうしたってつるむのも難しくなるけど、夏油がフリーになればなおさらだ。新しい組織を作ろうとすればやることも山積みだし、そりやお前と遊ぶ暇もなくなるだろうな。だから寂しんぼの悟クンは、手伝ってやるとか言っつて大好きな夏油について行こうとしたんだよな。せつかく出来た初めての友だち、そりやずっと一緒にいたいって」

「え? ……え? そうなの?」

「な、あ、ち、ちげーし!!」

初めての友だちというのはカマをかけたただだが、十中八九当たっているだろう。

いやそこで心底意外そうな顔してる夏油、それすらも理解してなかったお前の頭も俺は心配だよ。夏油は夏油で自分の頭の中の五条しか見ていない。「ひとりでも最強たりえるようになってしまった五条」しか、見えていないのだ。

仮に何でもひとりで出来たとしても、この情緒五歳児野郎がひとりで大丈夫なわけがないだろうに。五条にとつて夏油がどれだけ特別か、そんなもん夏油以外の全員が知っている。

「素直に言わねーから喧嘩になるんだろ」

「ち、げえって!!」

「何が違うんだよ。息抜きに夏油誘って振られただけでふて腐れてたくせに」

「え、」

「だ、から、……ちげーつての!!」

その一瞬後に眼前に現れた、蒼い瞳と赤い顔。振りかぶられた拳は確実に俺を狙っている。ぱちん、と頭の中で星が弾けた。ここまで、読み通り。

まず、対象は一名のみ。俺の刀が届く間合いにいて、俺と目を合わせていること。展開時間は最長でも一秒——だが、今回はコンマ二秒にまで短縮。日頃、少ない呪力をさらに抑えて蓄えていた呪力を解放。

久しぶりに全身に満ちる、必要分ギリギリの呪力。五条の瞳が見開かれたのが見えた。だが、もう遅い。条件は全て、整っている。

「領域展開、——『なゆたのほしうみ那由他星海』」

那由他に広がる可能性の海を、その蒼い瞳に叩きつけた。

*

アインシュタイン曰く、人間の脳は十パーセントしか使用されていないという。これは現代の脳科学ですでに否定されているが、人間が自分の脳にストッパーをかけているのは事実だろう。脳にしる肉体にしる、百パーセント解放すればたいいのはすぐに壊れてしまうからだ。

俺の手が届く程度の空間、ギリギリ五条が入りきる狭さの、俺の領域。呪力に満ちたこの空間は、いつも俺が見ている可能性の海そのもの。

この領域内での必中効果は、ただひとつ。あらゆる可能性を検討する、脳の強制的な活性化。

普段なら無意識のうちに排除してしまう発生確率の限りなく低い可能性や、自分では忘れてしまっていると思っている経験値や知識から新たに浮上する可能性まで、そのひとつひとつが星となって眼前に現れる。

今、五条の目の前は、星に溢れているだろう。星と、光と、あるかもしれない未来の可能性で、もしかしたら視界は白で塗りつぶされているかもしれない。通常の人間なら、一秒もあれば脳みそはクラッシュして使い物にならなくなる。快復しても後遺症が残る可能性があるし、当然下手をすれば死ぬだろう。

しかし今回はコンマ二秒に短縮した上、五条は常に反転術式で脳を作り直している。だからきつとこれは、ほんの一瞬気を逸らすことが出来る程度の。

だが、今回はそれでいい。

「——楽しいんだろ、高専での生活が」

見開かれた六眼と、その場で棒立ちする俺より背の高いそいつ。

視界の端で、呪霊をしまった夏油が地面に降り立った。

「だから、それを手放したくない気持ちは理解できるよ。ずっとこのままは無理でも、せめて夏油と一緒にいたいってのもな。……けど、そのやり方じゃだめらしいぞ」

「……あ、」

「そろそろお前は自分の脳みそ使うことを覚えろよ。見て、聞いて、理解して、どうやったたら自分の望みが叶うか考えろ。お前の望みが叶って、しかも夏油も納得する方法、お前だったら考えられるだろ？ 出来のいい頭もつてんだからさ」

あ、とまた言葉にならない音が五条の口から漏れる。領域展開の反動でまだ放心しているようだが、俺の声は聞こえているだろう。ゆっくり、五条が俺の言葉を咀嚼している気配がある。

視線をその後ろに向けて、お前もだよ、と言葉を続けた。

「お前は圧倒的に言葉が足りねー。誰もお前の事情なんか知るわけねーんだから、理解してほしいなら言葉を尽くせ。自分の努力を怠つてくるくせに癩癩起こすとか、マジでガキのやることだぞ」

「……返す言葉もないですね」

歩み寄ってきた夏油に、五条はびくりと反応して振り返る。にこりと微笑んでみせた夏油に、もう怒りの色はなかった。

「いきなり怒って悪かったよ、悟」

「す、ぐる、」

「……もう、結構長い間悩んで、ようやく出した結論なんだ。それなのに悟はあまりにも簡単に俺も、なんて言うもんだから、私の結論を軽んじられたように感じて頭に血が上ってしまった」

悟には悟の気持ちがあつてのことなのにね、と夏油は柔く受け止める。

「私の夢を考えれば、きっと君に協力してもらった方がいいんだと思う。だけど、……そうだな、私はきつと、私の夢のために悟を『使う』ようなことはしたくない」

「別に、」

「これは私の意地の問題だよ、悟」

手段を選ばないと言つた夏油にも、譲れない一線はある。いや、それでいい。それは、譲つてはならない一線だ。

夏油が掴んだ自分のカタチを歪ませないために、夏油が夏油であるために。

「私は、君と対等でありたい」

私の夢のために君を付き合わせるのは違う、と夏油は言い切る。その口調には断固とした意志があり、五条にも反論を許さなかった。

「一方的に使つたり使われたり、そういうのは対等とは言わないだろう？ たとえ悟が私と一緒に居たいと思つてくれたことだとしても、それじゃ私は納得できない」

「……俺がそれでいいつつつても？」

「うん。だめ」

笑顔で切り捨てられた五条の肩が、心なしか落ちたような気がする。どう見ても親に説教される子どもの図だった。

それはあながち間違いとも言いきれない。夏油の後をついてまわつた雛鳥も、いい加減自分の翼で空を飛ばなくては。

だから、と夏油は言葉を続ける。

「考えてほしいんだ、悟にも」

「……何を」

「悟が、これからどうやって生きていくか。呪術師として……いや、五

条悟として、どう生きるか。考えて、そのうえで私と同じ夢を見るなら、そのときは一緒にやろう。悟だけの夢を見つけたら、私も君の夢を応援するし、君も私の夢を応援してほしい。……ああ、けれどもそれが私と相反する夢だったら、」

そのときは、また喧嘩でもしよう。

夏油の言葉に、ぐ、と五条の手が握られる。その喧嘩は俺のいないところでやれよ、とは思ったが口には出さなかった。さすがにこの青春ドラマも真っ青の仲直りシーンに口を出すほど野暮ではない。いやそろそろ俺が倒れそうなので本当に早く終わってほしいんだけど、巻きで進めてもらえないだろうか。呪力使い果たして立ってんのもきついんだよこっちは。

頼むからさっさと返事しろ、と五条に目を向ける。

「……わっかんねーよ。僕が何言ってるのかも、何がしてーのかも」

「……うん」

「けど、……わかるようになるから、ちゃんと教えろ」

「はは、ああ、……わかった。最近忙しくてなかなか話すこともなかったしね」

たくさん話そうか、と夏油は五条の肩を叩き、五条はこくりと子どものように頷く。

終わったか、と思うと同時に口から息が漏れた。立っていられなくて、その場に尻餅をついた。たったそれだけの衝撃でもくらりと世界が揺れる。

「、クラゲさん？」

「……あつれ、クラゲさん実は呪力すつからかんじゃね？ え、嘘まじあれだけで？ 呪力量雑魚とは思ってたけどまじで雑魚じゃんウケる」

「調子取り戻すの早すぎんじゃねーの情緒五歳児、マジで少しは反省しろ」

「あんだだけの呪力で領域展開とかよく出来んね？ とうるかそう、あれもつかいやってよ、もっかい食らったら領域展開の感覚掴める気がする」

ひとの話を聞けよ、と言う前に襟元を掴まれてねえねえと揺らされる。こつちにはもう止める気力もないというのに、まじでこいつ人間性というものをどこかで拾ってきてほしい。

「こらこらと五条を窘める夏油も、どこか楽しそうだ。」

「やめておきな、悟。本当にクラゲさんは呪力量がびつくりするくらい少ないんだから」

「知ってつけど、クラゲさんの領域展開、何かウチのと似てんだって。もうちよいで何か掴める気がしたのに一瞬で解除しちゃったし」

「……ちよい待て五条、似てるって何」

「脳に直接作用する感じの領域展開だろ？ クラゲさんがいつも術式でやってる高速演算を対象にも強制する領域ってどこ？」

無下限呪術の領域展開も相手の脳に作用する系らしいから」

今できるやついねーから資料見た限りだけど、と五条の声が遠くに聞こえる。

その言葉を聞いて、脳裏に浮かぶのは禪院のドクズの間抜け面。頭に血が上って、初めて対人で試した未完成の「那由他星海」は、調整も出来ずに近くにいた直毘人さんをも巻き込んだ。《縛り》が足りなかったこともあって威力もお粗末なものだったが、おそらく直毘人さんは俺の領域展開の形くらいは理解したことだろう。そして直毘人さんは、今もなお俺を禪院に取り込もうとちよいかいを掛けてくる。

今、その理由がわかった。五条家相伝、無下限呪術と似通った領域をもつ俺の詳星呪術。何がどう似てるのか知らないが、五条が言うからには近いものがあるのだろう。だからあの人は俺を禪院の血に取り込みたがったし、俺が五条家に取り込まれていないかを気にしていたというわけだ。

「……なるほどね」

「え、何？」

「何でもない」

「じゃあ早く領域展開」

「あ、クラゲさん、私はこの帳の方を聞きたいんですけど。これ条件付きですよ、しかも調整が難しいタイプの」

「俺が呪力切れ起こしてるのわかっててそれかよお前ら。まじ限界クス」

くらり、とまた世界が回る。

どうでもいいけど領域展開のことは誰にも言うなよと釘を刺して、下ろしていた帳を消した。ざあつと外の空気が流れ込み、ぼろぼろになった校舎と校庭が陽の光に晒される。

視界の端に硝子と灰原くんが見えた。手が空いているところを見ると、怪我人はそれほどいなかったらしい。

「というかお前ら普通に良くて停学、悪くて退学だから。少しでも処分が軽く済むように片付けくらいすれば」

「……悟、どれだけ術式乱発したんだい」

「はア？ 校舎の壁吹っ飛ばしたのは傑だろ」

「校庭の樹を折ってまわったのは君だ」

「うるせえとつと働け」

ぶちぶちと言いつつ合いを続けながら瓦礫の山に向かうふたりを見送って、そのまま俺は後ろに倒れた。ぱたぱたと駆け寄ってくる硝子と灰原くんの足音を後頭部に感じる。

降りそそぐ日光がまぶしくて、目を細めた。

「……何やってんだろな、俺」

あの薄暗い部屋でモニターに向かっていればいいものを、何故だか最近は何事かばかり。俺はたださっさと隠居がしたい、それだけのはずだったのに。それだけでよかったのに。

いつの間にかひどく活動的になっている自分に呆れて、もはやため息も出ない。

「頭使いたくねーんだつつの……」

俺にとつてはただそれだけなのに、何でこつても面倒ばかり起きるのだろう。いやこれも怠惰と自由の日々のため、と自分に言い聞かせるが、さすがに疲れた。完全に脱力して、細く長く息を吐く。ひんやりとした地面が、もはや心地いい。

久しぶりに見上げた空は、蒼く澄んでいた。

波間に海月は思考する。
自分と、硝子と、星々と、それぞれの道の行く末を。

いつも通りの作業の途中、ふとモニターの端に表示された日付が目に入る。

そういえば、と思い立って、白衣のポケットから携帯を取り出した。画像のフォルダを漁って数日前に撮影したそれを表示させ、メールに添付する。俺はこれを見るたびに腹筋に力が入るのだが、彼女はどうか。

メール送って一分と経たないうちに、俺の携帯が盛大に騒ぎ出した。

「はい、家入」

『今のは何の嫌がらせですか、先輩！』

「ささやかな誕生日プレゼントだけど、気に入らなかったか？ 硝子や五条は笑い転げてただけだな」

二月十八日、二十四節氣でいう雨水のころ。そろそろ雪も水に変わろうかというこの日が、庵歌姫の誕生日だった。一番最初に「おめでとう」の一言を伝えたときにはひどく驚かれたものだが、単純にデータとして忘れないだけだと言えば俺は心底納得したように頷かれたのを覚えている。俺のイメーヅはいつたいたいどうなつてんだとは思つたが、いちいちひとの誕生日を祝う性格でもないのは事実なので何も言えなかった。

俺に送りつけたのは、特級クズの片割れの画像。それも、俺の「はつたりは大事だぞ」という言葉に忠実に従った真面目系クズが、袈裟をまとった姿だった。

『……いえ、確かにうさんくさすぎて面白いですけど』

「だろ。俺も直視したら爆笑しそうでずっと目を逸らしてた」

『先輩の爆笑するところの方がいつそ見てみたいです。これ、例の？』
「ああ。灰原くんとか心の底から褒めててマジ面白かったんだよ、『本当に似合ってますよ夏油さん、すぐく壺とか売ってそうです！』って。その言葉で七海くんが撃沈した」

そこでふ、と俺も小さく嘖き出す。

灰原くんにとっては心の奥底からの賛辞であるだけに夏油も怒るに怒れず、ちくちくと伊地知くんをいじめて鬱憤を晴らしていた。伊地知くん可哀想に。

『にしても、本当にやる気なんですか、夏油のやつ』
「ここまで来て『やっぱやめました』なんて言わねーだろ。言われても困る」

『……先輩が考えたことなら無理だとは思いませんけど、本当に上手くいくんです?』

夏油に旧盤星教の手綱を握らせるなんて。

その庵の言葉に、思わず喉の奥でく、と笑う。夏油にとってはどうしても必要な、金と、人員と、大義名分。その全てを解決するために俺が立てた策こそが、もはやその名を名乗ることが許されていない、盤星教の残党を利用することだった。

先輩は笑いますけどね、と庵は不服そうに言い募る。

『星漿体の一件で解体されたとは言え、狂信的なひとたちの集まりであることには変わりませんよ。盤星教を名乗れなくても、結局そこで出来てしまったコミュニティが消えたわけじゃないです』

「だから利用価値があるんだろ? 金があつて各地に拠点があつて人もいる。あの極端な思想も、導き手次第では使いようだ」

『……夏油ならそれができると?』

「できるかは知らねーよ。俺は何とかしろっつっただけ」

俺は所詮知恵を貸すだけだ。具体的な方策は夏油が考えればいい。といつても、正直なところそんなに難しいことだとは思わない。実際こつちは術師なのだ、天元が遣わした預言者とも名乗って堂々と乗り込めばいい。人が多ければ呪霊の被害に悩んでいるひとのひとりふたりくらいはいるだろうから、適当に祓って恩を売ることくらい夏油には容易いだろう。

一応対外的には笑顔で礼儀正しく振る舞うことくらいはできるアイツなら、あの思考回路のわかりやすい集団の掌握くらいは出来るだろうと踏んだ。もちろん反対する人間もいるだろうが、多数を心酔させることさえ出来れば大した問題ではない。

「上層にも恩を売れるしな。反対する理由もない」

『そりや、一度問題を起こした団体の監視だって言えば、上層だって反対はできないでしょうけど……』

「本人もやる気だったぞ。星漿体を守れなかった責任も感じてか、金を巻き上げることについて一切の罪悪感もないらしい」

『……加減はわかってますよね……？　　というか法には触れませんよね……？』

「そこは上手くやるだろ。自分の弱味を作るほど馬鹿じゃない」

少しだけ、夏油が盤星教の人々を傷つけるのではないかという不安もなくはなかった。だが、俺が何を言うよりも先に夏油自身がそれを否定した。

『正直、憎い気持ちはあります。ですが、むしろ、だからこそというか。もう馬鹿を出来ない程度には金を巻き上げ、呪霊や呪力のある子の情報を提供させて、ついでに思想の矯正も努力してみますよ』

自分たちがやったことの罪の重さを理解するのが、一番の苦しみだと思いませんか？

そう言い放った夏油は、それはそれはいい笑顔をしていた。俺としては上手く転がしてくれるなら文句はないので、好きにやれよとしか。夏油に思想の矯正なんてさせたならそれはそれでヤバイ方向に進むような気もするが、まあ俺の知ったことではない。これもまた因果応報というものだろう。

『……旧盤星教を乗っ取って、お金と呪いを集めて、呪力のある子どもたちを保護して。よく考えますね、先輩も』

「ついでに呪詛師の更生も夏油に押しつけた」

『……先輩……』

「何だよ、呪詛師にもいろいろいるだろ。家系とか生まれた環境の問題で、呪詛師としてしか生きられなかった奴とか。今までは幽閉か処刑かの二択で、更生なんてほぼ不可能だったからな。そういうやつらを情状酌量って名目で夏油が面倒見れば、使えなくもないと思うんだよ。アイツ飴と鞭の使い分けくらいは出来るだろうし」

これも呪術界に恩を売れる、と続ければ、俺は大きなため息をつく。

本当によく考えますね、というが、そんなにおかしなことだっただろうか。

今の呪術界が取りこぼしているもの、持て余しているもの、そういうものをかき集めることを考えたただけだ。そうしていつか、自分たちが見ないようになっているものの重みを思い知ればいい。

『……いえ、はい、先輩が実現不可能なことに協力するわけがないのは知ってますから。多分夏油も何とかするんでしようけど。けどこんな袈裟まで着て、……先輩、この袈裟のことわかってます？』

「わかってるって、何が？ 何か意味あんの？」

ああ、さすがに先輩もご存じなかったんですね、と引いた声で庵は続ける。

『袈裟にもいろいろ種類があるんですけど、これ、五条袈裟ですよ。わかります？ 五条袈裟』

「……まじっ？」

『まじです』

うわ、と思わずドン引くと、本当に引くんですけど、と庵も心底嫌そうな声。誕生日に変なもん見せてごめん、と付け加えれば、もういいですよ、と軽く笑われた。

『夏油の頭の中とか考えたくもないんですけど、もしかして願掛けとかそんな感じなんですかね』

「何、自分たちは二人で最強だけど『五条』を纏っていれば自分ひとりでも最強的な？ えっあいつ五条のこと意識しすぎじゃんやばい引く……」

『真面目に同感です』

ちなみにその「五条」の方はどうなんですか、とこれまたあまり聞きたくなさそうに庵は続けた。いつぞやの大喧嘩の顛末については、硝子を通して庵の耳にも入ったらしい。袈裟姿を見て爆笑出来る程度にはちゃんと話し合いをしたんですか、と尋ねられて、うーんと首を傾げる。

あれ以来、ふたりなりにちゃんと話し合いは重ねたらしい。たまにヒートアップして喧嘩に発展することもあったようだが、一応平和的

な殴り合いに収めたというのだから反省はしているということだろうか。

誰かを守りたいという感情や、使命感や責任感、自分が自分であるために為したいこと。自我が強すぎる情緒五歳児で社会生活初心者の五条には、どうもそういうものが理解しがたいようだった。たまに夏油は何と説明したものかと唸っていたし、五条は五条で考え込んでいることは多かった。俺としては「いい葉だな」くらいの感想しかなかったし口を出す気もなかったのだが、何せあのクズども、ちよくちよく俺に愚痴をこぼしにくるのだからまじでやめてほしいなど。

『もはや何をどう言ったら伝わるのかわからないですよ。五条家はいったい悟にどういう教育をしてきたんだ……?』

『ごちやごちや考えなくても好きだよーにやりやいーじゃん？ 何であんな遠回りなことすんのか全っ然わかんねーんだけど』

いやもうまじで知るかとしか。ただ、愚痴こそ言っても、互いに理解を諦めようとしなくていいところだけは少し感心した。わかった気になって放り捨てるよりはよほどいいと思う。

そしてそこそこに話し合いを重ねた後、互いに互いを理解したのかしてないのか、五条は一応の結論を出したらしい。

五条なりの「夢」を聞いたときには、つい耳を疑ってしまった。

「五条、教師になるんだと」

『……すみません、多分聞き間違えだと思っんですけど、今五条が教師になるって言いました?』

「言ったよ。いやわかるよ俺、俺も三回聞き直した」

『あのクズがひとを育てるとか正気で?』

「まじでそれな」

しかし本気だというのだから、クズの思考回路はわからない。

多分、先日の任務で後輩たちがかなり危ない目にあっただけでも関係しているのだと思う。二級任務だと言い渡された先で遭遇してしまった、一級呪霊。このところさらに力を付けてきた七海ちゃんと灰原くんのおかげで何とか被うことはできたものの、同じく任務に当たっていた伊地知くんが大怪我を負った。幸いにも命に別条はなかった

が、腹に大きな傷痕が残る程度には危なかつたらしい。しかも、この任務はどうやら上層からの嫌がらせによるものだったようで。

こういったことは、別に今に始まったことではない。だが、夏油と対話を重ね、少しずつ視野が広がってきたのだろうか。五条の眼には、明確な怒りがあった。

『……傑』

『……何だい』

『傑が言ってるのって、こういうこと?』

『……そうだね。これだけではないけど』

そっか、と頷いた五条の声は、確かにそれまでとは違っていた。五条が教師になるという話を聞いたのは、この数日後のことだ。

「夏油がもうひとつの高専をつくって外から呪術界を変えるなら、五条は高専で強く聡い術師を育てて内から呪術界を変えるんだと」

『……それ本当に五条ですか?』

「そう思うよな。どんな心境の変化なのか知らねーけど、五条に後輩傷つけられて怒るって感情があったことにも驚いたし、そこで呪術界の上層皆殺しにしようって発想にならなかったことがもう奇跡っつか」

『先輩、それ冗談になってませんよ』

「別に冗談言ってるつもりはねーけど」

今までの五条だったら、きつとそうだった。

たとえ気に入っていた後輩相手だろうが弱い奴が死ぬのは当たり前だと思っていた節があったし、自分の気に入らないやつなんて力尽くで黙らせることを考えたように思う。そんな五条が、仲間を危険にさらされて怒りを覚え、力でなく知恵を働かせ、遠回りでも確実に目的を果たすことを選んだ。

教師なんてらしくもない手段で、呪術界（せいかい）を変えることを夢だと言った。

「ま、それで夏油とどっちが先に夢を叶えるか勝負、なんて言ってたけど。ひとは変わるもんだとしみじみ思ったわ」

『……正直まだ私疑ってるんですけど……』

「うん、すっげーわかる。しかもアイツ話し方とか言葉遣いまで変えだしたんだよ、『僕』とか言い始めて。多分会って話したら自分の頭を疑うと思うけど、お前は正常だから心配すんなよ」

『ちよつと待ってください、そろそろ情報を処理しきれません』

きつと頭が痛い思いをしているであろう庵に、少し笑う。いやほんとまじで気持ちが悪くなるというか、俺も初めて見たときはとりあえずどこから驚けばいいのかわからなかったし、まず自分の頭を疑った。それが五条なりの努力なのだど理解してからは出来るだけ気にしないように努めたが、正直どうしたって慣れない。何せ相手はあの五条だ。

まじで信じられねーよな、と思わず言葉が出る。本当に、信じられない。あのクソガキが、その「星」を選び取るなんて。

『……けど先輩、それはつまり、五条は夏油と一緒にいるの諦めたってことですか？ あのクソガキ、それが嫌だったんでしよう？』

「いや？ 五条の夢にはそれも含まれてるだろ」

『というと？』

「五条が呪術界を変えられれば、別に夏油が外に組織作る必要はなくなるだろ。高専と夏油が作る第二の高専を統合しちまえばいい」

そしたらあの最強どもはまた一緒だ、と言えば、うええと庵がまた引いたような声を上げる。というか引いている。そりやそうだ。わかる。

「そうじゃなくても、方法こそ違えど見てる夢は一緒なわけだから、まあ今後何かと協力し合える。五条と夏油の繋がりが切れることはない」

『……あいつらマジで仲良すぎませんか？』

「俺はもうその辺考えるのをやめた」

もうそういう生き物なんだと思おう、と言えば、少し黙った俺もため息交じりにそうします、と囁く。仲良いことはいいことのはずだし、仲悪いよりいいんだよきつと、と俺も自分に言い聞かせている。

ひとつ息をついた俺は、それにしても、と少し愉快そうに声を改めた。

『ずいぶん気に入ったんですね、あいつらのこと』

「誰が？」

『先輩がですよ』

「……俺が？」

心底面倒なクソガキどもだと思つてつけど、と言つても、俺は愉快そうに笑うだけ。

『正直、あのクズどもが先輩に懐くのはわかる気がするんですよ、何せ先輩ですから。けど、いくら世話好きでもめんどくさがるの先輩が、まさかあの死ぬほど面倒なやつらのことを気に掛けるなんて』

「とりあえず誰が世話好きだ」

『先輩、そろそろ自覚しましょう？』

「コラ気の毒そうに言うな。……別に気に入ってるつもりも、気に掛けてるつもりもねーけど。使えるとは思うけどな」

『気に入ってるじゃないですか。じゃなきゃ使おうとも思わないでしょう』

そうだろうかと首をひねるが、俺はやけに自信満々な様子で。いやしかし俺があいつらを気に入っている？ 何とも領きがたい。正直利害の一致以上の関係はないつもりだし、間違つても友だちとかそういう関係ではない。なりたくもない。

まあ俺の目にはそう見えると言ふことだろう。というか、そもそも俺のところによく顔を出す人間が少ないからそういう風に見えるやしないのかもしれない。

いえ、他意はないんです、と俺は愉しそうに言う。

『きつかけは何であれ、先輩が人と関わったり、外に出たりするようになつて良かったなと』

「お前な、硝子みたいなこと言うなよ」

『あ、そういうえば硝子は元気ですか？ 勉強で根詰めたりしてないですか？』

「声のトーン違いすぎてウケる」

いつも通りだよと言つてやれば、俺は安心した声を落とす。相変わらず仲の良い。

外部の大学への編入のために勉強を続けている硝子だが、あれでも理系の科目には強いし、成績も悪くない。必死になって勉強するような性格もしていないが、プレッシャーを感じるような繊細さとも縁がないやつだ。

放つておいても編入試験くらい軽くパスして、医師免許もなんやかんやで手に入れてくるだろう。我が妹ながらまじで上手いこと生きている。

『……ところで、先輩、……その、』

「硝子のごことは心配すんな」

『、』

庵に硝子の立ち位置について話したことはないが、庵だって呪術界を生き抜く術師だ。うすうすでも察していることは理解していた。庵なりに気を遣って、それとなく立ち回ってくれていたことも知っている。

何も言っていないのに硝子のために動いてくれていた庵には、素直に感謝をしていた。

「硝子が医師免許持ちの術師になることは呪術界に知れ渡ったからな。上層からも好意的に受け止められてるし、五条と夏油が後ろ盾になってる。この状態で硝子に手を出すのはリスクを考えられない馬鹿だけ。そんな馬鹿にやられるほど硝子も弱くねーよ」

非戦闘員とはいえ、硝子にだって護身程度の心得はある。

ついでに念には念を入れて、五条と取引をしておいた。内容はほとんど夏油と同じ、五条の夢を理解した上で必要な助言と行動を、とだけ。その対価として、少しばかり五条と五条家の権力を借りた。なんてことはない、俺が出張に出ている間に硝子に近づこうとした下衆どもに、ちよつと圧力を掛けてもらったただけだ。

硝子に手を出したら、御三家の一角である「五条」が黙っていない。もちろん夏油も、呪術界上層も。ここまでやって硝子に手を出す気合いの入った下衆がいるのなら、それこそ俺の手で息の根を止めてやる。

「……気を遣わせて悪かったな、庵」

『いえそんな、硝子は私にとっても可愛い後輩ですから！ ……大丈夫なら、いいんです。良かった』

本当に安堵した声に、全くこいつも術師向きじゃない、と苦笑した。どうしてこう、術師向きじゃない性格のくせに、俺もまた術師として生きることを選んでしまったのか。理解しがたいなと思いつつも、硝子を気に掛けてくれる同性の術師がいることは正直ありがたかった。

ふと、電話先で誰かが俺を呼ぶ声が聞こえた。

『あ、すいません、任務みたいです』

『ああ。悪い、話し込んだな』

『いえ。お話聞けてよかったです。先輩もあんまり無茶しないでくださいよ』

「するわけねーだろ。あぶねー部分は全部クスどもに押しつけるわ」「とか言つて、どうせ手と口出しちゃうんですから。ほどほどに」「うるせー」

そこまで言つて、あ、とそもそも連絡を取ったきつかけを思い出した。慌ただしい気配を見せる俺に、これだけ、と声を掛ける。

「俺、」

『はい？』

「誕生日おめでと。任務気を付けてな」

『、……はい！』

ありがとうございます、という弾んだ声を最後に、通話を終える。らしくもなく長電話をしてしまった。少し熱を持った携帯を白衣のポケットに放り込む。固まっていた指をにぎにぎと動かして、改めてキーボードの上に手をそえた。もはやほとんどオートで、俺の指は入力始める。

硝子たちが高専を卒業するまで、あと一年と少し。硝子の無事はほぼ保障され、あとは過度に使い回されるようなことがないよう、術師に効率よく任務をまわすシステムを完成させるだけ。想定していたより、あらゆることがかかり早足で進んでいる。現状の課題であるシステムの開発にはまだ時間がかかるだろうが、片付けるべきはそれく

らいだ。

少しばかり癩ではあるが、やはり要因は協力者の存在だろう。俺ひとりでは絶対にこうは進められなかった。

「…………ふう、」

何となく指を止めて、大きく伸びをする。首を回して、肩を鳴らした。集中が途切れてしまった。珈琲でも飲んで気分を切り替えるでしょう。

誰だったかの差入れの缶コーヒーを手に取る。カシユ、とプルタブが音を立てると同時に、廊下を歩く騒がしい気配に気づいた。また来たのか、と缶に口を付けると、口の中にほのかな苦みと、それを上回る甘みが広がる。しまったこれ加糖だ。俺は甘いものは嫌いではないが、珈琲はブラック派だ。誰だ買ってきたやつ。

その甘ったるさに顔をしかめながら、俺は軽く響くノックに返事をした。

いくら私に甘いところのある兄貴とは言え、今回は簡単ではなかった。

あの手この手で言いくるめ、五条や夏油の援護射撃という名の脅しや取引を駆使しながら、最終的には「高専に両親呼ぶぞ」という私も絶対にやりたくない脅しを使って兄貴を動かした。ちなみにうちの両親はそれはそれは変わり者で、兄貴に「海月」という名前を付けたばかりか、私に「海星」で「みほし」という名前を付けようとしたのを兄貴が阻止したという逸話がある。危うく私のあだ名が永遠に「ヒトデ」になるところだった。別に両親と不仲なわけではないが、度を超した自由人夫婦なので正直他人に紹介したくはない。

ほんの一日の外出だというのに、そんなに嫌がるものだろうか。ついでに目の下の隈と取ってこいと厳命したので、今日の兄貴は健康的な顔色で太陽の下を歩くというかなり珍しい姿を晒している。

「うわ、違和感しかない」

「わかる」

「うるせえわ」

いつも上下真つ黒の服の上に白衣を羽織っている兄貴も、今日ばかりは淡い色のゆるいニットに、濃い色のデニムを合わせている。正直数年ぶりにこんな姿を見た。

嫌そうな顔を隠しもしない兄貴は、深々とため息をつきながら日光を浴びている。

「クラゲさん好きそーと思ったから誘ったげたのに」

「頼んでねーんだよ。三人で行きやいいだろ」

「まあまあ。でも、実際好きなんでしょう?」

昔は毎日のように通ってたらしいじゃないですか、とからかうように言う夏油に、昔は昔、と兄貴は切り捨てる。でも、今もちゃんと好きなきなことはとつくにバレていた。

高専から少し離れたところにある水族館では、さまざまな種類のクラゲを見ることが出来る。

「つかお前らこそ水族館って柄か?」

「あ、そういう偏見良くないと思います。僕たちだって水族館を楽しむ感性くらい持ってんだよ、なあ傑?」

「そうそう。たまにはいいでしょう? ほら、悟の情操教育にもいいかなと」

「夏油って五条のママかなんかなの? あ、これ前にも言ったな」

「こんな口うるせーママはちよつと」

「そうだね、私もこんなクソ生意気な子どもはいらないな」

また喧嘩を始めそうになる最強クズどもを放って、さっさと兄貴と水族館の自動ドアをくぐる。慣れた様子で入場料を払う兄貴に、来たことがあるのかと尋ねてみれば、兄貴はわずかに視線を浮かせた。

「……高専に入学したばかりのころにわりと来てた、か? あんまり覚えてねーけど」

「覚えてないって、兄貴が?」

「その頃の記憶、やけにおぼろげなんだよな」

誰かとよく来てたような、と小さく言ったところで兄貴は黙った。

そして考えるのをやめるようにパンフレットに目をやる。それを見て、私もそれ以上言うのをやめた。

兄貴は基本、脳に刻まれている情報は難なく思い出すことが出来る。それなのに、高専に入学したてのころのことをあまり覚えていないという。そして今、誰かと、と言った。なら、それはきつとそういうことだ。わざわざ解く必要のない「呪い」を暴くことはない。

人波に流されながら、ゆらゆらと薄暗い進路を歩いて行く。

「……人多いな」

「まあ休日だかんね。けどだいじよぶ、そのためにクズども連れてきたんだから」

「は?」

どゆこと、と兄貴がこつちを見るのと同時に、その肩に腕が巻き付く。

「置いてくことないっしょ。探したじゃん」

「振り向いたらいないから驚きましたよ」

「お前らが勝手に喧嘩なんぞ始めるからだろうが。くつつくな重い」

「クラゲさんのいけず! アタシのことは遊びだったのねっ!」

「キツシヨ。遊びでもお断り」

「うわ、この世界のイケメンに素でそんな反応する?」

おっと、ちようどいいところにクズどもが。今いるのは順路の中でも少しスペースのある最初のエリアだ。ここなら少々人が集まっても、通路をふさぐほどの迷惑にはならないだろう。

私はいつもと変わらない様子をつくって五条に顔を向ける。

「五条、ここでグラサンとかいらなっしょ。せつかくの水族館なのに魚見えなくない?」

「ん? あー、確かに」

外すの忘れてた、と五条は兄貴から離れ、サングラスを外す。同時に私は、兄貴の腕を取った。ん、と兄貴が瞬きしたところで、す、と息を吸う。

「えっすっごいイケメン!! 芸能人!? モデル!」

いつもより高い声、いつもより大きい声。この閉ざされた空間に、

よく響いた私の声。そして一瞬後に落ちる、は、とか、え、という間抜けな声。同時に私は兄貴の腕を引いた。

今日は休日、女性客も多い。もちろん男性だって、ミーハーなところがある人間なら「芸能人」「モデル」という言葉には振り向くだろう。そして残念なことに、確かに五条は見かけだけなら高身長で銀髪、宝石のような青い瞳という日本人離れたルックス。隣にいる夏油だって、五条に負けないスタイルに整った顔立ちで、しかも一応常識人ぶって人当たり良さそうに振る舞おうとする。

そりやまあ、注目さえ集めてやれば人が集まってしまうふたりなのだ。

「え、まじでイケメンじゃん、足なっが！」

「すつご、銀髪？ え、お兄さんたち二人ですか？」

「お兄さんピアスかつこいいですね！」

「いえ、すみませんが私たちは、」

「わ、声もイケボ！」

「硝子てめっ」

人が集まりきる前に兄貴の腕を引いて先に進んでいく。うわあ、と後ろから兄貴の引いた声が聞こえたが、知ったことではない。私だって人混みは好きではないし、どうせなら静かに水族館を楽しみたいというだけのこと。

適当に人をかきわけたところで足を止め、兄貴の腕を離す。

「ほら、静かになっただっしょ？」

「あいつらを連れてきた理由がよくわかったわ。鬼かお前」

「何、人だかりの中で水槽見たかったわけ？」

「いや、正直よくやった」

「おうよ」

あいつらも使いようだなと軽く言ってしまう性格の悪さ、さすがは私の兄。

さつきよりは人波も落ち着いた海の中を、ゆっくりと歩いて行く。たまに足を止めて、あれ何、と聞けば、近くにある説明書きより詳しい答えが返ってくるのだからその脳内にはどれだけの情報が詰め込

まれているのかと。兄貴曰く、お前だって思い出せないだけで知ってんだよ、ということらしいが、生憎と私は兄貴ほど脳みそを使いこなしていない。

「ぶらぶらと足を進めて、ようやくそこに辿り着いた。」

「……久しぶりに来たな」

ぽつりと落ちた眩きが、やけに大きく聞こえる。

目の前の大きな水槽に漂う、柔らかなクラゲたち。ふわふわと傘を動かして泳いでいるものもいれば、ただゆらりと水流に身を任せるものもある。ゆるやかに動くゼリー状の身体はぼんやりと透き通って、光量をぎりぎりまで絞られたライトのもとで淡く照らされていた。

今日兄貴を連れ出したのは、どうしても言いたいことがあったからだ。それを伝えるならここがいいと思ったから、五条や夏油と一緒に兄貴を引きずり出した。

兄貴は、じつと水槽を見つめている。静かな表情のまま、ただひたすらに。

「……兄貴、」

水槽に目を向けたまま、声を掛ける。兄貴の反応はなかったが、私の声が聞こえているのはわかっていた。兄貴はどんなときでも、私の声をちゃんと聞いている。口ではぐだぐだと言いながらも、めんどろくさそうにすることはあっても、確かに兄貴は私を大事にしてくれた。当たり前前に、そうしてくれた。

本当は、わかっていた。兄貴が高専で呪術師を続けるのも、ひたすらに研究に没頭するのも、少なからず私のためであるということ。それだけじゃないのかもしれないけれど、きつと理由のひとつではある。その確信はあった。

だって兄貴は、いつだって任務よりも研究よりも、私のことを優先してくれる。自分の優先順位はもう決まっていると聞いた兄貴が、私よりほかのものを優先するのを見たことがない。だからつまり、きつと、そういうことなのだ。

このクソ兄貴、シスコンにもほどというものがある。

「……術師、辞めれば？」

任務も、研究も、やりたくないなら頑張る必要はない。兄貴なら呪術師なんてやらなくたっていくらでも生きていく道はある。術師なんて術師しかやれないやつがやればいいのなら、兄貴だって術師でいる必要はないはずだ。

私は多分、術師でしか生きていけない。いろいろな意味で、術師として生きていくのが一番平和に生きられると思うし、私自身も別に嫌なわけではない。夏油や五条とも、それに夜蛾とも、たくさん話をした。自分の守り方は理解したし、アイツらも手伝ってくれると言った。もう、生き方は定まった。だから、私はこれでいい。

きつとこれから、自分のことは自分で何とかしてみせるから。

「私はもう、大丈夫」

もう、私に囚われる必要はない。囚われないでほしい。誰だって、自分の好きなように生きればいい。私にそう教えたのは、ほかでもない兄貴なのだから。

水槽のガラスごしに兄貴と目が合う。珍しく真面目に驚いた顔の兄貴は、数回瞬きをして、少し考えて、そして。

「……く、」

「おう何笑ってんだクソ兄貴」

「ふ、柄わたる、ふ、ついや、……お前な、く、」

珍しく肩まで震えている兄貴は、顔を背けて口元を手で覆っている。基本的に表情筋が動かないタイプの兄貴が、こうまで笑うのも珍しい。

人が珍しく真面目な話をしたのに、と思ったところで目が合った。いつもやる気なさげな目が、今は一段と細められている。

「なに思い上がってんだ妹、俺がいつお前のために術師やってるっつったよ」

「、」

「そりゃ俺は残念なことには妹想いの優しい兄だから、さすがに心配くらいはするけどな？ 両親よりよっぽどお前の面倒見てきたんだ、それはまあ仕方ねーだろ。けどな、だからってお前のために俺の人生を使うほど、頭イカれてねーよ」

俺はいつだって、俺のためだけに生きてる。

愉快そうに笑って、その大きな掌が私の頭に乗った。気に入らなく
て振り払おうとしたけれど、その手は離れなくて。にやりと笑った兄
貴は、そのままぐしやぐしやと私の髪ごとまで回した。

「そーかそーか、俺がお前のためにやりたくもねーことやっつてんじや
ねーかと心配になったのか。それでわざわざこんなとこまで連れ出
して、クズども使つて人払いまでして。心配させて悪かったな、俺そ
んな自己犠牲の精神もつてねーから安心しろ」

「まじこの兄貴クソ」

「はいはい、お前が素直じゃねーのは知ってる」

お前が生まれたときからな、と言った兄貴は、昔と同じ顔をしてい
て。む、と口を結ぶと、その長い指が私の髪を整えるように髪をたど
る。

嘘なんか言つてねーよと、その柔らかい笑顔が語っているような気が
がした。

「心配すんな、硝子。俺は好きにやっつてんだ、お前も好きにやっつてろ」
まあ確かにそのうち術師は辞めてやるけどな、と兄貴は手を離して
また水槽に顔を戻す。そのうちつて、とその横顔を見て言えば、視線
だけがこちらに向いた。

「やることやっつたらだよ。中途半端に投げ出したら気兼ねなく隠居で
きねーだろ」

「兄貴つてばいつからそんな真面目になったわけ？」

いつも通りの軽口に戻ろうとしたところで、背後からあーーーつ
とやかましい声。

「やっぱここにいた！硝子お前な、どんだけ面倒だったと思つてん
だよー」

「悟、せつかく撒いてきたんだから大声を出すな。でも硝子、あれは
ちよつとひどいんじゃないかい？」

「チツもう来やがった」

「俺たちに遠慮せずにもうちよいチャホヤされてくれば良かったの
に」

「心底残念そうに言わないでくれますかクラゲさん」

まあもうクラゲ見たしいいか、と兄貴は緩く足を進める。

俺たちは全然見れてねーんだけど、とぐだぐだ言う五条と、大きなため息をつく夏油。このふたりを餌にしたことについて一切の罪悪感はないが、文句を言われ続けるのも面倒だ。まあまあと軽く流す。

「拗ねんなよ、かわりに今日は兄貴が夕飯奢るから」

「オイ、さも当たり前のように俺に出させようとすんな妹」

先に進んでいた兄貴が首だけで振り帰って言う。年長者が出すのは当然じゃん、と軽く返してみれば、いつも通りめんどくさそうに顔をしかめた。

さつきまでの柔らかな笑顔はもう営業終了したらしい。確かに、あえてあの顔をクズどもに披露する必要もない。あれは、私だけの「兄」としての顔。

そんな私の気持ちに気づくはずもない特級クズどもは、さっと機嫌を戻して乗っかってきた。

「はい決定、晩飯はクラゲさんの奢り〜」

「ちなみに夕飯では後輩たちも合流予定で、特に灰原はひとの五倍は食べます」

「まじでいらねえ情報……あーもう、いいよ、どうせだから寿司食うぞ。水族館の後は魚って相場が決まってる」

「よっしゃ。回らない寿司な」

いやそこまで言っただけ、という兄貴に構うことなく、じゃあ五条の行きつけな、と五条が携帯をいじり出した。どうやらその耳には都合の悪い声なんて聞こえないらしい。もちろん私の耳にも聞こえていない。

そんな私たちを見て、夏油だけがうわあと引いた顔。

「まさか皆水槽の魚見て『美味しそう』とか思うタイプかい？ 情緒がないな」

「兄貴〜夏油寿司いらないうって〜」

「そうは言っただけ」

「いや僕も同類じゃん」

もう席予約しちゃった、とにんまり笑う五条に、兄貴は諦めた顔でため息をつく。会計の金額想像もつかねーんだけど、と死んだ目をする肩を、夏油がぼんと叩いた。隠居のための生活費を貯め込んでるのはバレてますよって、こいつマジでクズか。いや、そもそも優雅に揺蕩うクラゲを横目に見ながら寿司の話をしてる時点で全員クズだ。そう思い直してちよっと笑った。

そういや、とガラス越しにちよいちよいとクラゲを指でつつきながら五条が言う。

「クラゲさんてクラゲ見ても『美味そう』って思う感じ?」

「思わねーよ、クラゲほとんど味ねーし」

「実食済みはウケる」

共食いじゃん、と笑う五条に、そういえばクラゲはほとんど水分だから味がないのも道理か、と納得したように頷く夏油、いや中華料理とかで普通に食うだろクラゲ、と呆れたように言う兄貴。

どいつもこいつも好き勝手、我が道しか進む気のない馬鹿ばかり。兄貴はちよつと違うのかと思ったのに、残念ながら馬鹿は馬鹿。まったく私のまわりときたら何でも面倒なやつばかりなのか、自分を棚に上げてそう思う。

何だか、妙に笑えてきた。

「兄貴、」

そう声を掛けると同時に、足をはやめてその隣に並ぶ。何だよ、といつも通りに返される声。それ何だか、ひどくくすぐったい。

「久しぶりに生でクラゲを見た感想は?」

「……まあ、見れてよかったよ」

じゃあまた連れ出してやるから、と笑ってやれば、マジ生意気、と兄貴も笑った。

誰よりも海月の自由を望む硝子の檻は、自身の鍵を差し出した。けれど海月は首を振る。これは自分の意志だと笑うだけ。

いずれは外にと言いながら、それは今ではないらしい。
海月の呪いは未だ解けず、自らに解放を許すこともなく。
平穩を夢見る海月は、今日も硝子の檻で星を解く。

海月の反抗期

反抗期とは、精神発達の過程のひとつだ。

幼少期と思春期の二度あると言われるが、時期や回数には個人差がある。自我の成長によって周囲への反発心を抱きやすくなり、身体の成長や環境の変化に精神が追いつかず感情のコントロールが不安定になる時期でもある。つまり、幼さゆえにいろいろとやらかす時期のことだ。ひとによつては「黒歴史」と同義であるかもしれない。

校庭で後輩たちと戯れる双子を微笑ましく見つめながら、あの子たちにもいつか反抗期とか来るのかな、と特級クズの片割れはしみじみと言う。

何でもいいから早く部屋に戻らせるよという本音はさておき、あの子たちのためにも反抗期は来たほうがいい、とわりと真面目に思った。あの度を超えた夏油への崇拜は薄れたほうがいいだろうし、冷たくされて泣く夏油とか面白すぎるので是非見たい。

そんな俺の内心など知らない父親気取りは、参考までに伺いますが、と軽い声で俺に話を振った。

「硝子の反抗期はどうやって乗り切ったんです？」

「しばらく放つといたら勝手におさまったぞ。何か自分の反抗期を自覚したら急に恥ずかしくなったらしい」

「兄貴まじで黙れ？」

メスを手に背後に這い寄る黒い影ごときにビビる俺ではないが、まあ別にそんなひどくなかったらと一応のフォローは入れておく。実際いつもの生意気さが倍になった程度のもので、俺へのダメージは特になかった。

なるほど、と愉快そうに肩を揺らした夏油は、じゃあ、と俺に水を向ける。

「クラゲさんの反抗期は？」

俺の、と言われてふと記憶を探るが、そんなデータは見つからない。

「……まず反抗したい相手がほとんど家にいなかったしな」

多忙が過ぎる両親は幼い頃から家を空けていることが多く、高専に入学して寮に入るまではほとんど硝子とふたり暮らしだったと言っている。

四つ下の幼い妹に八つ当たりするほど大人げなくはなかったのですが、たぶん俺に反抗期というものはなかったのではないだろうか。……と適当に流そうと思ったのに、何故かタイミング悪く通りがかったクソ恩師のクソ愉快そうな声。

「なかなか大変だったぞ、海月の反抗期は」

何でアンタが答えるんですか、と反射的に答えても夜蛾はにやりと笑うだけ。

「何なら歌姫に詳細聞くか？」

俺よりも歌姫のほうがよく知っているだろうというからかい混じりに言葉に、いつのことを言っているのかを察して知らず眉間に力が入る。

俺だって恥という概念くらいはもっているし、消せないにしても思い出したくはない記憶のひとつくらいはある。

「……俺はちゃんと謝りました」

「えっ本当にあったんですか？ クラゲさん、詳細を」

「吐けよ兄貴」

というかあれは別に反抗期じゃない、と続けたいのに特級クズとクソ妹が妙にぐいぐい来る。いらん積極性をこんなところで発揮するんじゃない。

いやもうマジで誰が言うかと、結んだ唇に力がこもる。

「珍しいな、本気で嫌そうですね？」

「……誰にでもそういう過去のひとつくらいあるだろ」

あのとときの俺を殺せるものなら殺してしまいたいし、俺には本当に申し訳ないことをしたと知っている。あれだけ情けないところを見せたのに今でも俺に敬語を使ってくれるあの後輩、実は相当に心が広いと思っっているのだが何で特級クズふたりに対してはあんなに気が短いのだろう。正直あのとときの俺のほうが普通に最低だ。

へくへくと言いながらクソ妹は携帯を取り出した。何をする気なのか聞くまでもないが、これに関して俺は庵に口を割るなどか言える立場ではない。

となれば、せめて最悪の事態だけでも回避させてほしい。硝子、と痛む頭を押さえながらひとの嫌がることを進んでやるタイプの妹の名前を呼ぶ。

「庵に聞くなとは言わねえから他で言うな。俺がお前の幼少期の詳細を握ってることを忘れるなよ。全部バラすぞ」

「このクソ兄貴。仕方ねえな」

舌打ちをしながらも領いた硝子に、内心で安堵の息をつく。できるなら妹にも知られたくはないが、この特級クズに知られるよりは数億倍マシだ。

「えっ硝子、教えてくれないのかい」

「夏油もセンパイに聞けばいいじゃん。教えてくれるかは知らんけど」

「教えてくれるとは思えないから言ってるんだけど。じゃあ学長、「せんせーまさか教え子の個人的な事情をべらべら喋ったりしねえよな」

俺たちの会話を聞きながら始終面白そうに肩を揺らしているクソ恩師、日頃はまともそうに振る舞っているが、こういうところを見ると本当に呪術師にはろくなのがいねえと思う。わかったわかったと振るその手、へし折って呪骸作れなくしてやりたい。

「俺が話すのはやめておこう。傑、いい機会だから歌姫への態度を改めたらどうだ」

「私はちゃんと目上として接しているつもりなんですが」

「夏油お前、まじでそう思ってたから本当に可哀想だよな」

「さすがの私もたまに真剣にお前を気の毒だと思うことがあるわ」

笑顔の額に血管を浮かべた特級クズに妹と哀れみの目線を送りながら、じわじわと蘇ってきた気まずい思いに改めて蓋をする。

二十数年の年月を重ねてきた以上、俺にだって過去はある。覚えていること、忘れたいこと、——思い出せないことも。

意味深に向けられた夜蛾の視線には気づかないふりをした。

遺された呪い

——それは想のろいだった。

暦の上ではとうに春を迎え、春一番もすでに流れ去ったと聞く。都内とは言っても山間部に位置する呪術高専に春の気配が訪れるにはもう少しかかるだろうが、今のうちに春支度は整えておかなければならない。デスクにおいてあった新入生のリストを手に取り、その経歴に目を通していく。

いくら呪術師がマイノリティとはいえ、それでも毎年四月には新しい学生が入学する。たいていは片手の指で余る人数ではあるが、幸か不幸か「呪い」を得、見いだされた彼らは呪術高専の門を叩くのだ。少ない枚数のそれらに目を通し終え、ひとつ息をつく。

この学校の学生であれば正直言って個性はある。それも多かれ少なかれ、ではない。「多かれ」か「非常に多かれ」か、だ。普通の学校ではないのだから当たり前と言えば当たり前なのだが、きつと次に入学してくる彼らも高確率で個性派だろう。何せ前例がありすぎる。

同時に、これまでに迎えてきた「問題児」たちの顔が次々と脳裏を駆け巡った。ひとりやふたりでないところがまさにこの学校だろう。「……まあ、筆頭はいつらだが」

問題児のなかの問題児、あらゆる意味で桁外れだったあの世代。五条家の当主にして六眼と無下限呪術を併せもつ当世の「最強」五条悟。

呪霊操術を使いこなし、瞬く間に特級へと駆け上がったもうひとりの「最強」夏油傑。

反転術式を操り、他者に治癒を施すことができる希有な人材、家入硝子。

この三人が一代に揃ってしまったのだから、当時担任であった自身の苦勞といったら。またこれが生意気も生意気でろくに言うことも

聞かず、何度正座をさせ説教をしたかわからない。卒業が近いというのにとうとう「最強」ふたりが大喧嘩して校舎を破壊させたときには、頼むからおとなしく卒業してくれと真剣に頭を抱えたものだ。

何とか致命的な状況になるまえに仲直りしたらしいから良かったものの、そうでなければあれは完全に退学ものの事態だった。あのときばかりは喧嘩を止めてくれたあいつに心から感謝をしたな、と浮かんだ別の教え子の顔に、ふと笑う。

「……いや、あいつらも負けていなかったか」

彼らよりも四つ上、家入硝子の実兄、家入海月。

彼もまた教え子のひとりであるが、これまた相当に苦勞をさせられた。何といても理屈にあわないことが大嫌いな怖いもの知らず。貴重な文献を読みたいがために当時の学長の部屋に忍び込んで窃盗をはたらく呪術界の重鎮相手にも平気で言い返すわ、言い聞かせても言い聞かせて直らない奔放さにどれだけ胃を痛めたかわからない。

そして、もうひとり。海月の傍らに在った彼も、また。

脳裏に浮かんだ顔に、小さく安堵する。俺は彼がいたことを覚えている。たとえ誰よりも彼を覚えていたかった海月がその存在を思い出すことができなくとも、俺は。

身長はあの頃の海月より少し低かった。髪は茶よりも紺に近い黒で、少し癖が入っていたように思う。長い前髪をいつもうつつとおしそりにしていたが、何故だか頑なに切ることは拒否していた。

それなりに由緒正しい呪術師家系の出身であり、入学してすぐの頃は海月相手に傲慢に振る舞っていたが、海月が体裁や建前を一切気にしない人間だと気づいてからは仮面も剥がれた。

本当は繊細で、臆病かつ卑屈。呪術師らしい狡猾さも持ち合わせてはいたが、懐にいられた人間に対しては情が深い。海月に心を開いてからは本当によく笑っていたと思う。

そう、いい笑顔で毒を吐き悪戯をしでかす問題児だった。

『海月、こっちに豚来なかった？』

『三匹すれ違ったけどどれ？』

『小デブの眼鏡』

『それ全員当てはまるんだけど。個性ねえな呪術師』

『じゃあその中で一番性格悪そうなグレースーツ』

『たぶん学長室行った』

『さんきゅ。まあ俺の父親なんだけど』

『え、……ごめん?』

『いいよ。じゃあちよつと行ってくる』

いや全く、海月と彼はいつそ泣けてくるほど仲が良かった。性根のひねくれ方と口の悪さの方向性が同じだったのだと思う。

大喧嘩して高専の校舎を破壊した悟と傑も大概だが、任務のどさくさに紛れて気にくわない先輩呪術師の呪具を叩き壊した海月と彼も決して他人のことは言えない。

片やいつも通りの無表情、片や全力の笑顔で「任務中の事故です」と綺麗に声を揃えたあの問題児ども、自主的に正座をして説教を聞く姿勢に入ればいいというものではないと声を大にして言いたい。

後になってその呪術師の素行の悪さが明らかになったのだが、なら最初から素直にそう言えと。

『いやほら、言うて向こう結構地位のある家の呪術師だし? 夜蛾先

生じゃちよつと権力足りないかなって?』

『つて言うから、なら俺らの鬱憤だけでも晴らしとくかって』

『お前らもう一回正座しろ』

俺にできる対処もある、と言えばようやく「ごめんなさい」と棒読みの謝罪を吐いたふたり。ため息をつく以外に何ができたというのだろうか。

本当に、仲が良かった。ともに学び、鍛錬を重ねていた。

呪術界や呪術についての知識に乏しい海月と、一般常識に疎い彼。

表情も言葉も足りなかった海月と、その術式ゆえに他者の機微に聡かった彼。

事実のみを見据える海月と、卑屈と臆病に縛られていた彼。

戦うことを知った海月と、想うことを知った彼。

支え合い、補い合えるふたりだった。きつとこれからもずっとつるんで馬鹿をやっていくだろうと、さんざん呪術界に文句を言いながら

も呪術師として生き残ってくれるだろうと、そう思っていた。飛び抜けた能力こそもってはいなかったが、自身の能力を發揮する術をよく心得ているふたりだったから、きつと大丈夫だろう、と。

わかっていたはずだった。呪術師に悔いのない死などない。ここはいつ誰が死んでもおかしくない、地獄のような場所だというのに。

——海月の涙を見たのは、あれが最初で最後だ。

カタ、と響いた音にはつと肩を揺らす。春の強風に煽られて窓枠が揺れたらしい。ぼんやりしてしまった、と頭を軽く振って新入生たちのリストをケースにしまい、鍵付きの引き出しに入れた。かちや、と鍵の掛かる音がやけに大きく聞こえる。

そういえば今日は妙に静かだ。ちょうど正午になろうかというこの時間、いつもなら学生たちの喧噪や補助監督たちの忙しく歩き回る音が聞こえてくるのだが、今日はそれがない。任務でひとが出払っていて静かなのか、任務が少ないために穏やかなのか。後者だと願いたいところだが、おそらくは前者だろう。この世界は呪いに溢れている。

ひとがひととしてある限り、呪いが絶えることはない。どこかの特級呪術師は呪霊のない世界を目指していると噂に聞いたが、たとえ呪霊が消えたとしても「呪い」は形をもたないまま人間を縛り続けることだろう。

呪いとはすなわちひとの想い。心そのもの、またその揺らぎ。それを祓い去ることなど、どんな呪術師にもできはしないのだ。

再び、脳裏に真つ黒の制服を纏って俯く海月の姿を浮かぶ。

『——あいつの最期の呪いです』

そんな術式もってねーくせにどんな手使いやがった、と棺の前で落ちた静かな声。葬儀が始まる頃には、海月の涙はとうに乾いていた。『何を言われたかは覚えてるのに、どんな声だったか思い出せないんですよ』

驚異的な記憶力を誇る海月が、親友の声を思い出せない、と。今は何とか顔も覚えているけれど、少しずつ記憶が薄れていつているのがわかる、と。

反射的に海月の顔を見た。海月の瞳はひどく空虚だった。哀しみや苦しみ、そういつた全ての感情が抜け落ちてぼやけてしまったような。

ふと、波間に転がる半透明のシーグラスが脳裏に浮かぶ。

『忘れろって、最期に』

彼は決して呪言使いではない。ひとの記憶や意識に作用するような術式をもっていたわけでもなかった。まして脳を誰よりも使いこなす海月相手にそんな「呪い」を掛けるのは至難の業だと言っている。それでも彼は、呪力も何もない「ただの言葉」で海月を呪ってみせたのだ。

『たぶんそう遠くないうちに、俺はあいつのこと忘れると思います。だから俺の前であいつの話はしないでくださいね』

『……それで、いいのか』

どうしようもないでしょ、と頭を掻いた海月の声に、暗さはない。

『呪いは掛けるより解くほうが難しい。生死に関わるでもない呪いなら、下手に抗うより受け入れた方が建設的じゃないですか』

何より、と続けられた言葉のあとに、少し間があった。

黒縁に囲まれた遺影を見上げ、もうちょいマシな写真なかったのかよと家族写真を引き伸ばしたらしい仏頂面に毒づく。確かに彼らしくない硬い表情だった。

『……遺されたんだから、もらっとかねーと』

強がるな、とは言えなかった。

まだ高校一年生に過ぎない少年に、そんなことを言わせてしまった。そんな覚悟を負わせてしまった。噛みしめた唇からはわずかに血の味がした。

そんな大人の後悔など知ったことではないという顔で、海月はすんなりと日常に戻った。変わらず生意気で、怖いもの知らずで、最初から同期などいなかったという顔で。

事情を知らない補助監督が海月の前で彼の名前を出してしまったとき、海月は本気で不思議そうな顔をしていたから、彼の「呪い」は確かな力をもっていたのだと思う。しかし彼の存在が完全に海月か

ら消えたのかといえ、決してそうではなかった。

たとえば、突如として海月は自分が得た情報をデータにまとめ始めた。

海月は脳にインプットした情報を忘れることはない。だからそれまではメモをとる姿すらポーズに過ぎず、教科書やノートの類いも真っ白だったというのに、何故だか急に自身の知識をアウトプットし始めたのだ。

何十冊ものノートを黒く染めた海月にどういう風の吹き回しかと尋ねても「何かそうした方がいいと思っただから」と、本人もよくわかっている顔。忘れたことすら曖昧になっているはずの海月も、おそらくはその「欠落」を無意識に感じ取っていたのだろう。彼から得た知識が失われることなく脳に刻まれているのを確認するように、海月は手を動かし続けた。

海月が彼から教わった呪術界のこと、呪術のこと、些細なこともすべて。ひとつひとつ丁寧なまとめられたデータは、今では多くの呪術師が密かに頼りにする情報の宝庫となっている。

また、海月の表情と口数が増えたことにも驚いた。

『俺は術式あるから多少はわかるけど、それでも他人のことなんか基本わかんないんだって、お互い。以心伝心とか絶対にナイから、海月も自分のこと伝える努力はしろよ。俺で楽を覚えんな』

いつだったか、彼はわずかな傲慢と心配を含んだ声で海月にそう言った。

他者の心を読み取る術式、それをもってしても親類とうまくやれなかった彼の言葉には重みがあった。お前には言わなくても伝わるんだからそれでいいのではという本音は透けて見えたが、それでも海月はちゃんと頷いていたと思う。生意気盛りの不良優等生も、理のある忠告には素直に耳を傾けた。

意思表示の重要性は海月も理解していただろうが、何せ根っからの怠け者。サボれるものならサボりたいというのが正直なところだったのだろう。必要がなければ指の一本も動かさない海月だったが、言わずとも理解してくれた友はもういない。

どこか仕方なさそうではあったが、態度と言葉の両方できちんと表現をするようになった。まあ結果として味方も増えたが敵も増えたというあたり、海月らしすぎて言葉も出ない。敵にまわすと面倒な相手もいるんだぞという彼の言葉は無視することにしたらしい。

それから、——あの反抗期もおそらくは彼の死の影響だったのではないかと思う。

「……歌姫には悪いことをしたな」

決して笑いごとはないのだが、つい口元は緩む。いや本当に歌姫には悪いことをしたと思っっているのだが、反抗期が落ち着いた後の海月のぼつの悪そうな顔と言ったら。

この話になると、決まって海月は同じ言葉を吐く。

『……俺はちゃんと謝りました』

だからもう何も言うなと言わんばかりの、完全に拗ねた子どものそれ。

あれを「反抗期」という表現するのは正しくないということくらいはわかっている。彼の死が海月にもたらした呪いの欠片とでも言うのか、それが歌姫の存在によって外に現れた結果、海月は感情のコントロールを完全に失った。

今でこそ仲の良い先輩後輩の関係を築いているふたりだが、海月の反抗期がおさまるまでの数ヶ月は完全に犬猿の仲だった。海月は「弱いんだからとつとと術師やめれば」と貶し続け、歌姫は「先輩の顔に一発入れるまで絶対やめてやりませんから！」と返し続けた。

俺が何を言おうと解ける気配のなかった呪い。祓ったのは、ほかでもない歌姫だ。

夏の暑さが主張を始めた頃、ふたりはある任務に赴いた。その任務先で何があったのか。歌姫が何をし、海月が何を思ったのか。詳細はわからないが、その日を境に海月はすっかり元に戻った。そんなことありましたっけと言わんばかりの顔で後輩の面倒を見るようになったのだから、まったく現金なやつだと思う。

歌姫も最初はその変わりように戸惑ったようだったが、すぐに海月を頼りにするようになった。もともと面倒見のいいところがある海

月と、義理堅い歌姫。噛み合いさえすれば相性はよかったのだろう。まあ海月としては口には出さずとも「反抗期」について思うところがあるようで、何となく歌姫に甘いのは気のせいではない。歌姫自身がまったく気にしていなさそうだけに、海月が自分の失態を引きずっているのは微笑ましくさえあった。滅多に派手な失敗をしないだけに地味にダメージがあつたのだろう。誰しも恥をかいて大人になつていくのだから海月にとつても良い経験になつただろうと思いつつも、つい愉快に感じてしまうのは本人の日頃の行いのせいと言える。

海月は、確かに彼の存在を忘れてしまった。亡くなった人間のことには忘れることにしていると公言してさえいて、実際にほかの亡くなつたひとのことも意識的に記憶から消しているらしい。それも「何かさうしろつて誰かに言われたような気がしなくもないから」などという曖昧が過ぎる理由で、だ。それだけで十分にわかる。

どれだけ彼の呪いが海月に影響を与えているのか。
どれだけ彼の存在が海月にとつて大きかつたのか。

必要ないからと他者との交流を必要最低限におさえているのも、本当は彼の死の影響があるのではないか、と穿つた見方をしたくもなるというものだ。

もつとも、海月のそんな主張も今は妹や「最強」たちのせいですつかり崩れてしまっているのだが。真剣に嫌そうな顔で彼らを迎える深海の主の顔が思い出され、つい肩が揺れる。

正午の鐘が校内に響いた。おつと、また思い出に浸つてしまった。過去の問題児のことはさておき、また新しい問題児を迎える用意を進めなくてはならない。担任の選出や学生寮の準備など、やらなければならぬ仕事は山とある。さつさと昼食を済ませ、今日の業務は早めに終わらせてしまおう。

そしてその後に、せっかくだから久々に手を合わせに行こうと思う。親類と折り合いの悪かつた彼の墓は、この高専の敷地内にあつた。

高専の職員が管理してくれているとはいえ、滅多に訪れるひとはい

ないはずだ。たまには足を運んで「親友」の様子でも報告してやるとしよう。

海月は相変わらずだよ、皓^{こう}。

お前が遺した想い^{のろ}を、今も大事に抱えている。

琴線

——それは恐怖のろいだった。

「兄貴の反抗期ってどんな感じだったんですか？」

唐突に可愛い後輩にそう言われ、喉の奥に残っていたお酒をぐくりと飲み込んだ。

「突然何よ、硝子」

「学長が言ってたんですよ、兄貴の反抗期は大変だったって」

それから歌姫センパイがそのときのことをよく知ってるって。ひとの嫌がることを進んでやる兄の悪癖をすっかり受け継いでいる硝子は、そう言つてにやりと笑った。

家入先輩の反抗期、と聞いて確かに思い当たる節はある。あれを反抗期と言つていいのかわからないが、今にして思えば確かにあの頃の先輩は相当におかしかった。

度を超えた罵詈雑言、硬質でひやりとした声と態度。合同の実習ではひたすらに罵られ、地面に叩きつけられ、やる気がないならとつとと帰れと頭から水を掛けられた。

指導というにはあまりに過激で執拗。周囲からも諫められていたほどだったというのに、それでも先輩は私に対して辛く当たり続けていた。私も負けず嫌いが発動していなければとつくに心が折れていったと思う。

「反抗期というか、……家入先輩もいろいろあっただけだと思うけど」
あの家入先輩が自身を制御できず、理不尽に走ってしまうほどの「いろいろ」。何となく事情を察してはいるけれど、さすがにそれを確かめることはできずにいる。

「……というか、硝子は知らなかったの？」

先輩が二年生のときの春夏よ、とビール瓶を向ければ、うぐんと唸りながら硝子は空になったグラスを差し出す。グラスから溢れそう

になる泡に口をつけて、そのまま唇をぺろりと舐めた。

「兄貴、高専入ってから長期の休み以外はほとんど帰ってこなかったです。たまに生存確認程度に連絡はしてましたけど……言われてみればその頃かなり長いこと連絡通じなかったかも。忙しいとは聞いてたし、気にしてなかったですけど」

「じゃあきつと間違っても硝子に当たりたくなかったのね。本当シスコン」

「当たり前たくないって……え、じゃあセンパイに当たってたんですかあのクソ兄貴！」

信じられないという顔をする硝子に、つい苦笑を返す。

「ちゃんと謝ってもらったし、気にしてないわよ」

「そういう問題じゃないですよ」

「まーそうだけど。でもほら、あの家入先輩がめちやくちや素直に頭下げたのよ？ それがどれだけレアかアンタのほうがわかるでしょ？」

「……それ本当にうちの兄貴ですか？ センパイの夢の話でもなく？」

「想像以上にレアな経験してたのね私……」

その心底信じられないという顔に、やはりあれは相当のことだったのだと再認識する。

気まずそうに、申し訳なさそうに、自己嫌悪に視線を揺らしながら頭を下げたあのひと。もうしないと約束してくれたあとは、本当によく面倒を見てもらった。

「……それを根に持てない程度には助けてもらったの」

黒い制服を脱いで深海にこもるようになった今でも、変わらず。いつだってあのひとは私にとって「良き先輩」でいてくれたし、そう在ろうとしてくれている。さすがにそんなひとを恨み続けることはできなかつた。

脳に染みいるアルコールが思い出の箍を外していく。ふわりふわりと浮かんで消えていく記憶の数々は、苦々しいものもあつたが今となつては懐かしい。

「……もう何年前？　うわ、数えるのやめよ」

初めて会ったとき、確かあのひとは夜蛾先生に引きずられて大あくびをしていた。どうやら木陰で昼寝をしていたところを捕まったらしい。後輩の前でくらいしやんとしろ、と小言を受けて初めて私に眠そうな目を向けた。

半開きの黒目がちの瞳は、私の自己紹介を聞いても特に揺れる様子を見せず。何を考えてるのかわからないひと、というのが第一印象だった。そのあと私には特に興味もなさそうに振る舞っていたというのに、それが豹変したのは最初の合同実習のときだ。

あまり気の進まなさそうな顔で鍛錬の相手をしてくれた先輩は、私の最初の攻撃を見た瞬間から気配を変えた。

「……あの頃はもう、本っ当に心の奥底から死ぬほど先輩のこと嫌いだったけどね」

「うわ、何したんですか兄貴」

「そうねえ……骨くらいは折られたわ」

「はっ」

「毎日毎日ぼっこぼこ。『弱すぎて無理』『伸びしろが見えない』『何で高専来たんだよ自殺願望でもあんの？』『心身共に殴られ続けたわね』『ちよつと兄貴殺してきますね』」

立ち上がりかけた硝子のグラスにさつとビールを注ぐと、しぶしぶといった様子で硝子は腰を下ろした。

いや本当にあのときは「先輩憎し」の一心でその全部に堪えていたと言っている。あの澄ましたツラに一発くれてやるまで諦めてたまるかと、それだけを考えて毎日毎日必死で鍛錬を重ねたのだ。私を辞めさせたかったのなら完全に逆効果ですよザマーミ口と今もちよつとだけ思っている。

そう、先輩は私に呪術高専を辞めさせたかった。それを先輩自身が自覚していたのかは別として、呪術師なんて諦めてとつと帰れと言いたかっただけなのだ。

真つ黒な呪術高専の制服を恨み始めた季節、先輩と一緒に赴いた任務で私はようやくそれを理解することになる。このひとはずっと「何

か」に呪われていたのだと。

あの日の先輩の等級にあわせた任務は、さすがに私には荷が重かった。先輩の傍を離れないようにと言われていたけれど、実際の呪霊の質と量を見るとそうも言っていられず、……というのはただの言い訳。あれは完全に私の判断ミスだ。

『俺の邪魔だけはすんな』

今にして思えば、任務前に投げられた言葉に意地になっていたと思う。先輩に助けを求めなんて選択肢が浮かばない程度には冷静ではなかった。

その結果が、脇腹を切り裂かれて飛び散る血と痛み。

しくった、と思った。けれど傷はさほど深くない。これくらいなら、と再び呪霊の群れに向かおうとしたとき、真逆の方向に身体が動いた。

脇腹の傷を避けながらお腹の辺りにまわされた腕。

火花が弾けるように瞬時に高まったその呪力。

疲労というよりは動揺で荒く揺れる呼吸の音。

強く跳ねる心臓の鼓動が伝わってくるような気さえした。

『このクソ馬鹿、』

歯噛みするような声には、怒りよりも焦りがある。

呪霊の群れから離れたところでようやく下ろされ、何をするんだと先輩の顔を見た瞬間にその全てが吹き飛んでしまった。

顔色は青を通り越してもはや蒼白。自分のシャツの袖を裂いた布で止血をする先輩の手はひどく慌てていて、忙しく揺れる目は潤んでさえいるように見えた。

極めつけは震える唇が音もなく眩いた、——まるで懇願するような「しぬな」。

嗚呼、とその事実がすんと胸に落ちた。これまで家入先輩から受けた数々の暴力、投げられた暴言、そして「あんなことするやつじゃなかったのに」という周囲の言葉。全てが繋がると、あんなに憎たらしかった先輩の顔が少し違って見えた。

——このひとはきつと、喪ってしまったのだ。

『死にません』

咄嗟に口をついて出たのはそんな陳腐な言葉だ。思わず両手で挟むように触れた頬はぞつとするほど冷たい。それでも怖むことなく、しつかりと目線を合わせる。

綺麗だけど透き通ってはいないシーグラス。心の内を見せないこのひとの瞳は、いつもそれを思い出させた。

『たいした傷じゃないです』

範囲は広いが傷は浅い。痛みだつて、これなら実習で骨を折られたときの方がずっと痛かった。あれだけ私をいたぶってきたくせにこの程度でビビらないでほしい。

ひく、と血も涙もないと思っていた先輩の肩が揺れた。

『死な、……死なねえな』

先輩の呪力が星の瞬きのように揺らいだ。詳星呪法を使ったのだろう、きつと私が死ぬ星など見えなかったに違いない。そもそもがきちんと処置をすれば傷痕すら残らない程度の傷だ。

ひどく強張っていた腕から徐々に力が抜けていく。

『ええ、死にませんよ。舐めないでください』

『……お前いつも威勢だけはいいいよな』

『だけって何ですか！』

『うるつき』

そうか、と先輩はそつと腕を引く。いつもなら考えられないほど優しい手だった。死なないのか、という静かすぎる声は柔らかかった。

『傷おさえてじつとしてろ、片付けてくる。目エ離した隙に死んだら殺すぞ』

『死なないって言ってるでしょーが！ 先輩の顔に一発入れるまでは死ねません！』

ハ、と聞こえた声に思わず耳を疑った。

そんな愉快そうな声を一度も聞いたことがなかった。

『じゃあお前、俺が死ぬまで死ねねえな』

その言葉忘れんなよと私に背を向けた、先輩の顔。

柔らかく細められた眦に、緩んだ口元、軽やかな雰囲気。誰コイツ

と反射的に思ってしまった私は絶対に悪くない。初めて見たこのひとの笑顔はそれくらいに衝撃があった。本当にすぐに戻ってきた先輩に「何で止血してねーんだよ、押さえろって言ったろ」と呆れたように言われるまで、私は自分の目で見えたものが信じられずにいた。

その後は「自分で歩けます!」「うるせー喚くな怪我人」と騒ぎながら先輩に運ばれ、手当を受け、包帯が取れる頃に先輩に頭を下げられた。

『悪かった。……指導にしても感情的が過ぎたし、やりすぎた』

もう言わないし、やらない。

そう言い切った先輩の頭にはたんこぶがいくつもできていて、つい笑ってしまった。後から聞いたことだが、先輩は珍しく本気で反省して自分から周囲に怒られにいったらしい。あんな殊勝な先輩は初めて見たと誰もが口々に言っていた。

肩を震わせる私を何とも言いがたい顔で見る先輩を見て、実はこのひとと結構顔に出るのでは、と初めて思ったことを覚えている。

その日から、先輩は変わった。他のひと曰く「元に戻った」そうだが、私からすれば完全な別人。指導の厳しさは変わらなくとも必要以上の怪我をさせることはなくなったし、何より何がどうダメなのかちゃんと言葉にしてくれるようになった。

『まず逃げ方を身体に叩き込め、お前弱いんだし』

『なに無策で突撃してんだ猪か?』

『自分の術式の特長はお前が一番知ってるんだろ。適当に使うな、上手く使え』

ちよくちよく混ざる余計な言葉にデリカシー皆無なのは素だったかと遠い目はしたけれど、先輩なりに考えて指導をしてきていることはよくわかる。

そのときにはもう、先輩の目がシーグラスのようだなんて思わなかった。

「……歌姫センパ〜イ?」

「あ、ごめんぼんやりしちゃった」

グラスに残っていたビールを飲み干し、硝子が開いていたメニュー

を覗き込む。ビールのおかわりと適当につまみも追加した。

お通しの煮物をつつきながら、でも、と硝子は不満げに口を開いた。「私だったら何があるろうと骨折られた相手に敬語使ったりしませんけどね」

「はいはいそんな顔しない。私がいいつつつてんだからーの」

「センパイあのクソ兄貴に甘すぎませんか？」

「そう？ ……まあ、私が一番キツかったときに助けてくれたのも先輩だったしね」

「え、初耳」

きつと誰にだって一度はある、何をやっても上手くいかない時期。自分の実力が伸び悩んでいるのを感じたり、任務で失敗してしまったり、周囲の気遣いにも素直に伝えることができなかつたり。いらいらしてもやもやして、何もないのに泣きたくなって、でも意地が邪魔をして弱音や愚痴を吐くこともできなくて。

気晴らしすら上手くできないまま、ただ独りで塞ぎ込んでいた。

「先輩もそんな私に気づいてたんでしょうね、一応見てるとこは見るひとだし」

「……気づいたとしてもあの兄貴がまともなフォローするとは思えないんですけど……」

疑わしげな視線にひとつ笑って、運ばれてきた枝豆を口に運ぶ。

まあ実際、何ともあのひとらしい不器用な言い方だったのだから実の妹の予想は正しいと言えるだろう。

その日も容赦なく私をしごき抜いたあのひとは、汗だくで蹲る私の前でやれやれと言わんばかりにしゃがみ込んだ。あのな、と呆れた声が日の傾いたグラウンドに落ちる。

『人間、メシが食いたくなるのは生命維持のために栄養素が必要だからだろ』

あまりに唐突な言葉に、は、と訳がわからないまま顔を上げる。特にふざけた様子もないまま、先輩は呆れた顔のまま言葉を続けた。

『眠くなるのだって睡眠が必要だからで、人間の欲求つてのはそういうふうにしてきてる。……だからもしお前が弱音や愚痴を吐きたいと

思うなら、それはお前にとって必要だったことだ』

とくり、と胸の奥で音が鳴った。先輩の目は、相変わらず私を見つめたまま。

『……む、だだって、言わないんですか』

無駄を嫌う先輩なら、そういうものはすっぱりと切り捨てると思っていた。そしてまた、かつてのような冷え冷えとした視線を向けられてしまうのではないかと。

小さく息をついた先輩は、ひとそれぞれだろ、とどこか投げやりに言う。

『俺にとつては無駄でもお前にとつては無駄じゃねーからそうやってんじゃねーのか。弱音でも愚痴でも、吐いて楽になるならとつと吐き出せばいいだろ』

お前が強くなるのに必要だつてんなら、仕方ねーから聞いてやる。ため息まじりでも、その声に感じた温かみはきつと気のせいではない。ほかでもない先輩のらしくなさすぎる言葉は、私のつまらない意地を突き崩すには十分だった。

「それから先輩、じつと私の話を聞いてくれたの。相槌も打たずに」

「それ本当に聞いて、……本人に聞いている気がなくても脳が記憶してるから一緒か……」

「私としては早くそのデータ消してほしいんだけど」

「データの完全消去は有り得ないらしいですよ」

「つらい」

「どんまい」

よよ、と泣き真似をすれば何となく面白そうな硝子が瓶の口を向ける。注がれる命の水を眺めながら、でもね、と笑った。

「私は嬉しかったのよ」

優しい、と表現するにはたぶん少し違う。けれど私への罪悪感とか、先輩としての責任とか、きつとそういうものでもない。

わからないけれど、私は嬉しかった。また頑張ろうと思えた。頑張れると思った。

『つまり働きたくないと思う俺に労働は必要ないってことだと思っ

だよな』

『先輩、真顔で言わないでください』

ひと通り吐き出させてくれた後もいつも通りの顔で軽口を叩き、じゃあ寮に戻るぞとさりりと行ってくれた。

たまに優しい気はするけどたぶん気がするだけで、デリカシー皆無のくせに下手な優男よりずっと信頼できる。そんな家入先輩に、私はたくさん助けられてきたのだ。

「たかが反抗期くらいじゃ恨めないって」

そう笑ってみせれば、硝子は目を閉じて少し考え、改めて真剣な顔をつくる。センパイ、とかつてないほど決意に溢れた声色に、思わず私も姿勢を改めた。

「やっぱり兄貴もらってくれませんか」

「ごめん、健康で文化的な最低限度の生活を送ってないひとは無理」

生存権ってどこで買えますかね、と兄そっくりの顔で不満そうに言った硝子の顔に、やっぱり兄妹ねとこっさり笑った。

海月の心

——それは思のろいいだだった。

高専に入学して、まず言われたのは「そっくり」。

まあいつものことと言えはいつものことで、何せ顔の造形が本当によく似ているらしい。自分ではよくわからなくとも、これほど言い続けられれば理解くらいはする。

それから言われたのが「仲が良い」ということ。

喧嘩せずに普通に会話するくらいの距離感なのにそれを言われるのかとは思ったが、世間一般では兄と妹はあまり会話をしないものなのかもしれない。ほぼふたり暮らしの状態が長かった私たちは会話をせずには生活が成り立たないのだから、それは仕方がないだろうと思う。

さらにこっさり囁かれたのが「あの家入海月も妹には甘いのか」だった。

「だから兄貴つてばどんな血も涙もないやんちやしてたのかなって。まさか歌姫センパイいじめてたとは思いませんでしたけど」

「はは、それについては海月も本気で反省してるから水に流してやれ。歌姫も気になかっただろう?」

「歌姫センパイ寛大すぎませんか?　というか学長、担任のくせに何もしなかったんですか」

「それを言われると俺としてもつらいんだが、歌姫のほうが譲らなくてな。絶対に自分の力で海月の顔に一発キメてみせるから余計なことほしないでくれと」

「うわセンパイかっこよすぎ」

今日の高専は珍しく静かだった。カルテの整理を順調に終えて気分良く伸びをしていると、ふと窓の外に見えた真っ黒の影。机に縛り付けられていることのほうが多い学長が、しかも高専のなかでもあま

りひとのいない方向へと歩いていく姿だった。

暇ついでに窓越しに声を掛けると、散歩のようなものだというから気まぐれに誘われてしまった。少し日の傾いてきた時刻でも、少し前までであった冬の冷え込みはない。そういえば春も近いのか、と強い風に煽られる髪を手で押さえた。

「硝子にとってはああいう海月が普通なんだろう？」

「……まーそうですね。シスコンなんで」

「はは、俺もご両親から話を聞いていなければ意外だと思ったかもしれないな」

「え、うちの両親知ってるんですか」

あの超がつく自由人夫婦、できるだけ知り合いには会わせたくなかったのだがさすがにそうもいかなかったらしい。一度実家にお邪魔したぞっていつの話だ聞いてない。

「海月が入学した年の夏休み前くらいか。特殊な学校だし一度お話を言ったらご両親揃って迎えてくれてな。いろいろと話をさせてもらった」

「……大丈夫でした？」

「何がだ？」

「いえ、うちの両親、ひとの話聞かないのがデフォルトなんで」

そんなことはなかったぞと返されたが、一瞬目をそらされたのは気のせいではない。やっぱり何かやらかしたかどつい遠い目をする。

別に両親を嫌いということはないが、とにもかくにもキャラが強くて常識を知らない。

「いや、まあ、良いご両親じゃないか。あそこまで我が子を信頼しているのも珍しいと思うぞ」

「そりゃじゃなきゃ幼い子どもふたりほっぽって仕事に没頭なんかしないでしょうね」

「……あまり仲は良くないのか？」

「いえ？ 確かにあんまり家に居なかったですけど、別にネグレクトされてたわけではないので」

今にして思えば、本当にただ兄貴を信頼してのことだったのだと思

う。

昔から兄貴はずつとあんな感じだったらしく、私が生まれた頃にはすでにただの四歳とは思えないほどの落ち着きぶりを発揮していたらしい。しかも父よりも先に私のあやし方を覚え、母よりも先に私の夜泣きに対応してみせたというのだからお前はいつたい何なんだと。『海月、無駄なことは意地でもしない子だったけど、硝子のお世話はいつだって進んでやってくれたのよねえ』

『しかも硝子の成長見るのが楽しいみたいなんですよ。妹を可愛がる姿が微笑ましくて』

そう言つてにこにこ笑つていたのだという。

何でも兄貴に任せていた教育方針の是非はさておくにしても、学長に何喋つてんだよオイ両親。たぶんそれを聞いたら「喋りたかつたから」とか平気で言うひとたちだということくらいは理解している。

しかし兄貴、いつたいいつからシスコン拗らせてんだ。そんな気持ちで顔に出ていたのか、学長はまた肩を揺らして続けた。

「さすが研究を生業にされている方というか、ご両親は言葉の表現が面白いな。何だったかな、お前が生まれたときの話で、……『硝子が生まれたときに、人間としての海月も生まれた』と」

「……はい？」

春特有の強い風が流れる。どこからか樹を離れた葉が目の前を横切った。

これは海月には秘密にしておいてくれよ、と面白そうに学長は言う。

「本当に落ち着いた子どもだったそうだな、海月は。泣きもしなければ笑いもしない、だが言葉を覚えるのは非常に早い子だった、と」

それは聞いたことがあった。両親は脳の発達がほかの子に比べて早いのだろうかという気になかったそうだが、周囲にはかなり奇異の目で見られていたらしい。あの両親でなければ病院にでも連行されていたかもしれない。

『高速演算だったか？ 術式の話聞いて納得しかなかったな！』

『だからきつと情緒より知能が優先的に発達したのねって』

兄貴の術式について知っても普通に納得するだけだったというのだから、うちの両親のぶっ飛び具合が知れようというものだ。

どこまでも海月らしい話だが、と学長は感慨深げに続けた。

「生まれたばかりのお前と顔を合わせたときの海月を見て、ご両親は感動したんだと仰っていた」

両親曰く、私を視界に入れた途端、兄貴の無表情にじわりと赤みが差したのだと。

おそろおそろ手を出すと、反射的にきゅつと掴む小さな指。小さな生命の存在を理解するにつれて、感情をうっさなかつた瞳が緩やかに見開かれていく。

『……いもう、と？』

まるで、その言葉の本当の意味を初めて知ったような。

そうだよ、と微笑ましげに見つめる両親に構うことなく、じつと私を見つめていたという兄貴。一緒にお世話しような、という父の言葉に、兄貴はようやく顔を上げる。

『……うん』

頷きながら、ふにやりと緩んだ頬。それが兄貴の初めての笑顔だったという。

『名前はね、みほしにしようと思うの。海に星って書いてね、』

『それはまって』

そこですつと真顔に戻ったらしい、と遠い目で言う学長に目眩を覚えた。兄貴、いやお兄様、まじでありがとう。おかげであだ名が「ひとで」にならずに済みました。

「いや、まあ名付けについては蛇足だが、……海月が初めて情動を表に出した瞬間だったそうだな、海月が『ヒト』から『人間』になったのはきつとそのときだと仰っていた。だから、海月が硝子を大事にするのは当然なんだそうだ。硝子は妹であると同時に、」

自分の心そのものだから、と。

また強風が通り過ぎていく。今視界の端で飛んでいったのは何かの花びらだろうか。雪が解けたとは言えまだ肌寒いというのに、確かに春は訪れているらしい。

学長の言葉を咀嚼し、胸に落とし込んだ。

同時に駆け上がるこの感情は、言うなれば、そう、

「……学長」

「何だ？」

「おつつもいんですけど何ですかあのクソ兄貴、まじドン引き」

学長はぶふつと顔を背けて嘔き出したが、さすがに笑いごとではない。

いやシスコンなのは知っていたし、私に甘いなんて今さらの今さらだ。その程度でビビるつもりはもはやないが、いったい私の存在に何を見いだしてるんだクソ兄貴。兄貴の心とか人間性とか、おおよそひとに任せるべきじゃないものを私に背負わせないでほしい。

ひとしきり肩を揺らした学長はあくまでもご両親の考えだからと軽く手を振るが、いやそれでも知りたくなかった、気まずいにもほどがある。

「とまあそういう話を聞いていたので、お前に甘い海月を見ても俺は特に驚かなかったという話だ。確かに驚いているやつは多かつたがな」

海月の人間らしさはわかりにくいから、と歩く学長の足は思いもしない方へ向けられた。呪霊を祓うために命を賭し、遺体の引き取り手のいなかったひとびとが眠る場所、集団墓地のある方向だ。散歩にしても気軽に立ち寄るような場所じゃない。

学長、とつい声を掛けるが、少し付き合え、と学長は足を止めない。

「……海月には秘密だぞ」

さつきも同じ台詞を聞いたが、声色はまるで違っていった。それだけで悟る。この先に、眠っているのは。

ささやかな墓石は比較的新しい。管理の職員がいると聞いているから、きつと丁寧に入入れをしてきているのだろう。ほかのお墓同様、綺麗に整えられていた。

幼い子と視線を合わせるように、学長は墓前で膝を折る。

「硝子に会いたがっていたよ。海月が気に掛ける妹はどんな子だろうって」

そつくりと聞いてさらに会いたがっていたな、という軽い言葉に無言を返す。何と返したらいいのかわからなかった。

きつとここに眠っているのは、兄貴にとって大事なひと。

私の話をする程度には心を許し、そして今は忘れてしまったひと。どんな子だろうって、それはこつちの台詞だ。高専に入る前も一応のひと付き合いはしていた兄貴だが、基本的に広く浅く。私の知る限りでは特定の親しいひとをつくることなどなかったと思う。

そんな兄貴と親しく付き合っていたひととは、いったい。

「……どんな変人だったんですか？」

限らない本心に、しゃがみ込んでいた黒い影がかくりと脱力した。

「……否定はせんが、もう少し何かないか、硝子」

「すみません、根が正直で」

「まあ今の台詞を聞いて『それでこそ海月の妹』と腹を抱えて笑うようなやつだな」

「変人じゃないですか」

「仕方がないだろう」

海月の親友だぞ、と。返された言葉が、重い。

墓石から目をそらさないまま立ち上がった学長は、懐かしむように続けた。

「仲が良かった。悟と傑を見ているとよく海月とこいつを思い出す」

「……クソガキ二匹じゃないですか」

「クソガキだよ。何度正座させたかわからん」

それで反省するほど殊勝でもなかったがな、とそつと両手をあわせた学長。私もそれにならって手を合わせ、目を閉じた。

初めましてナントカさん、と何となく心の中で語りかける。

私が海月の妹の硝子です。そつくりらしいですが顔は似ていますか。

ね。あんな兄貴と仲良くしてくれるなんて、貴方もとんだ物好きですね。

学生時代の兄貴はどうでしたか。何を話しましたか。喧嘩とかしましたか。

私も、——私も、貴方と会って話してみたかった。

一緒に酒でも飲みながら、兄貴の昔話のひとつくらい語ってみたかった。

きつと、最高に楽しかっただろうに。それが残念でなりません。

自己満足に過ぎない言葉を終えて、目を開く。すでに学長は手を下ろしていた。随分長く話しかけていたんだと言い当てられて、ふつと口元が緩む。

「兄貴の悪口で盛り上がりたかったですねって話を」

「それはいいな。海月が真剣に嫌がりそうだ」

「最高じゃないですか」

そつと、名前も知らないそのひとに背を向ける。名前を聞く気にはならなかった。たぶん、知らないままでいいこともある。

強風に背を押されるように足を進めながら、墓地を離れたところまでぼつりと言葉が落とされる。

「……付き合わせてすまなかったな」

「いえ、暇だったんで」

それからしばらく無言のまま、校舎に向かって足を進める。それは気を使うような沈黙ではなかった。きつと思いい出に浸っているだろう、いつもより足取りが遅い。

何となく視線を下げる。雪解けたあとの土は、水の匂いが強い。

「……学長」

何を言うつもりもなかったのに、私の口は勝手に動いていた。

慰めのつもりはない。弔いのつもりもない。ただ私がそうしたいと思うから。

「兄貴のかわりに、私が覚えておきます」

家入海月の親友が、今も高専の片隅で眠っているということ。

そうか、と応えたサングラスの奥の瞳が切なげに細められたような気がした。

走馬灯の果てに

——それは形見のろいだった。

何かか俺の頭上で太陽の光を遮っている。

空はよく晴れているのに、ぽたり、ぽたりと水が降ってきた。

大粒の滴は不思議と温かく、光を反射してきらりと瞬く。

その光をよくよく見つめると、ほのかに浮かんでは消える影が見えた。

まるで星のように揺らめいて、輝いて、くすぐったくて、優しい。その正体に気づいて、嗚呼、と思った。

——これは、走馬灯だ。

*

海月の名前を聞いたとき、妙に納得したのを覚えている。

感情が色のように見える俺にとって、第一印象というのはすなわち相手の「色」。海月が纏う色は淡く澄んでいて、目を懲らさなければ見えないほどだった。けれど感情が薄いとか乏しいとかいうわけでもなく、確かにそこに満ちている。

「……クラゲ？」

「読み方はミツキ。別にクラゲでもいいけど」

「よくこの漢字当てたね。すごいセンス」

「俺もそう思う。そっちはこれ、ヒロ？ アキラ？」

「普通に読んで。皓こう」

そっか、よろしく、と。ゆるりと揺れた、淡い色。

まるで、海の底で息をしているように見えた。

*

「あ、これも知らない感じ?」

入学したての頃、俺はかなり感じの悪いやつだったと思う。正直に言おう、海月を見下して優越感に浸っていた。

一般家庭出身の海月が呪術界のことを知らないのは当たり前なのに、海月の無知を見つけてはあげつらった。別に海月が特別気に入らなかったとかではなく、ただの自己防衛だ。俺はお前より上なんだぞと意味もなく示して、自尊心を保とうとしていた。自分でもまじめみつともなかったと思う。

だが、海月はそんな俺にも一切動じなかった。そうなのか、知らない、助かる、ありがとうと、素直に自分の無知を受け止めた。

「ついでにこれも教えてくれ」

しかも、それならこれはどうなんだと質問してくる始末。あまりに動じない海月にだんだんと自分の小ささを思い知らされ、ますます嫌味に拍車が掛けたがそれでも波ひとつ立ってる様子はない。

しびれを切らした俺はどうとう尋ねた。

「お前怒るとかないの?」

きよとんと目を丸くした海月は、心底不思議そうに返した。

「教えてくれるじゃん。何を怒んの?」

感情の色は澄んでいる。嘘の気配は微塵もなかった。それどころか感謝の色さえ見えてこいつマジかと。嫌味を言われようが何だろうが、海月にとって俺は「知らないことを教えてくれるやつ」でしかないらしい。

こいつの中には負の感情とかないんだろうかと一瞬疑ったが、負の感情をもたない呪術師など有り得ない。でも、俺に対してそういう感情はないのだと纏う色が語っている。何だか妙に頬が熱かった。

澄んだ感情の中に「心配」の色を一滴垂らした海月は、熱でもあるのかと尋ねてきた。

「……ないよ」

こうして俺は、出逢ってから一ヶ月も経たないうちに白旗をあげたのだった。

*

ちゃんと話してみれば、まあ海月は話せないやつでもなかった。

感情より理屈でものを話すぶん、俺としては話しやすくさえある。海月も口数が多いわけではないが、俺と話すことを嫌がる様子は見せなかった。

「……それ、術式つかってんのか？」

「え？」

「何で俺の限界のタイミングわかんのか」

入学して最初の数か月、海月はとにかくよくぶつ倒れた。まあ無理もない、何せびつくりするほど呪力が少ない。術式や呪力を自覚して間もないということもあり、かなり頻繁に呪力切れを起こしていた。海月なりに自分の限界をはかっていたのだろうが、残念なことに海月の限界に気づくのは俺が先。この日もせっかく俺がその辺にしいたらと親切に教えてやったというのに、それでも呪力を使い続けた海月はぶつ倒れた。汗だくの野郎を運ばされる俺の身にもなつてほしい。

校庭脇の木陰に海月を転がし、まあね、と呆れながら答える。

「呪力の流れと感情の色を見てればわかる」

「へえ……」

「ちなみに俺は海月が意外と甘いもの好きなのも知ってるし、チョコより餡子派なのも知ってるし、夜蛾と初めて顔合わせたとき真剣に疑ってたのも知ってる」

「率直にコワイんだけど何見てんの？ いや甘いモンはともかくどう見ても夜蛾って堅気じゃねーじゃん、あんなガタイのいい悪人面が教師って言われても信じらんねーよ」

「わかる。ま、というわけで俺に嘘はつけないと思ってね」

「つく必要もなさそうだし、つかない」

そう言っつて海月は眉間にしわを寄せ、目を閉じた。めまいがひどいらしい。

俺の術式を知っても、海月は特に何の感情もなくそれを受け入れた。普通、多少なりとも心の内を悟られてしまうのは嫌がるものだが、海月はむしろ必要以上に喋らなくても俺が理解してしまうことを楽だと思っている節がある。後ろ暗いことがない人間の余裕なのだろうか。

ぱさりと海月の顔にタオルを落とす。ふわ、と海月の色がわずかに変わった。変わり方が妙に極端で、これは、と思わずジト目になった。「……いや色で感謝伝えたつもりになるのやめな？ 言葉にしなよ」

「これも伝わるのか。すげえな」

ありがと、と小さく聞こえた言葉にため息をつく。

「……限界は見定めてやるから、ちゃんと俺の忠告は聞きなよ。呪力操作に必死なのはわかるけど、ぶっ倒れてばっかじゃかえって効率悪いから」

「……ん。助かる」

それ以来、海月は俺の言葉をよく聞くようになった。いやそれはいいのだが、コイツときたら俺が察していることを理解すると言葉と表情をサボるようにもなった。確かに俺はわかるんだけどさ、そういうのやっぱりよくないと思うんですよねこの野郎。

仕方なしに説教をしたときの海月の顔は完全に面倒くさそうだったが、ほんのわずかに申し訳なさそうな色が見えたので許さざるを得なかった。何コイツずるい。

*

とはいえ、海月の成長具合は凄まじかった。

一度教えたことは決して忘れないし、体術にしても呪力の扱いにしている。術式的に「効果的な努力」をするのが得意なんだとしれっと言っていたが、俺だって幼少から稽古を積んできた自負がある。そう簡単に抜かされてはたまらない。

「いや、普通にまだお前のが強いだろ」

「そこで『まだ』がつくのが正直だよねムカつく絶対抜かさせないから」

「まじで負けず嫌いだな」

皓、と海月は呆れたように俺の名前を呼ぶ。名字で呼ばれるのは慣れていないと言え、あつさりとは海月は俺を名前で呼ぶようになつた。そのときはまだ死ぬほど嫌いな家の名前で呼ばれたくないとは言わなかったが、気づかれていたのかもしれない。海月は気遣いとかデリカシーというものとは縁のない人間だったが、気づかないふりをするのは得意だった。

俺はそれを優しさだと思つたけれど、たぶん海月にしてみればただの面倒ごと回避でしかない。それでもいいと思つた。

受け取る人間が善と思えば偽善も善。俺が優しさだと勝手に思つていればいい。

*

任務や実習で外に出ることが増えると、今度は俺の世間知らずが露呈した。

幼い頃から暇さえあれば鍛錬という生活を送っていた俺は、外で買いい食いをするこすらすら稀も稀。恥ずかしながらラーメン屋の食券の買い方すら知らなかったのだが、海月がそれを笑うことはなかった。

「知らないことは知ればいい」

さらりと言つてラーメンをすすする海月に、ひとを見下すような色はなかった。ただし慣れないラーメンを四苦八苦しながら食っている間に俺の餃子を一個かっさらつていったときは確かに面白そうな色が見えた。ムカついたので味玉を奪つてやったら、一個しかないもの取るか普通、と信じられない目で見られた。うるさいお前が悪い。

ジャンクフードの類いも食べたことがないという、じゃあ今度なと軽く返される。

「……海月はそういうのよく食うわけ？」

「いや？ 妹が駄々こねたときだけ、仕方なく」

海月に妹がいることを知ったのはそのときだ。

こういうやつの妹ってどんな子なんだろう。ちよつと聞いてみたい気もしたが、下世話な気もしてやめた。だいたい海月は俺の家族のことを聞かないでくれているのに、俺だけ聞くのはフェアじゃない。俺が自分の家族のことを話してもいいと思えたときに聞いてみようと思った。

*

「もしかして呪術師ってクズしかいねえの？」

「おめでとう海月、キミはいま真理に到達した」

「まじかよやべえな」

「やべえんだよ。ではここで残念なお知らせがあります」

「俺もお前もその呪術師のひとりですって？」

「はい大正解」

世知辛えな、世知辛いね、と軽口を叩く俺たちの足の下にはうつとおしく絡んできた呪術師どもが転がっている。学生相手に粹がるうえに相手との力量差もわからないとかいつそすがすがしいほどの雑魚だ。

どうせ俺たちが戦闘向きの術式をもっていないことをどこかで聞きつけていじめに來たのだろうが、まったく舐められたものだ。確かに呪術師の強さは術式さいのうに大きく左右されるが、術式だけで決まるのなら呪力の扱いや体術の鍛錬など必要ない。

幼い頃から鍛えてきた俺はもちろん、驚異的な学習能力を誇る海月がこの程度の雑魚に負けるはずもなく。

「また夜蛾に説教食らうかな」

「でもこれ俺ら悪くなくねえか。喧嘩売ってきたのこいつらだぞ」

「せめて一発くらい殴られとけば良かったかもね」

「何されるより先に飛び蹴りかましたのお前な」

「いやいや、海月の拳のが早かったよ」

「都合良く記憶改ざんすんな」

仕方ない、と海月は適当にクズの足を掴んだ。

「夜蛾に見つかる前に捨てに行くか」

いまだに表情筋が死に気味の海月だが、それでも零れ出る表情はある。愉快だと示す感情の色に、その色に相応しい緩く上がった口角。いつもそんな顔してればいいのに、と反射的に思う。俺もつられて目元が緩んだ。

「裏山あたりがいいかな。海月、夜蛾と遭遇率の低いルート探してよ」「確かいま会議だつってたか？ データ足りねえから確率微妙だぞ」

そのあと結局見つかって正座はさせられたのだが、クズどもの台詞を一言一句違わず繰り返してみせた海月のおかげで説教は短めに済み、特に処分もなく。頼むから穏便に事を済ますことを覚えろとため息はつかれたが、それは心外だ。

「殺してないんだからかなり穏便では？」

「その倫理観って呪術師的にスタンダードなの？」

そうだよ、と言い切るより先に夜蛾の拳が落ちる。

海月に余計な情報を入れるなって、そりやもう完全に手遅れだ。

*

海月は基本的に授業や実習には真面目に取り組んでいる。真剣に話を聞くし、わからなければ質問は欠かさないし、地味にキツイ体力作りも手を抜かない。だからてつきりかなり真面目な性格だと思っていたのだが、わりと早いうちからそれが勘違いだということには気づいていた。

「……海月くんよ、もう午後なんだよね」

「……………るせ」

「いくら休みでも寝すぎ！ さっさと起きろ飯を食い！ 身体づくりには規則正しい生活習慣と適切な栄養摂取！ どうかお前が読みたいっていうからわざわざ近寄りたくもない実家行って呪術の歴史書取ってきたんだけど！ それを寝て待っているとかすげー腹立つん

「だけどー！」

「……まだねるからほんだけおいて……」

「はい俺は怒りました布団剥ぎます三、二、一！」

そして布団を剥ぐと同時に俺の顔面に目覚まし時計が飛んできてぶち切れたし、海月のベッドは木片になったし、壁に穴が開いて隣の俺の部屋と繋がったし、夜蛾には盛大に怒られて足の感覚がなくなるまで正座させられた。

「……やることねえなら寝てえじゃん……一日二十二時間寝てえじゃん……」

「さすがに限度がある。ナマケモノか？」

「残念、コアラ。ナマケモノの平均睡眠時間は一日二十時間だ」

「別に睡眠時間の長い動物の話はしてないんだよね」

意外と皓は真面目で勤勉だよなと平気な顔であくびをする海月に、つい右手が拳をつくるが何とか抑える。休みの日に二度も夜蛾の説教を受けたくはない。込み上げた怒りをため息で流し、俺より少し高いところにある寝癖のついた髪を見つめた。

「俺がどうかじゃなくて、単純に海月が怠惰なんだろ」

「バレたか」

いやバレたかじゃねーんだわ反省しろ。

*

そんな海月も、たまにふらりと姿を消すことは知っていた。寝坊助の面倒くさがりのくせにどこに出かけてるんだとからかうように尋ねると、海月は特に気にした風もなく水族館だと答えた。昔から気分転換によく訪れる場所であるらしい。

「皓も行くか？」

話のついでに誘われて一瞬悩み、結局領いた。水族館というものに行ったことがないというのもそうだし、海月がわざわざ足を運ぶ場所というのが気になった。

ゆるゆると寄り道をしながら着いたそこは、本当に海の中のように

だった。あまりに見慣れない世界に、つい心からの言葉が素直に口から飛び出した。

「……魚ってまじで泳いでるんだ」

「待って。いやまじ待って、それ本気で言ってる?」

ちよつとさすがにそれは、という顔をした海月は数秒間頭を抱えたのち、何かを決心したような様子で口を開いた。纏う色はこの上なく真剣な色をしている。

「解説してやるからわからないことは全部聞け。大半は答えられると思う」

「苦悩と哀れみのこもった視線をどうも。何、実は魚博士の方ですか?」

「両親がな」

「は?」

聞けば両親が海洋学の研究者なのだという。ああそれで名前が、と言いかけたが、いや海に詳しいことと実の息子の名前をクラゲにすることはイコールじゃないなと思いついて黙った。何となく海月が遠い目をしていたような気がする。

それならばと目の前の海を泳ぐものを指さして適当に尋ねてみる。水槽横の説明書きより数倍詳しい解説が返ってきたことには感心を通り越して引いた。ハリゼンボンの針は実は千本もないとか別に知らなくても生きていけると思うね俺は。

でもせっかく聞いたものを忘れるのは屈辱なので、ちゃんとノートに書き留めておくことにした。海月に「前に解説しただろ」とだけは言わせたくなかった。

*

それからちよくちよく海月と水族館に出かけるようになった。海月が立ち止まるのはいつもクラゲの水槽の前で、本当にこいつ自分の名前好きなんだなど。

淡い光の中を漂う傘を見つめているときの海月は、ほかのどんなと

きよりも穏やかな色を纏っていた。まるで深海に差し込んだ光のよ
うな色だ。

クラゲのダンスを見つめながら、俺たちはいろんな話をした。不思議と、そこにいるときはいつもより素直にものを話すことができたと思う。

俺の家、諫見家は他者の心を読む、いわゆる覚の家系であること。
御三家の一角、禪院家の傘下にある家系であること。

俺はせいぜい感情の色が見える程度だが、より強く術式を継いだ兄がいること。

術式重視の家でずっと兄と比較され、出来損ないだと冷遇され続けてきたこと。

術式で劣るならとほかの面を必死で磨いたが、それでも認められなかったこと。

ぽつりぽつりと、少しずつ吐き出した呪詛。海月は時折質問をはきみながら、じつと耳を傾けてくれた。聞き終わったあとの海月は、ただ首を傾げていた。

「つまり皓の兄貴は術式持ち腐れの貧弱野郎ってことであってる？」

「うっわ、容赦なさすぎてサイコ。実際俺より弱いからあってる」

「優遇される理由が少しもわかんねえんだけど」

「理屈じゃないんだよ、こういうのは。千年単位で変わってない価値観なの」

わーくだらねー、と棒読みで呟く海月に、軽い笑い声を返す。海月ならそう言うだろうと思った。むしろ予想通りすぎて面白い。

ただ、想像してた以上に面倒な世界だな、とつぶやいたときの感情の色には驚いた。複雑に混ざった色は、心配と不安、それに焦り。おおよそ海月には似つかわしくない色だ。どうかしたの、とつい尋ねれば、一瞬目を見開いた海月はちよつと考えてから口を開いた。

「……妹がいるって話はしただろ」

四つ下の、それはもう生意気で可愛くない、けれどずっと面倒を見てきた妹のこと。

他者に治癒を施せる稀少な存在であること。

呪術界が真に欲したのは海月ではなく妹であること。

高専への入学に反対するつもりはないが、不安はあるということ。

「……正直、ここまで前時代的な価値観が根強いとは思ってなかったから」

「あー……」

稀少な力をもっていて、しかも女の子。そりゃ呪術界が見逃すはずもない。

海月も兄として妹を心配したりするのかわ、とちよつと意外にも思ったが、さすがに茶化そうとは思わなかった。むしろ少し、羨ましさすら覚えたかもしれない。

口では可愛くないとは言っても、きつと仲の良い兄妹なのだ。良い、家族なのだ。

「……妹ちゃん守るなら、やっぱ海月が強くないとだな。この世界、強ければそれなりに我は通せるから」

「ああ。どちらにしろ死にたいわけでもねーし、真面目にやるよ」

鍛錬は、と言葉を付け加えた海月について嘖き出し、ペしペしと海月に肩を叩く。なんだよ、と嫌そうに言う海月にまた笑って視線をクラゲの水槽に戻した。

背負っているんだ、と思った。

いつも好き勝手やっていますという顔をしながら、妹の存在に縛られている。

海月としてはきつと全部まとめて「自分のため」なのだろうし、それを当然こととして受け入れ、妹ちゃんを重荷になど決して思っていない。

でも、確かに背負っている。縛られている。——呪われている。

「……海月、」

きつとそれを言葉にしたら否定するのだろうか。それらしい理屈と解釈を並べ立てて、大事な妹が「呪い」などと言わせたりはしない。その思考そのものがすでに呪われているのだと、海月は気づいているのだろうか。

目の前ではライトに照らされたクラゲがふわふわと揺れている。

確かにこれは綺麗かもしれない。筋金入りの面倒くさがりがわざわざ見に来る理由もわかるような気がした。

「……会ってみたいな、お前の妹ちゃん。可愛い？」

「可愛くねーつつつてんじやん。びっくりするくらい俺に似てる」
「えっ何それ気になる」

会わせて会わせて、と海月に詰め寄るが、どうせ四年後入学してくるからと取り合ってはくれなかった。さてはシスコンかと冗談に見せた本音を投げれば、素知らぬ顔で足を踏まれる。このクソ同期、即断即決が過ぎるので攻撃的な色に気づいてからだと避けることができないうのがムカつく。

まったく四年後のことなんか話してる時点で海月はまだまだこの世界への認識が甘い。やりたいと思ったことは今すぐにも行動するべきだ。

呪術師なんて、いつ死んでしまうかわからないのだから。

*・

走馬灯はまるで星のように駆け巡った。

死に瀕したとき、生き残るための方策を脳から引き出そうとして走馬灯のように記憶が一斉に蘇るのだという話を聞いたことがある。残念ながら蘇った記憶のなかに俺を助けてくれそうな情報はなかったが、妙に気分はいい。星のように駆け巡る記憶、きつと海月がいつも術式で見つめている景色はこんな感じなのだろう。

死の間際に、お前が見ているものを見れた。辛かった記憶より苦しかった記憶より、お前との思い出ばかりが俺の脳を駆け巡った。それはひどく幸せなことのように思えた。

こぼり、と口から血の塊が溢れ出る。

「こう、……だめだ、何で、……見つからない、星が、」

ぼた、ぼたりと血だまりに滴が溶け込んでいく。

いいよ、と口を動かしたが、海月には届いたのだろうか。

海月の呪力がちらちらと瞬きながら脳を回しているのがわかる。

ただでさえ海月は呪力が少ないのに、そんな使い方をしてはすぐに呪力切れを起こしてしまう。せつかくあんなに呪力操作の訓練付き合ってやったんだから、「俺の生存」なんて存在しない「星」を探して術式を無駄にまわすのはやめろというか。

わかってている。俺は死ぬ。何てことない任務の、ちよつとした不確定要素のせい、こんなにも簡単に。呪術師の死なんてものは、そんなものだ。そんなものなのだ。

痛みよりも寒々しさが勝る。生命が血液とともに流れ出していくようだ。かろうじて動く手を伸ばして、海月の胸元を掴む。黒の制服にべつとりと血の手形がついた。

「み、つき、」

「喋るな皓、まだ、」

「泣くな」

なくなよ、と何とか口を動かす。

海月の顔が歪んだ。涙の雨はやむ気配を見せない。

降り積もり、積み重なった感情で海月の色がドス黒く染まりつつある。まるで墨をぶちまけたような色。これは、——恐怖だろう。

どんな呪霊を前にした時だっで見せることのなかった、恐怖と絶望の色。笑えるくらい似合わない、強く重苦しい負の感情。

嗚呼、本当に似合わない。何てこった、強すぎる色は今後に影響を残すというのに。

「…………いやだ」

何だよいやだっ、と笑い飛ばそうとしてできなかつた。ごほ、と気管に入った血を吐き出す。反動で胸元から外れた手を海月に取り除く。

その手は温かかった。同時に俺の手が冷たいだけだと理解した。

「意外、と、なきむしか、おまえ、」

「うるさい、…………泣くのなんて、初めてだ」

「…………まじ?」

「お前のせいだよクソが」

こんなもの知りたくなかつた、と。いつも貪欲に知識を求める海月

の口から、まさかそんな言葉が出るとは思わなかった。

「……知りたく、なかったか？」

「知りてえやつがいんのか」

「はは、……じゃあ、海月、」

そうだよな、知りたくなんかなかったよな。

俺も、お前のそんな色なんて見たくなかった。

淡く光の差し込んだ深海のような、透明なのに満ちている、柔らかいのに眩しい、海月だけの色。それが俺のせいでそんな風に塗りつぶされてしまうのなら。

いつそのこと、——忘れちまえよ、全部。

「俺のこと、忘れて」

涙に濡れた瞳が見開かれる。

忘れるのが海月にとってどれだけ難しいことなのかはわかってい
る。でもそこをなんとか頑張つてほしい。どうか、二度と思ひ出さな
いでほしい。

お前はもう、背負っている。

お前はもう、縛られている。

お前はもう、呪われている。

いい「お兄ちゃん」やってんだろ。だったら頭の中それだけにしと
けよ。妹ちゃん大事にして、それ以外のどうしようもないことなんて
全部忘れちまえ。

お前の覚悟のろいも心いも、どうか濁らせないでほしい。

「……ちゃんと、わすれなよ」

囚われなくていいんだ、俺になんて。

俺のために泣いてくれた。

俺の手を取ってくれた。

俺がいなくなることを恐れてくれた。

俺の家族だって、きつとそんなことはしてくれないのに。

だから、——いいんだ。

「……しぬやつのごとなんか、わすれたほうがいいんだ」

お前の涙も、お前との思い出も、その恐怖と絶望の色も、全部俺が

持っていく。

「諫見皓の、……さいごの、呪いだ」

呪力も何もない言葉だが、きつとお前の「脳」は俺の呪いを受け入れるだろう。だってお前、そんな性格してるくせに懐に入れた人間には甘いから。

海月は、きつと俺の形見を拒むことはない。

「み、……っ、き、」

身体力が抜けていく。目の前が歪み、徐々に光が薄れていくようになった。俺の手首を握っていた海月の体温も、もう感じる事ができない。

ごめんな、俺、呪術師だから。最後にお前のために何かできないかなって考えても、結局呪うことしか思いつかない。ほら呪術師ってクズばっかだからさ、ひとのために何かするとか根本的に向いてないんだって。薄れゆく意識の中でそんな言い訳を並べた。

もう、何も見えない。夜の帳よりも深い暗闇に、その声が響く。

「……皓、お前、まじでひでえやつだな」

震える声で落とされた恨み言と、もうひとつ。

「」

暗闇に溶ける最後の一瞬に聞こえたそれは、最高の呪いの言葉だった。

海月の青春

「何でちゃんとデータ化していくんないの？ 探すの大変なんだけど」

「学生時代に書いたもののデータ化は気分で作ってたよ。文句があるなら他あたれ」

んもーとか言いながら口を尖らせる特級クズ、率直に言って気持ち悪いので可愛い子ぶるのはやめてほしい。

奇跡的に高専の教師を続けている五条は、たまにこうして学生たちのために必要な資料をあさりに来る。五条曰く「まじで資料がないとわからない子っているんだね、作るのメンドーだし助かる〜」とのことだが、勝手のわからない資料の山から目的のものを探し出すほうが面倒だと思うのだがどうだろうか。まあ五条の頭にある知識は五条家にとつての「公式」に偏っているだろうから、他家の視点を含めた資料が欲しいということなのだろう。

部屋の隅に積まれたファイルやノートには、俺がこれまで聞きかじったすべてが書き留められている。俺からすれば別に書き出す必要はなかったし、今も残しておく必要はないのだが、何となく捨てるれないまままだ。ちなみにどの山のどの資料を五条が探しているのかも当然覚えているが、そこまで協力してやる義理はないので教えてやらない。

「あれ？ クラゲさん、何かクラゲさんの字じゃないやつ混ざってるけど」

「俺のじゃないやつ？」

振り返ると、これ、と五条が一冊のノートを掲げていた。古ぼけた水色のノートは見覚えがあるようでない。いや違う、知っているけれど思い出せない。記憶の海からその情報を引き出そうとすると、まるで重しを付けたように海の底で動かない「何か」。俺の脳が、思い出しではいけないと叫んでいる。

「しかも中身、何これ魚のスケッチと解説？ うわ、後半ほとんどクラゲだし」

めちやくちやスケッチ上手いけどさ、と五条が開いたページの上を泳ぐ海の生き物たち。鉛筆で丁寧を描かれたそれらはどれも高専から一番近い水族館で展示されている種類だ。スケッチのそばに添えられた解説にも何となく引つかかるものがある。きつとそれは、俺ならそう解説すると思われる内容ばかりだからだろう。

脳の奥でぼた、と滴の落ちる音が聞こえた。胸に響く心音がうるさい。

何も思い出せないが、思い出せないことが答えだということにはわかる。確かにそれは俺の字ではなく、そのノートは俺のものではない。ここから一番近い水族館にいる海の生き物のスケッチ、俺が解説しただろう内容、それを丁寧に書き留めたノート、思い出せないくせに懐かしいという感情。涙など流れてはいないのに、頬に冷たいものが流れる感覚だけが蘇った。そう、「蘇った」と俺は捉えた。

俺は記憶にある限り、涙を流したことなど一度もないはずなのに。

「……クラゲさん？」

どしたの、と首をひねる五条の手からそのノートを取る。一文字一文字刻まれるように書かれた字には、几帳面な性格がにじみ出していた。

パラパラとページをめくっていくと、最後のほうのページの隅に解説とは違う内容のコメントを見つけた。薄く印刷された罫線は無視して走る、ちよつと雑な字だった。

『たぶん、海月の一番のお気に入り』

そのページに浮かぶクラゲは、確かに俺がよく眺めている種類の。く、と喉の奥が揺れる。そんなこと誰にも言ったことはないはずだが、どうやらこのノートの持ち主にはバレていたらしい。

なになに、と相変わらず五条は愉快そうにそんな俺の顔をのぞき込む。

「思い出し笑い？ やだクラゲさんてばむつつりすけべ〜」

「言ってるよ。五条、これ戻しといて」

閉じたノートを返すと、ふーん、とそいつは興味深そうにノートを眺める。そしてからかうような色を引っ込め、少しだけ柔らかい声

で、言った。

「仲、良かったんだ？」

——仲が良かったかって？ 存在を覚えてもいないのにわかるわけがない。でも、わかる。我ながらひどい矛盾だが、わかってしまうのだ。

仲が悪かったら、こんな古ぼけたノート捨ててもせずに持っているわけがない。

仲が悪かったら、俺の解説どころか好みまでノートに書き留めるわけがない。

何も覚えていなくても、ちりばめられた事実が語っている。このノートの持ち主が、俺にとつてどんな存在だったのか。

五条の問いには答えずに背を向ける。クラゲさんてば照れ屋さ〜ん、なんて言葉が聞こえてきたが軽く無視をした。俺はお前の安い挑発に乗るほどガキじゃありません。

え〜〜〜と精神年齢が六歳から成長しないクズは椅子の背もたれに手を置く。

「いーじゃんクラゲさん、ちよつとくらい昔話してくれたってさ」

「お前に昔話して俺に何の得があるんだよ」

「娯楽に損得を求めるなんて野暮って言われない？」

「ひとの昔話を娯楽と言い放つやつに言われたかねえな」

教えて〜〜〜とガタガタと背もたれを揺らし始めたクズに舌打ちをして、仕方なく振り返る。

思いのほか近いところにあつた黒の目隠しは相変わらずだが、やはり今日の五条は何となくおふぎけの色が薄いような気がした。何となく、目隠しの下六眼は柔らかく細められているように思える。

まあ一言で言うところ「何か綺麗な感じの五条ってこんなにキシヨいのか」が俺の感想なわけだが、そこは特級クズの日頃の行いなので仕方がないと思う。

それで、と五条は言葉を続けた。

「誰なのこのノートの持ち主は。どういうひとだった？」

抽象的が過ぎて答えにくい問いに、ついため息が出る。

誰と言われても顔も名前もわからない。たぶん夜蛾ならわかるの
だろうが、わざわざ確かめる気もなかった。この呪いは解いてはなら
ないと俺の脳が告げている。

だから、俺に言えるとすればせいぜいこれくらいだろう？

「そいつは俺の、——」

番外（時系列関係なし） 十年後の話

「……五条、今お前なんつった？」

教師になつてもなお、何かと面倒ごとを俺のところを持ち込む特級クズ野郎だが、今回の「厄介ごと」は桁が外れていた。

思わずモニターから目を離し、椅子ごと振り返る。いつも通り何でもない顔をした五条は、愉快そうに笑いながら繰り返してみせた。

「だーかーらー。両面宿儺の器が現れたよ。すでに指を二本取り込んでるけど、それでも肉体を奪われずに自我を優位に保ってる。大したもんだよね」

「指取り込んで死ななかつたどころか肉体奪われてないってまじで？」

「まじまじ。びつくりだよね」

特級呪物、両面宿儺の指に堪えうる器。それはまさに、過去年生まれてこなかった逸材だ。しかも聞けば、その器は一般人の高校生男子だという。いやいくら危険な状況だからって他人助けるために呪物食う衛生観念は絶対に一般人ではないと思うのだが、とりあえずそれは置いといて。

器が現れたなら、器ごと破壊すれば両面宿儺の指も破壊することができる。当然、上層は宿儺が表に出てくるリスクを考えても、呪術規定に基づいて彼を死刑に処するだろう。だが、こいつがいる時点でそんなことを許すはずもなく。

「……で、どうしたわけ」

「高専に転入の手筈は整えたよ。口うるさい爺どもも黙らせた。どうせ死刑にするなら、指を全部取り込ませてからにすべきってね」

「執行猶予か。妥当なところだな」

妥当と言っても、五条が言わなければ通らなかつただろうけれど。やれやれと思いながら、少し目を伏せた。

これからその器の彼は、自分が生きていることで生じるメリットを

示し続けなければならぬ。自分が生きていることで生じる数多のデメリットを眼前に叩きつけられても、それでも、それでもその少年は自分の「生」を選択し続けられるほど頭がイカれているだろうか。

そんなことを思つて、小さく息を吐いた。にっと笑つた五条が、俺の顔を覗き込む。

「虎杖悠仁っていうんだけどね、いい子だよ。クラゲさん流に言うなら、びつくりするくらいの善良な魂の持ち主。しかも、頭はいい感じにイカれてる」

「……何だよ」

「いや？　ただ、クラゲさんが気に入るような子なんだよねって」

にやーと笑うその顔が気色悪い。露骨に顔をしかめて見せても、五条は愉快そうに笑うだけ。これだからこいつはクズなんだ、それだけ言えば十分に俺を動かせると思つてやがる。

「俺は関知しねーぞ」

「またまたそんなこと言つてー。入学が遅れてるもうひとりも揃つたらちやんと会わせてあげるからね！」

「いらね」

素直じゃない、と言いながら俺に五条は背を向ける。相変わらず俺の言葉なんて欠片も聞いちゃいない。いくら言葉遣いや振る舞いを取り繕つたところで、そのクズの性根は学生時代から少しも変わることはなく。

とはいえ、クズだからこそその五条悟なのでそこはもう諦めるほかなく。

「……五条」

何、と審者丸出しの目隠し野郎は首だけでこちらに振り向いた。

「七海や灰原、伊地知と早めに顔合わせしといてやれ。『虎杖悠仁』が『呪い』でなく『人間』だつていう印象をなるべく広めておいた方がいい」

そんなクズの「味方」でいるなんて「縛り」を結んでしまった以上は、俺も腹を決めるしかないのはわかつていた。

したり顔で頷いたあのクズの親指、誰か折ってくれないかなと心から思う。

*

五条が部屋を出てすぐ、白衣のポケットからスマホを取り出した。嫌なことは手早くすませてしまおう、さつさと目的のやつの名前を呼び出してコールする。ちようど手が空いていたのか、そいつは数コールと待たずに電話に出た。

『はい、夏油です』

「俺。今大丈夫か」

『大丈夫ですよ。どうしました?』

教祖業を始めて十年、どれだけ素質があったのか、今や旧盤星教はかつて以上の規模を誇り、夏油は教祖としてその頂点に鎮座している。天元の言葉を預かる預言者のな立ち位置からスタートした教祖業だったが、いやちよっとお前上手くやりすぎだろうと。夏油を拝みながら感激の涙を流す信者の姿を見たときにはさすがにドン引きした。お前詐欺師の素質あるなど言ったら呪霊をけしかけられたが、事実だと思う。

今も五条袈裟を纏っているだろう夏油とは、ちよくちよく電話でやりとりをしていた。

「両面宿儺の器の話は?」

『ああ、悟から聞きましたよ。まさか適合者が現れるなんてね』

「知ってるなら話が早い。夏油、お前に渡してる呪霊の発生予測だけど」

俺の研究を信頼すると言った夏油には、定期的に呪霊発生予測のデータを送っている。それを参考に自分が受けた呪霊除伐の任務を他の術師に割り振ったり、上級呪霊発生の可能性の高い場所に自ら赴いて手札を増やしたりと積極的に活用し、さらにフィードバックをもらっていた。おかげで精度もそれなりに上がってきたのだが、今後はそうもいかない。

やれやれと思しながら、その懸念を口にする。

「今後、突発的な呪霊の発生や、急激な呪霊の活性化の可能性が出る。

その片鱗をわずかでも察したら、俺の予測がどうあれとつと撤退するように念を押しといて。あのデータはイレギュラーには対応してない」

『……どういふことですか？』

「両面宿儺の指の適合者が出たんだぞ。器本人の自我がどうあれ、もはや彼は活性化化した呪物そのものだ」

『！』

俺は虎杖悠仁という自我を疑うつもりはない。五条が善良な魂の持ち主と言ったからにはそうなのだろう。伏黒を助けるために自ら危険を冒した事実を考えても、おそらくそれは事実だ。

だが、彼が生きている限り、彼の中にある両面宿儺もまた「生きて」いるという事実は重く考えなければならぬ。たとえ指の一本でも「目覚めて」いるなら、それは十中八九、各地に散らばっている「指」にも影響を与える。

「高専の忌庫に封印されている指はまだいいが、まだ発見されていない指がこれまで以上に周囲の呪霊を強く引き寄せたり、活性化させたりする可能性はかなりあると見ていいと思う。指の居所がわからない以上、さすがにそれは俺も予測できない」

『……なるほど』

頭に入れておきます、と夏油が重く返した。

これで夏油の方はある程度対処はしてくれよう。その可能性を踏まえて行動するだけでいざというときの判断はだいぶ変わってくる。

どちらかというと、問題は高専の方だ。

『ちなみに、高専は大丈夫なんですか？』

「大丈夫じゃねーな。上層は多分その可能性を考えてねーし、耳に入れたらやつぱり即刻死刑をつて話になるだろうし。五条に言ったところで糠に釘だし」

『ははは、悟ですからね』

自分は最強だから何でも済ます奴に危険を説いたところで意味があるとは思えない。まあ後輩たちや話がわかりそうなひとたちの

耳には入れておこう。余計な被害が減らせるならそれに越したことはない。

めんどくさ、とぼやいたところで、夏油が小さく笑ったような気がした。

「何だよ」

『いえ、やっぱりクラゲさんはその少年の死刑には反対なんですね』

クラゲさんらしいなど、と愉快そうに言われ、つい眉間に皺が寄る。確かに「器」の死刑は早計だと考えるが、それを情のためとか思われるのは癪だった。

あのな、と電話口に言い返す。

「問題を先送りすんのが嫌いな、俺は。せつかくはた迷惑な呪物全部葬り去れる条件が揃ったんだぞ。またそんな都合のいい器が現れてくれるとは限らねーし、相応のリスクがあるのだとしても特級が四人いるうちに面倒は片付けた方がいいだろうが」

『ははは、本当にクラゲさんくらいですよ、特級術師をただの便利な戦力だと本人相手に言い切ってしまう命知らずは』

いいですけど、とひとしきり笑った夏油は声を改める。万事了解しました、と少し低い声が鼓膜を揺らした。

『何かあればまた連絡をします』

「ああ」

そう手短にかわして、通話を終える。少し熱をもったスマホをまたポケットに放り込んで、モニターに視線を戻した。

せつかくそこそこに精度をあげてきた呪霊発生予測だったが、しばらくこれを当てにするのは危険だろう。たとえば万が一の確率でも、両面宿儺の指に当たってしまったときのリスクが大きすぎる。たった一回の「ハズレ」が、どんな結果を引き起こすかわかったもんじやない。

「……イレギュラー発生時のシミュレーション組んで……ああ、その強さの程度ももう一度五条と伏黒から聞き取りしねーとか。……忌庫の『指』の封印も改めて確認してもらったほうがいい」

やるべきことが次々と脳内に浮かび、口からため息が漏れる。また

俺の隠居が遠ざかったような、と考えるのも嫌になって、俺は諦めて再びキーボードを叩き始めた。

夏風邪は馬鹿が引く

「夏風邪は馬鹿が引くらしいな」

「それ、科学的根拠あるんですか？」

「知らん、と不機嫌そうに答えたクラゲさんは、いかにも仕方なさそうに冷感シートを取り出し、私の額に押しつけた。じんわりと広がる冷たさが心地いい。窓から流れ込むゆるやかな風が、わずかにカーテンを揺らしていた。」

数年ぶりに引いた風邪はなかなか堪える。自己管理くらいできているつもりだったが、甘かったらしい。間違いなく原因は数日前に片付けた任務だろう。そう強力な呪霊ではなかったが、とにかく天候に恵まれなかった。豪雨の中を数時間走らされ、そのまま被害者の救助にあたっていれば身体も冷える。結果見事に熱を出してしまった私は、悟にさんざん笑われ、硝子にため息をつかれてしまったというわけだ。元気になったら悟は殴る。

大人しく寝てろ、と薬をくれた硝子は大学編入に向けた手続きのために今日は不在。一通り私をからかい通した悟は代わりに任務に飛んでくれて、後輩たちも今日は別件で外に出ている。そして夜蛾先生は会議だか何だかで京都に飛んでいるらしい。

風邪くらい寝ていれば治るからひとりで構わないと言っているのに、妙に心配したがつた皆はこのひとを引きずり出した。

何で俺が、と顔全部で語っているクラゲさんは、硝子が出した薬の説明書きを丁寧に辿っている。

「看病しないと部屋の機材全部ぶっ壊すって脅されてんだよこっちは。俺だってやりたくてやってんじゃねーわ」

「本当にただの風邪なんですけどね……」

「滅多に倒れないやつが倒れてビビったんだろ。夏油、食欲は？」

「……少しなら」

「食欲がねー時点でそこそこ重症。かゆでも作ってくるから寝てろ」

「え、作ってくれるんですか？ 卵入れてください」

ため息交じりにハイハイと言った背中になんか少し笑って、ドアが静かに

閉まる音を聞いた。

得意料理がオムライスという噂は聞いている。おかゆ程度で失敗することはないだろう。野郎の手作り料理を楽しみに待つなんて、と自分自身に笑えてくる。

いまだ重い身体をベッドに沈めて、力を抜いた。熱いのに寒いという訳のわからない感覚が気持ち悪い。これはまだ熱が上がりそうだとむりやり意識を奥底に沈めていく。とにかく休息をとって、はやく治さなければならぬ。

しかし、体調の悪いときというのはたい良い夢は見られないものである。

沈んだ意識の底に広がる、完全な暗闇。何にも触れている感覚はないのに、まるで泥の中にいるように身体の動きが鈍い。息を吸ってもうまく肺が広がらず、妙に息苦しい。落ち着け、と自分に言い聞かせる。嫌な汗が身体中を伝うのを感じた。いや、汗だけではない。ずる、と何かとても嫌なものが身体を這っていく。蛇のような、人の腕のような、何かとても気持ち悪いもの。そういえば雨の中で取り込んだ呪霊がこんな感じの、と思ったところで怖気だった。体内で呪力が暴れている。

いや、たいした呪霊ではなかった。等級も、能力も、私にとっては何の問題もない程度のものであった。第一、取り込んだ呪霊はすべて私の支配下だ。こちらの意志に反して動くなんてことは有り得ない。

冷静になれば、呪力をコントロールしろ、と自分に言い聞かせるほどに、思考は焦りに支配される。自分の心臓の音が大きく聞こえる。落ち着け、大丈夫だ、問題ない、と言葉を重ねても消えないそれ。思考が黒く塗りつぶされていく。このままでは、と弱気な思考に走りかけたところで、自分のものではない呪力を傍に感じた。

めしや、と何かが潰れる音がして目が覚める。身体のかなかの何かが一ひつつ減った感覚がした。目を開けた先では、小鍋をもったクラゲさんが壁に向けて足を伸ばしていた。

「お前な、いくら熱あるからって寝ぼけて呪霊出すなよ。あぶねーだろ」

「……呪霊、出てましたか」

「反射的に潰しちまったわ。アラート鳴る前で良かったけど」

「まったく、とクラゲさんはベッド脇に小鍋を置いた。身体を起こすと、クラゲさんはかぱりとその蓋を開ける。ふわりとやさしい湯気が顔に当たった。」

「食えるか」

「……はい」

「食えるだけでいい、と差し出されたレンゲを受け取って、柔らかい黄色のそれを少し口に入れる。熱で馬鹿になった舌でも、わずかに味は感じられた。」

「……美味しいです」

「ほとんど味付けしてねーよ。味覚やられてんな」

「感想くらい素直に受け取ってくれませんか？」

「俺にとっちゃ他人の評価より自己評価のが重要でな」

「まあ食えるなら何でもいいわ、とクラゲさんはベッドサイドの椅子に適当に腰掛けた。」

「潰された呪霊の残滓はもうどこにもなく、かすかな残穢だけが壁に残っている。それもすぐに消えるだろう。」

「何だよ、潰したらまずい呪霊だったか？」

「……いえ。たいした呪霊ではなかったのでそれはいいんですけど」

「変な夢を見たので、とおかゆを飲み込みながら言えば、クラゲさんは特に気にした風もなく熱のせいだな、と断定した。心配してほしいとも興味をもってほしいとも言わないが、本当にこのひとは興味のないことには徹底的に無関心だ。もはや会話に付き合ってくれるだけの優しいのかもしれない。そう思うと、どこまでくだらない会話に付き合ってくれるのか試してみたくなくて、つい好奇心で続けた。」

「クラゲさんって夢とか見るんですか？」

「お前な、ひとをアンドロイド扱いすんのやめろっつってんの」

「え、見るんですか」

「そこで驚いた顔してんじゃねーよ」

「苦い顔のクラゲさんが面白くて、しかも意外と会話に付き合ってく

れることに驚いて、そのまま続ける。

「ちなみに最近見た夢は？」

「……。……木陰で昼寝してたな」

「夢の中で寝てるんですか」

ぽつぽつと、意味なんてまったくないくだらない会話を続けていく。

クラゲさんは確かに自覚のない世話焼きだが、面倒な言葉や意味のない問答は黙殺することも多い。それを考えれば、今日のクラゲさんはかなり付き合いが良かった。

食べられるか自信のなかった小鍋の中身が、少しずつ減っていく。

「ひとの看病するのは慣れてるんですか？」

「いや、硝子も滅多に風邪なんか引かなかったからな。倒れるのは俺のが多かったし」

「へえ、それは意外」

「呪力切れだよ」

「ああ、なるほど。無自覚で術式つかってたんでしたっけ」

どうでもいい話だ。本当に、意味のない話。いつものクラゲさんなら機嫌が良くてもせいぜい相槌しか打ってくれないような、それくらい生産性のない話。面倒くさそうな顔をしながらも、私が食べ終わるまでクラゲさんは話に付き合ってくれた。

「ごちそうさまです、と空になった小鍋を見せると、ああ、と軽く声が返される。一応という風に体調も確認されたが、吐き気や腹痛がくる様子はなかった。そう伝えれば、なら大丈夫だな、とクラゲさんは小鍋を片付け始める。」

手際よく洗い物をまとめる手つきに、何故だか実家の空気を思い出した。そんな自分に少し呆れながら、つい、ちよつとした出来心が口をついて出る。

私は一人っ子で、それを寂しいとか、兄弟が欲しいとか思ったことはなかったけれど。

「クラゲさんみたいな兄だったらほしかったかもしれない」

こんな唐突な言葉にも、クラゲさんは片眉を上げるだけ。不審そう

に私の顔を見て、言った。

「そうか。俺はお前みたいな弟絶対にごめんだな」

予想通りの答えはなかなか腹筋に来る。その容赦のなさが心地いい。

「ひどいなあ。あ、自分より強い弟がいたら立場がないからですか？」

「お前マジでそういうとこだからな」

ひとに喧嘩売ってる元気があるならとつとと薬飲んで寝ろ、と水のはいった湯飲みを押しつけられた。硝子が用意してくれた粉薬のパッケージの傍には、いつのまにか口直しの飴が用意されている。

「いったい私を何歳だと思ってるんだと思いつつも、貴方こそそういうところですよ、と肩が揺れた。」

深夜のカステラ

「あ、部屋にいないと思ったらこんなところにいた」

「……普通、夜中の二時にひとの部屋訪ねるか？」

草木も眠る丑三つ時、俺としては一服にちょうどいい時間、いつものように校舎裏の夜闇の中で煙草をふかしていた。もう部屋に戻って仮眠をとるつもりだったが、ひとの都合を考えないガキに見つかってしまった以上はそうもいくまい。

眠そうな様子など全く見せない五条は、任務帰りなのか制服を着ていた。

「どうせクラゲさん寝てねーじゃん。ほら土産買ってきてあげたから食おーよ」

「寝てねーんじやなくて起きるんだよお前の呪力うるせーし。何、カステラ？」

「九州まじ遠かったんだって、西の任務くらい京都のやつに行かせればいいのに」

「それは俺も思う」

短くなった煙草を携帯灰皿に放り込み、一切れずつ個包装されたそれを受け取った。煙草の味とカステラの味が混ざるのは微妙だがまあそれはそれ、あまりに気にせずひとくち齧り付く。ふたくち、みくちと重ねれば、カステラの甘みが煙草の苦みを塗り消していった。

さすがは舌の肥えた五条のボンボン、いいものを買ってきたらしい。やさしいけれど物足りなくない甘みは、確かに老舗らしい上等な味わいだった。

うま、と思わず感想が口をついて出る。だろ、と隣で同じくカステラを食っていた五条は得意げに言った。

「カステラはここがいちばん美味いんだって」

「何だよ、わざわざ調べて買いに行ったのか？」

「これくらいの楽しみないと出張なんてやってらんねーの」

ただでさえひとりで出張とかつまんねーし、とまたカステラを頬張る五条。そう口では愚痴を言ってみても、このところの五条はだいぶ

落ち着いているように見えた。まあ情緒五歳児が六歳児になった程度だが、前よりは自分の機嫌を自分で取れるようになったのではないだろうか。ようやく情緒が小学生になりましたおめでとう。

早いところ精神が身体の年齢に追いついてくれるといいんだけどとぼんやり思うが、こんな夜中に押しかけてくる時点でその日は遠いか、と思い直してカステラの最後の欠片を口に放り込む。

「もう一個食う?」

「もらう。……いやもらうけど、お前任務帰りならとつと部屋戻って休めよ」

「移動中ずつと寝てたから全然眠くねーの。だからクラゲさんとこ来たんじゃん」

「言つとくけど俺も寝てる時は寝てるからな」

「え、クラゲさんが寝てんの見たことねーけど」

「だからお前の呪力がうるせーから起きるんだっつもの」

え〜〜、と不満そうに五条は眉間に皺を寄せる。んなこと言われてもさ、と唇を尖らせた。

「ひとの呪力を騒音扱いとかマジ理不尽じゃん」

「耳栓で防げるぶん騒音のがまだ可愛いわ。馬鹿でかい呪力が近寄ってきたら嫌でも起きるだろ」

「前から思ってたけどクラゲさんて氣イ張りすぎだよ。常時臨戦態勢とか疲れない?」

「別に。お前らが絡んでくるようになってから呪いを送りつけられることが増えてな、迂闊に氣も抜けねーんだよ」

「やば、クラゲさんてばモテモテじゃ〜ん」

きやぴ、と似合いもしない効果音をつくってかわい子ぶる大男は控えめに言つて非常に気持ちが悪い。チツと舌打ちをすれば「この僕の可愛さを前に舌打ち……?」とか抜かす自意識過剰クズ、そろそろ面の皮の出来映えで覆い隠せないほど中身が腐っていることを自覚して欲しい。

さつさと二個目のカステラを口の中に放り込んで咀嚼する。やはり味はいいのだが、こどもも続けて食べるとさすがに口の中が乾いてき

た。

「ねえクラゲさん、そろそろお茶欲しくならない？」

「そうだな、部屋戻って自分でいれる。もしくは自販機で買え」

「え、クラゲさんがカステラの礼にお茶ご馳走してくれんの？ 嬉し

くくく！」

「聴覚イカれてるから病院行った方がいいぞ」

そうやって五条に背を向けたが、自分に都合の悪いことは聞こえない特級クズは機嫌良く俺のあとをついてくる。こうなつてしまえば五条が俺の言うことなど聞くはずもなく、たとえば俺が寝たいと言つても朝まで勝手に茶をしばいて居座り続けることだろう。少しは精神年齢も上がったかと思つたが、やはり五条に「ひとの迷惑を考える」なんて高等技術を求めるのは間違つているのかも知れない。

どうやら情緒六歳児が七歳児になる日は遠いらしい。俺の深い深いため息が、深夜の空気に溶けて消えた。

ちよつとしたお掃除です

またクオリティが上がったなと思いつつ、可愛いんだか不細工なんだか俺には判別のつかない「呪い」の拳を軽くかわす。

「もう学生じゃねーんだから説教は聞かねーつつつてんでしょ夜蛾せんせー」

拳をかわされたそれは、跳ねるように着地した床を蹴り、また俺の顔面に迫る。そこそこのスピードとパワーはあるようだが、この程度ならちよつとつとつとおしい呪霊程度。身を引いて小さな赤いグローブが顔の横を通り過ぎるのを見送り。ついでに腕を振り上げてその小さな身体を天井に叩きつけた。

おおくと全く感心してなさそうな特級クス二匹の拍手が薄暗い部屋に響く。同時に、心底疲れた様子の恩師が大きなため息をつく。

「今回の、結構出来がいいんじゃないですか？ お、まだ壊れてねーな」

「ああ、まだ調整中なんだがな。ツカモトと名付けた」

「知ってますか、親のネーミングセンスって子どもにすげー影響するんですよ」

クラゲさんが言うと言説力が違う、と笑う特級どもを軽く無視して、天井から降ってきたツカモトを受け止めた。首根っこを掴まれたままシャドーボクシングよろしくパンチを繰り返してくるツカモトは、やっぱり独特の顔をしている。これって可愛いんだろうか、ちよつと俺にはわからない。

「俺も今さらお前に呪骸をけしかけたくはないが、お前が何かやらからすと俺に苦情が入るんでな」

「それはお気の毒ですが、言いがかりですよ。俺が何したってんですか」

「むしろお前は何をしたんだ」

何をしたって、別にそんな特別なことはしていない。一連の流れを見ていた特級クスどもは仲良く笑いを堪えているが、本当に大したことをした覚えはなかった。

いつものごとくお偉方に呼ばれたから仕方なく出向いてやれば何故だかそこには問題児どもが先にご高説を伺っていて。こいつらいるなら俺いりませんよねと帰ろうとすれば三人並んでぐだぐだとうざってえ無駄話を垂れ流されて。暇だったから頭の中でフィボナッチ数列を数えていたが、9 9 1 9 4 8 5 3 0 9 4 7 5 5 4 9 7 まで辿ったところで欠伸が出た。聞いているのかと怒鳴られたが聞いているわけがねーだろアホらしいと言いたい。さすがにもういいだろと適当に話を切り上げてとつとと退出したというのに、帰り道でまた面倒などこそ誰かに絡まれた。

特級ふたりと一級ひとりを前にしておきながら、よくもまああんな堂々と喧嘩を売れたものだ。どれだけ良い血筋なのか知らないが、特級の片割れが御三家の当主だということももしかしたら知らなかったのか。いつそ哀れと思つて聞き流していたのだが、さすがに俺もちよつと機嫌が悪かったのだ。いや、五条や夏油に手を出させなかつただけ優しいと俺は思うのだがどうだろう。

特級どもに殺されることを思えば、俺の拳が顔面にめり込んだことくらい怪我のうちにも入らない。

「……五条、道塞いでるクソ邪魔な馬鹿がいたら潰すよな？」

「潰す潰す〜！ お掃除しちゃう〜！」

「夏油、きたねー声でわめく塵ごみがいたら片付けるだろ？」

「わざわざ掃除をしてあげるなんてさすがクラゲさんですね。道が綺麗になったなあ」

そう、珍しく俺は善行を為したと思う。とんだ箱入りのくせに前線を奔る術師を侮辱し、あろうことか邪魔までしやがるクス野郎など、高専にいただけ害でしかないのだから。

「つまり俺がやったのはただの掃除。何の問題が？」

むしろボランティアをした俺の心意気は褒められてしかるべきでは。美しい奉仕の精神を説いても、夜蛾ときたらただただ眉間に皺を寄せるばかり。

「……まさかと思うが、それが通用するとは思っていないな？」

おつと、まさか俺の善意が通用しないとは。それならそれで、まあ

仕方がない。ずっと夏油に目をやると、にっこりと笑ったクズは小さく頷いた。

「じゃ、塵を物言わぬ塵にして証拠隠滅してきます。夏油、そいつ今どこだ」

「位置的には来客用の応接室ですかね。移動している様子はありません」

「いくらアラート鳴らないようにしてるからって呪霊に張り付かれてることにも気づかないとかマジ雑魚だよ。やばすぎ」

「どう見ても実力はせいぜい三級程度だからな。呪具もいらねーわ、消す」

「待て待て待て待て」

いったん冷静になれと言うが、俺が冷静でないように見えるのだろうか。特級どもに目をやれば、ふたりもただ面白そうに首をすくめるだけ。小さく息をつき、じゃあどうしろと、と頭を掻く。当然ながら俺に謝罪をするという選択肢は存在しない。

「……一般家庭出身の術師への差別」

ぽつりと言葉を落とせば、夜蛾の顔色が変わる。

「女性術師への偏見、侮辱。前線を奔る術師や補助監督ならびに窓への蔑視、ついでに呪力をもたない人間を金ヅル扱い」

「……海月、」

「いや別にどうでもいいんですけど、さすがに耳障りな声できたねー性根を見せられると俺も不快というか。これでも俺綺麗好きで」

ぶらぶらと揺れながらシャドーボクシングを続けていたツカモトが大人しくなる。ぽいつと手を離せば、軽い足取りで夜蛾の足下に駆け寄った。

苦笑を浮かべた夏油は、俺の言葉に応えるように続ける。

「吐き気を催す程度にはひどい言葉でしたよ。クラゲさんが一瞬遅ければ私がやってみましたね」

「つかあの塵マジ何言いたかったんだろね？　どこの誰かも知んねーけど」

結局誰なの、と五条が夜蛾に尋ねれば、夜蛾はそつと目をそらす。

最近力を付けてきたという新興の呪術家系の名前を口にし、やたら言いにくそうに小さく付け足した。

「聞くところによると……歌姫と硝子に言い寄って振られたと」

「……は？」

「……それはそれは」

「マジかよウケる」

あまりのくだらなさに目眩すら覚える。道理で名指しで硝子を反転術式もちの胎扱はらいし、庵の顔の傷やら何やらをこき下ろしていたわけだ。

なるほどね、とこきりと肩を鳴らした。

「やっぱ呪具取ってくるかな。これ以上素手で触りたくねえわ」

「クラゲさん、身体はどうでもいいので意識だけ残しておいてくれませんか。使い勝手を試したい呪霊がいて」

「しよすがねーな」

「え、僕の分がないんだけど」

「何言ってるんだよ五条、お前用に大物が残ってるんだろ」

「そうだよ悟、君にはそっちをお願いしたいな」

「え、何？」

そいつの家、と夏油と声を揃えれば、途端に目を輝かせる五条。そして完全に顔を引きつらせた夜蛾。

「☒の調整に使う」

「こちらお前たち、待ち、……待てと言っているだろう!!」

この後に俺たちが何をし、その結果どうなったのか。

まあ、だいたい予想の通りだとだけ書いておくことにする。

ふたりの「最強」

俺の目の前には今、イイ笑顔をこちらに向ける特級クズが二匹。俺の座っている椅子は両側からがっしりと固定され、逃げようにも退路を完全に塞がれている。

「ねくクラゲさん、僕だと思っうよね？」

「いいんですよクラゲさん、悟に気を使わなくても」

にこにこ笑顔をつくる大男二匹の後ろには、まじごめんと冷や汗をかきながら両手をあわせる虎杖の姿があった。謝っても吐いた言葉は戻らねえんだよクソガキが。

事の発端は、この虎杖の何気ない一言だ。

『先生たちよく最強って言うけどさ、ぶつちやけクラゲさんはどつちのが強いと思う？』

いや、何気なくとは言ったが俺からすれば全然何気なくなかったし、正直嫌がらせかと思っった。何でそれをわざわざ特級クズ二匹の前で聞くのかと。どつちも大人げないうえにプライドが死ぬほど高いことくらいわかってんだろ虎杖この野郎。

ちなみに伏黒と釘崎はちやつかり部屋の隅に避難し、すぐにも部屋を出られる位置をキープしている。ふざけんな俺も逃げたい。

「クラゲさんてばシンキングタイム長くない？」

「はは、即断即決のクラゲさんが珍しいな」

本当に悟に気を使わなくてもいいんですよと肩に手を置く夏油、俺の肩で自慢の握力を発揮すんな。術式に逃げないでねと六眼を覗かせた五条も何でそんなマジになってんだ馬鹿じゃねーの。いや馬鹿なんだよな知ってる。

脅されなくなつて術式を使うまでもない。俺はこの状況から逃げられないし、どつちだと答えてもその後死ぬほど面倒なことが待っている。

どうしろってんだ、と俺は深い深いため息をついた。

「……どつちが強いとかそんなもん勝手に殴り合えよ。俺に聞くな」

「何言ってるの。悠仁も言ったでしょ、僕らが聞いてるのはクラゲさんのどつちなのでハナシ」

「ええ、実際はもちろんやってみないとわからないでしょうが、クラゲさんが私たちをどう評価しているのは気になるな。そんなに怖がらなくてもどんな答えでも怒ったりしませんよ。そうだろう、悟？」

「モチロン。もうクラゲさんてばいつまでも子ども扱いすんだから」

いや未だにお前の精神年齢は六歳から更新されてない、と反射的に口から転がり出そうだったのをすんでのところで飲み込んだ。代わりに噛みしめた歯の隙間から「虎杖この野郎」の一言だけが絞り出る。視界の隅で赤いパーカーが深々と土下座をしていた。

何でこういうときに限って硝子も七海くんも灰原くんも伊地知くんもいねえんだよ、と我が身の不運を呪いながら眉間の皺を指でのばす。

「……思うに、」

どちらが強いかと問われても、俺には判断ができない。なぜなら、こいつらの「最強」はそれぞれベクトルが全く異なるからだ。

「まず、夏油の強さの要は手数のださだ」

夏油が呪霊操術によって取り込んだ呪霊の数は数千に及ぶという。数の暴力だけでも脅威だというのに、ひとつの呪霊の特性を攻略してもまた別の呪霊が出されるだけ。手札の呪霊も蠅頭レベルから一級相当、あるいは特級。そのうえ一度に出せる数に限りがないとくれば、まず呪霊操術を正面から破るのは不可能に近い。

「もちろん全ての呪霊を使いこなすだけアタマがあることが前提だが、まあそこは高専時代にめちゃくちゃ試行錯誤してるの見だし」

「余計なこととは言わなくていいんですよ」

「お前マジでひとに努力するとこ見られるの嫌いだよな。筋金入りのかつこつけ」

「わかる、傑はその辺ちよー頑固。とんでもない目立ちたがりのくせにや」

「悟？」

五条と同時にさっと目線をそらす。本当のことを言われて怒るのはガキの証拠です。

「ごき、と鳴らされた拳に、しかもこいつ体術も普通にイけるやつだからな」と息を吐く。

偏見じみたセオリーとして「式神使いは術師本人を叩け」なんて言われるが、夏油についてはそれは全く当てはまらない。どちらかというと呪霊よりも自分の拳で敵を殴り飛ばしたい脳筋野郎なのだから、つくづく人間性と術式は一致しないものだと思う。

高専時代から普通に五条と互角に殴り合っていたやつが「一般家庭出身」の「趣味特技・格闘技」とかふぎけてんのかと心から思うんだけどどういう育て方したんですか(一)両親。やっぱりちゃんと聞いときゃよかった。

数千の呪霊と、術師本人。手札の数で言うなら間違いなく呪術界最多と言えるだろう。

「対して五条の強さは、限りなく質の高い『矛』と『盾』があること」六眼によってその力を完璧に発揮できる無下限呪術。その強さは歴史が証明しているといってもいい。過去、幾人もの優秀な呪術師がこの「最強」の前に敗北を喫してきた。

「生身の人間を軽く消し炭にするレベルの攻撃乱発してくるうえに攻撃はあたらねえ、当たったところで反転術式で端から治る。ただでさえ多い呪力量に、六眼でロスもないとなりや呪力切れも狙えない」

正直、まじで付けいる隙が見つからない。術式の力押しだけでも十分だというのに、ム力つくくらい頭も切れる。呪術に関する知識も呪力操作も体術も含め、呪術師に必要なと思われるあらゆる才覚を十二分備えているのだ。

コイツの場合、シンプルな強さなだけに「何故強いか」と言葉を尽くす必要もない。攻撃の破壊力がヤバイ。こっちの攻撃は当たらない。まかり違って当たっても傷はすぐに治る。ただそれだけ。それだけだからこそ、打つ手がない。

目隠しの下でドヤ顔決める五条は何とも腹立たしいが、その傲慢を裏付けるだけの実力があるのは確かだった。

「……これで人間性さえ備えてたらなあ……」

「いやいや、人間性を備えてたらそれはもう悟じやないですよ」

「誰に言われてもクラゲさんと傑だけには言われたくないんだよね」

「それは聞き捨てならないな。クラゲさんはともかく」

「俺の人間性をお前らと同列で語んな頼むから」

そういうわけで、と迂闊な質問を投げてきやがった虎杖に目を向ける。さつきまでひとりだった正座が何故か三人に増えていた。お前から仲良いな。

「多彩な手札で戦況を有利に運び、相手の強みを発揮させない、言わば戦略的な『最強』なら夏油。大抵の敵を打ち破れる矛と大抵の敵には打ち破れない盾をもつ、オーソドックスな『最強』なら五条だ。『最強』の意味合いが違うだけに、単純比較は難しい」

そもそも、このふたりの強さを比較することにあまり意味はないと思う。それは剣と銃を比べてどっちが強いか答えろと言っているようなもので、そんなもん結局のところ使い手の力量次第、状況次第。下手をすれば判断するやつ好みの問題だ。

「まあ、夏油の手札に無下限をいかくぐれるような術式もちの呪霊がいるかどうかはひとつの鍵になるだろうな。極ノ番や領域展開含めた話になると俺は知らん。見たことねーし」

わかったかと言葉を投げれば、赤パーカーはこくこくと頷く。三人揃ってやけに目を輝かせているのだが何かあっただろうか。

三人の様子を見てくつくつくと肩を揺らした五条は、しようがないなくと頭の後ろで手を組んだ。そんな相棒を見て、夏油もまた肩をすくめる。

「この答えで許してあげるとしようか、悟」

「あんまりイジメても可哀想だもんね」

「満足したならいい加減出てけよお前ら。俺の作業の邪魔すんな」

えくとかうだうだごねるガキどもを何とか部屋から追い出し、ようやく落ち着く。虎杖はあの年頃にしてはちゃんとしたやつではあるのだが、たまにとんでもないことを言い出したりやらかしたりするの油断が出来ない。別に質問してくるくらいは構わないが、あの特級

クズどもの大人げなさをちゃんと理解してものを言っただけ。今回のはあの程度の答えで逃げ切れたが、いつもそうとは限らないのだ。まじクズはクズ。

それにしても、「どちらの方が強いのか」とは。ふう、と自分で思うよりも大きなため息が出た。

ただの喧嘩ならそれこそ星の数くらいしてきたふたりだが、さすがに本気で殺し合ったことはないだろうと思う。「喧嘩するほど仲が良い」を地で行くふたりであるし、互いが互いの唯一であり最大の理解者であることは嫌と言うほど理解しているだろう。自分の片割れともいえる相手の命を狙う理由なんて、あのふたりに生まれるはずもない。

だが、もし。銀河の中のほんの星屑くらいの可能性として、このふたりが殺し合わなければならぬ場面が来るのなら。本気で相手を殺すと覚悟を決めることがあるとしたら。

そのときは、……きつと。

「……知らね」

もしもの未来を考えるなんて俺らしくもない。浮かんだ想像を振り切るように、俺はキーボードに指を伸ばした。

ひとの嫌がることは進んでやります

ぼたり、と汗が地面に落ちる。

身体を巡り、腕を通して刀に込める昏く熱いモノ。それを「呪力」と呼ぶことを知って数ヶ月。緻密な呪力操作ならこのひとが一番だと五条先生に紹介されたのが、僕の前で面倒くさそうに本を開くクラゲさんだった。

日光を避けるように木陰に座るクラゲさんは、普段任務以外ではほぼ外に出ないらしい。

「また呪力が揺らいだぞ。やる気あんのか」

「あ、ります……っ！」

「喋る元気はあるらしいな。あと一時間追加」

「うっ……！」

里香ちゃんの呪力を刀に込め、それを支配する。送る呪力を流し込まずぎてはいけないし、だからと言って力を抜きすぎてもいけない。呪具のなかに均一に、血が巡るように滑らかに行き渡らせてこそ呪具を「呪具」として扱える。

『クラゲさん以上に呪力操作が緻密に行える術師はそういないよ。口は悪いけどゴリツゴリの理論派でやればできるみたいな根性論絶対言わないひとだから、安心して話聞いてきな』

五条先生はそう言ったけれど、顔全部で「何で俺がこんなことを」と語っているクラゲさんはただ僕に指示だけを出して本を読んでいる。全身と呪具に呪力を薄く行き渡らせて維持しろ、とは言われたが、あとは揺らいだ瞬間に指摘が入るだけ。こちらを見てすらいないのに、ほんの僅かな揺らぎもクラゲさんは見逃してくれなかった。

さすがに二時間を過ぎた頃から刀を握る手が熱い。もう脳みそが焼き切れそうだった。

「く、……らげ、さん、」

「何だ」

「じゅ、りよくそうさって、……コツとか、あるんですか……！」

「今のお前に言えることはねえな」

ばつさりと切り捨てたその目が、ようやく僕の方を向いた。黒目がちの瞳は、相変わらず心底面倒だと言っているようだった。

「呪力操作は呪術師の基本だが、ある程度のレベルで操作できれば術師としては一応問題ない。お前に今求められているような緻密も緻密なレベルまでやる術師は少なえだろうな。何でかわかるか」

「え、……えっと、……」

「呪力があまりにも膨大だからだ」

ぱたりと本を閉じて立ち上がったクラゲさんは、仕方なさそうに傍に立てかけていた細長いケースを取る。中に収められていたのは、白い鞘の刀だった。すらりと抜かれた刀身が、日光のもとできらりと光る。

「膨大な呪力、強すぎるエネルギーはそれだけで脅威だ。その刀、ある程度の呪力には耐えられるものを五条が選んだんだろうが、それでも耐久性には限界がある」

「え、」

「お前の『呪い』の全力に耐えられるような呪具がそうそうあると思うな。うっかり呪力込めすぎたが最後、そいつもすぐに折れる」

だからお前は、息をするように呪力を操れなければいけない。

すつとクラゲさんが剣先を僕に向ける。一瞬で水が浸透するように呪力が行き渡る。進むようなそれではなく、凧いだ海のように揺らぎのない呪力。包み込むように纏われた呪力のせい、クラゲさんの身体と刀が一体になったようにさえ思えた。

「まずは呪力を一定で保てるようになれ。次は『自分の思う量で』一定を保てるようになること。具体的には、その刀が折れないぎりぎりのラインで保つのが理想だな。それを平常時戦闘時、動揺しようが激高しようが揺らがせないこと」

とん、とクラゲさんは刀を肩に担いだ。身体が動いても、全身に行き渡った呪力はわずかの揺れもなく凧いだまま。

すごい、と思わず口から感嘆の息が漏れる。

「揺らがせないことが出来れば、逆に揺らがすことは簡単だ。あとは必要なときに必要なだけ呪力を動かせるようになればいい。……そ

の呪力量があればそもそも呪力を『動かす』ってことすら必要なさそうだがな」

「…………え、えつと…………？」

「その辺は出来るようになってから考えろ。まずはとにかく呪力の流れを堰き止める感覚を身体に馴染ませること。無意識でも出来るくらいになれば」

継続することにコツも何もねえよ、とクラゲさんは纏う呪力を収めた。

またその面倒くさそうな視線が僕に向く。ついびくつと肩を揺らしたが、質問は終わりかと無言で問いかけられているのだと気づいた。

今、僕の「コツはあるのか」という質問に、今のレベルで言えるコツはないということ、その理由までクラゲさんはちゃんと答えてくれた。このひとは多分、尋ねればちゃんと教えてくれるのだ。

ええつと、と少し言いよどみ、ふと浮かんだ疑問を思っただまに口にする。

「あ、る程度の呪術操作ができれば問題ないなら、何でクラゲさんはそんなに、…………？」

出来るのか、までは言えなかった。息切れがひどくて言葉が出なかったというのと、明らかにクラゲさんが「そこ聞くのかよ」という顔をしたからだ。言ってから失敗したと口をきゅつと嚙む。

やれやれという顔をしたクラゲさんは、また呪力揺らいだぞ、と指摘してから言った。

「お前と真逆の理由だよ。極端に呪力がすくねーから節約するために練習したの。誰が好き好んでこんな面倒なことやるか」

すいませ、と口をつけて出た言葉を、別に怒ってねーよと遮られる。呆れはしたけど、と呪具を鞘に収めた。

「乙骨お前、どう見てもいじめられっ子なのにわりと考えなしにもの言うんだな」

「あ、…………！」

「だから怒ってんじやない。いいんじやねーの、言いたい言葉も飲み

込んで何も言えなくなるよりずっとマシだ。ましてお前には言いたいことを言う権利がある」

思いがけない言葉に、つい目を見開く。

また呪力揺らいだ、と眉間に皺を寄せられ、はっと呪力の波を押さえ込む。何とか揺れを収めたところで、クラゲさんはため息交じりに僕に背を向けた。

「五条見てみる、相手が誰だろーが言いたい放題だろ。性格最悪のクズ野郎だが、あいつは最強で特級だ。誰も口出しなんざ出来ない。そういう意味で呪術界はシンプルだ」

ただ強ければある程度は我を通せる、と白い刀を携えたそのひとは日陰に戻った。刀をケースに仕舞い、幹によりかかるように腰を下ろす。

そのまま続ける、と投げられた声は相変わらず面倒くさそうだったが、怒りの色は確かになかったように思う。きゅ、と柄を握る手に力がこもった。脳裏に五条先生が去り際に言った言葉が蘇る。

『クラゲさんは信用していいよ。性格が捻くれてる分、無駄に気を使うひとじゃない。だからって学生相手にむやみに毒を吐くひとでもないし』

そして、もしかしたら憂太とは相性いいかもね、と。もしかしたら今感じているこれが、その言葉の意味なのだろうか。

ぐつと奥歯を噛みしめ、再び意識を集中させる。今クラゲさんが見せてくれたものを写し取るように、呪力を押さえ込んでカタチを整えた。波紋ひとつない凜いだ呪力。海の底のような、満ちているが故の静けさ。刃の先まで呪力の一滴を染み渡らせる。

このまま維持、とまた額に汗が浮かぶのを感じたところで、知った足跡が近づいてくるのを感じた。

「何だ、お前らまだやってんのかよ」

ひよい、と視界の隅で長い黒髪が揺れた。今日は僕以外の皆は実習に出ているはずだが、真希さんだけ先に戻ってきたらしい。

僕がおかえりなさい、という前にクラゲさんが口を開いた。

「ああちようど良かった真希、少し手伝え」

「はあ？」

何だよ急に、眉をひそめた真希さんに構うことなく、クラゲさんは僕を指さして言った。

「乙骨に思いつく限りの罵詈雑言を投げろ。日頃思ってること全部言っていい。乙骨、落ち込もうが腹が立とうが呪力揺らすなよ。当たり前だが里香も出さな、俺らが死ぬぞ」

「え、…………え!？」

「もっかい言う、里香を出さなよ。俺に特級過呪怨霊なんか止められねえからな」

今の状態を保ち続けろ、と言った声には、ほんのわずかに先ほどまでと違うものが含まれていたような気がした。ひく、と自分の口元が揺れたのを感じる。

「あの、…………実はやっぱり怒ってますか…………？」

おそろおそろの口から出た言葉に、クラゲさんは初めて「面倒くさい」以外の感情を表情に乗せた。それは、そう、あえて言葉にするなら「愉悦」のような。

「怒ってないつつつてんだろ。真希、頼む」

「…………鍛錬だつーなら仕方ねーなア？」

そしてクラゲさんと同じ表情をした真希さんによって、僕は心に盛大な傷を負うことになる。

*

「大丈夫大丈夫、その程度で怒るなら僕とつくに口聞いてもらってないよー」

「自覚あんじゃねーか特級クズ。乙骨、五条の人間性だけは絶対見習うな」

「え、ええと…………」

「心配すんなよクラゲ、悟のクズは真似できるほどヌルくねえよ」

「それは確かに」

「アハハ僕泣いちゃうよ〜？」

つかれたよるに

それは見知った腕だった。この体温も匂いも、わずかに伝わる心臓の音も。私が間違えることは決してない。

「……おにいちゃん？」

「……どんだけ寝惚けてんだ、妹」

その呼び方小学生以来だなど、思い出の中のそれより遥かに低い声が鼓膜を叩く。

一瞬で頭が覚醒した。

「……兄貴、状況説明」

「硝子、起きたんなら離せ」

「状況説明」

なぜ私は兄貴の腕の中で寝ているのだ。見上げた先にあつた顔を睨みつけると、いや全部お前のせいと言わんばかりの呆れた視線を返される。

「重傷の術師が相当数搬送されてきて処置したんだろ、覚えてねーの？ 呪力切れでぶっ倒れたんだよ。仕方なしに部屋まで運んでやつたらお前、しがみついて離れねーし」

見てみるこれ、と指されたのはいまだ白衣の襟元を握りしめる私の手。ぱつと離すと、厚みのある白にくつきりと皺が浮いていた。

まじか、と信じられない声が零れる。よくよく見ればここは確かに寮の私の部屋で、私はベッド脇に座る兄貴の腕に抱え込まれていた。

まじかー……ともう一度声が漏れる。やれやれと兄貴もため息をついた。

「おおかた睡眠不足もあんだろ。らしくもなく真面目に勉強してんじゃねーぞ」

「大学編入を目前に控えた人間へのセリフじゃねーわ」

「点数足りてんだろ、適当にしとけ。詰め込みで勉強しても非効率だし」

とりあえず下りろとペしりと肩をはたかれる。のろのろと膝から下りれば、さっさと寝ろよと兄貴も立ち上がった。

「今さら呪力切れなんか起こす時点で判断力鈍ってんだよ。倒れるまで呪力使うな」

「……まじでヤバかったんだよ、患者」
「だとしてもだ」

それはお前にしか出来ないかもしれないが、お前がやらなきゃいけないわけじゃない。

それは、幾度となく兄貴が口にする言葉。説教臭いことは好かないくせに、度々こうして私の意識に刷り込んでくる。その根底にある柔らかないものの存在はちゃんと理解していたが、私はあえてこう返すことにしていた。

「私がやらなきゃいけないわけじゃないけど、やるって決めたことではある」

もちろん、限界まで身を削ったりはしないけれど。

そうにやりと笑ってやれば、親愛なるシスコン兄貴は何とも言えない苦い顔。

「……まじで誰に似たんだ、その頑固」

「むしろ兄貴以外の誰がいんの？ ほら寝るからとつと出てけよ兄貴」

「運んでやったお兄様に礼もなしかクソ妹」

「あ、起きたら数学と英語聞きに行くからヨロシク」
「聞けよ」

全くと頭を掻きながら兄貴はドアノブに手をかける。ぐだぐだと言口では言うが、どうせ怒ってもいなければ気にもしていないことはわかっている。

何せ、この私の「兄」なのだから。

「おにーちゃん」

「……んだよ」

「オヤスマシ」

「ったく……おやすみ」

早く寝ろよ、といつもの自分棚上げのセリフを残してドアが閉じる。

その声が少しだけやさしく聞こえたのは気のせいだろうか。小さく息を吐くと、再び眠気が蘇ってきた。

重症患者が幾人も運び込まれたことを聞いた兄貴は、きつと私を心配して医務室までやってきたのだろう。わざわざ作業の手を止めて、深海から足を踏み出して。それくらい、ちゃんとわかっていた。

もぐりこんだ布団の冷たさが身に染みる。明日の差し入れは少しだけ奮発してやろうと心に決め、きゅつと目を瞑った。

特級クズの憂さ晴らし

高専に用事があったついでに、何となく深海へと足を向けた。私たちが卒業したあともクラゲさんは何ひとつ変わらず、こうして薄暗い部屋で数の海を泳いでいる。

いつも通り迷惑そうな顔のクラゲさんの態度など気にすることもなく、腐った上層の嫌味に付き合わされた鬱憤を晴らすように適当な世間話を振り続ける。七割ほど無視されたが、気にせず話しかけ続けていると少しずつ相槌を打ってくれるようになった。今回も根負けしてくれたいらしい。

「……五条といいお前といい何なのマジで。少しもこっちの都合を考えやしねえ」

「最終的にはクラゲさんが折れてくれるって知ってるからでしょうね。優しいなあ」

「折れるまで退かねえからだろクソ迷惑なガキどもめ」

「私たちは『最強』ですから。退くなんて負けるのと同義でしょう」

「最強アピールうざ」

もう帰れよという顔を隠しもしないクラゲさんだが、そういう対応をされるからこそ絡みたくなるというか。今日は時間もある、もうしばらくクラゲさんに付き合ってもらおうと頭の中で話題を探った。

そういえば、とまた話を振るとクラゲさんの眉間に皺が寄るのが愉快でならない。

「最近クラゲさん、若い術師のなかで人気があるんですって?」

「……まじで何の話?」

「あれ、知りませんか? 硝子が言っていましたよ。ほら、悟のせいで外に出ることが増えたでしょう、学生の相手したり、実習や任務の引率をしたり。それで存在が知れ渡ったせいとか、妙にクラゲさんの話を聞きたがるひとが増えたって」

正直ウザい、と自覚の薄いブラコンが酒を片手にわりと荒れていた。まあ家族のことを根掘り葉掘り聞かれれば気分がいいはずもない。

少し考えるように視線を浮かせたクラゲさんだが、思い当たることがあったのかすぐにモニターに視線を戻す。

「……硝子の兄で、お前や五条と繋がりがあるのが公になればまあ当
然は当然か。そーいや妙に知らねえやつに話しかけられたような気
もするわ」

「一緒に任務に行きたいという申し出があったと伊地知も言っ
てましたよ」

クラゲさんが強いことも評判になっ
てるそうですから、と付け加え
れば、なら俺のかわりに行けよ暇かよ、と身も蓋もないことを言う。
何を言ってるんですかと、私は素直な気持ちを口にする。クラゲさん
のかわりが務まる呪術師がそうそういるわけないでしょうと、心か
ら。

「二級の術師の中なら、クラゲさんは限りなく最強に近い」

私としては心の奥底から褒めたつもりだったのだが、返ってきたの
は大きなため息。

「……ずいぶん斬新な煽りだな。マジで褒めてるつもりなのがタチ悪
い」

「褒めてるでしょう」

「正確に評価しようとしすぎた結果マウントになっ
てんだよ」

どうでもいいけど詐欺師してんだからもうちよい言葉選べるよう
なれって誰が詐欺師だ策を立てたのはクラゲさんだろ、というの
はさ
ておいて。

実際、一級の中でもクラゲさんは強い方だ。それはまあ私や悟に敵
うべくもないが、大抵の相手に後れを取ることはまずないだろう。術
式や呪力といった基礎的な戦闘の能力以上に、その一瞬の最良^{ベスト}を選び
取るだけの冷静さと度胸が頭抜けている。どうせいつぞや見せた「奥
の手」以外にも隠し球はあるのだろうし、何ならクラゲさんは死ぬく
らいならさっさと逃げると公言しているひとだ。

私や悟の強さが「勝つ」ことにあるならば、クラゲさんの強さは「負
けない」ことにある。方向性の違いはあれど、その強さがあるからこ
そ私たちも安心してこのひとに無茶ぶりが出るのだ。どんな厄介

ごを押しつけても何となくどうにかしてくれるうえに自力で生き残ってくれる、大変有り難いひとだと思う。

何かろくでもねーこと考えてるだろ、と胡乱な視線をにっこりと笑ってかわす。

「いえ、クラゲさんが人気だと私も鼻が高いなど」

「お前どの立場からも言ってるの？ いややっぱ言うな、何言われても多分ムカつく」

「やだなあ、そんなひとが味方で嬉しいって話ですよ」

「俺は何であんな軽率なことを言ったのか、わりと頻繁に後悔してる」

大人なんだから自分の発言には責任をもってくださいね、といつぞやの言葉をそのまま返したときの、クラゲさんの顔と言ったら。

これだからこのひとに絡むのはやめられないな、とついつい肩を揺らした。

奇縁極まれり

「あらイイ男発見♡」

「毎回毎回それやめてくんねーかラルウ」

キャラの濃すぎる人間にはとつくに慣れたが、それでも何となく微妙な気分になるそれ。何度言ってもこの「挨拶」をやめようとしないうるるにため息をつきつつ、夜分に悪いな、と門をくぐる。

「構わないわよ、傑ちゃんの呼び出しなんですしょう?」

「用があるのは自分のくせに呼びつけるとか何様なんだよって感じだよな」

「教祖さま夏油さまでしょ」

「うわ」

いやそうなんだけど、と遠い目をすれば、くすくすとラルウは愉快そうに笑う。

旧盤星教を取り込み組織作りを始めて以降、夏油の周囲にはそれなりの人間が集まってきている。このラルウもそのひとりで、極めて常識的且つ冷静な判断ができる術師だと思う。少々腹の底が読めないところはあがるが、術師ならそんなものだろう。夏油は彼を信頼しているようだったし、俺も別に思うところはない。

こつちよ、と施設の中を案内してくれる横顔は、悪意のある人間のものではなかった。

「あら、なーにクラゲちゃん、私の顔に何かついてる?」

「ちゃん付けするくらいなら呼び捨てにしてくんねーかな。……いや、」

何でもない、と言った俺に、ラルウはぱちりとウインクで返す。

「ごめんねクラゲちゃん、私傑ちゃんの方が好みなの♡」

「それは良かった。今後も心変わりしなくていいからな」

「あらいけず。クラゲちゃんてそういうところ可愛くないわよ?」

俺が「可愛い」を望む人間に見えるのかと投げてみれば、ひとを見た目で決めつけちゃいけないと思うのよねと軽く返してくるラルウ。このマイペースと返し方、何か九十九さんに似てるんだよなとため息

をついた。平たく言えば俺にとっては苦手なタイプだ。

とはいえ、マイペースを崩さないということとは流されないということでもある。夏油の思想と言葉に引きずられない人間がいるというのは良いことのように思えた。きつとラルウはこの組織の柱のひとりになってくれるだろう。

この調子でひと増やしてとつととお役御免になりたいもんだな、とぼんやり視線を浮かせれば、くす、と隣から小さな笑い声が聞こえた。薄暗い廊下の先から視線を外すことなく、何だよ、と言葉だけを落とす。

「いいえごめんなさい、夏油ちゃんが貴方を頼りにするのもわかると思ってる」

「使われてる覚えはあっても頼りにされてる覚えはねーけどな」

「素直じゃないわね本当に。茶化してるつもりはないのよ」

クラゲちゃんが夏油ちゃんの傍にいてくれて、本当に良かったと思ってるのよ。

静かな廊下に、ぽつりと落とされた言葉。確かにラルウの声色に茶化したような色はなくて、本心からの言葉だということは疑いようがなかった。

だが、だからこそ。そう、だからこそだ。

俺はおもむろに袖をめくり、左腕をラルウの眼前に差し出す。

「ラルウ、見ろこれ」

「あら、何？」

「めつちや鳥肌」

きよとんと目を丸くしたラルウは、次の瞬間には堪えきれないというように嘖き出していた。堪えようにも堪えきれなかった笑いは廊下に響き、それを聞きつけたらしいそいつがひよつこりと近くのドアから顔を出した。

「ラルウがそんなに笑うなんて珍しい。何があったんですか、クラゲさん」

「聞かない方がいいぞ。俺は笑えなかったし多分お前も笑えない」

あーうすら寒い、と袖を戻した俺に、風邪でも引いたんですかと夏

油は不思議そうな顔。ああ笑ったと涙を拭いたラルウは、何でもないのでドアに向けて俺と夏油の背を押した。

「縁は異なるもの、味なものってやつ？」

「それ基本男女の縁についていうやつだからマジやめて」

「クラゲちゃんお願いこれ以上笑かせないで」

星に願いを

「ながれぼしに三回ねがいごとをすると、ねがいがかとうってほんとう？」

美々子と菜々子が星に興味をもったのは、夜蛾先生が差し入れてくれた本がきっかけだった。息子のお下がりですまないが、と差し出されたこども用の図鑑には鮮やかな写真やイラストがたくさん添えられていて、きらきらしたもの好きふたりはひどく気に入ったらしい。繰り返し図鑑を開いては、この星が、星座が、と新しく知ったことを話してくれた。それはひどく微笑ましく、そんなに興味をもったなら今度は天体観測でもしてみようかと思っていたころ。

いつも通り（こういう言い方をすると「俺は承諾してない」とジト目で見られる）ふたりを預けにクラゲさんの部屋を訪れると、我先にと深海の中央に浮かぶ椅子に駆け寄った双子は開口一番にそう尋ねた。急になんだという顔で、クラゲさんは振り返る。

「流れ星がなんだって？」

「ほんにね、かいてあったの！　ながれぼしがひかっているうちに三回ねがいごとを言えたらねがいがかとうって！」

「ここ、見て」

子どもの手には重い図鑑を震える手で持ちながら、美々子はここ、とページを指した。そういえば図鑑のコラムにそんな話が載っていたような気がする。美々子の震える手を見かねたのか、クラゲさんは図鑑を手にとってそれに目を向けた。特に興味のなさそうな様子に、よりにもよってそれをクラゲさんに尋ねるか、と思わず遠い目をする。明確な数字をもって呪霊の研究に勤しむこのひとが、まさかそんな迷信を信じているはずもない。

せめてどうか子どもの夢を壊さない言い方を、と念じながら様子をおかがっていると、そうだな、と一瞬考えたクラゲさんは口を開いた。

「試したことないから俺にもわかんねーな」

え、と私を含めた三人の声がそろった。

「ここにはそういう話があるって書いてあるだけで、何回試してどれ

だけ願いが叶ったのか書いてないだろ。俺もやったことないし、わからない」

「えー！」

「クラゲさんにもわからないことあるんだ……」

当たり前だろ、とクラゲさんは口元にわずかな苦笑をのせる。夢を壊さないように気をつかったのかと思いきや、どうやらクラゲさんは大真面目に言っているらしい。誰か検証したのかなとか言いながら呑気に凶鑑を見つめている。

「なんだあ、ねがいごとかなうかと思ったのに」

そう言って不満気に唇をとがらせる菜々子。その顔を見て、クラゲさんは少し愉快そうに首を傾げた。

「叶わないとは言っていないだろ。やってみないとわからないって話」

「……えっ」

「！」

菜々子は驚いたように声を漏らし、美々子もぼつと顔をあげる。希望に満ちたふたりの目は、星空のようにきらきらと輝いている。

「わからないなら試してみないとな。……そろそろperlセウス座流星群の時期だし、天気さえよければ流れ星くらい高専でも見える。本当に願いが叶うかどうか、自分たちで実験してみればいい」

でも夜は危ないから絶対にふたりだけで外に出ないように、とクラゲさんがぴつと指を立てると、ふたりは満面の笑顔で頷いた。

*

「驚きましたよ」

天体観測にはしゃぐふたりに聞こえないように小声で言うと、何がだよ、とクラゲさんはいつも通りのめんどくさそうな声色で返した。

「いえ、クラゲさんなら迷信は迷信だとぼつさりと切り捨てるかと」

「検証してないのに迷信だって切り捨てるのは早計だろ。そもそも科学は万能じゃないんだ、科学的じゃないからって否定するほうが非科学的だよ」

科学じゃ証明できねーけど呪霊は存在するだろ、と続けられた言葉になるほど、と頷く。優れた科学者ほど物事を断言するのを避けると聞いたことがあるが、きつとそういうことなのだろう。こういうときのクラゲさんの柔軟さというか、思考の軽やかさは素直にすごいと思う。

天体観測をやるときはこのひとも引きずり出そうと内心で計画を立てながら、何食わぬ顔で言葉を続けた。

「それにしても、どうして流れ星で願いが叶うなんて話になったんでしょうね？」

「ウラル・アルタイ系民族の伝承由来って説と、キリスト教由来って説が有力って話だな」

「うわ即答……本当にその脳内データベースどうなってるんですか？ そんなだから『クラゲさんアンドロイド説』がまことしやかに流れるんですよ」

「その説提唱してる本人が言うな」

あと俺は天体観測付き合わねーからな、と続けられた言葉は全力で聞こえなかった振りをする。わざわざそんなフラグを立てなくてもちゃんと付き合ってもらうので安心してほしい。

クラゲさんにはこやかな笑みだけを返す私を胡乱な目で見つめ、とここで、とモニターに表示されている時刻をつつく。

「あと一分で授業始まるけど、お前そんな呑気にしていいの？」
「……あ、」

始業を告げるチャイムが、校内に鳴り響いた。

最高のカスクートをももめて

クラゲさん、とモニターに向かう背中に呼びかける。

「ご馳走様でした。ありがとうございます」

「……ああ、今日だったか。俺はちよつと調べもんしただけだよ」

「お金も出してくださったんでしよう」

たいした金額じゃねーよ、とクラゲさんは右手でデータの打ち込みを続けながら左手を振った。本当に器用なひとだと思う。

七月三日、梅雨も明けきららない今日は私の誕生日だ。十七にもなれば自分の誕生日にさしたる感慨があるわけでもなかったが、何にしても大袈裟な同期が何か企んでいるのは感づいていた。灰原ほどサプライズが出来ない人間もない。少し前からこそそと伊地知くんと話をしては、私の顔を見てにやにやと笑っていた。もはや隠す気があるのかと言いたい。

とはいえ、誕生日を祝ってくれようというその気持ちは素直に嬉しかったので、多少ずれたお祝いであつたとしても今日はちゃんとお礼を言おうと思っていた。が、まさか本当にちゃんとしたプレゼントを持ってきてくれるとは。

もう、香りから違つていたと言つていい。質の良い小麦の香ばしい香りは食欲をそそり、挟まれた生ハムとチーズはシンプルながらきちんと調和を考えて配置されている。これは絶対に美味しいと直感した。ちよつど昼食時で良い感じに腹も減つている。

おそろおそろの灰原と伊地知くんを目をやれば、笑顔で大きく頷かれた。いただきます、と言い切る前にそれに齧りつく。堅すぎず、しかし物足りなさを感じるほど柔らかくもない最高のバランスのバゲット。ほどよい塩味の生ハムとまろやかなチーズが絶妙なハーモニーを奏で、時折舌を刺激する黒胡椒がしっかりと味を引き締めている。ひとくち食べればふたくち目を我慢することは出来ず、気づいたらまた次を求めてしまう。

私の直感是完全に当たっていた。今まで食べたカスクートのなかでいちばん美味しい。

『これは……いったいどこの店の……?』

『美味しい!? 美味しいでしょ!? やったね伊地知、協力ありがとう!!』

『いえ、あの普通無理なスケジュールを間に合わせたのは灰原さんですから』

『どこの店のだと聞いてるんですが』

『隣の県まで行ってきたよ! 昼までには売り切れちゃう隠れた名店なんだって!』

聞けば、私の誕生日に最高のカスクートをプレゼントしようと考えた灰原は伊地知くんとクラゲさんに助力を願ったらしい。

クラゲさんはネットの海から美味しいカスクートを売る店の情報を。伊地知くんは昼過ぎには売り切れるカスクートを確実に手に入れ、この昼食の時間までに高専に帰れる最高効率のルートの選択を。そして灰原は、そのかなり無茶なミッションを持ち前の身体能力で完遂してきたらしい。タクシー捕まえるより走る方が速かったよ、といったもの笑顔で言い放った灰原に、途中で誰か轢いていないかちよつと心配になった。

『それにしてもさすがクラゲさんですね、サイトに載っていないお店の情報まで探し出してしまっなんて』

『本当にね! このお店ね、カスクート以外のパンも本当に美味しいんだって。たくさん買ってきたから一緒に食べよう!』

ほら、と紙袋いっぱいパンを差し出した灰原は、太陽のように顔いっぱい笑う。生真面目な後輩も、はにかむように。

『誕生日おめでとう、七海!』

『おめでとうございます、七海さん。いつもありがとうございます』

ストレートに祝われて気恥ずかしい気持ちがないでもなかったが、私の口は勝手に礼を言っていた。どのパンも本当に美味しかったし、何よりその気持ち嬉しかった。

もうひとりの協力者にもお礼を言わなくてはと、こうして部屋を訪ねるほどに。

「パン、どれも美味しかったです」

「知る人ぞ知る隠れた名店なんだと。自分が買えなくなったら困るからって口コミすら流れないほどのな」

「よくそんな店をネットで探せましたね」

「こういうのはコツがあるんだよ」

まあ俺にはたいしたことじゃない、とクラゲさんはそこでようやく手を止め、くるりと椅子を回した。いつも通りの無表情を少しだけ柔らかにしてくして、ん、と何か小さな包みを放り投げた。とっさに受け取ったそれは、意外と甘党のクラゲさんがよく食べている黄色の飴玉。

「誕生日おめでと。まあ頑張つてまた一年生き残れよ」

そしたら来年も飴くらいやるよとモニターに向き直ったクラゲさんの声は、いつもより少しだけ柔らかい。

それにしても、といつもの調子に戻った声が続ける。

「美味そうだったら俺の分も買ってきてつて言っただけど、まあ灰原くんなら忘れてるよな」

「……いつも同期がすみません」

*

「……毎年律儀に飴もらいにくるんだから物好きだよな、七海くん」

「頂けるものは頂いておこうかと。クラゲさんこそ、よく毎年覚えていますね」

「一度覚えたデータは忘れねーんだよ」

「……ねえ傑、僕クラゲさんに誕生日祝ってもらったことないんだけど」

「私もないな。クラゲさん、差別はよくないと思うんですが」

「お前らの誕生日祝ってやってくれて言われたことねーし。人徳の差だろ」

「じゃあ自分で言う。僕十二月七日だから祝ってね！」

「私は二月三日です。よろしく願いますね」

「そういう貴方がたはクラゲさんの誕生日を祝ったことはあるんですか」

「ないけど。いつなのかも知らないし」

「むしろクラゲさんに誕生日とかあるんですか？ あ、開発された日？」

「ひとをアンドロイド扱いすんのもいい加減にしろクズ」

「それでよく祝って欲しいなんて言えますね。クラゲさんの誕生日の方が近いですよ」

「まじで？ じゃあいつなのか教えてよ、僕たちが本気で祝ってあげるから」

「いいね、盛大に祝ってあげますよ」

「全力で遠慮する。まじでやめろ」

海月と日車

「素晴らしいな、これは」

俺がまとめたデータの山に埋もれながら、そのひとは心底感心したように呟く。

「わかりやすさはもちろんだが、資料の順序がいい。知識のない人間でも順番に読んでいけばちゃんと理解ができるようにまとめられている。このままで十分にテキストとして通用する代物だ」

「それはどーも」

一度開花してしまった才能は消すことはできない。死滅回游をきっかけに不幸にも呪術師として生まれ直したこのひとは、今後の身の振り方を決める前にとりあえずこの世界を知ることにしたらしい。

日車寛見、スーツの胸元に弁護士バッジを掲げたまま現れたこのひとは、俺のまとめた資料をみせてもらえないだろうかと俺に頭を下げた。俺のことは虎杖に聞いたのだという。

「しかし、君はこれを全て把握していると聞いたが」

「そうですけど」

「何故また、覚えていることをわざわざ形に？」

迂闊にも、ぴく、と肩が揺れた。

この人もまた、相当に脳の扱いが上手いひとだということとは言葉の節々から察している。覚えたことを忘れるという感覚の薄いひとからすれば、それは当たり前前の質問だっただろう。俺がひとのために動くような人間でないことを聞いているならなおさらだ。

いやすまない、と何か察したらしい日車さんはすぐに切り返す。

「悪戯に踏み込むつもりはなかった。失礼した」

「いえ。何となくとしか言えないことをどう説明しようかと思っただけです」

何となく、そうした方がいいと思ったから。そうしたいと思ったから。そんな曖昧が過ぎる理由を口にするには躊躇いがあった。しかし、それ以外に説明しようもない。

「理由のない気まぐれを起こしたくなることもあるもんで」

「……そうか。ならその気まぐれに感謝だな」

また無言で資料をめくり始めた日車さんに、このひと「善人」側だなど反射的に思う。いらぬ才能を開花させたせいでこの世界に足を突っ込んでしまったようだが、やはりこちらの世界には向いてない類いのひとだ。

まじで死滅回遊とか余計なことを、と内心で悪態をつきながらキーボードを叩いていると、クラゲくん、と背後で静かな呟きが落ちた。

「何ですか」

「今後のための参考意見として聞きたいんだが、……君は呪術師をどう思う？」

「クソです」

「できればもう少し具体的に」

具体的に何も、ひとの負の側面や生き死にが常に隣にある世界なんて碌なもんじゃないに決まってるだろうと言いたかったが、振り返った先にあった日車さんの目を見てやめた。

さすが善良な魂の持ち主、少しもふざけていない真摯な目は適当な答えを許さない。

「……これは俺の勝手な想像ですが、弁護士やってれば人間の嫌なこと結構見ますよね」

「そうだな。正直だいたい食傷気味だ」

人間の負の感情から生まれる呪霊を祓って、祓って、祓って。命がけで地道に減らしているというのに、それでもどこかしらで呪霊は生まれ誰かの生命を食い殺している。終わりの見えない仕事というだけでも嫌になるのに、相対するのが呪霊だけでなく呪詛師だったり呪術界そのものだったりすることもあるわけ。

この世界にあるあらゆる仕事の嫌な部分だけ抽出した仕事といつても過言ではないと俺は思っている。そりゃあ善良で良識のある人間には堪えられない。堪えなくていいからとと出ていってほしい。

「人間の醜さを骨の髄まで理解し、受け入れると同時に命がけで否定

する仕事です。たいてい呪術師として長生きしている人間に碌な奴はいませんし、呪術師としてしか生きられないクズばかりだ」

さらに言うなら、と日車さんの視線を正面から受け止めながら、俺は椅子の肘置きに右肘をついてもたれかかった。

「他人に意見を求めて素直に受け入れるようなひとは、まず呪術師に向いてませんよ。早死にコース一直線、後悔しか残らない」

そこで初めて、そのひとはク、と肩を揺らした。そうか、と口角を上げ、改めてこちらを見る。

「無自覚な世話焼き、と聞いたが。なるほど、その通りだな」

「……俺をどう評するかは勝手ですけど、遺憾の意だけは表明しときますね」

「はは、いや、すまない、気を悪くしないでくれ。非常に参考になった。ありがとう」

「いえ」

善人ではあるが変人でもあるな、と幾分か柔らかい表情になったそのひとを呆れたように見る。というか余計なことを言ったのは虎杖だろうか。世話焼きというのはたまに言われる言葉ではあるが、俺としては非常に受け入れがたい。

やれやれと身体をモニターのほうへ戻すと、クラゲくん、と再び呼び止められる。首だけ後ろに向けると、またそのひとと目が合った。

「今日一日でこれを読み終えるのは難しそうだ。また来ても構わないか？」

どう見ても面白そうな様子のそのひとは、何となく全てを読破してもこの部屋に訪れるような気がした。頭を搔き、少し考える。作業の邪魔さえしないでくれるなら俺が拒む理由は特にない。

「……まあ、どうぞご自由にな」

頭の中でチカ、と星が光る。

一番大きな星の中には、和菓子に入った紙袋を持ってこの部屋のドアをノックする日車さんの姿があった。

「普通」のはなし

ある程度の「想定外」には対応できる自負がある。任務中にイレギュラーが起きるのは当然のことだし、日常生活においても特に何かとやらかしてくれる相棒のおかげで多少のことは耐性がついている。が、さすがにこれは予想していなかった。

「……………」

「……………」

真つ昼間の大通り、それもおもに地元の間人が行き来するエリアでまさか深海の住人と鉢合わせるとは思わないだろう。驚いたのは向こうも同じらしい、珍しくわずかに目を見開いて固まっている。

といってもそのひとが驚いた理由は私と鉢合わせただけでなく、私の隣にいるひとのせいだろうけれど。

「あら傑、お知り合い？」

私だって人間なので、実家はあるし産み育ててくれた両親もいる。呪霊を見えると言った私を受け入れ、高専に進むことを選んだ私の背を押してくれた両親にはちゃんと感謝をしているし、帰省をして顔を見せては親孝行と思って買い物に付き合うことだって普通にある。とはいえ、その姿をひとに見られるというのはなかなか思うところがあるというわけで。それも、まさかこのひとに。

知り合いというか、とつい言葉を濁すと、すつとクラゲさんは前に進み出た。垂れた目尻をわずかにゆるませ、いつもより柔らかい声に言葉をのせる。

「夏油くんのご家族の方ですか？ 初めまして、家入と申します」
アンタ誰だ、と言いきりそうになったのをすんでのところで堪えた。

*

「お前俺を何だと思ってるの？ 礼儀くらい知ってるわ」

「生憎と貴方が礼儀を発揮してるのを見たことなかったもので」

このひと本当に公共交通機関が似合わないな、と思いつながら隣に座

るそのひとを見る。地下鉄の座席に座っているだけで面白いとか
いつそ才能だと思う。

そんな気持ち顔に出ていたのか、垂れたジト目がこちらを睨めつ
ける。

「言つとくけどお前もたいがい似合わねえぞ。見てるだけで狭苦し
い」

「身長だけならいうほどクラゲさんと変わらないんですけどね。筋肉
量の違いかな……ああ別にクラゲさんがひよろいとは言つてません
よ。」

「言つてんだよクズ。お前に比べたら人類の大半はひよろいわ」

まあクラゲさんは細身に見えるだけでちゃんと鍛えているのはわか
かっているし、さほど筋力を必要としない戦闘スタイルなのだろうと
察しているけれど。そもそも鍛えても筋骨隆々になるタイプではな
さそうだ。マッチョなクラゲさんなんて想像するだけで笑える。多
分硝子も腹を抱えて笑うのを通り越して泣くと思う。

鍛えますから、と軽く言えばクラゲさんはめんどくさそうに視線
を外した。

「お前の場合、親父さんの遺伝もありそうだな」

「ああ……そうですね、よく父に似ていると言われました」

話をそちらに持つて行かれると、つい声が小さくなってしまふ。

まさかの笑顔に近い表情で、私の母に挨拶までしてみせたこのひ
と。これがまたどこをどう見ても礼儀正しい好青年という体で、つい
夢かと疑った。

しかも適当に挨拶をして去ってくればいいものを、ひとを家に招
くのが好きな母は当然のようにクラゲさんを夕飯に誘い、いやそんな
と最初は遠慮をしてくれたクラゲさんも、母の押しの強さと、おそら
くは何よりも私の顔色を見て最終的に頷いた。

そしてまさかの、両親と私、クラゲさんの四人で食卓を囲むことにな
ったという。いやどうということだ、私にもわからない。

「あんな嫌そうな顔する方が悪い。意地でもやりたくなるだろ」

「ええ、こういうときに貴方は硝子の兄なんだと思知りますよ」

「不思議とあいつ、俺の嫌なところばっか似てな」

「嫌なところだと自覚があるなら改めては？」

その必要性を感じないと言い放ったこのひと、どの口でひとをクズ呼ばわりするのかと。ひとの嫌がることを進んでやるいじめっこ精神、完全に妹にも遺伝しているのでどうかした方がいいと思う。

仕事から帰った父にも丁寧挨拶をしてみせたクラゲさんは、一歩の隙もなく「私のクラスメイトの兄」で「先輩の呪術師」として振る舞って見せた。学校のことから呪術のことまで、話題を振られてはひとつひとつ丁寧答える。せっかくだから、と父に酒を勧められても嫌な顔ひとつせず杯を受けていた。酒は脳が鈍るからあまり呑まないと喋っていたのに。

『さては家入くん、なかなかの酒豪だな？ 全く顔色が変わらないじゃないか』

『遺伝的に酔わない体質でして』

『父さんはその辺にしておきなよ。顔が赤い』

『そうよお父さん、ごめんなさいねえ家入くん』

いえ、と軽く返したクラゲさんはまた酒に口を付けた。誤魔化すこともなくちゃんと呑んでいるようだが、確かに顔色は変わっていない。酒豪というのは本当らしい。

対して酒が回ってきたらしい父は、その切れ長の目のふちを赤くしていた。

『……家入くん、君は呪術師として働いて長いのかな？』

酔っ払いらしく唐突に態度を改めた父は、少し低い声で尋ねた。急に変わった話題も戸惑うことなく受け止めたクラゲさんはそうですね、と少し考えて答える。

『長いというほどではないですが……まあ、彼の四つ上なので、その年月分くらいは』

すぐ死ぬやつが多いこと考えれば長いかも、と言わないでくれたのには安心した。両親にはあまり呪術師の世界のことを話していない。無駄に心配をかけたくもなかったし、万が一にも巻き込みたくなかった。卒業後にやろうとしていることについても、具体的な部分は誤魔

化して伝えてある。

そのまま余計なことを言わないでくれよ、と横目にクラゲさんを見る。絶対に私の視線に気づいているくせに素知らぬ顔で無視をするこのひと、本当に性格が悪い。

『傑も卒業後は呪術師として働くと聞いて……しかも高専から離れて活動するという話なんだが』

『ええ、聞いています』

『傑には傑のやりたいことがあって、古い体質の組織から離れた方が動きやすいというのはわかる。だが、……やはり私たちにはその世界のことかわからない分、親としては心配もあってね』

傑の選択について君はどう思うか、呪術師としての率直な意見が聞きたい。

静かな声で続けられた父の言葉に、すつと母も姿勢を正した。酒もある席ですまないねと父は苦笑するが、退くつもりはないらしい。父さん、と声を掛けても視線で黙らされる。

なるほど、とクラゲさんは酒を置き、まっすぐに視線をかえした。

『好きにやればいいと思いますよ。特に問題ないんじゃないですか』

あまりにもあっさり、とクラゲさんはそう言った。

「……クラゲさんあのとき、完全に素でしたよね」

「あのとき？ ……ああ、お前の進路の話のときか。率直につて言われたら変に取り繕うのもおかしいだろ」

地下鉄に揺られながら、クラゲさんは何でもないように言う。率直にしてもあまりに軽く言われた言葉にうちの両親は目を剥いていたというのに、このひと自身はまったく気にしていないのだから何というか。

問題ないとは、と繰り返した父にクラゲさんは軽く頷いて続けた。

『おふたりが何を心配されているのかはわかるつもりです。ただでさえ呪術師は常に死の危険と隣り合わせなのに、呪術界を牛耳る組織からも離れば全てのリスクをひとりで負わなくてはならない。普通に考えて生き残るのは相当難しいですね。あ、この『生き残る』は文字通りの意味です。高確率で死にます』

率直が過ぎる言葉に両親は息を呑む。クラゲさん、と口を挟もうとするが、クラゲさんは気にも留めない。研究の話をしているときのような淀みない口調が、一気に静まりかえった部屋に響く。

『繰り返しますが『普通は』です。でも彼は普通じゃないので』
『……クラゲさん?』

『呪術界でも高専に入学して一年そこで特級になる人間を普通とは言いませんよ。いったい中学までどんなやんちゃしてきたのか俺が知りたいくらいです。まあ平凡な子どもだったと言われても絶対信じませんけど』

『異議あり』

『却下。ですから俺はそんなに危険な賭けだとは思いませんね。そもそも日本にいる全呪術師が束になって彼に掛かってもせいぜい相討ち、少数いる彼の味方を差し引けば勝つのは息子さんです。その程度の実力はある』

それが呪術における「力の差」であり「特級」という階級だと、きつぱりと言い切った。両親の結ばれた口元を見て、つい私も付け加える。

『……進路のこと、絶対大丈夫だと言い切るほど樂觀はしてないけど、心強い味方はいるし考えられる限りの手は打っているから。クラゲさんも味方のひとりだよ。ものすごく頭のいいひとだし、細身に見えるけど普通に父さんより力もある』

そう付け加えれば、えつという顔をする両親。いちばん反応するのはそこなのかよとクラゲさんの心の声が聞こえたような気がしたが、ここ数年で私に身長を抜かされてしまったとはいえ今も筋トレが趣味で恵まれた体格の父と、格闘技好きの父子にすっかり慣れきっている母なので無理はないと言いたい。

ジト目気味の隣からの視線を軽く無視し、両親に笑いかける。
『心配かけてごめん。でも、もう決めたんだ。出来る限り無茶は避けるから、応援して欲しい』

すると父はそうか、と苦笑して言い、母は少し困ったように微笑んだ。ようやく食卓に和やかな空気が戻る。クラゲさんも改めて「好青

年」の顔に戻し、酒を手を取った。

そこからはまた、とりとめもなく何でもない話。私の昔話（恥ずかしい部分は全力で阻止した）や、逆にクラゲさんのご両親の話（軽く誤魔化されたがたまに遠い目をしていた）、高専での生活の話（都合の悪いことを言われてたまるかと話の主導権を奪い合った）など。

細身のクラゲさんに力で負けると言われたのが気になったのか、父がクラゲさんに腕相撲を挑んだのには笑った。

「腕相撲、あれ呪力使ってませんか？」

「呪力なしでもさすがに一般人に負けねーわ。さすがお前の親父さんだな、一回で負けを認めてくれよ」

「ええ、負けず嫌いを察しておきながら五回勝負全勝してプライド叩き壊しましたね」

「あの話の流れだと負けてやるわけにもいかねーだろ。お前も余計なこと言うなよな」

酒が入っていたのもあってもう一回もう一回とうるさかった父にも、クラゲさんは嫌な顔ひとつせず対応をしてくれた。普段だったら腕相撲なんか絶対にやってくれないのに。

正直、ここまでクラゲさんがサービスしてくれる理由がわからない。結局夕飯のあと、うちの実家を辞するときまでクラゲさんは猫かぶりを貫いてくれたし、私のことを悪く言うことも全くなく。むしろ会話の端々で両親の心配がほどけるように言葉を選んでくれたと思う。

高専に戻ると言った私を見送ってくれた両親の顔は、いつもよりずっと明るかった。

「……クラゲさん」

堅い背もたれに身を預けて両目を閉じていたクラゲさんが、ずっと片目をあけて私を見る。無言のまま続きを促された。

胸の内のわだかまりをそのまま言葉にするのに、少し躊躇う。うまく言葉にできなくて、つい別の疑問に逃げてしまった。

「……今日はどうして昼間に外出を？」

「呪具のメンテ。ひとに頼むのに夜中に訪ねるわけにはいかねーだ

ろ」

「ああ、なるほど」

なるほど、の次の言葉が続かない。そんな私を見て、クラゲさんは呆れたように息を吐く。めんどくさそうな両の視線が私を貫いた。

「お前が俺をどこまでクズだと思ってるのかは知らねーけど、見えな
い身内相手に何でもかんでもべらべら喋るほど腐ってねーよ」
、」

「夕飯の誘いに乗ったのも、まあお前が嫌がってたのが面白かったつ
てのもあるけど、ただの好奇心。どんな家で育てばお前みたいのが出
来るのかちよつと気になっただけ」

「言い方。……いえ、ええ、……ありがとうございます。正直、助か
りました。普段のことともそうですが……呪術師のこととも今後のこと
も、うまく伝えられないままだったので」

「気にすんな」

ばつさりと投げられた意外な言葉に、思わずまばたきをひとつ。

頬杖をついたクラゲさんは、ぼんやりと路線図を眺めている。

「知らなくていいこともある」

せつかく見えねーんだし、とぼそりと言葉が落ちる。

呪術界がどんな世界なのかも。呪術師がどんな生活を送っている
のかも。「いいひと」では決して生き残れない場所であることも。
たったひとことに、その全部が詰まっているような気がした。

そして同時に思う。知らなくていい、知らない方がいいことばかり
の場所に、妹を受け入れるしかなかったクラゲさんは、いったいどん
な気持ちで。その先の言葉は決して言っではいけないような気がし
て、ごくりと全てを飲み込んだ。

顔の筋肉を動かして、いつも通りの笑みといつも通りの声を作る。
うちはどうでしたか、と何も気づかないふりをして。

「ごくごく普通の家だったでしょう？」

意外でしたか、と笑ってみせれば、ひとつまばたきをしたクラゲさ
んは呆れたように口元をゆがめた。別に意外でも何でもねーよと言
いたげな笑みとともに、口を開く。

「『普通』を『普通』のまま守るのが難しいんだろうが。だからお前も『普通』を捨てるしかなかったんじゃないやねえの」

まあ知らんけど、とクラゲさんが付け加えると同時に、到着のアナウンスが流れた。

不機嫌クラゲ

基本、感情豊かな人間でないことは昔からよく知っている。

心を動かすことすら面倒くさがる人間性だというのもそうだし、呪術師になってからはさらに磨きが掛かった。だから感情に振り回されることなんて稀も稀。兄貴のあんな姿を見ることはかなり少ない。

「……いやあれいつも通りじゃねーの？」

「ただ煙草を吸ってるようにしか見えないけど」

「は、節穴どもめ」

「めちやくちや話しかけんなオーラ出てんでしょーが」

任務の報告で高専に寄ったという歌姫センパイも一緒に、校舎裏の角からこっそり超絶不機嫌の迷惑野郎の様子を窺う。昼間でも薄暗いそこは兄貴にとつての喫煙場所だが、だからといって昼間に一服している時点で普通ではないし、その横顔を見ればわかる。ぱつと見ではいつも通りの無表情だが、あれは相当に頭にきているときの顔だ。

お前からまた何かしたんじゃねーのと同期のクスどもに目を向けるが、ふたりは揃って首を傾げた。

「心当たりがありすぎてどれのことやら」

「な。だから逆に俺らじゃねえよ」

「安定のクスかよ。まあ確かにお前から相手なら兄貴も直接文句言うか」

「たぶん上層かほかの呪術師か、でしょ。敵味方があまりにもはつきりしてるひとだから」

それでもあそこまでイラついているのは珍しいけど、とため息交じりの歌姫センパイ。あのひとかあのひとかあのひとか、と兄貴の「敵」を指折り数えることができるあたり、どれだけそれに巻き込まれてきたのかと少々申し訳ない気持ちになる。いや全部兄貴が悪い。

「アタマが化石みてーな性格クソのやつばつかじゃん」

「悟、知ってるのかい？」

「まー、そこそこの名を知れた術師の家のやつだし。伝統と血筋自慢の雑魚」

「なるほど、それは確かにクラゲさんが嫌いそうだ」

確かに、と紫煙を細く吐き出す横顔を見る。

歴史、伝統、血筋、相伝、規律、——別に兄貴だって、そういったものを全否定しているわけじゃない。相応の価値と機能があるから重んじられるのだと、兄貴自身が言っていたのを聞いたことがある。

『使いこなせもしねえくせにそれを振りかざす馬鹿が嫌いなだけだ』

そう吐き捨てたときの兄貴も、相当に機嫌が悪かった。確かあれは「脳が拒否するレベルで嫌いなせいで名前すら覚えられない」禪院家傘下の家系の呪術師と顔を合わせたあとだったような。

もしかしたら今回もそいつか、と思ったその瞬間。

「お前ら」

そう大きい声ではなかったが、妙に硬い声にぴくりと私たちの肩が揺れる。

煙を吐ききった兄貴は短くなった煙草を携帯灰皿に放り込み、こちらに身体を向けた。先輩、と言いかけた歌姫センパイの言葉を視線で遮る。センパイをビビらせるなクソ兄貴。

そして何を言うかと思えばこの一言。

「肉」

は、と四人の声が綺麗に揃う。

傍迷惑な不機嫌野郎は、一回で理解しろよとばかりの態度でまた口を開いた。

「夜、肉食いに行く。来たいなら勝手に来い」

「……やべーよ傑、今日世界滅びるんじゃないやね？」

「有り得るね悟、天変地異の前触れだ」

「来たくねえなら別にいい」

「五条御用達の高いところ押さえました〜」

「有り難くご馳走になります。後輩たちも呼びますね」

「勝手にしろ」

クズどもの変わり身に呆れながら、どしたの、と一応声を掛ける。数秒黙った兄貴は、小さく息をついてから別にと一言だけ落とした。

「ただの気まぐれだよ。タイミングが良かったな、庵」

「……まあ、そういうことにしておきますけど」

「酒飲みたきや好きにすりゃいいけど、絡み酒は勘弁しろよ」

「の、飲みませんから！」

ハイハイと適当に返事をして私たちの横をすり抜けた兄貴は、振り返ることもなくすたすたと歩いて行く。夜になったら皆で部屋に行きますね、という夏油の言葉に片手をあげて応えた白衣の背中はそのまま振り返ることなく去って行った。

言うだけ言つてこつちのことは放置かよとは思ったが、あのマイペースは標準装備だ。いつものこと過ぎてため息も出ない。

「……結局、何があつたんだらうね？」

「別に何でもいーじゃん？ 奢られとこーぜ」

「五条、アンタねえ……」

「……ま、いーんじゃないですか」

おそらく深海に帰っていった、あの背中を思い起こす。

ごく稀にだが、兄貴だつて感情に振り回されることがないわけではない。だが今までの兄貴なら、その行き場のない感情も全部ひとりごとと堪えていた。感情の処理が終わるまで何をすることもなく、ただ独りで黙り込んで。

その兄貴に、私らを巻き込んでやけ食いで憂さを晴らそうなんて発想が生まれたこと。それはきつと、悪いことではない。

「せいぜい高い肉食つて金使わせてやりましょ」

知らず上がった口角に、歌姫センパイが不思議そうに眼を瞬かせていた。

*

「……うわ」

「ウケる。会計いくら？」

「せ、先輩、やっぱり私も少し……！」

「いい、財布しまえ。久々に見た桁数だったってだけ」

海月の子守歌

「あー……まじ天国……」

「高専中のエアコンが全滅したのに何故ここだけ無事なんだ……」

「クラゲさんまじどういいう手エ使ったワケ？」

俺は静かにしてろよと言ったはずなのだが、まあこいつらがそんなことなど気にするはずもなく。

まだ六月の終わりだというのに信じられないレベルの酷暑が続く今日この頃、このたび高専中の空調が軒並みご臨終なさったらしい。そもそもがオンボロなうえ、いきなり夏がきたものだからロクに手入れもされずに酷使されたのだ、そりゃ機嫌も損ねるだろう。

ちなみに俺の部屋は研究用の機材を導入したとき、ついでに空調も新しいものに取り替えた。何せ九十九さんのポケットマネーだ、俺は遠慮なく最新式の良いやつを買ったとも。おかげで今もこの部屋は快適な温度を保っている。

枕やタオルケットを抱えて部屋に乗り込んできたこいつらは、どうやら本気で今晚をこの部屋で過ごすつもりらしい。

『可愛い妹が熱中症で死んでもいいのか』

珍しく硝子がガチの顔で泊めろと訴えてきたので仕方なく許可したのだが、まさかおまけがふたりついてくるとは思わなかった。硝子曰く「最強も暑さには負けるんだって。ウケるよね」とのこと。一応お前ら男と女じゃねえのかとは思ったが、口にするだけ馬鹿らしいと思っただのでやめた。余計なことは言わないに限る。

やいのやいのと修学旅行かと言わんばかりにうるさかったそいつらも、さすがに真夜中が近づくと静かになる。五条どころか夏油も呑気な寝息を立てていて、実は爆睡型なのかと少し意外に思った。まあ連日の熱帯夜で寝不足だっただけかもしれない。大きすぎる芋虫二匹は、タオルケットにしっかりとくるまって起きる気配もなかった。

その二匹の隣、比較対象のせいでひどく小さく見えるもう一匹の芋虫はもぞりと寝返りをうった。

「……あにぎ、」

聞こえてきたか細い声に、小さくため息をつく。硝子は俺と同じで眠りが浅い。

「……モニターが眩しいとか言うんじゃないぞ」

「ん、……ねむれない」

そう言つて転がったまま目元をこする硝子。半分眠つて半分起きている状態のようだが、確かに妹はこうなるとかえつて寝付くの間がかかる。昔はどうか早く寝かせようといういろいろ試したものが、まさかこの歳になつて同じ状況に陥るとは思わなかった。

早く、と言わんばかりに俺をじつと見つめる顔が、幼い頃の硝子と重なる。完全に幼児退行してやがる、と仕方なく椅子を下りて硝子の枕元に座り込んだ。

手を伸ばし、さら、と自分と同じ黒髪に指を通す。

「つたく……ほら、目エ睨れ」

何年ぶりだ、と思ひながら息を吸う。歌うというほどの音量もなく、むしろ囁くだけのそれ。音と言葉を辿るだけの拙いものだが、硝子にはそれでいいらしい。

大昔に父が俺に歌い聴かせた、どこぞの国に伝わる古い子守歌。

「——硝子？」

歌い終わる頃には、硝子は昔と同じ顔で小さな寝息を立てていた。やれやれ、どうやら今でもちゃんと効果はあつたらしい。硝子がくるまっていたタオルケットを肩まで引き上げ、最後にもう一度そつと頭を撫でる。

「……おやすみ」

音を立てないように立ち上がり、ついでに仕方なくクソガキどものタオルケットも掛け直し、改めて椅子に座る。

いつもより小さなタイプ音が、三つの寝息に溶けて消える。

*

「……眠ってる間にクラゲさんの歌声を聴いた気がするんだけど」

「うつつつそ俺も。まじかあれ現実？ クラゲさん歌うの？ ウケ

る」

「え、兄貴の歌声とか十年は聴いてないんだけど」

「勝手に俺を夢に登場させんな出演料取るぞ。とつとと顔洗つてこい」

何てことない夏の日

このクソ暑いなか真っ昼間に外出しただけでも疲れたというのに、まさか大通りでこの特級クズどもと顔を合わせるとは。何故だか一緒に高専に戻る羽目になった挙げ句、今も俺の部屋を陣取っているこのクズども、マジでいい加減にしてほしい。

「いや、私たちを使って逆ナン撃退しておいてそれはないでしょう」

「そーそー。しつこく絡まれてたから助けてやったんじゃん」

「何、兄貴逆ナンとかされてたの。ウケるんだけど」

「やかましい」

残念なことに先日まで久々の出張に出ていた俺は隈が消えていて、そういうときに外に出ると声を掛けてくる物好きはたまにいます。面倒ごとに発展する前にいつも適当にかわして逃げるのだが、今日の女性はや妙にしつこかった。それを見ていたらしい特級クズどもが割り込んできたために逃げられたのは事実なのだが、あれを「助けた」と表現するにはかなり語弊があるだろう。

『ひどいわツアタシとあろうものがありながら浮気だなんてエ！』

『ワタシだけだって言ってくれたあの夜はなんだったの……？ やつぱり、小さくて可愛いオンナノコの方がいいんだ……ッ！』

でかい図体をくねらせながら俺にしな垂れかかってきたクソガキどもに、何で俺にはコイツらを殺すだけの力がないんだろうなと久々に自分の無力を呪ったのだがそれはさておき。

唾然とした顔の女性を前に、俺の脳内では次の行動の選択肢とその結果が無数の星となって瞬いた。優先順位を間違えるな、俺にとって今最重要なのは一刻も早く帰ること、それに尽きる。

我ながら決断にはコンマ一秒と掛からなかったと思う。

「で、クズどもの悪ふざけを否定するどころか全力で悪ノリして乗り切ったと」

そう面白そうに言う硝子に、俺は特に返事をすることなくキーボードに指を伸ばす。

さすがにまったく恥がなかったとは言わないが、どうせ俺はたいし

て外に出ることもないし、目の前にいる女性も高確率で再会することなどない。だつたらどんな誤解を生もうとも、俺は俺の優先順位をもとにその星を選ぶ。

『……何だよ、妬いてるのか?』

可愛いな、と。

未だかつて言ったこともない台詞とともに、俺は表情筋を動かした。

グラサン下の蒼と切れ長の黒がこれ以上なく見開かれる。

『悪いけど、これからコイツらの機嫌をとらないといけないんだ』

それじゃ、と目の前の彼女が冷静になる前にさっさとふたりを引きずってその場を離れた。クソガキどもは悪寒がとか何とかクソうるさかったが、俺だつて完全に鳥肌がたっていたのでお互いさまだと思う。しかも礼代わりだ何だとアイスを奢らされたのだから文句言われる筋合いはない。

俺たちが戻ると同時に涼を求めて部屋にやってきた硝子は、その女の子が気の毒だとけらけら笑っている。やかましい。

「俺、クラゲさんのあんな笑顔初めて見たわ」

「偶然だね悟、私もだよ。まだ悪寒がひどい」

「心配すんな、今後二度と見ることはねえよ。俺も鳥肌がおさまらん」
ついでに無駄に動かした表情筋に違和感がひどい。何となく頬をさすりながら画面に数字を打ち込み続ける。

ふくふく、と意味深に唸りながらクソ妹が俺の背後に寄った。

「けどまじ兄貴つてそういうの全部切るよね〜」

「むしろ俺が喜んで遊びに行くように見えるのか」

「見えねーけど、そーゆーのキョーミないわけじゃないんしょ? 彼女

女いたんだし」

その言葉で脳内に浮かぶ、もうほとんど思い出すこともなかった長い髪の背中。

何でそれを、と俺が言うより先に特級クズどもの驚いた声が響く。飛びつくように椅子の後ろに貼りついたそいつらに、もうため息も出ない。

「クラゲさんの彼女なんて気になるな。どんなひとだったんですか？」

「めっちゃくちゃ性格悪い美人!?! それかめっちゃくちゃ頭いい変人!?!」

あ~~~~~クソうるせ~~~~と眉間に皺を寄せつつ、ざっと記憶を巡るがやはり硝子にそんな話をした覚えはない。

俺に「彼女」と言える存在がいたのは中学の頃。硝子は俺と入れ替わりで中学に入学したから顔を合わせたことはない。噂くらいは聞いたことがあるかもしれないが、これまで硝子がそれを知っている気配はなかったし、おそらく知ったのは最近。そして俺も硝子も何だかんだ中学までの知り合い、つまり高専に入る前の人間関係はどうしたって希薄になる。

可能性で考えて、硝子が最近接触していてもおかしくなく、彼女の存在を知っている人物——脳内検索で該当した人間がひとり。そうか、あいつなら硝子もとつくに知っていると思つて口にした可能性は高い。

「……庵か?」

「お、やるじゃん。正解」

そういえば高専時代に一度、庵と行った任務の帰り道で彼女とすれ違ったことがある。中学卒業とともに別れた彼女は、昔と変わらない顔で俺に声を掛けた。

『久し振り、海月くん』

長い髪が印象的で、常に微笑みを崩さないひとだった。しかしそれは温厚という意味でなく、むしろもつと苛烈で、頭の中は随分とぶつ飛んでいたのをよく覚えている。

この俺を相手に、堂々と取引を持ちかけてきた元クラスメイト。

「すっごい美人だったって歌姫センパイが言つてた」

「え~~~~クラゲさんてば美人がいいんだ~~~~? ブスは嫌い~~~~」

「女性の美醜なんて興味あつたんですか? それはそれで意外だな」

「……先に聞くが硝子、お前庵から具体的に何聞いた」

「ここまで来たら適当にでも答えてやらないとクスどもが退かない

ことは骨身に染みて理解している。だが、言わなくてもいいことまでべらべらと喋りたくはないし、不名誉な誤解があるなら一応否定はしておきたい。たとえば大して喋るようなエピソードがない関係だったとしてもだ。

にまにまと愉快そうなクソ妹の顔が暗い色のモニターにうつる。えつとお、とその声は我が妹ながら腹が立つほどわざとらしい。

「背中まである長い黒髪が綺麗でえ、モデルかってくらいの大人工い美人でえ、中学卒業するまで付き合ってたとかあ？ 後はあ、向こうから普通に話しかけてきたって。喧嘩別れじゃなかったんだ？ 高専行くから別れた感じ？」

さすが俺は見たことと聞いたことだけを正確に話し、邪推を真実のように言うことはしていないらしい。まじでアイツ呪術師には向かねえやつだなと、まともが過ぎる後輩にたまには酒の一杯くらい奢ってやろうと決めた。

その程度の話しかしていないのなら俺は余計な弁明をする必要はない。はくくくくくくく長いため息を吐ききり、仕方なく口を開く。

「ただの『取引』だ。利害関係」

「……は？」

「俺も彼女も、よく知りもしねえやつに呼び出されたり手紙送りつけられたりするのに飽き飽きしてたんだよ。だから彼女彼女関係を偽装しないかって向こうから持ちかけられた。カモフラージュと一緒に帰ったり多少出掛けたりはしてたが、そんだけ。卒業で無事契約満了、平和にサヨナラだ」

「急にクラゲさんらしくなった」

「は？ じゃあ手エ出してねえの？ つつまんな」

でもちよつとくらい手エ出したんだろむつりすけべくくくと頬をつつくクソ五条の指をはたき落とし、いい加減散れと羽虫をはらうように手を振る。

画面にうつるクソ妹もつまらなさそうに口を尖らせていた。

「兄貴はわかるにしても、何、そのひともモテすぎて困った系なの？」「そうだな。本命以外は眼中になかったらしい」

「え、本命いんのに他の男と付き合ったわけ？」

「事情があつたんだろ。知らんけど」

俺も詳細は知らないし興味もなかったので聞かなかつたが、彼女の様子からして迂闊に告白ができない相手だったのだろう。まあ未成年を相手にするわけにはいかない大人か、あるいは同性か。だからといって諦めるほど生易しい性格には思えなかつたので、きつと今も虎視眈々とターゲットを狙っている。

『絶対に逃がしたくないの』

その話をしたときの、彼女の表情ときたら。苛烈、強気、傲慢、何と表現しても足りない顔で微笑んでいたのだから、本当に俺と同じ年なのかと疑わしく思ったものだ。

もしかしたら、俺が知る中で一番強かな女性かもしれない。

「……面白え話がねえのはわかつただろ。さっさと離れる暑苦しい」
不満そうな顔を隠さない馬鹿三匹がようやく引き下がったのを見て、やれやれと小さく息をつく。滅多にない日中の外出の上に調子に乗ったこいつらの相手までしていれば、さすがに疲労感がやばい。

今晩は長めに睡眠時間をとるか、と頭の中で今日の作業の流れを改めて考えていたとき、そういえば、とまた夏油の声。

「日中の外出なんて珍しいですね。任務って感じでもなさそうでしたけど」

「呪具のメンテ」

ああ、と五条の眼が部屋の隅に立てかけてあるケースに歩み寄り、サングラスをあげてしげしげとそれを見つめた。

「何か変だよな、これ。よくわかんねーけど、ただの呪力ある刀じゃねーだろ。相当なレアもんぽいけどどっから手に入れたの？ 五条ウチにもねーよ、たぶん」

禪院家からの借り物、と何の気なしに口にしてからふと視線を右上にあげる。そういえば五条って俺と禪院家のいざこざの話をするとき、基本近くにいなかったような。

五条家と禪院家は言うまでもないほどの犬猿の仲だが、五条もそういうのは気にするのだろうか。何の反応も返さない五条を不審に思

い、キイと椅子をきしませて後ろを向く。

そこには、心底信じられないという顔でこちらを凝視する五条の姿があった。

ほっといてほしい

「……鍵掛けてんだから入ってくんなよクズども」

「だったらせめて硝子のメールにくらいは反応すべきでしたね」

「クラゲさん顔真つ赤じゃんウケる」

熱い身体に、回る視界。いつもの椅子に深く腰掛け、今日ばかりはモニターに目を向けずに背もたれに首ごと身を預ける。

こんな姿を誰にも見せるわけにも行かず鍵を掛けて閉じこもっていたというのに、まさかドアを蹴破って入ってくる馬鹿どもがいるとは。

横から伸びてきた見慣れた手が、俺の視界を塞ぐように額に乗せられる。

「はい高熱く。呪力も全然回復してねーし、昨日はしやぎすぎたせいじゃん？」

そいつらのせいだろうがよ、と流し込まれる呪力に目を閉じる。

夏油の卒業後の進路の話で特級クズどもが大喧嘩したのが昨日のこと。調整が面倒な「帳」に通常通りの術式の展開、しかも奥の手の領域展開まで使わされれば、ただでさえ少ない俺の呪力じゃ足りるはずもなく。呪力切れも一日休めば治るかと思っただが、どうやら甘かったらしい。

呪力切れによる倦怠感だけでなく、術式の使いすぎによる脳への負荷。久しく感じることのなかった発熱と頭痛は、じわじわとした不快感となって押し寄せてきた。

硝子の手のひらから流れ込む呪力が、冷たい水のように脳に染みこんでいく。

「ま、メールに返信がなかった時点でそんなこつたろーとは思っただね。兄貴昔からこういうの絶対言わないじゃん。顔見りや一発でバレルのに」

「誰にも見られたくないから鍵掛けて籠城って、子どもじゃないんですから」

「まじやせ我慢じゃん。とっとと硝子に診てもらばいーのに」

「るっせえんだよ……下手に知られる方が面倒だ」

敵が多い自覚はある。できれば死んでくれと呪われている自覚もある。気まぐれに呪いを送りつけられることもざらな俺だ、わざわざ弱っていることを周囲に教えてやる必要もない。そう思っただけ引きこもっていたというのに、本当に空気の読めない馬鹿どもめ。

反転術式によって、脳にかかっていた負荷が少しずつ軽減されていくのを感じる。切れていた脳細胞が再び繋がっていくような感覚に、う、と小さく声が漏れた。

よし、と硝子の手がそのまま俺の額をはたく。

「じゃ、連行よろしく」

れんこう、と聞こえた言葉に飛び起きようとしたが、どこぞのグラサン白髪特級クズにがっしりと頭を掴まれた。

「男子寮でいんだろ？」

「ああ、今七海から連絡がきた。ベッドの準備は完了、看病の用意も万端だそうだ」

「お、……い待てお前ら、」

ぱつと五条の手を引き剥がすと、今度はずいっと夏油の笑顔が眼前に迫る。大人しくしてくださいね、とまるで聞き分けのない子どもに言い聞かせるかのように夏油は続ける。

「抵抗するなら今すぐここに灰原を召喚します。目立つと思いますよ、彼に横抱きで運ばれるのは」

「……何で横抱き限定」

「面白そうでしょう。ちなみに大人しく運ばれてくれるなら私が呪霊を提供します。夜蛾先生の許可はとったのでアラートも鳴りませんし、誰にも見つからないように寮まで運んでみせますよ。まあ私としては灰原に抱っこされているクラゲさんがとても見たいのでどちらでも構いません」

どうしますかとか言っただけだが、どこに選択肢があるんだよと。せつかく良くなった頭痛がまた悪化したような気がして、またぐったりと背もたれに身を預ける。さつと親指をたてた妹、お前体調戻ったら見てろよ。

「まー安心しろってクラゲさん、元気になるまでちやくんと俺たちが守ってやつから♡」

「謹慎ついでに寮で看病してやれって先生からも言われてるので、お気遣いなく」

「さっそくこいっつら謹慎食らってんの。ウケるっしょ」

何もウケねーよと言い返す元気もなく、俺はただただ深いため息をついた。

海月と伊地知と年の瀬と

「……なあ、ひよつとして俺脅されてる?」

いつそ感心したような様子で、兄貴はくるりと椅子をまわした。いつもより開かれた瞳に、まさか、といつになく毅然とした声が返される。

「あくまでも事実を申し上げたに過ぎません」

そう言つて眼鏡のブリッジをあげた、ふたつ下の後輩。いつもの気弱さはどこへやら、伊地知は兄貴からの視線を正面から受け止めている。

そこそこ長い付き合いになってきたというのに、伊地知にとって兄貴はいまだに気軽に話せる相手ではないらしい。私から見れば兄貴はだいぶ優しくしていると思うが、それでも根がビビリな伊地知は兄貴の前でもつてしまうことが多かった。だというのに、今は少しもそんな様子を見えない。

勝算があるときなら兄貴相手でもこんな強気な態度でいけんじやん、と内心だけで呟いた。高専に用事がてら兄貴の顔を見に来たという夏油も、面白そうな顔で後輩の横顔を眺めている。

「このところの出張続きで、そろそろ五条さんにも限界がきています」「何が限界だよ。どうせあの特級クス、世間は冬休みなのに生徒と遊ぶ時間も取れないからって拗ねて任務で鬱憤晴らし始めただけだろ?」

「ええ、呪霊を祓う際に『ついうっかり』野山を更地に変えたり、建造物をいくつか消滅させたりと」

「破壊癖って直んねえんだな」

「クラゲさん、そこで私を見ないでもらえますか」

私は無駄に被害を大きくしたりしませんよ、なんてどの口が言ってるんだらうと学生時代を思い出す。五条と夏油が出た任務でものが壊れなかつたことのほうが珍しい。だからこそ穏便に済ませたい事情がある任務については兄貴やほかの術師にまわされていたという話を聞いたことがある。

クラゲさんもおわかりでしょう、と伊地知はひるむことなく言葉を続けた。

「これ以上五条さんの破壊行動が続けば、さすがに上層も五条さんに任務を押しつけることが出来なくなります。特に『ただ呪霊を祓えばいいわけではない面倒な案件』については、別の術師に任務をまわすことになるでしょう」

その手の任務で、まず名前があがる術師といえば。

露骨に兄貴の眉間にしわが寄った。このクソ寒い季節に出張なんか行つてられるか、という心の声が駄々洩れだ。

く、と視界の端で夏油の肩が揺れる。兄貴の口からため息が漏れた。

「……ひとつ質問いいか、伊地知くん」

「何でしょう」

「何とかして俺に五条の機嫌とれって言いたいののはわかったよ。実際アイツが大人しく任務こなさねーと俺に出張まわされる可能性は高いし、確かに俺には協力する理由があるのもな。けど、そもそもどうして伊地知くんはそんな必死なの。別に五条の出張に同行しなきゃなんねーわけでもねーんだろ?」

何でそんな必死に五条を働かせようとしてるワケ、と面倒くさそうな声が落ちると同時に、ぐつと伊地知が奥歯を噛みしめたのがわかった。

「あのひとが機嫌最悪のまま出張から帰ってきたら後でどれだけ八つ当たりを受けることになると思ってるんですか！　せめて年始くらい心穏やかに仕事させてください！」

「年始だから『仕事を休みたい』じゃなくて『心穏やかに仕事したい』な辺りがまじで伊地知くんって感じ」

確かにカレンダー関係ない仕事なんだけどさ、と嫌そうな顔でぼやく兄貴と、遠い目をする伊地知。ウチに来れば休ませてあげるのにと夏油は嘯くが、夏油は夏油で絶対こき使うだろお前と思う。

まあ、と夏油はひたすらに楽しそうにままた続けた。

「クラゲさんは出張に行きたくないし、伊地知は八つ当たりの心配を

することなく仕事がしたい、と。なるほど、これはクラゲさんが頑張るしかないですね」

伊地知に悟の機嫌を取れというのはさすがに酷でしょう、という夏油の言葉に私も頷く。

「ま、出張行きたくないならやるしかないだろ」

すると何とも言えない顔をした兄貴は、仕方なさそうに目を伏せた。わずかに波紋をつくった呪力と、ほんの少し開いた瞳孔。数の海を泳いだ兄貴は、心底嫌だという様子でポケットからスマホを取り出す。スピーカーにするから静かにしてろよ、と言ってはた迷惑な特級クズの名前をタップした。

数回のコールのあとに聞こえたのは、いかにも不機嫌ですという声。しかし知ったことではない兄貴はさっさと本題に切り込んだ。

「鬱憤晴らすなら別の方法考えろ五条。もの壊すな」

『……は〜？ 何、何でクラゲさんにんなこと言われなきゃなんなの？ ちゃんと任務こなしてんだし誰にも文句言われる筋合いはないけど？』

クソガキ、と唇だけが動いた。

「五条、ものに当たらず大人しく任務片づけて来い。……そしたら、」
何よ、と面倒くさそうな声が続きを促した。

心底嫌だという顔を隠さず、兄貴は切り札を口にする。

「褒めてやる」

天井の空調の音がやけに大きく聞こえる。返事のないスマホに構わず、兄貴は声を強くして繰り返した。

「これでもかかってくらい褒めてやるよ。俺が、お前をな」

『……マジ？』

「マジ」

『これまでの研究成果全部懸けて誓える？』
「誓える」

『後でやっぱナシとか言ったらクラゲさんの部屋ぶっ壊すからね!!』

そう叫ばれると同時に切れた通話。胡乱な目でスマホの画面を見つめる。なあ妹、と呼ばれた声には珍しく困惑した色があった。

「……俺がひと褒めるのってそんなに珍しいか？」

「兄貴がどうこうってより五条が褒められるのが珍しいんじゃない？」

なるほど、と納得した兄貴に、夏油は堪えきれないという様子で噴き出した。

「こんな簡単にアイツの機嫌を直すなんてさすがクラゲさんだ。それにしても悟のことをどう褒めるんです？ 是非聞いてみたいなあ」

「どんなクズでもハードルを下げれば褒めるところはあるだろ、たぶん。精神年齢と同じ六歳児だと思えば多少は捻りだせる。……たぶん」

「たぶんで二回言ったぞ兄貴」

「もう何でもいいですありますがとうございますクラゲさん!! これで平穩に仕事ができます!! では私はさっそく仕事に、」

「いや伊地知くんは一緒に五条の褒めるところ考えろよ」

そこで今日いちばんの絶望顔を見せた伊地知がさすがに気の毒に思えたので、年が明けたら酒の一杯くらいは奢ってやろうと思う。

夏の酔い

まだ慣れないアルコールにうっかり悪酔いしてしまうというのは、まあわかる。

自分の酒量も把握しきれていないのならまともに歩けないのも、ぎりわかる。

相当な恨みを買っているだけに他で弱みを見せられないのも、わかる。

イメージ戦略が必要な立場だけに「家族」に醜態を晒せないのも、まあよし。

ただ、だからといって酔い潰れた状態で俺の部屋に乗り込んでくるのはまったくわからない。

「おい夏油そこで寝るな、せめて寮行けよクズ」

「くらげさんがつめたい……」

「これまででもお前に優しくした覚えはただの一度もねえんだわクソが」

俺の部屋のど真ん中、それも堂々と大の字に寝転がる夏油の顔はどう見ても真っ赤だった。しかもめちゃくちゃ酒臭くてこれは公害の域。換気扇を全開でまわしているが、元凶がこの部屋に転がっている限りはマシになることはないだろう。

誰かの何やらの祝いだなんだで飲み会をする話は小耳に挟んでいたから、どうせうちのクソ妹や酒乱の後輩や下戸のくせに悪ノリだけは達者な特級クズの相棒に限界まで飲まされたのだろう。特別酒に弱いということはないはずだが、まあ「この程度も飲めないのか」とか煽られまくって飲み過ぎたというところか。負けず嫌いも大概にしろってんだクズ。

というか何で俺の部屋に来るんだというのが一番の。真夜中もとつくに過ぎた時間に面倒くさそうな呪力が近づいてきたと思ったら、この馬鹿ふらつく足でドアを蹴り開けやがった。おかげで蝶番がイカレてしまったので、酔いが醒めたらきっちり修理させようと思う。

あー、とかうーとか意味を成さない言葉を口から零す酔っ払いに、頭から水でもぶっかけてやろうかと半ば本気で考えたころ。ぽつり、と微かな機械音に掻き消されてしまいそうなほど小さな眩きが部屋に落ちた。

「……ありがとうございます」

「……それは何について言ってるんだ？」

あまりに微かすぎていつそ聞かなかったふりをした方がいいのかとも思ったが、ここまでされて夏油に気遣いをくれてやる理由もないので適当に返す。

は、と夏油の肩がわずかに揺れる。口元にはわずかに笑みが零れていた。

「……ぜんぶ、ですよ」

全部、と言われるほど夏油のために何かしてやった覚えもなかった。

もうめんどくさくなってモニターに視線を戻しキーボードを叩き始めると、また夏油が笑ったような気がした。

「わたしは、……」

その後も口の中で何やらもごもご言っていたようだが俺の耳には届かなかった。というか別に聞く気もない。酔っ払いの自分語りほどサムいものはない。

「……きいてますっ？」

「聞いてない。もう面倒だから立てねえなら寝ろお前。俺にお前を運んでやる優しさはない」

「くらげさんひりき……」

「硝子が持ち込んだ酒ならあるけどもう一杯行くか夏油？」

「これがあるはら……」

「硝子と俺と五条に言え」

あーもう、と仕方なしに立ち上がり、備え付けの小型冷蔵庫からミネラルウォーターを一本取り出した。新品のかたいキャップを緩めてから軽く締め直し、仮眠用のブランケットを取る。夏油を蹴り動かして横向きの体勢にさせ、顔の前に水を置き、でかい芋虫にブラン

ケツトを掛けた。

一応吐き気はと尋ねれば、されるがままの夏油からの微妙の一言。その辺にあつたビニール袋もついでに床に転がし、そのまま自分のスマホを手を取った。

「二日酔いの薬は硝子に頼んどいてやるから寝ろ。まじで寝ろ」

「はは、くちわるいののにめんどろみがいい……」

「言ってる酔っ払い」

硝子から爆笑のメッセージが返ってきたのを確認し、スマホを適当に放り捨てる。朝になったら薬ついでに荷運びごじょうぶを派遣することなので、とりあえずこの酒臭さも朝までの我慢だ。

再びモニターに向き合つてキーボードに手を添えるも、また背後から囁くような声。さすがにもう返事をしてやる義理もないと構わずキーを叩き始めると、少し音量を上げてまた名前を呼ばれた。

何なんだよと眉間に皺をよせて振り返れば、悪戯に成功したような色を表情にのせて夏油は眉尻を下げた。

「……おやすみなさい」

そのあまりに甘ったれな声には真剣に吐き気を覚えたし、何故それを動画におさめて夏油を脅す材料にしかなかったのかと。

俺も呪術師としてまだまだ甘いらしいと心底反省した、ある夜の話。

教訓

この気持ちを忘れないでおこう。そう、脳に刻み込む。

ひどく気持ちの悪い薄ら笑い。平易な言葉を選びながらも、肝心なところは曖昧で難解な表現を選び、こちらの疑問には答えているように答えていない。そして自分たちは味方だ、君たちを評価している、その力が必要だ、そんな見え透いた世辞で本音を隠し、俺たちを動かそうとしている。

子どもだからと舐められているのだろう。実際、確かに俺たちは子どもだ。だが、それでもわかることはある。感じ取れるものはある。

平等に視線をやっているように見せているが、わずかに姿勢が一方に寄っている。俺たちがもつ力についても、詳細まで興味が見えるのは一方だけ。ここまで来ると、さすがに確信を持って言えた。

こいつらの狙いは、硝子だ。

硝子には、ひとの傷を癒す力があるらしい。確かに心当たりは多大にある。しかも、それは呪術の世界とやらでも相当希少であるようだ。

目の前に座るそのひとたちをよくよく見れば、袖口から見えた手首や、シャツから覗く首元には古傷のあとがあった。なるほど、呪術師が傷の絶えない仕事であるのなら、傷を癒す力は何としても欲しいところだろう。ついでに視える兄もいたからこっちも懐柔してスカウトしとくかって腹か。何ともわかりやすい。

静かに話を聞いていた硝子が、きゅつと俺の服の裾を掴んだ。まだ小学生の硝子だって、決して馬鹿ではない。こいつらの腹のうちにあるものを、わからないなりに感じ取っているようだった。そんなことも察せられない馬鹿な大人はいまだに笑顔を貼り付けているが、完全に逆効果だ。硝子の手が、小さく震え始めた。ここらが限界だろう。

「……すぐにはお返事できません。両親とも話しあわないと」

それはもちろん、とさらに言葉を重ねようとするそいつらを適当にかわし、さっさとご退場願った。見ず知らずの大人の言葉を聞いてやっただけ感謝してほしい。本来通報ものだぞ馬鹿じゃん。

本当に、なんて馬鹿なやつらなんだろう。震える硝子の背を撫でながらしみじみと思う。

こちらを子どもだと舐めてかかきり、あんなに見え見えの取り繕いで誤魔化したつもりでいるなんて。子どもだろうが何だろうが、ちゃんと脳は機能しているというのに。それを理解して俺たちに接していれば、俺くらい軽く騙して操れたかもしれないのに。

やっぱ大人だから馬鹿じゃないとは限らないんだなとよくよく理解した俺は、年齢でひとを判断する人間にはなるまいと心に誓ったのだった。

*

「……というわけで、俺は年齢で人間を判断しません。歳上だろうが何だろうが、馬鹿だと思ったら遠慮なく馬鹿にします」

「なるほど、呪術界の重鎮に暴言を吐いた言い訳は以上か？ とりあえず正座しろ、説教が終わったら歌姫に謝っておけ。お前の後ろで蒼白になってたぞ」

「あれ、アイツ案外度胸ないですね」

「……歌姫が気の毒でならない……」

ねこ」

「ごめんなさいと珍しく殊勝な態度で頭を下げるクズどもの傍らに、一匹の毛玉が転がっていた。」

「まだ成猫には早いという程度に小柄だが、その態度のせいかサイズよりも大きい印象を受ける。少し長めの黒い毛の中に、同じ黒の目がぱっちり浮いていた。その一對の瞳はじつと俺の顔を凝視していて、俺も何となく目を逸らさないまま口を開いた。」

「……マジで肉体が変化したわけではなさそうだな？ 認識阻害の術式か」

「そうそうそんな感じの対象者とその周囲の五感に影響する術式。僕には硝子の輪郭通りの呪力をまとった猫っぽい何かに見える」

「六眼にまで影響してんのか。大した術式だな」

「ええ、巻き込まれた一般人が多かったところもあり、珍しく私たちが揃って任務に出たんですが……」

「久々の三人一緒に任務に浮かれてはしゃいでハマやらかした、と。そう続けてやれば、さすがの特級クズどももきゅつと唇を結ぶ。俺には猫にしか見えない硝子だけが、平気な様子で大きなあくびをしていた。」

「ふうんと目を細め、硝子の首根っこを引っつかむ。触った感触も重さも猫のそれだ。このレベルで五感を操るのは大したものだが、縛りの釣り合いを考えれば本当にこれは「対象を一時的に猫に見せること」だけに威力を全振りしているのだろう。直接的な害のある術式ではないらしい。」

「……呪霊は祓ったんだろ？」

「それはもちろん。力入っちゃってチリも残んなかったけど」

「私を取り込めればすぐに戻してあげられたと思うんですが……悟、はしやぎすぎだ」

「はあ？ 傑がトロかっただけでしょーよ」

「特級ふたり揃ってたくせに硝子を巻き込んだか。ざまあねえな」

「ぴたり、と喧嘩を始めようとしていたふたりが動きを止める。バツ

が悪そうな様子でその場に正座したあたり、夜蛾の教育が行き届いている。

硝子を床に下ろし、クズどもの旋毛を見下ろした。とりあえず両腕に呪力を流し込み、まっすぐに振り下ろす。

がつ、と鈍い音が深海に響いた。

「硝子は俺が預かるからさっさと出てけ。お前らへの説教は夜蛾に任せる」

「クラゲさ、」

「さすがに一晩もありや戻るだろ。出てけ」

しよぼくれた特級クズどもの顔は正直おもしろかったが、生憎それを眺めていたいと思うほど俺は悪趣味じゃない。さっさとふたりを追い出し、俺はぎしりといつもの椅子に腰掛ける。

足元に寄ってきた硝子が、のんきな様子で一声鳴いた。

「……硝子」

「にい」

「気が済んだらさっさと戻れよ」

猫の顔でもわかるくらいニヤリと口元を歪めた黒猫は、平気な顔で丸くなった。最近目元にクマを飼い始めていた妹は、これ幸いとばかりに目を閉じる。

サボりたいがために呪いを解除せずに猫で居続けるこいつ、さすが俺の妹だと思う。

受難の始まり

大丈夫だから、と送り出された。とりあえず最初はこのひとで慣れる、と。それを疑うつもりは全くないけれど。

「……あれ、今回の担当、伊地知くん？」

高専時代から何かと縁があったこのひと。家入さんのお兄さんの、一級呪術師。身近に特級という人間離れした先輩がいるだけに霞みがちだが、本来は一級が最上級。そう振る舞うことがないだけで、このひとだって本当は私くらい一瞬で殺せてしまう実力者。

もちろん、そんなことをするひとでないことは知っている。だが、それでも緊張するなという方が無理というか。

「い、至らない身ですが、精一杯努めます。よろしくお願いいたします……！」

「そんな固くならんでも。ああ、もしかしなくても初任務か、これ」
自分が呪術師に向かないことは早々に気付いていた。でも、きつとやれることはあると思った。そして選んだ、補助監督の道。

もちろん補助監督には補助監督の苦労や、重みはある。私のほんの小さなミスで、誰かが傷つくかもしれない。その重みを背負う覚悟は決めてきた、……つもりだった、けれど。

私のミスで、クラゲさんが傷つくかもしれない。公平ゆえに厳しいけれど、その根底には見えにくいやさしさがあるこのひとが、もしかしたら——命を落とすことだって。

その事実が、ひたすらに重い。

「……伊地知くん」

ぼんやりと私の顔を見ていたクラゲさんは、いつも通り感情の読めない顔で手を出した。

「とりあえず任務の詳細。資料出して説明」

「は、はいー」

自分だって高専時代は術師側で任務に出ていた。手順はわかっている。

任務の概要の説明。術師から要請があればさらに情報を収集、必要

であれば追加の調査も行う。事前の準備が終われば術師を任務地へ送り届け、「帳」を下ろす。「帳」に気を払いながら周囲の様子を探り、術師が任務に集中できるよう手を尽くす。「帳」が消えたら術師と合流し、必要であれば家入さんのもとへ、そうでなければ術師の指定の場所へ送り届ける。それが、補助監督である私の仕事だ。

さすが、クラゲさんは「帳」を下ろしてから三十分と経たないうちに車へと帰ってきた。お怪我は、と確認しても、平気、と変わらない様子で後部座席に乗り込む。

「んじや高専までよろしく」

「了解しました」

くあ、と欠伸をしたクラゲさんは、まるで戦闘後とは思えない呑気さで目を閉じる。眠ってはいないようだが、心身を休めてはいるのだろう。なるべくその邪魔をしないように静かにアクセルを踏み、真夜中の道を走った。

何事もなく高専に帰参することがこんなにも安心できるとは。車を止め、クラゲさんに到着を告げる。

ん、と目を開けたクラゲさんと、バックミラー越しに目が合った。伊地知くん、と名前を呼ばれ、ぎくりと肩が震える。何か、不備があったのだろうか。そんな気持ち顔に出ていたのだろう、呆れたようにビビりすぎ、と続けられる。

「俺そんなに怖い？」

「そんなことは！」

「気が小さいのは知ってるけど、せめてもうちよつと隠せよ」

「す、すいませ、」

「せっかく文句なしの仕事したんだから」

反射的に頭を下げて、それから後部座席を振り向いた。今、クラゲさんは何て言ったのだろうか。感情の読めない黒目がちの瞳は、今回の任務の資料に向けられていた。

「よく出来てる。要点がまとまってるからざっと見ただけで概要がわかるし、必要な部分にはちゃんと詳細な補足がある。なくてもいいけどあれば嬉しい情報は口頭でちゃんと付け足してくれたし、まじで質

問事項皆無の説明と資料もらったのは久しぶり」

「……！」

「けど、それを作った本人がそんな自信なさげだともらった情報まで疑いたくなるだろ。やることやってんだから堂々としてろ、仕事の出来を自分の態度で疑わせるな」

それも仕事のうちだぞ、と変わらないトーンで落とされた言葉。

以前も、報告書や資料の作成を褒められたことはあった。クラゲさんに頼まれて研究資料のまとめを手伝ったことさえある。

「兄貴は思ってもないことは言わないし、出来ない奴に手伝いなんかさせないよ」と家入さんに肩を叩かれたときはどれだけ嬉しかったか。あのクラゲさんに手伝いを頼まれるなんてと灰原さんや七海さんどころか夏油さんにまで言われ、どれだけ誇らしかったか。

あの先輩方の背中を見ていることしかできなかつた私にも、きつと出来ることがある。そう、思うことが出来たのは。

噛みしめた唇から、わずかに鉄の味がする。

はい、と小さく答えたが、聞いているのかいないのか、クラゲさんは特に返事もせず少し声を軽くして言った。

「でも伊地知くんよく補助監督やる気になったな。俺呪術師のサポートする仕事とかマジで無理。呪霊の大群なんとかしてこいつて言われたほうが絶対マシ」

「はは……そうですかね」

「そうだろ。ああ、でも伊地知くんは慣れてるか」

え、と瞬きをすると、クラゲさんは不思議そうに資料から顔をあげる。

「五条と夏油で呪術師の相手は慣れただろ？ 少なくとも今の高专に五条より理不尽でめんどくさい特級クズはいねえよ」

よくアレにあんだけ絡まれて堪えられるよな、とさざりと言われ、この四年間の記憶が走馬灯のように頭の中を駆け巡った。

脳内で見慣れた白髪とサングラスが好き放題に暴れだす。夏油さんは卒業と同時に高专を離れたが、もうひとりの特級術師はまだ高专所属の術師として活躍している。

——嗚呼、そうか。あのひとより面倒なひとはいないけれど、あのひとのサポートも今後は立派な仕事のひとつになってしまおうのか。気づいてしまった事実には、冷たいものが背筋を走る。

血の気が引いた私を見たクラゲさんは、ほんの少しだけ気の毒そうに眉を下げる。

「そろそろ『嫌だ』の一言くらい言えるようになったほうがいいよ。まじで」

未来に起きうる「可能性」を演算で弾き出すそのひとは、妙に優しい声でそう言った。

*

「……新作のコンビニスイーツを調べるのは補助監督の仕事じゃねーと思うな、俺は」

「私も……そう……思います……」

「あの馬鹿が勝手に購入したものの経費交渉するのも違う気がする」

「……そう……思います……」

「出張先でのあれこれくらい、自分じゃなくて高専に問い合わせるよって思わない?」

「……思い、ます……」

「俺まじで伊地知くんすげーと思うよ。久々に心の奥底から同情してる」

「……そろそろ泣いてもいいでしょうか……」

「ティッシュならそこにあるぞ」

世界でいちばん、

「ねえクラゲさん聞いた〜!?」

ドアを蹴破るように部屋に飛び込んできた特級クズの片割れに、もう何か来ると思っていたと諦めの境地に至る。何故コイツの来訪を予想できたのかと言われれば、すでにクソ妹とこいつの片割れが同じように乗り込んできたからだ。

『兄貴くやばい話もってきてやったぞ〜』

『クラゲさん、そろそろ危機感をもつべきでは?』

そうニヤニヤニタニタと気色の悪い笑みを浮かべていたやつらをようやく追い出したというのに、トドメのようにやってきたクソガキ。

どうせ口にするのは同じ内容だろう、調子にのらせるのも癪なのでさっさと出鼻をくじいてやることにした。

「俺が見合える話ならもう聞いたぞ」

「ちよつとクラゲさんツそこは知っても知らないふりして新鮮なりアクションとるところでしょ! そんなんで笑いのテツペン取れると思ってるの!?!」

その程度じゃ怯まないクズを無視してキーボードを叩き続けると「ノーリアクション禁止ツ!!」と耳元で叫ばれた。しねばいいのに。しねばいいのに、俺にはこいつを殺す力がない。まったく、こういうときだけは我が身の無力を思い知る。なんて無駄な思考だろう。

仕方なしに身体を後ろに向ける。ぎし、と椅子が悲鳴を上げた。

「俺がどこその由緒正しき呪術師家系の御曹司に見初められたんだろ? 呪術師には珍しいほどの根明だってな」

「僕らよりも年下の二級ってことも?」

「夏油は将来性踏まえてもせいぜい準一級止まりって言ってたな」

「あらかびシ。僕は二級止まりだと思っけど」

お前のほうが厳しいじゃねーかと視線を向ければ、五条は逆だと手を振った。

「僕はヤサシーから見込みないやつゝの等級上げるのには反対なの。身

の丈にあつた立場に置いてやるのも優しさだよ」

「いや俺はお前と議論する気はねーけど。とにかく俺のことは知ってる。話は終わりだろ、帰れ」

「え〜〜僕が話したいのはその先なんだけど〜〜?」

それで、クラゲさんはどうすんの？

わざわざ目元の布をずらし、六眼をきらきらと子どものように輝かせて尋ねる五条悟、コイツまじで自分のツラの良さをよくよく理解してんなと頭の片隅で思う。まあ中身の腐り具合を知ってる身としては、当然こんな下世話な好奇心に付き合つてやろうなどとは思えないのだが。

というか、そもそもどうするも何も、という話なのだ。

「むしろ俺が何をしなきゃなんねえんだよ」

「は? 牽制くらいしいにいきやいーじゃん。何なら見合いぶち壊しにいく? 今ならこのグッドルッキングガイが全面協力して感動的な脱出劇考えちやう!」

「するか馬鹿。俺の問題だろ、俺らが口だすことじゃねえよ」

「……強がり?」

「に、見えるならお前の六眼も節穴だな」

ただの先輩後輩だと言っているのに、何でこいつらは俺と俺の関係を勘ぐりたがるのか。硝子や夏油と同じく顔全部に「面白くない」と書いた五条は、ぶーぶーと不満の声を上げながら腕を振り回している。もう頭痛がしてきた。

あのな、と黙らせようとしても娯楽を諦めたくない六歳児はただただ喚く。

「だってクラゲさん絶対歌姫のこと好きでしょー!? 日頃からあんだけ気に掛けて助けてやってるくせに『別にそんなんじゃない』とか言われても全っ然説得力ないから! どう見ても完全に特別扱いしてんじゃん、そんな相手を搔つ攫われてもいーワケ! 余裕ぶっこいてるとマジで後で泣き見るよ! ここは素直になる!」

「……は……」

硝子や夏油ならこの辺で一応は引き下がったというのに、さすが精

神年齢六歳は自分の欲求に忠実だ。ひとの迷惑を考えやしねえクソガキを前に、多少は話に乗ってやらないと満足しないかと眉間の皺を伸ばした。

もうため息をつくことすらめんどくさい。

「わかった、五条、一億歩譲って俺が俺に特別な感情を抱いてると仮定する」

「認めた!？」

「仮定つつつてんだろ聞けやクソボケ。で、それを前提にこの状況を鑑みて、——俺が邪魔する必要がどこにある?」

え、と深海の薄暗い灯りのなかで六眼が揺らめいた。

ぎい、と俺の椅子が鈍い音を立てる。

「硝子や夏油も聞きもしねえのにべらべらと見合い相手のこと喋ってたが、つまり甘えの抜けねえ坊ちゃんなんだろ」

そもそも相手が俺を気に入ったのも、俺がそいつに喝を入れたただとか、何かの任務で助けたとか、そういうきっかけだったらしい。

いくら俺が背伸びをしたがるところがあるとはいえ、あいつは向上心も自立心も強く、そのくせ自分の未熟をよくわかっている。そんな俺がそういうやつ隣の隣に立つ姿はどうも想像がつかなかった。

何より、と今まで見てきた庵歌姫という人間に関わる記録が脳裏に浮かぶ。

「……俺が、自分ではどうしようもない状況に陥ったとき」

あいつは基本的に自分で出来る限りのことをしようとする。でも、自分の手札では解決できないと気付いたときには、きつと——。

「誰の顔が一番先に頭をよぎるか、わかるか?」

これは思い上がりじゃない。

経験則であり、ただの事実だ。

「あいつにとつて一番頼れるやつが、俺以外にいないと思うか?」

絶対に俺を裏切らない、疑わない、そのうえで手を貸してくれる相手。そんな都合の良いすぎる存在、世界中探したってきつと俺くらいのも。俺が自覚しているかどうかはさておき、これは現時点では純然たる事実であるように思う。

見合い相手がどれだけプライドのないやつだったとしても、想う相手に自分よりも頼りにする男がいるというのはたぶん面白くはないはず。いくら俺と俺の間に何も無いと言い張ったとしても、だ。

そして俺自身も、自分と相手の気持ちのズレをすぐに理解するだろう。あいつはもともとひとの機微に聡い。

「俺がわざわざ手を出さなくても十中八九上手くいかねーよ。何もする必要がない」

だからさっさと帰れと言おうとしたところで、はたと気付く。

「……ずっと俺に浮いた噂がないのって実は俺のせい？」

「ハイもう責任取るしかないやつ〜！ 自分しか選択肢を残さない狡猾さはさすがクラゲさ〜〜ん！ そこに痺れる憧れな〜〜い！」

「クソうぜえ」

もうプロポーズしちやいなと肩を叩く手をはたき落とそうとしてかわされた俺は、さすがにもう少し後輩との距離感を考えるべきかと久々に頭を抱えたのだった。

五条はうるせえからはよ帰れと心から思う。

《だって毒の判別はできないって言うから》

いや正直、さすがの俺もあそこまでアイツが怒るとは思わなかったんだよ。

そりゃ少しは怒るだろうと思ったし、癩癩のひとつふたつ起こして後輩くんたちに八つ当たりくらいはするかなとは思ったけど。まあそのときは七海くんか灰原くんか伊地知くんかに適当に謝れば済むかなって。

でも考えてみる、日頃俺のがどれだけアイツの面倒ごとに振り回されてやってるかかって話だろ？ 好き勝手に俺の部屋乗り込んでくるわ、俺が何してようとひたすらくだらねーこと喋り続けて、しかも話を聞いてなかったら拗ねて作業の邪魔するわ、それを堪えてやってんだからこれくらいよくねえ？

こないだなんか、まだデータ化してない資料をシュレッダーに掛けようとしやがったんだぞあの馬鹿。ぎりぎりで気づいて止められたから良かったけど、アレまじでやる気だったからな特級クズ。こっちの事情も確認せずに勝手に乗り込んできておいて構わなかったら拗ねるって何？ 未成年とはいええもう数年で成人するような人間の精神構造かそれは？ 情緒五歳児なのもいい加減にすべきだろ？

それだけ振り回されることを考えれば、たまに俺のちよつとした実験に付き合うくらい安いもんだと思っただよ。無下限呪術のこちよつと聞いたから知的好奇心が刺激されたっつーか。あれだ、五条にとつても「ひとのものを勝手に食べちゃいけません」っていういい教訓になったと思うんだよな俺は。

「で、結局何をしたんですか」

「クリームの代わりにわさびを入れたシュークリームを俺の部屋に放置しておいた。別に食えとは言っていない」

「五条のやつまだ涙目で暴れてんだけど。ウケる」

《レゾンデートル》

「気づいてた？」

祈本里香の呪いのカタチ、と続けられた言葉に少し眉を顰める。

「……呪いをかけたのは乙骨のほうだつて話か？」

「気づいてんじやーん。教えてよね」

「普通に考えるだろ、可能性として」

あの莫大な呪力の要因が祈本里香にないのなら、もうひとりにあるだろうと考えるのは当たり前のこと。むしろ何で最初から調べなかったんだよという話だ。

そう口にしてやれば、相変わらずの情緒六歳児は拗ねたようにつんと唇を尖らせる。率直に言つて気持ち悪い。

まあ呪いは解けたからいいけどさ、と五条は一步俺に近づいた。

「いやー愛だよ。死者の魂を縛り付けるほどの呪いなんてそうそうお目にかかれないよ。クラゲさんにしてもいいサンプルだったんじゃない？」

「まあな。……呪力量の多い人間は大変だなと同情したよ」

迂闊にひとも愛せやしない、と肩を竦めれば、五条は愉快そうに喉の奥を揺らした。

ねえどうする、と俺の座る椅子に並ぶ。

「僕が愛する『誰か』の死を否定して呪霊を生んじやったら」

最強の呪霊になりそうじゃない？

あまりにくだらない戯言、あまりに有り得ない悪ふざけ。答える価値もない言葉だったが、答えなければウザ絡みをされることは目に見えている。

俺はキーボードを叩く指を止め、やれやれと口を開いた。

「クズのお前にそんな情はない」

ひどいッという呟きを無視して入力を再開する。

まあ一億歩譲つて呪霊を生じさせてしまったとしても、絶対に。

「お前は祓うだろ、それでも」

どんな要因で生まれた呪霊だったとしても。

慕う誰かの魂がその根底にあっても。

どんな呪霊でも確実に祓う。だからこそその最強、だからこそその五条悟だ。そんな程度で揺らぐほど、この特級クズのひとでなし術師は脆くない。

ようやく視線をモニターから外して隣を見れば、包帯の下に隠れた瞳と目が合ったような気がした。そうだね、いつものように他を舐めきった「最強」の笑みがこちらに向けられる。

「僕、最強だから」

そんなの僕にしか祓えないしねと傲慢に宣った「五条悟」は、やはり少しも揺らがなかった。

《このあとめちやくちや食べた。》

「いや毎度言ってるじゃん、送られた側の手間考えてくれよ。食べやすいようにとか、保存しやすいようにとか、とにかくもうちよい何かない？ そりゃ俺も硝子も魚嫌いとかじゃねーけど、限度ってあるだろ。まず一般人に捌ける代物じゃねーからこれ。……あ？ 俺？

解体の様子なんて見たこと……あるか。あつたわ。うるせーあれ確か俺が六歳るときだぞ、俺だつて普段使わない情報は探さねーと出てこねーの。……そりゃ見たことあれば何とか出来るかもしれないけど、いろいろと道具とか……一緒に送った？ いやだからそこで気遣い見せるならそもそも解体したやつ送ってくれよ。生命の神秘がどうとか適当なこと言うな、んなもんガキのころから見慣れてるわ。こっちは生まれたときから魚の模型だの凶鑑だの写真だのに溢れた家で育ってんだぞ。というか父さんって海洋学者なんだよな？ 漁師じゃねえんだよな？ 何でマグロの一本釣りとか挑戦してんの何やってんの？ 論文終わんなくて現実逃避でもしてたのか、それとも母さんの逆鱗にでも触れて研究室追い出されたのかどっち？ うっわ凶星かよ、うるせー怒らせると面倒なこと知ってるくせに結婚記念日忘れる方が悪い。ほかのひとに迷惑だろ、とつとと謝れ。俺も硝子

も絶対仲裁なんかしねーからな。……何したら許してもらえるか？
俺の術式を夫婦喧嘩の解決なんぞに使おうとすんな土下座でもしてこいクソ親父」

「はい、というわけでこれから校庭で兄貴による本マグロ解体ショーやりまーす。冷蔵庫に入る程度まで減らすから全員限界まで胃に詰め込めよ」

「すっごいでつかいマグロだ!! 任せてください、いくらでも食べます!!」

「どうやって食べましょうか、刺身だけでこの量はちよつと」

「いっそ火でもおこしてバーベキューとかどうだい？ ステーキも美味しそうだよね」

「せんせー、ここ炭とか鉄板とかねえの？」

「あるわけないだろう、今調達してきてもらっている。伊地知、すまないが寮の食堂から調味料一式を借りてきてくれないか」

「あ、ついでに米炊くよう頼んどいて。俺漬け丼食べる」

「は、はい！」

「先生も兄貴もノリノリじゃんウケる」

「マグロに罪はないからな」

「そういうこと。夏油、マグロ運ぶから呪霊貸して」

「いいですけどアラート鳴りますよ」

「構わん、俺が許可する。たまにはこういうのもいいだろう」

そして校庭で始まるマグロパーティ。

《汝は何者なりや?》

生憎と生まれたときから「特別」であった僕なので、畏れられるのも敬われるのも慣れたもの。ひととして扱われることの方が少ななくて、それもまあ当然のものと思っただけだ。どうでもいいんだけど。

だから、これはただの好奇心。僕に対して畏れも尊敬も抱いたことがなさそうな顔をしているこのひとへの、ちよつとした気まぐれで暇

つぶし。言わばただの街頭アンケートだ。はいそこ、ここは室内とかつまらないこと言わな〜い。

では、ここで質問です。最強の「五条悟」クンとは、何でしょう？「クズ」

はい、ナイフのように短くて鋭いお答え！ 予想通り！ わかつてた！ でももうちよつと詳しく！ テレビの前のあの子にもわかるように！

「誰だよ視聴者。クズをクズ以外の何て表現しろってんだ、俺の罵倒の語彙はそんなに多くねーんだよ。クズで馬鹿でガキで理不尽で傲慢でクソ野郎で、……やっぱクズ」

この僕を相手に、よくもまあここまで罵詈雑言をつらつらと。「最強」に敵うべくもない術師のくせに、僕をちつとも特別視しない。僕も傑も、七海も灰原も伊地知もいっしょよくたに扱う変人だ。僕よりずっと弱いくせに、それでもなお。

「いやお前らと七海くんたちを一緒にはしてねーけど。さすがに可哀想」

たまにちよ〜つとくらい敬ってほしいなって思うけどね！

七海たちに向ける優しさのほんのちよつとを僕らに向けてもいいと思うんだけどね！ 今度傑と一緒にデモおこしちやおうかな！ やだやだ差別反対！

「騒音宣言やめろ。……何だよ、恐れ敬ってほしいのか？」

今さら、と胡乱な目を向けるクラゲさん。その視線に肩を揺らせば、今度は呆れたようなため息をひとつ。

僕が俺だったときからクラゲさんはずつとこうで、多分これからもずつとそう。

クラゲさんにとって、僕はずつとクズでガキな妹の同期。トモダチなんてものでもなくて、せいぜいが知り合いで、僕にとっては「縛り」まで結んだ数少ない「味方」。

そう、僕にとっては希有な存在。でも、クラゲさんにとって僕は最強でクズな、それでもやっぱ「特別じゃない何か」。何故だかそれは、不思議なほどに心地いい。

ねえ、と改めてクラゲさんに声を掛れば、めんどくさそうに向けた視線。

「僕、やっぱクラゲさんじゃなくて海月さんって呼ぼうかな」

クラゲなんか目指さずに、ずっと海月じゅつしでいればいい。そう思う程度には、いつのまにかこのひとのことを気に入っていた。

真剣に嫌そうにしかめられた同期そっくりの顔は、ひどく愉快だった。

《穢れの味》

「すごいや夏油、お前呪霊取り込むとき経口摂取なんだって？」

呪霊って味すんの、と何の気なしに尋ねられて、迂闊にも一瞬心臓が震えた。いや、クラゲさんにしてみれば本当に何の意図もない質問なのだろうし、私としても特に誤魔化すようなことでもない。

もう、とつくに慣れた呪霊の味。そう、慣れた味だ。

「ゲロ拭いた雑巾みたいな味ですかね」

「お前ゲロ拭いた雑巾の味知ってんの？ 衛生観念やば」

「ものの例えという言葉はご存知ですか？」

冗談だろ、とクラゲさんは表情を変えないまま、ぱらぱらと資料をめくる。そしてまたモニターに顔を戻し、キーボードの音を響かせた。

「まあ、そうだよな。人間の負の感情の味が美味いわねーか」

「ええ、まあ。慣れましたよ、たいしたことじゃありません」

「そうだな」

さざりと言われて、思わずその後頭部を見る。私の様子に気づいたのか、クラゲさんは何だよ、と肩越しに顔をこちらに向けた。

「何、本当は『たいしたこと』なわけ？ 強がりか」

「違いますけど」

「ならいーだろ。俺の知る限り、強力なのにデメリットがない術式の方が珍しい」

五条の術式だって本来は脳への負担が大きすぎる、とクラゲさんはまた前を向いた。

「味が最悪でも腹壊さないだけマシじゃねーの。飴でも常備しとけば」

「ああ、口直しに？ ……考えたことなかったな」

あまりに軽く言われてしまって、思わず小さく嘖き出した。この様子を見るに、どうやら本心からそう思っているらしい。味わったこともないくせに何を、とも思わなくはないが、たいしたことではないと言ったのは私自身だ。

そう、たいしたことではない。どれだけ不味くても、それを味わうだけの価値がある術式だ。私が為すべきことのためなら、それくらい。 ……ああ、でも、もし少しだけ堪えるのが嫌になったら、そのときはこのひとに飴のひとつでもたかることにしようか。

きっとこのひとは、心底呆れた顔をしながらポケットから飴を取り出してくれるから。

「……クラゲさん」

「何だよ」

「飴、常備しといてくださいね。もうしてるんでしょうけど」

「これは俺の糖分補給用。自分で買え」

その言葉と同時に投げつけられた小さなそれは、淡い星の色をしていた。

ないしよばなし

何ヶ月かに一度、私たちの家に来てくれるふたりがいる。

ふたりは私たちほどではないけれどとてもよく似た顔をしていて、気だるげな感じや目の下の隈までそっくりな、私たちをいじめたりしない、とても優しいふたり。

勉強を見てくれるクラゲさんと、私たちの話を丁寧に聞いて健康診断をしてくれる硝子さん。このひとたちは大丈夫だよと夏油さまが紹介してくれたその日から、私たちもふたりのことが大好きだった。「何だ成績良くなってんじゃん。何、施設育ちを馬鹿にされたから頑張った？ まあ理由は何でもいーわ、間違えたところちゃんと復習しとけよ」

クラゲさんはわからないことを馬鹿にしない。わかるようになるまで何度だって説明してくれるし、怒ったこともない。私たちもそうだったけれど、ここに来る子の中にはそれぞれの事情で勉強が遅れている子も少なくなかった。学校の勉強にはなかなかついて行けない子にも、クラゲさんは優しい。

「自分のペースで出来るようになっていけばいいんだよ。勉強なんてちゃんと積み重ねれば誰だって出来るようになる。それが早いか遅いかなんて大したことじゃない」

いつもそう言って、何かひとつ出来るようになるたびにちゃんと認めてくれる。

気まぐれに掌に置いてくれる飴が、私たちにとっては何より誇らしかった。

「ごはんはちゃんと食べてるか？ ……身長も伸びたな、大きくなったる」

ひとりひとり、そう言っては頭を撫でてくれる硝子さん。

煙草の匂いはするけれど、私たちの前で吸うことは一度もなかった。他のひとにはなかなか言えないことだって、硝子さんになら言えた。いつも私たちの言葉を最後までちゃんと聞いて、それから私たちが自分の答えに近づくのを手伝ってくれる。

「夏油みたいな男が学校にいない？ いやいてたまるか。……いや、そうだな、……いろんなひとと関わって世間を知るのは大事だ、とだけは言っておくよ」

将来が心配、と何故だかよく嘆いていたけれど、それでも私たちの言葉を否定するようなことは絶対になくて。何だつて相談できる、とてもいいお姉さん。

私たちにはもうお互いしか血の繋がりのある家族はいないけれど、クラゲさんや硝子さんのことは本当に兄や姉のように思っていたし、夏油さまも私たちのことを家族だと呼んでくれる。本当に、——本当に、それが嬉しくて。泣きたいくらい、嬉しくて。

もう電気も消してまっくらの部屋、私たちは同じベッドの中で誰にも聞こえないように話した。

「たのしい」

「うん、たのしいね。やさしくて、うれしい」

「うれしい、……あつたかい」

「あつたかくて……ええつと、きつと『しあわせ』だね」

「うん、すごく、『しあわせ』」

明日はまた、クラゲさんと硝子さんが来てくれる日。

算数で満点を取ったテストを見せたら、クラゲさんはまた褒めてくれるかな。

嫌いな野菜もちゃんと食べられるようになったよって言ったら、硝子さんは喜んでくれるかな。

夏油さまが絶対にそうだよって言ってくれたから、きつとそうだと
思う。

「そしたら、ねえ、みみこ、」

「うん、ななこ」

ありがとうって、だいすきって、ふたりにちゃんと言わなくちゃ。そう言っただけはくつつきあって、真っ暗闇のなかでくすくすと笑った。

はやく、明日が来ればいい。

呪術師たるもの

家入海月は、ひどく頭のいい学生だった。

生まれ持った術式の特長もあるだろうが、それを差し引いても頭の回転が早く、しかも学ぶことに飢えている。新しいことを教えてみれば片端から吸収し、すぐさま応用を利かせてみせるのだから、まったく教師冥利に尽きるというか。

時折みせる奔放ささえなければ、胸を張って優秀な学生だといえるだろう。

「奔放？　初めて言われましたけど」

「そうか、言葉というのは難しいな。海月、その文献どこから持ってきた」

「学長の部屋にあった本棚の上から二番目、左から七冊目」

「すぐ返してこい」

えくくく、と嫌そうな顔をする不良優等生は、なぜだかときおり「良識」の二文字がぽっかり抜けている。立派な窃盗だぞと言えば、学長が出張から戻るまでには返しておきますよ、と平気な顔でページをめくりはじめた。そういう問題じゃない。

「いいじゃないですか、読めるもんなら読んでみるって言ったの学長ですよ。侵入者よけの結果と盗難防止の呪具かいくぐったんだから俺には読む資格があります」

「……あれを破ったのかお前は」

「破ったというか、穴をついたというか」

調査、計画、実行で一ヶ月かかりました、としれつと言う海月に、そろそろ拳を落とすのも馬鹿らしくなる。

熱心に読み進めていく横顔にため息をついて、そんなに読みたかかったのかと尋ねれば、いつも通りのやる気のない声で肯定が返ってくる。

「ちよつと気になってたことがあって、参考になりそうだったので」

「参考？　その反転術式の理論書がか」

「正のエネルギーって何がどこまで出来るのかなと」

声の覇気のなさに反して、そのページをめくる手はひどく早い。それで読めてるのかと思わず疑ってしまうが、海月のことだから読めているのだろう。

瞬きひとつしない眼は、どこかギラついていた。

「個々人の術式反転を除いて、反転術式つて治療に使うじゃないですか」

「そうだな」

「マイナスの反対はプラス。傷つけるのがマイナスなら、癒やすのはプラス。感覚的にまあわかるんですけど、それ以外の効果はねーのになって」

「俺は聞いたことがないが……たとえばどういう効果を予測している？」

そう尋ねると、海月は一瞬視線を宙に浮かせて、考える仕草をみせた。しかしすぐに本に視線を戻し、またページをめくりながら口を開く。

「マイナスの力が『呪いをかける力』なら、プラスは『呪いを解く力』とかだったら釣り合いとれませんかね。たとえばですけど」

「ほう。面白いことを考えるな」

「単純に言葉を反対にただけですが。……うーん、やっぱ治療のことしか書いてねーな。そういうもんなんですかね」

「反転術式を使える人間がそもそも少ないから、検証が足りんという可能性もあるな。治療以外に使おうとする人間がそもそもいなかったのかもしれん」

そうですか、と軽く答えて海月は文献を閉じる。それなりの分厚さだが、もう読み終わったらしい。能力だけ見れば文句なしに優秀なのに、とつい遠い目をしてしまった。何ですかじろじろと、とか言ってくる生意気さにも頭が痛くなる。

とはいえ、その熱心さだけは教師として認めたい。

「……呪力は前提として『呪い』だ。呪いをもって呪いを制するのが呪術師である以上、『呪いを解く』という概念がそもそもないという言い方も出来る」

「俺一般家庭出身だからそう思うのかもしれないけど、呪われたときに『呪いを解こう』じゃなくて『さらに呪おう』って発想になるのかなかなかぶっ飛んでますよね。だから呪術師って変なやつしかいねーのかな」

「お前も立派な呪術師のひとりだが？」

「いや俺は所詮ぴかぴかの術師一年生なんで。俺のぶっ飛び具合なんてまだまだですよ」

いやお前も十分変人、とは教師として、大人として言わないでおいた。知的好奇心を満たしたいがために数多の呪いをかいくぐり、学長の部屋に忍び込んで本を盗む人間がぶっ飛んでいなくて何だということか。どう考えても術師向きで困る。

道徳教育の必要性を本気で考え始めたところで、海月はその分厚い文献をぼんやりと眺めながらぼつりと言う。

「呪う方法はたくさんあるのに、呪いを解く方法はねーのか」

その声は妙に静かで、妙に感傷的に聞こえた。が、おそらく気のせいだろう。家入海月は、そんな生ぬるい性格をしていない。

うーん、と少し首をひねって、海月の目が改めてこちらに向いた。

「結局、呪術師は呪うしかねーってことですね」

それだけ言って俺に背を向けた「呪術師」は、これ返してきまーすと歩き出す。

ひとを呪うことに抵抗がない時点でお前は立派な呪術師なんだよとは、——言えなかった。

絡み酒の本音

家入海月というひとは、この呪術界では数少ない「まとも」なひとだと思っっている。このひとがひとつ上の先輩であったことは、本当に幸運だった。

常にめんどくさそうで、やる気も見えなくて、でも実習や任務ではすぐく頼りになって、意外と面倒見もよくて。どんなときでも私の言葉をやんと聞いて、丁寧に答えを考えてくれて。ときには弱音や愚痴にだって耳を傾けてくれた。

とことんまで無駄を嫌うこのひとが、私の弱音を「無駄」だと切り捨てないでくれることが、どれだけ嬉しかったか。どれだけ助けられたか。

「だから先輩が先輩で本当に良かったと思ってるんです〜!!」

「だったらその先輩の前で酔い潰れて手間掛けさせてんじやねーよこの馬鹿」

「信頼故です!!」

「その信頼いらねーわ。まじでお前何で酔ったら俺んどこ来んの？毎回寮の空き部屋まで運ばなきゃなんねーこっちの身にもなれよ。いい加減酒の飲み方覚えろ」

「先輩のお説教も久しぶり〜!! おんぶも久しぶり〜!!」

「うるせ〜〜〜。耳元で喚くな」

心底嫌そうな顔をしながらも、先輩はちやんと部屋まで運んでくれる。決して、私を見捨てない。私が出来のいい後輩じゃなくても、まだまだ弱くても。

「任務でどんな失敗したのかしんねーけど、やけ酒して強くなれんなら苦労しねーぞ」

……たまに、こんなデリカシーのないところはあるけれど。うるさいんです、と言ってみれば、やっぱりかと言わんばかりの盛大なため息。それでもやっぱり、先輩は先輩で。

「来るならシラフで来い。そしたら話くらいは聞いてやらんでもない」

「やっぱ先輩やさしく〜〜!」

「抱きつくな。お前な、一応俺も男なんだから危機感を持ってよ」

「……ききかん? せんばいに?」

「……そういう面まで信頼されるとさすがに微妙な気分になるもんだな」

やれやれと首を振りながら、先輩はずり落ち掛けた私を背負いなおす。細身に見えるけれどその身体はがっしりしていて、私を背負っても少しも揺らぐ様子がない。あの部屋に籠もりっぱなしのくせに、鈍らせていないのがさすがというか。

この背中に、私は何度も助けられてきた。

「……先輩はすごいひとですよ」

「何だ、まだこのめんどくさい問答続くのか? 俺を褒めても何も出ねーぞ」

「だって先輩すごいんですもん! 強いし、頭いいし、私のこと馬鹿にしないし!! あんなに喧嘩売りまくってるのに生き残ってるし!!」

「あーはいはい」

「ちゃんと聞いてください!!」

「お前シラフのときは堅すぎるくらいなのに、酒飲むとまじでめんどくさくなるのどうにかなんねーの?」

「なりません!!」

「即答はウケる」

足して二で割ったらちようどいいのに、とかぶつくさ言う後頭部にごつんと頭をぶつける。やめろ石頭、とそれでも平然とした言葉が返ってくる。

先輩は本当にすごいひとなのに、と何だか悔しくなってきた。すごいひとで、やさしいひとだ。硝子に甘くて、でも他の後輩の面倒もちゃんと見ていて、あのクソ生意気な五条や夏油にまでなんだかんだ上手に接していて。なのに、このひとはとにかく自分のことに無頓着だ。

こんなに、すごいひとなのに。

「……庵」

どれだけ私がそう言っても、このひとは響かない。このひとはどこまでも自分本位であるくせに、その実たいして自分に興味がなかった。

結局このひとにとっては「自分自身」すら「手段」のひとつ。強さも知識も何もかも、目的のために足りていけばそれでいい。それを周囲がどう評価しようと思ったことではないのだろう。

あまりにも先輩らしすぎるそのスタンスが、私にはどうしても悔しかった。

「……。……ありがとうな」

ぽつりと落とされた言葉は、夢かうつつか。

どうしたらこのひとは、自分自身に目を向けてくれるのだろう。そう思いながら、私の意識は暗闇に溶けていった。

*

「昨夜はほんつとうに申し訳ありませんでした……!!」

「まじで足して二で割れねーかな。土下座はやめろ、されても困る」

次の日全員二日酔い

「結局、口ほどにもなかったな」

漂う酒の匂いに、床に転がる死屍累々。下戸の自覚のある五条はもちろん、弱い方ではないと豪語していた夏油や七海くんでさえも真っ赤な顔で転がっている。ほどほどイケますと元気に笑っていた灰原くんもまた、のんきな顔で寝こけていた。

酒を飲みましようとして最初に言い出したのは誰だったか。大量の酒をもつて俺の部屋に乗り込んできたこの馬鹿どもは、いつものごとく床に座り込んで呑めや歌えやの宴会を繰り広げた。

俺も最初のうちはうんざりしながらも放って作業をしていたのだが、何せとんでもない絡み酒がひとりいて、俺を宴会に引きずり込み、後輩たちにもしこたま酒を飲ませた。大口を叩いていた夏油や七海くんが潰れたのも、ひとえに硝子の膝で爆睡している奴のせいである。こいつのめんどくささと言ったら筆舌に尽くしがたく、仕事が終わらず巻き込まれずに済んだ伊地知くんが心底羨ましかった。

「相当呑ませられてたからね。酒の入った歌姫センパイまじ最強」

「こいつの絡み酒まじで何とかなんねーの？」

「無理じゃん？」

「即答すんな」

ため息と一緒に手元の酒を喉に流し込む。そこそこの度数の日本酒だが、残念なことにはまだシラフだった。同じようにグラスを傾ける硝子も、酔っている様子はない。妹もまた、酒に強い家入の血をちゃんと継いでいるらしい。

にしても、と硝子はどこかしみじみと言った。

「何かここまでできたら酒に強いのも損な気がしてきた」

「言いたいことはわからんでもないが、醜態さらしたくないなら控えるよ。俺なんて酒飲むたびに俺に土下座してんだからな」

「ウケる。歌姫センパイはまじで兄貴のこと好きすぎ」

「正直わりとまじで困るから懲りてほしい。後輩に土下座をさせる趣味はない」

そんな趣味あったらまじで兄妹の縁切ってるわとか言いながら、硝子はまた自分のグラスに酒をつぐ。いったい誰の金なのか、それなりの値段の酒だ。続けて、ん、と酒瓶を差し出されたので、仕方なしに俺も空になったグラスを向ける。とろりと流し込まれたそれは、確かに芳醇な香りを放っていた。

そしてまた、かちり、とグラス同士のぶつかる音が響く。

「ちなみに兄貴、今酔ってる？」

「全然」

「えー。結構呑んだよね」

「ちゃんと水は挟んでるしな」

「チツ、ちゃんとしてやがる」

「何なのお前」

どんなふう酔うのかと思って、と言った硝子の目は据わっていた。これは面倒な予感。お前もその辺にしとけよと言っても、硝子は胸に抱いた酒瓶を離そうとはしない。

確かにうちの家系は遺伝的にアルコール分解酵素が多いが、かといつてももちろん絶対に酔わないわけでもなく。というか酔っていいよが酔っていいまいが、面白そうと思えばとりあえず行動してしまうのが俺の妹なわけで。

「兄貴の酔ったところが見たい」

この好奇心に忠実な感じ、まじで俺の妹なんだよなと。急かすように差し出された酒瓶にため息をつきつつ、俺は手元のグラスをひといきで空にした。

「一応言っとくけど、酒がなくなったら諦めろよ」

「お、強気じゃん。上等」

仕方なしにグラスを差し出した俺に、愉快犯の妹はにやりと笑った。

この後どうなったかって、まあ俺が負けるはずもない。

凡人の頂

卒業してからも、月に数度はこうして古巣を訪れている。

それは小うるさい上層とのやりとりのためだったり、呪詛師や呪霊の情報を得るためだったりするのだが、こうして見知った顔の近況を知っておくためでもあった。

「あ、夏油さん！　こんにちは！」

「どうも」

ソファの置かれた休憩用のスペースで立ち話をしていた後輩たち。いつのまにか一級にまで上り詰めた彼らの影から、ひよいっと一回り小柄な影が覗く。

「どもつす夏油さん！」

「や。君もいたんだね、悠仁」

見えなかつたよと素直に口にすれば、いや俺別にチビじゃねーし、と可愛い生徒は不満げに口を尖らせる。悠仁も決して小さくはないのだろうが、何せ一緒にいるのが遅しくなった七海や灰原だ。相対的に小柄に見える彼がつい可愛らしくて笑ってしまう。

「三人で立ち話かい？」

「さつきまで灰原さんに稽古つけてもらってました！」

「虎杖くんすごいんですよ、学生時代の僕よりずっと強くて！」

「私は偶然居合わせただけです。夏油さんこそご用事ですか」

悟に呼び出されてね、と一歩二歩と足を進める。

私とは違うやり方で呪術界を変えろと言った「最強」の親友は、卒業後この古巣で教鞭を執っている。悟が教師になると決めたときはどうなることかと思っただが、これが意外と上手くやっているらしい。

若人の成長は嬉しいものだよなんて言ってるのを聞いたときは目頭が熱くなつたものだが、同じくその言葉を聞いていたクラゲさんは正気を疑うという顔をしていた。いや私は素直に悟の成長を喜びたいと思う。

その悟は、どうやら私を呼び出しておきながら遅刻しているらしい。待ち合わせの時間だというのに来る気配がみえず、つい苦笑が漏

れる。

「まったく、悟の悪癖はなおらないね」

「五条先生ならクラゲさんとこ寄ってくつつつてたけど」

「またウザ絡みに行ってるんですかあのひとは」

「あはは、五条さん相変わらずクラゲさんのこと大好きだよね！」

それなら私もクラゲさんの部屋に行った方が早いだろうか、とふと考える。

いつのまにか、ただの「同期の兄」というには濃い繋がりができてしまったあのひと。数の海を漂い星々を見つめている、根っからの引きこもり。

時折電話でやりとりはするが、しばらく顔は見ていなかった。たまにはあの不健康そうな顔を拝んでいくのも悪くない。

前からそうなんだ、と何となく不思議そうな顔で悠仁は言った。

「五条先生って何かとクラゲさんに絡みに行くよな。クラゲさんに五条先生と仲良いんだねって言ったらすげー顔されて遠回しに殺すぞって言われたけど」

「……何でクラゲさんにそれを言うんですか君は……」

「どちらかという五条さんはクラゲさんが心底嫌がるからこそ絡みにいってやるよね！」

いつもすごく愉しそう、と晴れ晴れと言い放つ灰原。クラゲさんからすれば堪ったものではないだろうが、悟の気持ちはわからなくもない。

家入海月というひとは、特級呪術師である私たちを畏れる様子を見せないどころか、うつとおしがり面倒くさがり、そんな負の感情を隠しさえもしない。かと言って私たちと敵対するわけでもなく。知恵を貸せと言えばいやいやながら打開策を示し、手を貸せと言えばため息をつきながらも呪具を取る。

味方でいるという「縛り」とも言えない「縛り」を律儀に守り続けるクラゲさんだからこそ、これほどまで気楽に接することができるのだ。

く、と喉の奥が揺れる。

「悟なりに気を許してることだよ」

家入海月というひとりの人間として、ひとりの呪術師として。

「クラゲさんは信用と信頼に足るひとだからね」

しかも強いし、と笑って付け加えれば後輩ふたりの口元にも笑みが浮かぶ。悠仁はまだクラゲさんの力量を知らないのか、そんなふたりの顔を交互に見つめた。

「俺実はまだクラゲさんが戦ってんの見たことないんだけど、やっぱ強いのか？」

「強いよ！ といつても、僕もクラゲさんの強さをちゃんと実感したのは最近なんだけど」

「正直なところ、私もそうです。わかりにくいですからね」

「はは、そうかもしれないね」

一級に認められた呪術師、それだけでそれなりの強さであることは保証される。しかし、クラゲさんの「強さ」の在り方は非常に希有なもののように思える。

何故って、そう、まさに「わかりにくい」からだ。

「まあ私も本気で戦っているクラゲさんを見たことあるわけじゃないけどね。間違いなく言えるのは、決してあのひとが『特別』じゃないということ」

見る限り、飛び抜けて優れていると言えるのは呪力操作くらいだろう。それも少なすぎる呪力量を補うためのもので、戦闘において非常に効果的な武器とまでは言えない。一瞬の呪力強化で相手の意表を突いたり、五感を強化して補助的につかったり、あとは戦闘が長引いても呪力切れをせずにすんだり、まあそれくらいだろうか。

もちろん呪力操作は呪術師にとって重要な技術だ。だが、クラゲさんのように呪力量が極端に少なければマイナスがちよつとプラスになるくらいのものでらう。

また、術式はもっているがこれまた強力とは言いがたい。詳星呪術はあくまでも「可能性」を覗る術式であり、「未来視」とは訳が違う。精度が違うとは言え、確実じゃない未来の予測なら術式がなくなつて誰でもやっている。次はどんな攻撃がくる、右を狙うか左を狙うか、

その全て可能性が見えたところで結局選ぶのは本人で、外れる可能性も大いにあるのだ。実際、不確定要素があれば一切役に立たないと本人も軽く手を振っていた。

そこまで聞いた悠仁は、まるでわからないというように眉間に皺を寄せる。

「……え、じゃあクラゲさんって何がすごいのか？ あ、呪具の刀使うんだっけ？ 剣術？」

「クラゲさん曰く『刀を使って戦うこと』と『剣術』はまるで別物らしいですよ」

「乙骨くんが刀の使い方教わろうとしたらばっさり断られたって言うってたね！」

そう、率直に言ってクラゲさんに特別優れているところなんて何もない。何も無いのに、あのひとは負けない。何故かわからないけど負けないのだ、あのひとは。

どんな任務を振られても、たいした怪我もなく帰ってくる。

どんな呪霊を相手にしても、慌てる素振りを見せることはない。

そこには例の「奥の手」や、それ以外の隠し球があるからというのも理由ではあるのだろう。けれど、決してそれだけではない。

「クラゲさんは何も特別なものをもっていないし、何も特別なことをしていない。倒すべき相手を分析し、自分の手札から策を立て、その通りに動いているだけ。勝てると思ったら勝ち筋を辿るし、無理と思ったら退却する。本当にそれだけなんだよ」

なのに、強い。だから、強いのだ。

「そのひとつひとつの精度が高すぎるんでしょうね。当たり前のことであまりに何気なく完璧にこなすので、何故強いのかと言われると上手く説明ができない」

「何気なく完璧にするのがいちばん難しいんだけどね！」

言うなれば、大した才のない人間が努力のみで到達できる最高点。こんなことを本人に言ったらまた「それで褒めてるつもりなのがいい」とか言われてしまうのだろうが、実際にそこに到達できる人間がどれだけ少ないことか。

『出来ることは出来るし、出来ねーことは出来ねーよ。そんだけだ』
そこで完全に開き直れる精神力をもつ人間が、どれだけいると思っ
ているのだろうか。

「……すべーいひとなんだよ、クラゲさんは」

少なくとも高専時代の私は、そう簡単に開き直すことはできなかつ
た。時間をつくっては深海を訪れていたかつての自分が思い出され、
何となく気恥ずかしい気持ちに蘇る。

自覚のない世話好きは、意外と面白がったりからかったりすること
なく私が訪れるのを受け入れてくれた。あれこれと知識を仕込んで
くれて、参考文献とか言って本の数冊をどさどさと投げられたことも
ある。

ないものねだりする前に自分の手にあるものの使い方を考えろ、と
繰り返し私に言ったあのひと。今にして思えば、もしかしたらクラゲ
さん自身も自分の強さに悩んだことがあったのかもしれない。

そういうもんなのかー、とじつと考えていた悠仁が、あ、と目線を
あげる。同時に、私の肩に見慣れた腕がまわされた。その気配には気
づいていた。

「皆おそろいでなーんの話イ？」

「よつすセンセー！」

「あ、五条さんどうも！」

「貴方はまず夏油さんに遅刻の謝罪をすべきでは」

「オイオイオイオイオイ七海イ？　まずお疲れさまですだろ〜？」

慣れた軽口に、つい肩が揺れる。

まったく、悟が来るといつもこうだ。

「何どしたの傑、ご機嫌じゃん。そんなに僕に会えて嬉しかった？」

「ははは悟、冗談は顔だけにしておくべきだよ」

「このグッドルッキングガイにそんなこと言うのオマエくらいだから
ね？」

「いやわりとナナミンも言ってるね？」

「言ってるね！」

「五条さん、冗談は顔だけにしてください」

「しばくぞ」

それで何の話してたの、と自分の遅刻を棚上げする寂しがりな仲間に入れろとぐいぐい来る。クラゲさんの話だよ、と悠仁が答えれば、クラゲさんの、と悟は意外そうに繰り返す。

そうだよ、と何となく愉快な気分では悠仁の言葉を引き継いだ。

「クラゲさんは強いんだって話」

それを聞いたもうひとりの「最強」は、心底不思議そうな顔で何を今さらと言いつつ放った。

「んなの当たり前じゃん」

そう、クラゲさんは強いのだ。

あまりにも当たり前前に、私たちとは違う頂に立っている。

彗星の行方

引きこもる余裕がなくなってしまった今でも、相変わらず日光に当たる気にはなれない。

なるべく日当たりが悪く、しかし窓を開ければ風通しは悪くない一室。高専の機能がほぼ停止している今、適当なところで煙草を吸ってもうるさいやつがいけないことだけは有り難い。

窓から緩やかに入ってくる風に、吐き出した煙が掻き消されていく。それをぼんやりと眺めながら、緊張感の欠片もない足取りで馬鹿でかい呪力が近づいてくることに気付いた。

「やつほークラゲさんサボリー？」
「うるせえ」

声と呪力の両方がうるさい。

自分からずいっと視界に入ってきた五条は、いつものようにふざけた笑みをその顔に乗せている。

箱の中で小さくなっていたはずの「最強」は、久々の外の空気に触れて存分に羽を広げているように見えた。少なくとも、俺の眼には。

「みーんな準備と鍛錬に明け暮れてんのに、こんなところにひとりでさ」
「お前も抜け出してきてんだろが」

「僕はいーのよ。最強だもん」

その言葉に、つい視線を五条に向ける。

するりと目隠しを外したそいつは、俺と視線をあわせてにんまりと笑う。

「何、僕が負ける星でも見た？」

その言葉に、わずかに目を細める。

間近に迫る、呪術の王・両面宿儺と現代最強の呪術師・五条悟の文字通りの殺し合い。

あまりにも情報の足りない現状で詳星呪法を使おうとはさすがに思わなかった。——いや、認めよう。らしくもなく使いたくなかったのかも。しれない、と。

小さく舌打ちだけを返してみれば、五条のクズはそれはそれはたの

しそうにキャハ、と笑ってみせた。気持ち悪い。

「まー見てないよねクラゲさんだし。でもほら、術式使わなくても予測はたてられるでしょ？　ねえねえどつちが勝つと思う？　やっぱ五条クン？　それとも悟チャンかな〜!？」

「……五条」

「え、やっぱ僕？　だよねだよね当然だけど五条クンうれし〜〜!」

「策くらい練ってあるんだろうな」

硬い声色を聞いてか、目の前のふざけた野郎はぴたりと動きを止める。

俺だって五条が負けるとは思っていない。五条は六眼と無下限呪術をあわせもつというだけではなく、それらを積み重ねてきた相伝のすべてを己のものとしたうえで、駒をさらに次に進められる存在だ。

もはや術式がどうか領域展開がどうかという次元の話ではない。

五条悟はきつと、現代を生きる呪術師の誰よりも呪うことあそぶを知っている。

五条という家で受け継いできた「強くなるための地図」、そのゴールの先に好き勝手道を手付け足したあげく地図をはみ出して落書きを続けるような悪童クソガキが負けてたまるか。そんなことはありえない。

だが、ありえないなんてことはありえない。

「お前が負けるとは思ってねえよ。だが、楽に勝てるとも思っていない」
百歩譲って、宿讎だけだったら。

千歩譲って、十種影法術ふしぐろだけだったなら。

俺はきつと五条の勝利を疑わなかった。

「宿讎だっただけの傲慢クソ野郎じゃない。伏黒の肉体を得たことで勝算が生まれたからこそ、あいつはお前から逃げなかった。次も、おそらく逃げない」

平安を生きていた以上、戦闘の経験値はおそらくは向こうのほうが上だろう。

しかもこれまでの呪術の研究を続けてきたクソ迷惑な老害ブレイクまで向こうにいるのだ。

「……呪術の歴史そのものと戦うようなもんだろ。スケールがデカすぎて予測する気にもなれねえよ」

それはもう、やってらんねーという気にもなるといふものだ。

しかし当の五条ときたら、そんな俺を見ながらいつものようにふぎけたツラで笑う。

「クラゲさんてば、上層の腐ったミカンに説教されてたときと同じ顔してるよ」

「そうだな、同じくらいうんざりしてるわ。何で呪術師なんてもんなつちまつたかな俺は」

「んもくくまたそんなこと言つてえ、」

そろそろクラゲさんも、サボるのやめてよね。

ちか、と薄暗いなかでも微かな光を受けて輝いた六眼が俺を射貫く。は、と眉をひそめたときには六眼は再び黒い布の下に隠れていた。

「僕のほうはまあ、任せてよ。トーゼン無策じゃないし、相手が呪術の歴史そのものなら新しいこと考えるまでだし？ 大丈夫だよ僕、最強だから」

もちろん戦闘以外のことはめちやくちやクラゲさんにも協力してもらおうし、と軽く笑うクズ野郎の声はいつも通りだ。だからこそ、さきほどの一言が俺の中に重く響く。

ただサボらず手伝え、というにもあまりも。

「……五条？」

「ねえ、海月さん」

ぽん、と左肩に重み。

ゾクリと冷たいものが背筋をはしる。

「そろそろ、自分を型に嵌めるのやめない？」

——まだまだ強くなれるのに。

それは、俺がかつてこの口であいつに吐いた言葉だった。

ブラックボックス

深い深い情報の海は、宇宙に似ているように思う。

数という数が降り積もる空間、そこに浮かぶ記憶という名の情報が星のように瞬いている。ここの管理は俺にとっては少しも苦ではない。雑多に見えて整理されたその奥に、触れてはならないものがあることも知っている。

勝手に入り込んだどこぞの不法侵入者の腕ともいえない黒いものが、俺のメモリの奥深くへと潜り込んでくる。たくさんの星をかき分け、鎖を巻いて閉じ込めたとある記憶へとどんどん近づいてきた。わかつているのだろう、俺にとってそれがどれだけ重いものなのか。

黒いものの手が伸びる。言いようのない不快感が込み上げた。

「触んな」

脳内に呪力が満ちる。血液のように循環する。不純物の存在など許しはしない。

あえて侵入を許した呪霊に容赦なく呪力を叩きつける。祓うには弱くとも、追いつくくらいならこれで十分。

すう、と気色の悪いものが額あたりから抜け出ていくのを感じた。

「――夏油」

「さすが」

抜け出た黒いモノが、そのまま夏油の手の中で渦を巻いた。おおくと妹がやる気のない歓声をあげる。

ことの始まりは、やつかいな憑依系の呪霊が出たという話だった。対象の脳を乗っ取って記憶を探り悪夢を見せては負の感情を増幅させて食い尽くし、しかも対象の肉体を操ることも可能というタチの悪さ。くわえて攻撃してきた者のほうが呪力があると判断すれば即座に乗り換えるという尻軽呪霊だった。

最終的に勇氣ある補助監督のひとりに憑依したそいつは、補助監督ごと拘束された状態で高専に運び込まれた。硝子なら何とか、という希望をもって搬送されたようだが、硝子によると「自分がやってもらいが超難易度の脳外科手術に匹敵する」「できなくはないけど後遺症

の可能性あり」とのことらしい。

じゃあ別のやつに憑依を移したうえで脳の主導権争いに打ち勝たせ、体外に追い出してもらおう、という理屈で俺のところまわってきたそうさ。

常に脳を作り直してる五条に回せばいいじゃねーかと思ったが、残念ながら遠方に出張中。じゃあ夏油の呪霊操術、と言えば「憑依は肉体の接触を介して行うそうで、外に出るタイミングがないみたいなんです。憑依した状態では調伏はできませんし、私に憑依させるのを試してもいいですが、万一私が暴れたら誰が止めてくれるんですか？」とか適当を抜かしやがった。たぶん普通に嫌だったんだと思う。俺だって嫌だわ。

とはいえ正式に任務として下されればやらざるを得ず、仕方なしに結界の符に囲まれた部屋のなかで自分の脳を呪霊に差し出したというわけだ。

「兄貴、頭悪くなってない？」

「あえて語弊のある聞き方すんな妹。問題なし」

呪力をまとった手でベッドに横たわる補助監督に触れば、流れ込むように呪霊は俺の身体にうつった。迷いなく脳へと移動していき、触手を伸ばすように記憶領域を無遠慮にまさぐられ。

本来ならその瞬間に意識を失うはずだったのだろうが、自分の脳のコントロールで俺が負けるはずもない。

意識を保ったまま呪霊のカタチを捉え、道を阻み、——触れてはいけないものに気付きやがった不法侵入者を呪力で叩き出した。

レアな呪霊を労力なしで手に入れたクズ野郎は、それはもう機嫌がいい。

「ありがとうございますございますクラゲさん。こういう呪霊は珍しいんですよ」

「何に使う気だよそんな呪霊。まったく、済んだなら俺は戻るぞ」

「待って兄貴、一応検査」

そう言って伸ばされた妹の手が額に伸びる。

冷たい呪力が再び脳に満ちるが、硝子の力は不快ではなかった。

「……ん、問題なさそう。さすがだね」

「そりやな」

「やっぱりクラゲさんを推薦して正解でした。……それにしても」
触るな、とは何に？

俺は面白がっているらしい特級クスに視線を向けた。

「口に出てましたよ。珍しく本気で嫌そうでしたね」

「呪霊に脳みそ探られて嫌じゃねえやついるか？」

「いないでしょうね。いえ、この呪霊、ちゃんと『対象にとつてもつとも精神的ダメージになる記憶を探り出す』ことができるそうで」

「ここ、と上手く笑顔の仮面を被ったそいつは両手をあげる。

「失礼、下世話な好奇心です。クラゲさんにもそういうのあるんだなと」

「下世話な自覚があつて何より。報告書はお前が出せよ」

「了解です」

大人しく引き下がった夏油を一瞥して俺は部屋を出た。

薄暗い廊下を歩きながら、自分の記憶のなかにある『それ』を思う。それ以外の記憶のすべてを俺は思い出せる。管理している。しかしその中身はわからない。思い出せない。それが俺にとってどれだけ異常なことか。

でも、不思議なことにごじ開ける気にはなれない。開けてはならないと、俺のなかの何かが叫んでいる。「誰か」じゃなく「俺」の声だから、逆らう気は起きなかった。

開かないように嚴重に鎖をまきつけ、浮かんでこないように重しをつけ、消去されるわけでもなく記憶の海の底で眠るブラックボックス。まるで宝箱のようだと、そんなガキっぽいことを思った自分に少し呆れた。

高専の薄暗い廊下に、ひとりぶんの足音とため息だけが静かに響く。

終着点 ※本誌ネタバレ注意

まず目に入ったのが「最強」の特級クズふたりだったあたり、俺の日頃の行いってそんなに悪かったかなとつい眉間に皺が寄った。

「おつクラゲさんじゃくくくん元気くくく?」

「お久しぶりですクラゲさん、クマがないほうがやっぱり健康的でいいですね」

「心臓止まったあとにする会話じゃねえな」

どうやらここは空港に似た空間のようだった。なぜだか窓の外には飛行機まで見える。

妙にリアルなせいで実感は湧かないが、自分の状況は理解していた。立って歩けるのに自分から心臓の音が感じられないし、何より死んだはずのクソガキ二匹が本当に「クソガキ」時代に戻っている。

はたと気付いて自分の姿に目を向ければ、俺の胸元にも高専のボタンが光っていた。ということは、俺もあの時代の自分に――、

「海月、」

それは、よく知っている声だった。

記憶の奥深くに沈んでいたブラックボックスが消えていることに気付く。俺のなかの「何か」が触れるなど主張し続けたもの。俺の手で、誰かのために、確かに仕舞い続けたソレ。

呪いが解ける。すべてが蘇る。

いまの俺の多くを形作った、ほんの数ヶ月間の青い春。

「――、」

顔を上げる。俺の眼前に立つそいつの顔を見る。記憶のままの顔で、口の端をあげて立っている。血の海はもう見えない。

とつさに開いた口が勝手に動いていた。

「……どちらさん?」

視界の端でロビーのソファに座っていた馬鹿どもが「ぶふっ」と派手に嘔き出した。

一瞬硬直したそいつは、いつものようににつこりと笑っていない笑顔で俺の喉元につかみかかる。その手は不自然に震えていた。

反射的にさつと目をそらす。

「言うと思ったこのひねくれ者!! 根に持つてるな!? 根に持つてるだろ!!」

「な〜くんも覚えてねえわ何の話〜? そういやどつかのクソ野郎が死に際に自分のこと忘れろとか言いやがった気がするけど、忘れろって言われたから忘れちまったわ〜」

「完っ全に思い出してんでしょ俺が悪かったってば!!」

悪かったよ、と。

繰り返された言葉に、首元の手が緩んだ。

逸らしていた目を正面に戻せば、悔しそうな顔が目に入る。

「……何だよその顔。今さら後悔されても困んだけど」

「……後悔はしてない」

「嘘つけよ。いーよ別に、呪いにすらなつてない呪いを勝手に抱えてたのは俺だ」

なあ、皓。

その名前は、ひどく口に馴染む。

久し振りの親友の目には、らしくもなく薄い涙の膜が張って見えた。

「ずっとここにいたのか?」

「……いたよ。見てた」

「ずいぶん都合のいいシステムなんだな。ここタイムリミットある?」

「知らない。たぶんないんじゃない?」

「じゃあ俺もしばらくここにいろわ。暇つぶし付き合えよ」

「わかってるよ」

皓の向こうに、クソガキ二匹だけではない、多くの見知った顔が見える。資料のうえでしか見たことのない顔も少し見えた。

これが妄想なのか、いまがどういう状況なのか、まったくわからなけれどどうでもよかった。頭を使うなんて面倒なことはもうしたくない。

もう、終わったのだから。ようやく首元の腕が外される。

「妹ちゃん、待つんだろ？　ところでマジで似てんね。びっくりしたわ」

「似なくていいところまで俺に似やがってな、あいつ」

「またそんなこと言ってる。無駄だよクラゲさん、もう僕たちがさんざんクラゲさんのシスコンエピソード喋っちゃったから」

「ちなみにネタはまだまだありますけど聞いてくれますか？　皓さん」

「聞く聞く。ちなみに海月の高専時代のエピソードもまだまだ山盛りあるよ。ねっ先生」

「そうだな」

「おいこら担任」

「あ、私も入れて欲しいです。結界術教えてあげたときの家入くんがまた良い子でね、」

「アンタまでいんのかよ」

自分も自分も、といつの間にか酒もないのに宴会のような。

参加したことはないが、おそらく同窓会というのはこういう感じなのだろう。賑やかというよりは騒がしい空気だが、終わったからこそと思えば悪くない。

心残りはある。悔いもある。でももうできることは何もない。だったら嘆いたって仕方がない。ここからどんなに想ったって、きつと届くことはないのだろう。

だったら不謹慎だろうが何だろうが、ただここに在ることを許して欲しい。誰に許しを得る必要があるわけでもないのに、そう思う。

ただ、だから、できることなら、思うことは、——そう、たったひとつだけ。

——お前はゆっくり来いよ、硝子。どれだけでも勝手に待ってる。

サンタ捕獲大作戦

「ねえ、クラゲさん」

「サンタクロースって、ほんとうにいるの？」

何か前もこんなことあったな、とにじりよる双子から視線を浮かせる。その後ろで困ったように眉間をかいているのは、おそらくふたりのサンタ役を担うクズの保護者。

双子が呪いの吹きだまりのような村から救出されて初めてのクリスマス。きつとサンタなんて存在とほとんど縁がなかっただろうふたりが喜んでくれるようにと、夏油が後輩たちとともに頭を悩ませていたのは知っている。プレゼントの選定はすでに済んでいるはずだが、まさかサンタの存在を疑われているとは。

まあいきなりそんな都合のいい存在教えられても信じられないよな、と真剣な表情の双子に目線を戻す。さて、どうしたもんか。

「……先に聞くけど、ふたりの言ってる『サンタ』ってどういうやつ？」
とりあえず俺は、真面目に質問をされているなら嘘を言うつもりはない。夢を夢として大事にするかどうかは本人が決めることだ。

俺の問いかけに、ふたりはお互いの目を見合わせる。

「えつと、くりすますいぶの夜におうちにきて……」

「わたしたちにプレゼントをくれる赤と白のおじいさん！」

いや、赤と白のおじいさんて。だいぶゆるゆるの認識だが、まあそこはいい。フィンランドのサンタクロース村にいるぞなんて答えじゃ納得しないことはよくわかった。つまり双子が尋ねているのはクリスマスイブの夜に自分たちの枕元に置きに来る不審者の正体だ。じわじわと双子の背後に立つクズからの圧力が強まっている。余計なことを言うなって、俺も別にサンタの正体がブラックサンタも真つ青のクズ野郎だなんてつまらないことを言うつもりはなかった。そんな、ただ答えを教えるだなんて面白くない。どんな疑問であれ、その答えは自分の手で掴み取るべきだ。

「じゃあ、作戦考えるか」

口角が上がる。ぱあっと双子の瞳が輝く。ひくりとクズの頬がひ

きつる。愉快。

「十二月二十四日、お前たちがベッドに入って起きるまでの間に『サンタ』は現れる。いつどこに来るのかわかっているなら、……わかるな？」

うん、と同時に大きく頷いた幼い好奇心。まったく、良い資質をもっている。

「つかまえる！」

「そのつらおがむ！」

「な、菜々子、その言葉遣いは、」

「よし、作戦会議だ。夏油、お前は教室行けよ。遅刻すんぞ」

クラゲさん、とわずかな焦りを含んだ声を軽く無視して笑顔を向ける。今度こそしつかりと夏油の顔がひきつった。この上なく愉快。

「さあ、どうしてやろうな？」

たまにはこういう頭の使い方もある。愉快な娯楽をもちこんでくれた双子の頭に、ぽすりと掌をのせた。

*

「ところで硝子は何歳までサンタ信じてた？」

「んー、結構最近」

「……嘘だろ？」

『サンタを信じてる限りプレゼントは来るぞ』という兄貴の教え「そういうところだよ、この兄妹」

破り捨てて欲しかった

もう少しだと、もう何度心の中で繰り返しただろう。だというのに、いざ「そこ」に辿り着いてみれば、呆気ないと言えば呆気ない。

機材もデスクも全て運び出し、まっさらな箱に成り果てた深海。その中心に立ってようやく、解放感と喪失感はわりと似ていることを理解した。

いや、寂しいとかそういうことはまったくもってない。呪術にも高専にも一切の未練はなく、もう働かなくていいという一点についてはこのうえなく嬉しい。怠惰に浸るための準備はすでに整っている。そのためだけに俺はこの地獄を生き抜いてきたのだから。

ただ、これは、放っておけば未練になる。未練とは呪いにほかならない。たとえ呪力が伴わずとも、いつ、どう作用するかわからない。そんな不確定なものを無視するわけにはいかない。

そんな言い訳を奥歯で噛みつぶし、背後に立つ彼女に向き直る。

「――庵、」

最後の挨拶にきた義理堅い後輩に、その辺の紙に書き留めたメモを差し出した。何の疑いもなく素直に受け取る様子に、俺のわずかばかりの良心がきしむ。

「引越し先の住所と新しい連絡先」

「あ、はい」

「家族とお前にしか教えてねーからあんまり大声で言うなよ。無駄だとはわかってっつけど一応の抵抗はしたい」

「それ私に教えていいんですか」

「いえ言い触らしたりしませんけど、と真顔で言う庵に肩をすくめる。」

どうせどれだけ隠したところで、必要になればあのクズどもは勝手に調べあげるだろう。いや「必要になれば」どころか「暇だから」くらいの理由で俺のプライバシーなんて軽く無視するやつらだ。クズどもの性根などとうに諦めているが、せめて「もうお前らと関わる気はない」という主張くらいはさせてもらおうと思う。

だから、本当なら誰にも教える気はなかった。空気を読んだ善良な魂の持ち主たちも、あえて聞いてくることはなかった。これで呪術界と縁を切る、それでよかったのに。

「……お前がその情報を使うかどうかは自由だけど、まあ来たけりや来いよ。近くに温泉もあるし、骨休めにはいいところだ」

俺が余生を過ごすためにあらゆる情報を集めて選んだ場所なので、快適さは保証できる。地酒も美味いらしいと付け加えると相変わらずの酒好きは目を輝かせた。

いつもなら呆れるところだが、さすがに俺もいまそんな余裕はないらしい。軽く頷いて口を開こうとしたとした考えなしの馬鹿を、ただし、と少し強い声で遮る。

「……まあ、男のひとり暮らしだから。その気がねーなら硝子か誰か連れてこいよ」

「……えっ」

「いや、うん、好きにしろ」

「そこで逃げないでください先輩！」

咄嗟に顔を背けた俺の腕を、よくよく知った小さな手が引き留める。

いま、自分がどんな顔をしているのかわからない。

「……『いい先輩』でいてほしいなら逃がしたほうがいいと思うね、俺は」

「そ、ういうところがずるいんですよ貴方は、しかも今さらになって！」

「巻き込めるわけねーだろ」

今さらになったのは、俺を俺の「特別」にするわけにはいかなかったから。俺自身が多方面に喧嘩を売り続けた自覚があるから。

何より俺が、俺のためにしか生きられないとわかっているから。

「これは、……ただの、はじめだ。俺の事情でしかない」

「……相変わらず本っ当に勝手ですね」

「自覚してる。いらなかったらそれ破り捨てていーぞ」

喋りながらうるさく響く鼓動を落ち着ける。ようやく顔を前に戻

すと、珍しく俯きがちな俺が視界に入った。

顔に傷つくろうが弱かろうが俯くなと言いついて聞かせてきた後輩の、こんな姿を見るのは随分と久し振りのような気がする。それが俺のせいでという事実には、随分と奇妙な気分が駆られた。

身長差のせいで俺の表情は見えない。だが、黒髪の間から覗く耳は真つ赤だった。

せんぱい、とか細い声が静かに海底に落ちる。

「……う、かがい、ます、ね」

ひとりで、と付け加えられた囁きよりも微かな声が、俺の鼓膜を確かに揺らす。

聞こえないふりをしてやれなかった俺は、きつとクズどものことを言えないくらい性格が悪いのだろう。

その手を振り払ってやる優しさを、俺は持ち合わせていない。

「……お前、男の趣味サイアク」

「知ってますよ……」

俺の手が俺の腕を滑る。指先までおりてきた小さな手は、冷たくて心地よかった。

*

「おいクズども祝杯あげんぞ。付き合え」

「何、ヘタレのクラゲさんがようやく勇氣出したんだ？ おつつつそ」

「そう本当のことを言うもんじゃないよ悟。歌姫先輩の鈍さも大概だったんだから」

「確かに、クラゲさんはかなり露骨でしたからね。あれは自覚があったのか、なかったのか」

「あつたんじゃない？ それでも俺さんに優しくしたかったんだよ、きつとー」

「クラゲさんはある意味どこまでも正直なひとですからね、——自分の心に」

何歳になっても

やりたいかと言われれば心底嫌に決まってるんだろ殺すぞと言いたいところだが、これも俺が自分の研究に没頭するため。あの子たちの性格の悪さと諦めの悪さは育ての親譲りなのだから、さつさとミツシヨンクリアしてしまった方が絶対に労力は少なく済む。

そう自分に言い聞かせながら、高専の一角、呪術師たちが待機に使う一室に足を踏み入れた。ソファに座って新聞を開いていたそいつは、すでにほうぼうで祝われてきたのだろう、でかい図体に「本日の主役」と書かれた安っぽいタスキを掛けている。

クラゲさん、と機嫌の良い声に応えることなく、俺は深々とため息をついた。

「何ですか、人の顔を見てため息なんて」

「ため息つきたくもなるわ、何で俺がお前なんぞのために真つ昼間に出歩かなきゃなんねえんだよ」

ほら、と放り投げたそれを夏油は軽く片手で受け止めた。俺がよく糖分補給に持ち歩く飴玉だが、夏油もそこそこ気に入っているらしく、たまに俺の部屋にくると必ずいくつか奪っていく。心底自分で買えよと思う。

手の中のそれをまじまじと見つめた夏油は、まさか、と信じられない顔で呟いた。

「……………これ、誕生日プレゼントですか？」

「お前双子にどういう教育したんだよ、お前の誕生日祝わねえと部屋に居座って騒ぎ続けてやるって脅してきやがったぞ」

いったいどこで聞きつけたのか、あの夏油命の双子と来たら俺が夏油（と五条）の誕生日を祝ったことがないと知って朝から俺のところへ飛び込んできたのだ。文字通りずーっと夏油様ゲトウサマとぴいぴい鳴き続けるものだからさすがの俺も耐えかねた。

しかもわかったわかったと白旗を上げれば、じゃあプレゼントは、と注文まで付けてきたのだからマジでいい性格をしていると言える。プレゼントなんて飴で十分すぎるだろと言いたいのを堪え、ほぼほぼ

ヤケになって右手をのばす。

癖が強く見える髪も、双子たちの懸命の手入れのおかげか意外と触り心地は悪くない。

「……誕生日おめでと。毎日頑張ってる、まあ、……偉いよ」

頭を撫でて褒めてやれっってお前ら、夏油を何歳だと思ってるんだと。

五条すら撫でたことあるのに夏油様を撫でたことがないなんて有り得ないって、五条を撫でたのだって別に何か褒めたわけじゃねえと何度言っても聞きやしなかった。

とつくに成人しているうえに俺よりタツパのある野郎を撫でるというミツシヨンを達成し、もういいだろと手を下ろす。

そのとき、はたと気づいた。

「……顔赤くねえ？」

「……うるさいんですよ」

「もしかしてお前嬉しいの？ マジで？」

「そんなわけないでしょう、冗談はやめてください」

「いや俺はどうでもいいけど、いいのか？ 最近奮発して画質いいやつ導入したらしいぞ」

え、と夏油は俺が指さした方へ視線を浮かせる。その先にあったのは、黒いカバーのついた防犯カメラ。

エベレストより高いプライドを誇るカツコつけ野郎の顔色が一瞬で変わる。

「あれ、ダミーじゃないやつ。職員室でモニターできて、もちろん録画してる」

まず夏油はいつもなら術師の数人くらいいるこの部屋にひとり残された時点で疑うべきだったし、双子が今ここにいないことに違和感をもつべきだった。ついでに夏油と俺がいるなら絶対絡んでくる五条が乗り込んでこないことにも、だ。

「油断したな、夏油」

刹那、視界から夏油が消える。同時に呪霊侵入のアラートが高専中に鳴り響く。

壁ごと叩き割られた窓の外に雪がちらついているのを眺めながら、

やっぱり何歳になっても破壊癖って治んねえんだなあとしみじみと思ったある二月三日のこと。

*

「海月、何でお前はわざわざ被害を大きくするんだ」

「腹いせと八つ当たりですが何か？」

*

「聞いて夏油様、確かに頭なでなではうちらがクラゲさんに頼んだけどー！」

「私たち、物をあげてとは言っていないの」

「だからその飴は、本当にクラゲさんからのプレゼントってワケ！」

*

「ねえ僕の誕生日は!? とつくに過ぎてるんだけど!!」